MAINE　TRAFFIC

紫電改

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＭＡＩＮＥ　ＴＲＡＦＦＩＣ

【Ｎコード】
Ｎ０５１４Ｘ

【作者名】
紫電改

【あらすじ】
静岡県に住む鉄道大好き少年。この小説は彼の生きがいを小説にしたものです。
中学生の彼の心が回り始める。
目標は・・・一人前の運転手。

なおこのシリーズでは岸川高校鉄道研究部のエピソードです。

1列車　鉄道少年（前書き）

この小説はフィクションです。
なお、鉄道に興味のある方にはこのことを頭の中に入れて読んでいただければ幸いです。この小説には現実と違う個所がございます。
どうかご了承ください。

1列車　鉄道少年

僕は静岡県に住んでいるどこにでもいる中学3年生。スポーツは全くダメ、勉強はできるとは思いたくない少年である。そんな自分であるが、一つだけ自分を輝かせることができるものがある。それは鉄道である。

僕の将来はもう決まっている。それもそこ以外考えてもいない。だが、そこへ行くためには高校をかまさなければ行けないことも分かっている。もちろんその高校生活にも鉄道が絡んだ方が面白いと思っているのは事実。そのためにはどこに行ったらいいものがずっと考え悩んでいるが、めったにパソコンでそんなこと調べていない。だが、暇があると自分の家にある離れにこもって、模型で遊んでしまっている。中学3年生の6月となれば、僕は最悪の中学生かもしれない。いや、そうに違いない。

と、ここまでは前ふり。ここから本題に入るのだが、まだ自分の名前を言っていなかった。永島智暉。これが僕の名前である。

6月8日。今日は久しぶりにフリーな日だ・・・。久しぶりというのはウソ。本当は毎日フリーなのだ。いつものように離れに行って模型を走らせている。言っていなかったが、僕の離れに展開しているのは新幹線と複々線の在来線が走っている鉄道模型。周回の大きさは実物にたとえて10キロぐらいになるというほどの大きさ。車両は別の部屋に置かれている。ここには折りたたみケースに入った鉄道模型が30箱入っている。内訳は22箱が父のもの。3箱が祖父のもの。2箱が従兄のもの。3箱が自分のものだ。レイアウトは大きすぎだし、車両は持ちすぎではと思っているかもしれないが、自分の持っている量などまだひよこ。いや、卵にもなっていないかな・・・。世の中にはそう言う人もいるくらいだ。ここで前述した通りの時に遊んでいる。もちろん、やっていて飽きたことは一度もない。

遊んでいると離れのドアが開く音がした。顔を上げてみると女の子がそこに立っている。僕と顔つきはよく似ている。
「ナガシィ。６月１４日に岸川（きしかわ）っていう高校で文化祭があるんだけど、見に行かない。」
第一声はこれか・・・。彼女は坂口萌（さかぐちもえ）。僕の理解度が一番いい人だ。
「ええー、文化祭。行くの面倒くせぇじゃん。」
「そう言うと思ったよ。・・・でも、これ見たら行くっきゃないでしょってなると思うな。」
「どういう意味だよ。」
聞き返すと萌（もえ）は何のためらいもなくモジュールを置いている長机の下をくぐった。ためらいがないのは当然だろう。小学校の時はほぼ毎日。中学になってからだと土日はほぼ毎回と多いからだ。僕の近くまで来ると、手に持っていた岸川（きしかわ）高校のパンフレットを差し出した。受け取って中をサラサラっとみてみる。するとあるところが目にとまった。
「でしょ。」
「・・・。」
「ねっ。だから行こうよ。絶対満足できること間違いなしだから。」
確かにそうなのだが。この手の部活があるというのは今初めて知ったことだ。
「よしっ。決めた。行こっか。・・・で、何日だっけ。」
「忘れるの早いねぇ。６月１４日。パンフレットの裏に書いてあるけど、遠江急行（とうきゅう）の涼ノ宮（すずのみや）か遠州鉄道（えんてつ）の助信（すけのぶ）から行くのが近いんだって。どうする。」
「じゃあ遠州鉄道で行って遠江急行で帰ってくる。」
「なんでもいいよ。そこは任せる。」
「つうかその文化祭何時から始まるんだよ。」
「あっ、言い忘れてた。９時からだよ。それで終わりが１５時。」
「１５時終わんのかよ。もうちょっと長くやれよ。」
「まあ、そこ文句言ってもしょうがないし・・・。じゃあ行くって

ことでいいね。」
言い終わるとグルッと部屋の中を見まわした。ほぼ毎日来ている状態で見るものなんてないはずなのだと思っている人は分かっていない。この部屋にあるのは鉄道模型のモジュールレイアウト。つまり探しているのは・・・。
「ナガシィ。あすこに走ってる寝台特急(ブルトレ)何。「北斗星(ほくとせい)」・・・じゃないか。「さくら」かなぁ。それとも「あさかぜ」。」
目的のものを見つけて僕に問いをした。
「「出雲(いずも)」だよ。」
「えっ、「出雲(いずも)」。」
今度はじっくり見て、走っているものを確認する。その姿がはっきりしてくると、
「あっ、ホントだ。よく見たら２４系引っ張ってたのがＥＦ６６じゃなくてＥＦ６５だった。」
「だろ。ＥＦ６６とＥＦ６５じゃまず見た感じが違うんだから。」
「そう言われればそうでした。ＥＦ６５は箱っていう感じだもんね。その箱っていう感じで赤いのがＥＦ８１だっけ。」
「・・・そんな感じでいいよ。」
立って、長机の下をくぐって車両庫のほうへ歩いて行く。
「えっ、もう車両換えるの。換えるんだったらさぁ「カシオペア」にしてよ。」
「うーん・・・。どうしようかな。」
車両庫の奥に入って従兄の箱を見つけて中身を出す。
（あれは貨物を取ってくるね。高速貨物(かもつ)かな。それともタンク貨物(タキ)。いや、紙(ワム)・・・。）
１２両編成用の箱を見つけて２つ取りだす。とりあえず中身を確認して、次は機関車を探した。機関車は地元のＥＦ２１０（桃太郎）をはじめとする機関車を大勢引っ張り出した。機関車の次は機関車に対応する車両を探す。例えば、ＥＦ２１０が貨物列車を牽引している時は３１３系や２２３系など東海道本線(とうかいどうほんせん)を走っている車両。Ｅ

Ｆ６４が重連でタンク貨物を牽引している時は３８３系「特急しなの」など中央本線を走っている車両という風にする。その車両を一つか二つ見つけて、戻った。

「やっぱり「カシオペア」は持ってきてくれないんだ。」

「その代わりにもっと面白いもん持って来たぞ。貨物だ。」

「また２６両やる気。準備するだけでも疲れない２６両って。」

「２６両以外走らせる気ないし。それに萌が手伝うからそんなに関係ないじゃん。」

車両の入った箱を萌に渡して、机をくぐる。中に入ると萌はすでに着発線荷役方式の貨物駅にいて車両を並べ始めている。その並べるのに合流して、４両５両と並べていく。その数が２６になったところで、その前に機関車を連結する。スタートはＤＦ２００（レッドベアー）だ。

「「レッドベアー」だっけ。」

「ああ。」

「「ブルーベアー」とかいないのかな。雷ものは「レッドサンダー」と「ブルーサンダー」でちゃんといるのに。」

「まあ、作らなかっただけだろ。じゃあ、もうちょっとしたら出発ぞ。」

今まで走っていた「出雲」を駅で止めて、車庫まで回送する。その回送が終わると貨物の番だ。貨物列車が停まっている線路に電気が行くように変えて、コントローラーのブレーキを解除。マスコンを入れて、貨物駅を発車する。発車した後は放っておくだけ。走っていくところを子供のように追いながら、その工程を見守る。やがて貨物列車は新幹線の高架橋の下をくぐり、また新幹線の高架橋をくぐる。坂を上って鉄橋を通過。次に坂を下ってこのレイアウトの緩行線の下をくぐる。緩行線の駅を通過した後また坂を上ってこのモジュールで一番大きい駅を通過。やがてまた元の貨物駅に戻ってくる。しばらくこの動作を繰り返して、ＥＨ５００（金太郎）にバトンタッチ。また動作を繰り返して次の機関車へとバトンを渡してい

く。

「そろそろＥＦ２１０（桃太郎）に変えない。」

「ＥＦ２１０（桃太郎）はまだ。次はＥＦ５１０の北斗星色に引かせるんだから。」

「なんでそこでそれ。ＥＦ５１０の北斗星色も貨物引くけど、ＥＤ７５から引き継ぐっていうことはないでしょ。つうか東北本線通ってきて常磐線に入る貨物なんてあるの。」

「あるわけねぇだろ。究極にありえない貨物やってんだから。」

「・・・。ねぇ、ナガシィ。気になってはいたんだけどさぁ、日本で一番長い貨物ってどこからどこ結んでて、どこをどう通ってるの。」

「知るか。多分東京から西鹿児島あたりまでじゃない。」

こういう貨物列車もあるだろう。だが、この貨物列車は日本一ではない。日本一は札幌貨物と福岡貨物を結んでいる列車。走行路線は札幌から千歳線、室蘭本線、函館本線、江差線、津軽海峡線、奥羽本線、羽越本線、信越本線、北陸本線、湖西線、東海道本線、山陽本線、鹿児島本線の順だ。

「それって「はやぶさ」とごっちゃになってない。」

速攻でツッコまれた。

「そうだな。でも、これって仕方ないんだよなぁ。駿兄ちゃんも貨物マニアじゃないし。分かる人いないんだよなぁ。」

「へぇ。駿兄ちゃん貨物の模型結構持ってるから一見すると貨物マニアって感じするけど、違うんだ。」

「ああ、本人が言ってた。」

「ふぅん・・・。」

お互い走っている車両に目を向ける。今走っている貨物列車は２６両のコンテナ貨車にコンテナを満載している。当然ずっと満載では面白くない。

「そろそろ牽引機変えるかぁ。」

「変えるんだったらコンテナ満載もやめない。」

「そうだな。じゃあ、長いタイプのコンテナと載せ替えるか。」
貨物駅に列車を止め、そこまで赴く。まずここまで牽引してきたＥＤ７５を貨車から切り離し、ケースにしまう。次に後ろに続いているコンテナ貨車のコンテナを必要数外し、２０フィートコンテナに載せ替えていく。この２０フィートコンテナは1両の貨車に3個載る。載せ方も何パターンかあり、満載。１２フィートコンテナを２０フィートコンテナで挟む形。その逆。こういった方法。もしくは満載されているコンテナすべてを外し、そのままにするということだってある。僕は２６両中１８両にそれを施した。そのうち１０両を何も載せていない状態にした。編成は満杯から一気にスカスカになった。
「空コキ多いなぁ。」
「なんか別なほうがいいのか。もっと空コキ増やすか。」
「なんでそうするんだよ。もうちょっと空コキ減らすべきだろ。」
「常磐線(ほくとせいしょく)だったらこんな感じなんじゃないの。あれ、ＥＦ５１０の北斗星色は。」
萌(もえ)の手にチラッと青い物体が見えた。真ん中には金色っぽいラインが入っている。
「おい、それ返せよ。」
見つかっているということが分かっていたようなのですぐに応じると思いきや、
「せめて、あと2両増やしてくれないとヤダ。」
「空コキ。」
「違う。コンテナ載せてあるコキ。」
「外すのより載せるほうが面倒くさいんだよ。」
「知るか。載せろ。」
5秒ほどいがみ合って、
「最初はグー。ジャンケンポン。」
チョキとチョキであいこだ。
「あいこでしょ。あいこでしょ。あいこでしょ。あ

いこでしょ。あいこでしょ。あいこでしょ。あいこでしょ。あいこでしょ。あいこでしょ。あいこでしょ。」
１２回目でようやく決着。
「ヤッター。」
「チェ。」
「ほら、舌打ちしてないで、早く空コキ２両減らしてよ。」
「へいへい。」
貨物駅のコンテナホームに置いたコンテナをランダムに選出。空コキ２両のうち１両に１２フィートコンテナを５個。もう１両には３０フィートコンテナを真ん中に乗せ１２フィートコンテナでそれをはさむ形に積載した。
「あー。ジャンケンになると俺が負ける確率高くなるじゃん。」
「ぶつぶつ言ってないの。思考パターンで私に勝つなんて１００年早いわよ。」
「ほら、約束通り２両減らしだぞ。」
「まだまだ。」
「・・・。」
「最初はグー。ジャンケンポン。あいこでしょ。あいこでしょ。あいこでしょ。あいこでしょ。あいこでしょ。あいこでしょ。」
「はい。それ返せ。」
「えー。」
「ジャンケンに負けたんだから返せよ。プラス空コキは２両減らした。」
「はぁ。分かったよ。」
萌からＥＦ５１０を受け取り、コキ１００形２６両の前に連結する。コントローラーに戻って、ブレーキを解除。ゆっくりとしたスピードで貨物駅を発車。また何分か放っといて、ＥＨ２００（ブルーサンダー）に交代。そして、ＥＦ６４の重連に交代。そして、
「ようやっとＥＦ２１０（桃太郎）か。」

「そうだな。東海道本線って言ったらＥＦ２１０（桃太郎）の王道だもんな。」
「その隣は３１３系。・・・ねぇ、ナガシィ。５０００番台（３１３系）２編成連結して、１２両編成やってよ。２２３系みたいに。」
「気持ち悪い。やめろ。」
「やってよ。面白いじゃん。」
そう言いながら、萌は僕に近づき、わき腹を指でなぞった。
「やめろ。くすぐったいから。」
「ナガシィがやるって言ってくれればやめるよ。」
「お前・・・。」
「ねぇどっち。やってくれるの。」
「はぁ。今日だけだぞ。」
そう言うと萌のくすぐり攻撃は約束通りなくなった。車両庫に行って３１３系の箱を探す。車両庫には父の３１３系５０００番台と従兄の３１３系５０００番台がある。それを探し出して、車両庫から戻ってくる。
「はいよ。やるとは言ったけど、並べるとは言ってないからな。」
「・・・。並べてくれたっていいじゃん。」
「ダメ。」
この言葉で萌はあきらめたらしい。自分で３１３系を並べ始めさっき言った通り１２両編成にした。並べ終わると萌はコントローラーの位置まで来て、
「外回りは借りるね。言っとくけど、出してる間に貨物がぶつかるってことないようにね。」
「大丈夫だって。さっき貨物駅通過したばっかだから。今鉄橋のところにいるし。」
「了解。」
車両基地のポイントコントローラーで３１３系が止まっている線路に電気を行かせる。次にコントローラーのつまみを回して、３１３系の発車を促す。それを確認すると、自分の運転するコントローラ

ーのブレーキを解除。マスコンを入れて、出庫してくる３１３系を本線に乗せるよう電気をとる。３１３系が本線に乗るとこう問いてきた。

「ナガシィ。３１３系、脱線しないよねぇ。」

「知るか。脱線するんだったら、どっちかの編成にモーターぶち込めばいいじゃん。駿兄ちゃんの「スーパー雷鳥」みたいに。」

「そうだね。もし、脱線したらそういうよ。」

「そういう・・・。まさか、自分じゃやりたくないって思ってない。」

「チェッ。ばれた。」

どうしても萌はそうしてほしかったらしい。舌打ちをした。

「チェッ。ばれたじゃなくて、自分でそれくらいできるだろ。」

「あー。何も聞こえません。」

「ウソつけ。」

このあと３０分間ぐらい３１３系とＥＦ２１０牽引の高速貨物列車を運転した。

他にも２２３系１０００番台の１２両編成と２２３系２０００番台の１２両編成の新快速。京浜東北線の２０９系と山手線のＥ２３１系など。いろんな列車を走らせていたらもう時間は5時。いつも思うことだが、気付くともう夕ごはんの時間だったりする時もある。時間が足らないのだ。

「ヤベ。家帰んないと。ナガシィじゃあね。明日学校でな。」

時間に気付いて萌が離れのドアに向かう。

「６月１４日忘れんなよ。」

ドアを半開きにした状態で行った。

「忘れねぇよ。これ見ちゃったんだから。」

パンフレットをかざすと、ニッと笑って帰っていった。

「岸川かぁ・・・。」

裏付ける思いで、つぶやいた。

人物

永島智暉（ながしまともき）

誕生日　３月１１日　血液型　Ｏ型　身長　１６１ｃｍ

坂口萌（さかぐちもえ）

誕生日　１０月３日　血液型　Ａ型　身長　１５９ｃｍ

1列車　鉄道少年（後書き）

感想がございましたらお書きください。

2列車　見に行きます　文化祭

６月１４日。岸川高校の文化祭に向かった。岸川高校は遠州鉄道の助信から西へ歩いて２５分ほど。岸川の正門についた時刻は９時０３分だった。もうすでに受け付けは始まっている。受付をスルーしてからはすぐに鉄道研究部が展示を行っているというホールに向かった。

ホールは人でたくさんだ。その人が集中しているところには建物が建っているとても小さい風景が見える。家の離れでよく見なれたレイアウトだ。

「家のより小さいな。」

「ナガシィ家のは大きすぎるだけじゃないの。」

「いや、そうかもしれないけど・・・。」

「ほら、なんか走って・・・。」

汗が出てきそうだった。そう言う頃には他の子供に混じってかじりついてそれを見ているからだ。でもいつものこと。萌にとっては普通のことと受け止めた。永島を追ってモジュールところにした。

「３１３系だ。これ東海とかで走ってる車両だぜ。」

「これだって毎日走らせてるじゃん。新快速だか、普通で。知ってるよ。」

「ああ、そうだった、そうだった。」

今度は３１３系の走っていった方向からまた列車がやってくる。前面が白くオレンジと緑のラインが入っている。湘南色という塗装だが、その車体にはステンレスボディーの部分が多い。２１１系という車両だ。

（２１１系でシングルアーム。こんなの見たことないけど・・・。）

カーブを曲がりきってきた６両編成の車両の後ろにはさっき走っていった３１３系がくっついている。こんな編成あるのだろうか。僕は初めて見る編成に少し違和感がある。だが、走っている車両にそ

んなことは関係ない。他の子供がやっているように列車の進行方向に先回りする。ここで見ていたいなぁというところに来たら、しゃがんで電車が走っている高さに目線を合わせる。こうやってみると模型でも本物の様に迫力を感じるのだ。その時萌は僕の背中側にある方に目線を向けていたらしい。先にあっちの列車が来たみたいで肩をつついた。

「「サンダーバード」だよ。」

目線をそっちに替えて、「サンダーバード」を見る。だが、その列車は「サンダーバード」と違って顔が赤い。

「「サンダーバード」じゃなくて「スノーラビット」だよ。「はくたか」、「はくたか」。」

「えっ「はくたか」ってこんなに顔真っ赤の車両もあるの。」

「ああ。北越急行が持ってる車両は顔真っ赤だよ。」

「へぇ。そうなんだ。」

理解しているのかどうかは知らないけど・・・。目線を戻して、さっきの列車が通過するのを待った。通過すると走り去った方向に顔の向きを変えて次のカーブを曲がって姿が見えなくなるまで見送る。見送り終わるとまたつつかれた。

「「雷鳥」。「しらさぎ」。どっち。」

むこうから走ってくるのは４８５系という特急電車。この手の車両には先頭にこの車両は「特急〇〇」と掲げている。そこを見ればいい。けど、今走ってくる車両にはそんなのどこにもない。おまけに流線型の顔をしている。

「お前、今分かってて聞いただろ。」

「えっ。・・・はぁ。「雷鳥」でしょ。パノラマだったから分かりやすかったよ。」

「だったら聞くなよ。」

「いいじゃん別に。ナガシィに比べたら鉄道知識ないんだから。」

「いや、そうだけどさぁ・・・。」

すると今度は、

「おい、ハクタカ。「雷鳥」編成違う。４号車と5号車と8号車ドアの向き逆。」
後ろから声を張り上げられる。
「今更いいじゃないですか。そこまで見てる人いませんよ。」
さっきの人にハクタカと呼ばれた人が答える。すると、さっきの人とは別の人が「雷鳥」に手を出した。走っていた車両を手で捕まえ、モーターがはいっていると思われる車両を抜き取った。それを抜き取るとそれまで走っていた「雷鳥」は動かなくなり、その人はさっき後ろの人が指摘していた車両の向きを正常な向きに直していった。そして一番最後にモーター車を線路上に戻して、分離した車両を連結しなおしていた。
「膳所さん。そこまでしなくても・・・。」
「ハクタカの場合はあそこまでしてやんないとダメ。名寄もこれからそうすればいいじゃん。」
さっき「雷鳥」を直した人は膳所、編成が違うと指摘した人は名寄というらしい。
「はぁ・・・。」
「名寄。次「立山」行くから、内回りにこれ並べて。」
「うわ。来たよ「立山」。」
今まで３１３系が走っていた方は「立山」という列車に置き換えるらしい。この名前も初めて聞く列車だ。だが、並べているところをよく見ていると見たことのある車両だった。家の車両庫にある「急行ゆのくに」というのと同じ車両だ。
「ちゃんと並べろよな。」
「まあ、ハクタカとは違って編成間違うことないだろ。」
「いや、名寄の場合は間違い方がひどい。上野でもよく解るぜ。」
「あっ。外回りあっち向きなのをこっち向きで入れちゃった。」
「ほらな。」
「ハハ。そう言うことか。」
ちょっとの間中のやり取りを聞いているといろんなことが分かる。

名寄という人は鉄道のことはよく解っているがケアレスミスが多い。
「立山」を渡した上野という人は鉄道にはそんなに詳しくないらしい。膳所という人はパーフェクト・・・。そんな具合だろう。
　また今度は、
「ナヨロン、そっちに３１３系の「ムーンライトながら」ある。」
女子の声だ。この部活には女子もいるみたいだが、言ってることは全然違う。３１３系はいくら使われても特別快速まで。「ムーンライトながら」に充当されるわけがない。そして、今言いたかった車両は・・・。
「「ムーンライトながら」って３７３系で運転してるよねぇ。」
当の本人も萌にツッコマれるとは思っていないだろう。
「そんなのはないぜ。」
「あれないっけ。」
すると後ろからまた別な人が出てきて、
「３１３系の「ムーンライト」・・・じゃなかった。えーと３１３系の・・・あーもう。３７３系の「ムーンライトながら」。」
ようやっとその答えにたどり着いた。
「違うって分かってるのに2回も間違うかな。」
「さぁな。あの二人は天然ってところかなぁ。まああれでマニアだったらただのバカだけど。」
「・・・。ナガシィ。他のところも見に行かない。なんか面白いのやってると思うし・・・。」
「ヤダ。終わるまでここにいる。」
（やっぱり・・・。）
　しばらくの間同じところにしゃがんでみていたため足が痛くなってきた。座ろうとしても電車のほうがさせてくれない。今名寄と上野という人たちのほうは４８９系の「特急あさま」と「特急白山」がＥＦ６３という機関車にプッシュプルしてもらって走っている。この情景はかの有名な碓氷峠でしか見れない光景だった。一方ハクタカという人がいる方は８８３系の「特急ソニック」と７８７系の

「特急つばめ」が走っているが、その「ソニック」のほうだけ「クソニック」と呼ばれているのはなんでだろうか。
「さっきから「クソニック」ってよく言ってるけど「ソニック」ってそんなにクソなのかなぁ。」
言い終わると叫び声が聞こえる。
「ああ。この「クソニック」また架線柱喧嘩売りやがって。」
「本当にクソだな。つうか誰だよ。内回りに「クソニック」出したの。そいつ処刑だ。」
「あのう僕ですけど、何かいけないんですか。」
「犯人ハクタカだってさ。ダメに決まってるだろ。内回りに置いたら「クソニック」が架線柱に喧嘩売りにいって自分から脱線するから。「あずにゃん」もそう。」
「じゃあ、なんで「スーパーおおぞら」は内回りに出しても何も問題ないんですか。」
「あれはＫＡＴＯの振り子機構が少ししか働かないからいいんだって。だけど「あずにゃん」と「クソニック」と「しなっちの副作用」はマジで副作用するからダメ。」
「「あずにゃん」と「クソニック」は何言いたいか分かりますけど、最後の「しなっちの副作用」ってなんですか。」
「えっ、「しなっちの副作用」は「しなっちの副作用」に決まってんじゃないか。」
「全然答えになってません。つうか善知鳥先輩それ遠回しに解らないって言ってますよね。」
こういうやり取りが聞こえてきた。
「あの人が言ってる「しなっちの副作用」って「しなの」のことだよねぇ。」
「ああ、多分な。」
なんか分かってはいけない気がするのはなんでだろう。
ずっとホールにいて2時間。もうほとんど終わってしまった。昼でも食べに行こうかと誘われて、他の展示に行ってみる。そこで見

たのはポケットモンスターに変装した人や、気ぐるみを着ている人。今の高校生というのはこういう感じなのだろうか。そんなことを思いながら、あるクラスのクラス展に入って焼きそばを買ってまたホールに戻った。

戻ってみると名寄・上野周回のほうには貨物列車が走っていた。その先頭に立つのはＥＦ２１０。桃太郎。後ろに続いているコンテナ貨車は１７両。貨物列車としてはふつうであるが、家で走らせている２６両の高速貨物列車と比べてしまえば少し短い。その隣に走っているにはＥＦ６６が牽引する寝台特急。ヘッドマークは「あさかぜ」となっていた。編成は7両。正規の１４両の半分であるが、ツッコマないことにしておこう。一方のハクタカチームはＥＦ５１０が牽引する「寝台特急カシオペア」と「寝台特急北斗星」が我が物顔で走っている。どちらかといえばこちらのほうが客の目を引いている。

「あーっ。ハクタカっ。「カシオペア」止めてっ。」

叫び声がした。その叫び声はさっきギャグを言っていた人だ。止めてと言った「カシオペア」を見てみると、機関車の動輪が線路から外れており、その車輪の下に何かを巻き込んでいる。

「止めました。」

「ちょっとサヤ。「北斗星」も止めてっ。ぶつかるっ。」

と言った時にはもう遅かった。「北斗星」は「カシオペア」が待ちこんだ謎の物体Ａに突っ込んで乗り上げる形で脱線した。そのおかげで「北斗星」を牽引していたＥＦ５１０は少しばかり態勢を崩した。次の瞬間。ＥＦ５１０は観客側にグラっと倒れて落下していった。

すかさず手が出た。落ちていくＥＦ５１０をダイレクトキャッチ。床に落ちる手前で受け止めた。その頃には部員の人が脱線した「カシオペア」と「北斗星」の復旧に駆けつけており「カシオペア」を復旧させていた。それに混じってＥＦ５１０を「北斗星」が走っていた外回りの線路に乗せて、

「あの。お手を触れないようにお願い・・・。」
そう聞こえた時には六つある車輪を次々と乗せていった。
（なんだ。こいつのなれたような手つきは。家で模型やってるとしか思えない・・・。これは将来期待できるかも・・・。）
「触れちゃいけないのは分かってますけど、ＥＦ５１０（こいつ）を助けたついでです。」
全ての車輪を乗せ終わってから口を聞いた。その現場には少しいづらくなったため、萌を促して場所を移動した。
「毎日やってるからって。あれは将来来るって勘違いされたんじゃない。」
あきれられた。でも、その顔には決めつけているというのも垣間見た。
「いいじゃねぇかよ。やっちゃったもんはやっちゃったんだから。それよりもここで「北斗星」が来るの見てよう。」
永島に続いてしゃがもうとすると、対角線のコーナーで同じようにしている人を見た。明らかに中学生。そういう人だった。
（同じような人もいるんだなぁ。ナガシィと同類・・・。）
「北斗星」を見て目を輝かせている永島を見てふと笑いがこぼれた。
「どうした。何か笑えることでもあったか。」
「いや。なんでもない。」
「何でもないわけないだろ。笑えることが何もないのに笑うっていうのは変人の証。」
「変人とも限らないんじゃないか。思い出し笑いっていうのがあるんだから。」
「・・・。」
「ほら。そっち向いてなくていいのか。「北斗星」が来たぞ。」
萌に言われて振り向いてみると「北斗星」はすでに僕の前ではなくカーブを曲がっていってしまっていた。
「あっ、この野郎。」
「ハハハ。引っかかった。」

「・・・。」
「抑えろって。家でいっぱい見れるだろ。」
「見れるけどさぁ。ＥＦ５１０の北斗星色での「北斗星」はここでしか見れない気がして。」
「なんで・・・。あれ、ナガシィ家の「北斗星」って私のあげたカシオペア色のほうだっけ。」
「そうですよ。萌からもらったカシオペア色ですよ。」
「あれ、そうだったっけ。「北斗星」のＪＲ北海道仕様のやつはあげたの覚えてるんだけど、他の何かとごっちゃになってわかんない。」
「確か。お前からもらったやつは「北斗星１号・２号」のセットと「北陸」の客車セットと「能登」の９両セットと「ＥＦ５１０のカシオペア色」だった。」
「あれ・・・。なんかナガシィにワムの３４両セットあげた記憶があるのは・・・。」
「それ当てたのは駿兄ちゃん。駿兄ちゃんがそれもってきた時に見せてって最初に言ったのが萌だった。それだけ。」
１５時近くになると他の客をひいてきて、だんだんいづらくなってくる。ちょっと前にホールを出て、家への帰路についた。
文化祭が終わるとすぐに片づけに入る。今まで大きなモジュールとプラレールで埋め尽くしていたホールは何もない状態に早変わりしていく。
「今年は優秀賞かぁ。去年グランプリだったけどおしかってね。」
「まったくだ。生物部死ねばいいと思う。」
「おいおい。過ぎたこと悔やんでもしょうがないだろ。それより片付け手伝え。」
「ねえ膳所さん。生物部に聞こえるように死ねって叫んでいいですか。」
「やめろ。それやる前に片付けろよ。」
「じゃあ片付け終わったら叫んでいいんですね。」

「いや、そうじゃなくて。」
「おい、善知鳥。話してばっかで手が止まってるぞ。」
「ごめんねアヤケン。気をつけるよ。」
ふつうの学習机を「はーっ」という声とともに持ち上げる。
「でも、今日絶対岸川くるっていう人見つけたよ。」
「誰だよ。」
「あの「北斗星」が脱線したときに、ＥＦ２１０（モモチャン）を危機から救った人。」
「えっ。善知鳥の言ってたいと従弟じゃないのかよ。」
「だって海斗はもう大阪で行く高校も決めたって言ってたし。それに今日はちょっと見に来ただけだから。」
「にしては最初から最後までいたよな。あいつと同じで。」
「その人がここに来るっていうのか。でもそれは併願じゃないか、併願校落ちたらの話だろ。」
「そうだけどさぁ・・・。なんか単願できそうな気がするんだよねぇ。」
「こらッ。机持ったままそこで話してたら同じだろが。」
「あっ。すみません。」
その頃、
「ナガシィ。今日楽しかったね。」
「ああ。・・・萌。俺、行く高校あすこに決めた。」
「他の高校とか見てから決めた方がいいんじゃない。」
「いや、俺にはあすこしかない。それに・・・あすこだったら楽しめそうだ。」
７月。
「文化祭を見に行った後はテストかぁ。」
萌は小さくため息をついた。
「ナガシィはいいよねぇ。勉強しなくていいんだからさぁ。」
「さすがにそれは無理。１時間くらいは勉強しないと。」
「それでもいいじゃん。塾行き始めたら定期テストふつうに２００

点いくようになったし。何か覚える秘訣とかあるの。」
「秘訣なんてないよ。それに萌がこれやったら死ぬと思う。」
僕がやっている勉強法とはテスト1時間ぐらい前になってパニクッテいる状態でノートもしくは教科書に目を通すこと。ここではそれだけやって数学の問題集などはあらかじめやっておき、ここで目を通す。といった具合。もちろんこれができるのは1時間目のテストだけで2時間目、3時間目のテストは10分間の休み時間だけでこの作業をする。
「そりゃ死ぬと思うよ。ナガシィのやり方で覚えれる人のほうがすごいと思うから。」
「人をエスパーみたいに言うな。」
「永島。今度のテスト勝負しようぜ。」
そう話しているときに話しかけてきたのは友達の宿毛佑真だった。彼とは中学校からの中で、定期テストでは毎回勝負している。勝敗は五分五分。塾に行く前は負け続けていたが、塾に行き始めてからは勝ち続けている。
「宿毛も懲りないよねぇ。勝てっこないよ。」
「いいだろ。それに勝負する前から負けるって思うのは嫌だ。今回は俺も自信あるんだ。合計点勝負しようぜ。」
「ああ、いいよ。」
「ねぇ、宿毛。宿毛ってテストの時どうやって覚えてる。」
「えっ。俺の場合は、とにかく実践かなぁ。問題集かなんか買って、まずその問題集にやらずにノートにやる。やり終わったら採点して、次に問題集にやって、また採点。そんな感じかなぁ。」
「その方法でナガシィに負けてるってどうよ。」
「まぁ、少し腹立つけどな。でも、結果がそうだったんなら、もっと頑張ればいいだけの話。」
「もっと頑張っても勝ったことないじゃん。」
「あのなぁ。もっと長い目で見ろって。永島の場合はすぐに忘れる。短期記憶に頼ってテスト乗り切ってるんだから。」

「それに、学調とかじゃ、あれ完全に負けてるから。国語１９点とか取ったことあるし。」
「それ１年の話だろ。２年生の時は２６点取れてたじゃん。」
「上がったには上がったけど、国語が弱点ってことには変わりないじゃん。」
「お前はもっと本とか読もうぜ。そうすれば読解力上がるから。」
「なんか今更って感じするんだよなぁ。俺の場合本はアニメにして読んでるからなぁ。」
「・・・。ナガシィの場合本を読むと想像力が発達するから。別に悪いやり方じゃないんだけどね。」
「そうだったな。永島（ながしま）サスペンス系以外は速く読めないもんな。」
「ふつうおかしいよねぇ。」
「おかしくて悪かったな。」
「まあまあ。じゃあ、永島（ながしま）。テストの時待ってるぜ。」
宿毛（すくも）はそう言い残して、自分の席に行った。
「ナガシィ。今からもテスト期間も勉強せずに離れにコンツメでしょ。私なんかそれ出来ないからいいよなぁ。」
「憧れるんなら、ずっと「デュエモ」とか「バトルアーマー」のゲームやってればいいじゃん。」
「見つかったら没収されるんだけど。」
「・・・。そ、そりゃドンマイ。」
数日後。
「永島（ながしま）。国語何点。」
「３７点.」
「ハハ。国語では勝った。３８点。」
「勝ったって。まだ国語だけだろ。この後どうなるかだって。勝負は合計点だろ。」
「そうだったな。わりぃ。」
そう言い残すと自分の席に戻っていく。
「ナガシィ３７点か。私２３点。」

「あと2点で半分じゃん。せめて半分取ろうぜ。」
「まぁ、この調子なら合計１１０点ぐらいだと思うし、またゲーム解禁かな。」
「よかったな。」
「あっ、そうだ。ナガシィ。電車でＧＯ！の新快速姫路行き。あれどうしても尼崎で数秒遅れちゃって高得点でないんだよねぇ。ナガシィだったらやりこんでると思うから、今度やってくんない。」
「マジかよ。それ俺も苦手なんだ。特に尼崎。あれって塚本で早く通過しそうになってわざと速度落とすと痛い目見るんだよなぁ。停車位置５５０ｍまで１３０ｋｍ／ｈでツッコんで一気に減速っていうことやらないと間に合わなくなるからな。」
「でもそれやるとどうしても±（プラマイ）３０ｃｍに収められなくならない。」
「いや。そこはうまくやればどうにでもなる。後は時間との闘いってところか。」
「ナガシィ。それで何点いった。私２３万。」
「２４万。」
「あっ。じゃあナガシィでも私の記録更新無理かぁ。」
「無理だな。」
そのまた数日後。
「えー、これはオープンキャンパスに行った時の感想を書く用紙です。この夏の間に公立を少なくとも2校。私立も1校見て・・・。」
その説明が終わるとあくびと声が出た。
「あーあ。決まってるのに公立も見に行かなきゃなんないのかよ。」
「面倒くさそうだね。」
「できればずっと家にいて模型いじってるほうがずっと楽しいんだけど。」
「アハハ。ナガシィらしいね。」
「そういえば、萌はどこに行くか決まった。」
「えっ・・・。公立はいける学校だったらなんでもいいんだけど、

私立なら宗谷(そうや)にでもしようかなぁって・・・。」
（何言ってんだよ。私。）
「へぇ。萌(もえ)らしいな。夢に近づくためなら宗谷(そうや)に行くのが一番か。」
（ダメだ。私も岸川(きしかわ)行きたいなんて到底言える状態じゃない。）
「うん・・・。」
「自信持てって。実をいうと俺のほうが受かるかなぁって思ってる。」
「それ絶対無駄。ナガシィ内申点高いに決まってるじゃん。」
「それでも心配になるときない。」
「そりゃ少しはあるけど、ナガシィは大丈夫だって。ナガシィの進路はみんなが意外に思うほどレベル低い進路なんだから。」
「・・・。」
「そうでしょ。」
「それもそうか。変な心配かもな。」
笑っている永島(ながしま)の顔がなぜか遠くの人のように思えた。

この回からの登場人物
宿毛佑真(すくもゆうま)　誕生日　４月７日　血液型　Ｂ型　身長　１６４ｃｍ

2列車　見に行きます　文化祭（後書き）

これにはタイトルの前に〇列車と冠していますが、大して意味はありません。ただ、順番が分かりやすければと思ったからつけました。もしほかのシリーズになったら〇Mに変わるかもしれません。

3列車　夏　冬

今は夏休みの真っただ中。公立のオープンキャンパスはいやいや行って、そこで聞いたことはすぐに頭の中から拭い去った。8月の第3週。岸川のオープンキャンパスがある。そこに行って体験授業を聞き流して、自由に見学できるときにまた鉄道研究部の展示に行ってみた。

　展示を行っていたところは昇降口のある2階。昇降口から右にかじをきってつきあたる部屋だった。ドアを開けて中に入ってみると、文化祭より小ぶりのモジュールが展示してある。中にいたのは文化祭の時に見た人たちと同じように岸川を見に来た中学生。部員の数は文化祭見たときよりも少ないと思った。今走っている車両は内回りは何か分からないが、外回りは253系「特急成田エクスプレス」であることはすぐに解った。

「「253系」だ。」

声を上げたくなくても上がってしまう。電車を見ると出る癖。しょうがない。声を上げたのが影響したのか、目線が自分のほうに向いているがお構いなし。「253系」に近づいて、間近で「253系」が走り去るのを見た。

　その子の姿と反応の仕方を見て、鉄研部員は声をひそめて、

「おい、善知鳥。あの子なのか。善知鳥が言ってた絶対に鉄研に入るっていう中学生は。」

「よく覚えてないんだよ。顔つきとか。」

「おい、ふつう覚えてるだろ。物忘れひどすぎ。」

「あの子ですよ。見かけなかったのって11時ぐらいから30分くらいの間でしたから。」

「アヤノンはよく覚えてるね。」

「外回りだったし、気付きやすかったっていうのもありますから。」

「へぇ。」

「善知鳥先輩。へぇじゃなくて・・・。」
また、
「あの子電車に詳しいんだな。まるで木ノ本や留萌みたい。」
「友紀はまだ分かってないなぁ。別に詳しくないよ。「２５３系」くらい解ってふつう。」
「そうそう。「２５３系」分かったって何の自慢にもならないよ。」
「そうか。あたしは分かるとしたら「ドクターイエロー」くらいしかないのに・・・。２人もあそこまで詳しければ入るんだよね。あの子も鉄研に入るのかなぁ。」
「蘭。まだ鉄研に入るって決めたわけじゃないって。さくら行こう。」
「えっ。ちょっと木ノ本、留萌。待って。」
しばらく２５３系に見入っていたら内回りは６８１系「特急はくたか」に変わり、やがて外回りはＥＦ８１が牽引する貨物列車に変わった。それに目線をあわせてみていると誰かが僕に話しかけた。
「将来鉄研に入ろうって思ってる。」
おそらく文化祭の時に見ているのかもしれないけど、僕のほうはそれがだれかなんて覚えていない。誰だかわからないけど、
「はい。」
とだけ返事をした。
「おーい。この子将来の鉄研部員だって。」
「マジ。こんなマニア部入ってくれる人いるの。」
「よかったな。今年は２人だったから来年はどうなるかと思ったけど。」
「よし。まずこれで１名は確保したわけだ。１人と言わずに来年は５人くらいドンと入部があった方がいいけどな。」
「５人なんて。そんなたくさん入部するわけないだろ。３人くらいで十分だよ。」
「多いほうが楽しいじゃん。ねぇ君。」
すると何かをかぶせられた。手を当ててみると帽子だ。それもただ

の帽子ではない。運転手や車掌のかぶる制帽だ。
「似合うって。これかぶりたかったら鉄研こいよなぁ。」
「それだけで来るかっていうの。ていうか最終的に決めるのは本人なんだから、本人に選ばせないと。」
「でもそそることはできるのよね。」
「確かにそうだけど・・・。」
「もう決めてますから。」
と言ってかぶせられた帽子を取った。
「もうここしか来るところはありません。絶対にここに来ます。」
帽子をかぶせた人に渡して、教室を出た。もうしばらくいればと止められたが、もう帰りたいと言って断った。だが、一つ次の心配がやってきた。もし僕一人の入部だけだったらどうしよう。でも、そんな心配は後か。
それから月日が流れて2月。岸川高校の受験日は2月9日。その日までにやれることをやっていった。
「永島。お前って岸川志望だったんだな。」
宿毛が話しかけてきた。
「何。その言い方。知らなかったの。」
「いや、多分そうじゃないかなぁとは思ってたんだけど、本当に同じ進路とは思ってなかっただけ。」
「同じ進路。」
「ああ、俺も北星落ちたら行くところ岸川なんだ。あすこだったらものすごく適当にやらない限り留年はないからな。」
「北星併願かよ。落差ひどくない。」
「そんなのどうでもいいって。俺北星は受かるかどうか知らないけど、岸川だったらどんなバカでも受かるからな。」
その声は周りにも聞こえていた。隣にいたクラスメイトが意外そうに話しかけてきた。
「永島も宿毛も私立岸川狙ってるのか。」
「ああ。」

「ウソ。永島も宿毛も成績いいよねぇ。」
「ああ。高校のほうに送られる1学期の成績永島が34で、俺が36。」
「そんなに成績よくて岸川行くの。」
「俺はまだ北星狙ってるけどな。永島は岸川単願で狙ってる。」
「えっ。もったな。それで親なんか言わないの。」
「言わないよ。進路は全部任されてるから。だからどこ行こうが自由。」
「自由でも岸川以外行く気ないだろ。鉄研やりに行くんだから」
「えっ。鉄研やるためだけに岸川に行くの。もっと上の学校とか狙わないわけ。」
「いや、さっき言ったじゃん。岸川以外行く気ないって。」
「二人とも俺より成績いいのにレベル低いなぁ。」
「俺が思うに成績いい奴って全員レベル低い高校言って自分の好きなように高校生活送るもんだと思うけど。」
「いや。それは永島と宿毛だけだと思う。」
この話が終了すると、
「もう願書は出したんだしあとは受けに行くだけ。宿毛テスト1時間前になったらよろしく。」
「おいおい。永島受験会場違うってこと考えとけよな。」
「あっ・・・。考えもしなかった。」
「おい。ふつうに考えろよ。俺は併願。お前は単願。受験会場が違うって考えてふつうじゃないか。」
「ナガシィはふつうじゃないからそういうこと考えないの。」
クラスメイトと入れ替わりに話に入ってきたのは萌だった。
「言われてるぞ。ふつうじゃないって。」
「結構前からふつうじゃないのは自覚してるけど。」
「・・・。」
「ハハ。ねぇ、ナガシィ。勉強してる。」
「してると思う。」

「ううん。家で模型と遊んでると思う。」
「うん。その考え方正しい。なんか勉強すると体が拒絶反応を起こすというか。」
「それはウソでしょ。ただ勉強したくない言い訳じゃん。」
「・・・。はい。そうですね。」
そんなこんなで2月9日。岸川高校を単願で受験。その数日後には・・・、
「あー、受かったかどうか心配だー。」
「ナガシィ心配しすぎ。内申34あって、岸川単願。受かんないわけないじゃん。」
「それでも受かってるかどうかは気になるだろ。」
「それは・・・。」
（なんでだろう。ナガシィにここまで受かってほしくないって思ったことなんて・・・。いや、そう思ってちゃだめだ。ナガシィは岸川で鉄研やる。それを止めちゃいけないんだ。そうしなきゃいけない・・・。でも・・・。んっ・・・。）
（高校からは萌とは一緒じゃないのかぁ・・・。えっ。俺何考えてんだよ。宗谷に行きたいって言ったのは萌の意思じゃないか。それを止めるなんておかしい。二人とも自由に生きて、もしまた・・・。その時。その時そうすればいい。）
そう思いを巡らせている間に自分たちの順番がやってきた。僕は岸川に萌は宗谷に合格。
（これで本当に・・・。）
（・・・。今は・・・。でも、いつか言わなきゃ。私が目指してるのはこんなのじゃない。今からでも間に合う・・・。）
そして、合格通知をもらった日の放課後。
「ナガシィはやっぱり岸川合格おめでとう。あすこなら毎日楽しそうだね。」
「ああ、だろうね。萌は宗谷。お互い夢に前進だな。」
「そうね。これからお互い夢に向かって歩いてくんだよね。」

「うん。俺は電車の運転手。萌は幼稚園の先生。この二つをかなえるためにはそこに行くのが一番の近道になるのは間違いないんだからな。」

「・・・。そうだね。」

何かかわす言葉がなくなったみたいに黙り込む。

「ナガシィ。鉄道研究部って何するんだろうね。」

「よくわかんないけど、どっか行ったり文化祭とかで展示やったりするんだって。」

「よくわかんないって・・・。それでも入る部活。」

「入る部活だよ。俺岸川行かなかったら行く学校ないんだから。他の学校はただのトゲだよ。」

「内申３４あってそういう人も珍しいと思うけどね。」

「そうかぁ。俺には全部トゲみたいに見えるけど。」

「違うでしょ。ナガシィには岸川はとげを覆うクッションがあるけど、ほかの学校にはそのクッションがないからおりたくないだけじゃない。」

その描写を想像してみる。ヘリコプターに乗っている僕はいま下を見下ろしている。下にはたくさんのトゲ。それもとても鋭い。ちょうど中心ぐらいにはとげが突き出ていないところがある。そこに飛び降りようとしている。

「うーん。当たってるかも。」

「かもじゃなくて当たってると思うよ。」

それから1か月と数日。今執り行われているのは伊奈中学校卒業式。中学3年生全員の名前が順番に点呼されて、卒業証書を授与されていく。僕も卒業証書を受け取って、自分の席に戻った。

（ここで、萌と話すのも今日が最後か。）

心の中で分かりきっていることを思った。

（ナガシィと毎日話せるのも今日が最後かぁ。）

萌も分かりきっていることを思った。

卒業式が終わると3年生は保護者と2・1年生に見送られて、体育館を後にする。体育館の次は学校の外へ。あるところまで歩いて全員水入らずになる。

「ナガシィ。帰ろ。」

「お前友達とは話してかなくていいのか。」

「綾(あや)たちとか学校同じだし、また会えるし。」

「そう。じゃあ、行くか。」

自分には友達はそんなにいない。別に悲しくもないし、何の未練もない。ただ一つだけ僕を悲しませるのは萌(もえ)とは違う学校になるということだけだった。

「これから違う高校だな。」

「嫌なの。」

「いや、そういうわけじゃないけど・・・。今までずっと話してたのに、これからは話せなくなるんだなぁって思っただけ。」

「・・・。それはそうだけどさぁ。でも、県外の高校とか行くわけじゃないし、会おうと思えばいつでも会えるわけだし。」

「それもそうだな。ごめん。なんか暗くなるようなこと言って。」

「気にしないで。ナガシィのことよく分かってる人だから。」

「そうだったね・・・。」

しばらく黙って数歩。今日はいつもの帰り道がどうしても長く感じてしまう。

「なぁ、萌(もえ)。文化祭とか見に来いよ。待ってるから・・・。」

「暇だったら行くね。」

「いつも暇なくせに。」

ちょっとの間お互い黙っていた。

「ナガシィ。・・・創(つく)るなよ。あと頑張(がんば)れよ。」

何をつくるなということなのだろう。でもだいたい想像はつく。

「分かったよ。そっちこそな。」

「・・・うん。じゃあね。私こっちだから。」

「おう。じゃあな。」

手を振って僕は萌と別れた。その後ろ姿を見送っているとため息が出た。

（結局言えなかったなぁ。でも、いつか言わなきゃいけないことか・・・。これ、本当にナガシィ許してくれるのかなぁ。やっぱりウソついてきたから許しちゃくれないのかなぁ。）

永島の歩いて行った方向を見て、考えを巡らせていた。

その時僕は・・・、

（結局えいなかったなぁ。好きって・・・。・・・。大丈夫。萌はほかの男子には・・・。）

家のところまで来てそれを思う。ちょっと萌の家のある方向を向いてしばらくそのままでいる。

（言えるチャンスはいくらでもある。また、その時が来たときに・・・。）

二度と訪れることがないだろうと思う二度目を心の中で思う。だが、この先に待っていた展開は少なくとも僕には想像できなかった。

3列車　夏　冬（後書き）

気まぐれ投稿みたいになってすみません。
これからもこのような不定期投稿ですが、読んでくれる人には感謝。

4列車　スタート　高校生活

中学を完全に卒業して7日後。４月7日。僕は真新しいワイシャツに腕を通し、ネクタイを締め、黒いズボン履き、ブレザーに身を包んだ。

岸川高校入学式。１年生は9クラス。そのうち1クラスは中高一貫コース。2クラスは特進かコース。残りの6クラスがふつうにやっていくコースとなっている。僕は1年5組で、同じ中学校から来た人は僕を含め3人。そのうち一人は僕と同じクラスである。彼とは親友で名前は宿毛祐真である。もう一人は名前も顔も知らない。

「あーあ。俺は北星落ちてここになっちゃったけど、またお前と一緒だな。」

「そうだな。」

「これからもよろしくな。またテストとかになったら勝負しようぜ。」

「ああ。でも・・・、始まってそうそうテストの話っていうのもなぁ。」

「テストの話を引き合いにしたのは悪かった。いきなり勉強の話だと遊べなくなるってか。」

「うん。」

「お前は十分遊んでるって。受験勉強だってろくにしてないって自慢してただろ。」

「それでもやったって。受験前の1日前に1時間くらい。」

「それをろくにやってないっていうんだよ。まあ、私立なんて受からないほうがおかしいってところあるからそれでも合格したならいいか。」

「そっ。そういうこと。」

「ハハ。永島らしいな。永島の場合は結果しか気にしないからな。その頭ある意味うらやましいよ。」

「何。宿毛俺の頭みたいなほうがいいって思ってる。」
「自分の好きなことしか頭に入ってこないんだもん。そこまではっきりしてる頭だったら何かと苦労することがないのかなぁってこと。」
「そうかなぁ。」
「じゃあ、考えても見ろよ。お前高校決めるときここに鉄研があるから来たんだろ。他のところまともに考えてたか。」
「ああ、確かに。」
（分からせるにも一苦労かよ・・・。）
体育館に移動しながらこんな話をする。今日は部活紹介があるそうだ。まあ入る部活も決まっているのだが・・・。
「永島はどこをどう考えたって鉄研だろ。俺どの部活にしようかなぁ。」
「宿毛部活入ろうって思ってるの。」
「いや。出来れば入らないほうがいいなぁ。まぁ、強制だったら適当なところ入っといて活動に行かないっていうのも一つの手だな。」
「入るんだったら活動しろよ。」
「もう部活動にはうんざり。永島は運動部に入ってなかったからそう感じないんだって。」
「確かに運動部じゃなかったけど、情報処理部でも後々面倒くさくなったぞ。」
「お前その時代から遊んでたんじゃないのか。」
「うん。インターネットいじってＫＡＴＯとかＴＯＭＩＸのインターネットで好きな車両の再生産とかいつかなぁってみてた。」
「やっぱりやるのはそれかぁ。ちゃんとタイピングとかやってたんだろうな。」
「やってはいたよ。２年生までに表計算２級取ってスピードは３級まで取った。」
「・・・。なぁ、永島。気づいてはいたけど、お前活動と遊びがごっちゃになってないか。」

「えっ。」
永島のこの反応には正直困った。
中高一貫コースをのぞくクラスの生徒全員が集まったのが１３時１０分ごろ。始まったのは１３時２０分きっかりだと思いたい。まず始まるのは運動部の紹介。運動部なんて入る気はないし。運動部の部活紹介はとにかく耳から入れて耳から出した。頭をただ通り過ぎていくだけ。なんといっているのかも忘れた。
何分かたった後に５分間の休憩をはさむ。これが終われば文化部の紹介。まず一番に生物部の紹介。その次に鉄道研究部の紹介となっていた。
（これ以外聞かなくていい。）
そして、いよいよ鉄道研究部の紹介。出てきた人は２人。１人が演説台に行ってもう１人は胸の前で何かを広げた。あの広げた物は間違いなく鉄道模型である。その車両が何なのかは分からなかったが、何かと白が強調される車体である。５８３系「急行きたぐに」だろうか。その傍らで語っている人はこう言っている。
「僕たち鉄道研究部は３年生４人。２年生２人の計６人で活動しています。部費は年間１４，０００円と多少高いですが、年に一度臨地研修と言う旅行に行って東北などいろんな所へ訪問しています。また地域からの要請で学校以外でも展示を行っております。・・・」
（部費は１４，０００円。それを差し引いても入る価値はある。いや。入らなきゃ岸川に来た意味がない。僕は勉強をしにここに来たんじゃないんだ。それは二の次。）
また別の人は、
（鉄道研究部かぁ。私がここに来た半分の目的はあれ・・・。でも、女子が入っていいの。逆にそういう面でいじられたくないし・・・。）
それが終わるころ。僕の頭の仲は鉄道研究部のことだけでいっぱいになった。部活紹介が終わって教室に戻ろうとするころ。宿毛が話しかけてきた。

「頑張れよ。部費も高いみたいだし。」
「あんなの関係ないよ。関係すんのは、入るか入らないかだ。」
「それもそうだな。」
「宿毛（すくも）は部活何にするんだよ。さっきはどうでもいいやつに入っとけばいいって言ってたけど。」
「なんていうかなぁ。こういうときに限ってそういう部活って見つからないんだよなぁ。」
「あっ、なんかわかる。自分に合ってるの探してる時って自分が気に入ったのは何か都合が悪くて、気に入ってないけど都合がいいっていうことだろ。」
「そんなところ。でもさっきの説明聞いて、俺情報部にでもしようかなぁって思ってる。やっぱりこれからの時代パソコンいじれなきゃついてけねぇだろ。さすがに基本操作ぐらいはできたほうがいいかなぁって。」
「ふぅん。」
宿毛（すくも）にそう返事を返すと自分の肩が少し重くなった。
「どうした。」
落ち込み気味の僕が少し気になったらしい。
「なんかここまで来ると鉄研（てっけん）入るの俺だけなんじゃないかなぁって思えてきた。」
「なるほど。もし一人だったらお前が自動的に次期部長になるんだもんなぁ。」
「俺部長なんて柄じゃないし。出来れば俺よりもしっかりしたやつが入ってくれればいいなぁって。」
「ストライクゾーンの狭い要求だな。残念だけど俺は鉄研（てっけん）にはいかないぜ。部費１４，０００円なんて到底払えないからな。」
「そこをなんとか。お代官様。」
「他当たれって他。」
このやり取りを見ている人がいた。すらりと伸びた僕よりも身長のある人が。

教室に戻ると担任から部活登録届の紙をもらった。顧問はうちのクラスの副担任安曇川正司先生らしい。部活登録届をもらうと時間はすでに15時を回っている。全員10分間ぐらい自由にしていた。その10分間が過ぎると遊びを危ぶむ宣言があった。

「ええ、これからは毎日ノート3ページやって出してもらいます。」

（マジかよ。）

（これじゃあ北星と同じじゃん。）

「土曜と日曜合わせて6ページを次の週の月曜日に出して、ゴールデンウィークなどの連休中は1日5ページやって出してもらいます。この勉強は絶対みんなのためになるからな。この高校生活でどこまで頑張れるかが・・・。」

（知るか。）

その悪夢のホームルームが終わって・・・、

「永島。四ツ谷先生のあれ。どう思う。」

「俺たちを殺す気かよ。四ツ谷先生。」

「殺す気はないんだろうけど・・・。永島は当然やらないんだよなぁ。」

「やるわけねぇじゃん。あのなのやったらいつか死ぬ。だから反抗してノートは出さない。・・・。そう聞く宿毛は出す気あるのか。」

「ふと、これやったら永島を抜き返せるかなぁって思った。」

「やってみれば。ノート出したほうがいいか出さないほうがいいかはそれで決着がつく。」

「出したほうがいいだろ。・・・でもそれをすると対等じゃないか。永島が出さないなら、俺も出さないでお前に勝負しかけたほうがいいか。でないとハンデ大きいからな。」

「なんだ。結局宿毛も出す気ないじゃん。」

「だってやりたくねぇもん。北星受かってたら俺も考えたかもしれないけど。」

アルミ可撤出てきている下駄箱の下から2番目の手をかけて、ロックを解除。手前に引っ張ると靴の入った口がぽっかりと開く。上履

きを靴に履き替え、両開きになっている昇降口を出る。その先には階段があって１０段くらいの階段の２本立てになっている。最初の１０段を下ると進行方向右側にまた別の階段が通じてきている。

「あれ、永島(ながしま)そっちから帰るのか。」

「違うって。鉄研(てっけん)のあるとこ体育館のステージ裏って言ってただろ。だったらこっちから言ったほうがいいのかなぁって。」

「ああ、そういうことか。」

その階段を下ると１回の昇降口に通じる。そこを左に曲がって２・３年生の駐輪場のあるところへ向かう。ちょっと開けたところに出ると右手側に２・３年生の立体駐輪場。左手側に体育館の入り口がある。その入り口からステージ側を除くとステージの上に何か置いてあるのがわかる。

「ステージ裏じゃなくてステージ上じゃないのか。何か置いてあるし。俺が思うにあれの後ろに部室みたいなものがあるとは到底思えない。」

「どこにあるかなんて今はどうでもいい。それより、分からなかったら安曇川(あどがわ)先生に鉄研(てっけん)の顧問らしいし。」

「そうだな。鉄研の顧問らしいよ。」

宿毛(すくも)は歩き始めて、僕にさよならを言って帰った。

案内があった体育館ステージ裏に向かおうと思ったが、ここで路頭に迷った。すると誰かが声をかけてきた。振り向いて見るとクラスの・・・誰だっけ。

「佐久間(さくま)だよ。永島(ながしま)何してんだよ。」

「鉄研(てっけん)見に行こうかなって思ってて・・・。でも、ステージ裏って言ってただけでどこにあるのか分かんないからここに突っ立ってるっていう感じだけど。」

「鉄研(てっけん)っ。永島(ながしま)も鉄研(てっけん)はいんの。実は俺も鉄研(てっけん)に入ろうって思ってんだ。つうかそのためにここ来たくらいだし。どうせ見に行くんなら一緒に行こうぜ。」

「ああ。」

「でも・・・、場所が分かんないっていうのは俺も同じなんだよなぁ。」
「安曇川先生に聞けばいいじゃん。あの人顧問だし。」
「なんでお前聞かなかったんだよ。」
「んっ。多分頭がそこまでまわんなかったんだよ。俺バカだし。」
職員室に戻って安曇川先生を呼ぶ。すると、居合わせた先輩らしき人を呼びとめた。
「鷹倉君。この2人鉄研見学に行くって言ってるから、部室まで連れてって。」
「はぁ。アド先生。僕はただのパシリですか。あっ後、部活登録。」
「はいはい。分かりました。じゃあ連れてって。」
安曇川先生は鉄研部内ではアド先生と呼ばれているようだ。誰が命名したかは知らないけど、まあいいか。そして呼びとめられた鷹倉先輩という人はいかにも迷惑そうな顔をしている。しかし、その顔も誰かを見てからは変わった。
「絢乃。こいつら部室まで連れっていってやって。」
「ハクタカさぁ。そういうことするのやめなよ。」
と言ってから僕達のほうに顔を向ける。するとため息をついて、
「分かったよ。場所教えるだけでも教えとくわ。だから案内終わるまでは待ってろよ。」
「へイへイ。」
「で、ハクタカ。あたしの部活登録届も出しといてね。」
「お前なぁ。」
「じゃあ、行こうか。」
絢乃と言った人は紙をハクタカという人に渡して、すぐに僕達を連れていってくれた。
「鉄研に入部かぁ。君達ってなんか詳しいことってある。」
「俺は新幹線のことはだいたい分かります。」
まず佐久間が口を聞いた。
「俺は電車のことならだいたい・・・。」

「そう。電車のことで話をするなら先輩にいい人がいるんだけどなぁ。」

話しながら、体育館のグリーンベルトを歩く。端まで来るとドアを開けて中に入る。そこで体育館用のスリッパに変えるように促されて、体育館内に入る。中ではバスケット部が準備を始めている。どこまで行くのかと思っているとステージの手前で左にかじをきった。すると目の前にドアが現れる。そのドアを開けるとステージに上がるための階段。それを上ってステージに上がる。ステージを無視して、奥側の狭い通路に入る。そこをするするとすり抜けて、さっきいたところの反対側に来る。その前にはまた階段。それを7段上ると小さな踊り場を介してまた階段。この位置まで来ると上に二つのドアがあることを確認した。絢乃という人はそこまで来ると二つあるうちの左側のドアを指差して、

「あっちがあたし達の部室。普段は鍵がかかってるから、来たいときは安曇川先生か吹奏楽の山科先生に鍵をもらって開けてね。これで部室の場所分かった。」

「あ・・・、はい。」

「それじゃあ。今日は活動ないから。不定期っていうのも不便だよねぇ。ああ、そうそう。名前言ってなかったね。あたしの名前は楠絢乃。とりあえず部員だからよろしくね。」

そう言って来た道を戻っていった。僕と佐久間はしばらくその場にいたが、早く帰りたいという気持ちに押されて帰った。

今回からの登場人物

佐久間悠介　誕生日　1月15日　血液型　B型　身長　174ｃｍ

鷹倉俊也　誕生日　3月22日　血液型　B型　身長　173ｃｍ

楠絢乃　誕生日　12月22日　血液型　B型　身長　167ｃｍ

安曇川正司（アド先生）誕生日　10月21日　血液型　B型

身長　163cm
1年5組担任　四ツ谷（よつや）

5列車　岸川高等学校鉄道研究部（ＫＲＣ）

その頃萌が通い始めた宗谷学園では・・・。
「萌の彼氏は当然鉄研入ったんだよねぇ。」
「入らなきゃ岸川に言った意味ないしね。」
「ていうか萌なんで岸川行かなかったのよ。そうすれば彼氏とも同じ学校だったのに。」
「ナガシィが宗谷に行くのが一番だって言ったからね。それがあるとなんか行きづらいだろ。」
「ああ、そういうことか。それだと行きづらいわなぁ・・・。でも寂しくない。」
「そこまで子供じゃありません。ナガシィがいくら大きい子供だからって一緒にしないでよ。」
「永島君にあったら言ってやろうかなぁ。萌が永島君のこと大きな子供って言ってたって。」
「言ってもいいよ。本人がそう言ってたんだから。」
「・・・。」
（手回しが速かった・・・。）
翌日。部活の中身はまだ見ていないが、部活登録届を出した。数日後。今日はアド先生から活動日だと聞かされて勇んで楠先輩に教えてもらった部室に向かった。
だが、ドアの前に立ってドアを押してみると開かない。鍵がかかっている。
（あれ。ドアって押せば勝手に開くっていうやつじゃなかったっけ。）
しばらくすると佐久間も合流して、またしばらくの間ドアの前で突っ立っていた。
「あれ、新入部員。」
下から声がする。踊り場のほうを見てみると女子の顔がこちらをの

ぞきこむ状態にある。
「サヤ早く来てみ。新入部員いるよ。」
その人はサヤという人を呼んだ。ちょっとするとそのサヤという人が顔を出した。
「あれ、なんで前に突っ立ってんの。入ればいいじゃん。」
第一声はこれかよ。この人はバカなのか。それとも、ウケを狙っているのか。
「サヤバカだろ。鍵かかってるから入れないに決まってるだろ。」
「あれ、鍵は善知鳥(うとう)が持ってるんじゃないの。」
「あたしが持ってるわけないでしょ。だからサヤが取って来てよ。」
「サヤ先輩も善知鳥(うとう)先輩も自分で鍵取り行くとかして下さいよ。」
聞き覚えのある声は楠(くすのき)先輩の声だ。その声がしたあとサヤという人が階段を上って来て部室のドアを開放した。
「あれ来てたんだ。前に鍵は安曇川(あどがわ)先生か山科(やましな)先生に貰ってって言ったのに。」
僕達の顔を見つけるとそう言って、
「ちょっと狭いけど入れば。電車好きにはたまらない部室だと思うし。」
促されて中に入った。入ってみると確かに狭い。ドアのすぐ横にはレールの入った箱が置かれている棚。レールの他に転車台の模型も置かれている。ドアの左側にはカラーボックスみたいなのが２つ置いてある。ぱっと見モジュールの材料になりそうなものが置かれていた。その向こうには木の棚があり、そこには製作中のモジュールが置かれている。そして、右側奥の方には白いケースに詰まった引き出し。中はカラーボックスの中身と同じモジュールの材料だろう。真ん中あたりにはこの狭い部屋に長机。それも２つはベコベコになおり、そのうちの１つには製作中と思われるモジュールが３枚置かれている。またそのうちの１つには木の棚が置かれており、そこにはＥ２３１系の写真とモアイ像が置かれている。意味はあるのだろうか。そして、その長机に対応するように長椅子が一つ。後は折り

たたみ椅子が3脚。学習椅子が5脚ほど置かれている部室だった。
　先輩達は思い思いの席に腰をかけて、休んでいる。さっきサヤと呼ばれた人はＰＦＰをやり始めて、善知鳥という人と楠先輩は携帯電話をいじり始めた。全員マイペースすぎて逆に困るというか・・・。しばらくそんな状態が続いていると、また人が来た。だが、その人はドアを開けるとすぐにドアを閉めてどっかに行ってしまった。
「ナヨロン。」
いきなり善知鳥という人が叫んだ。ドアに突進して、今帰ったと思う人を捕まえて、部室の中に引きづり込んだ。
「おい。善知鳥。首掴むことないだろ。いつもギャグでやってるの分かってるじゃないか。」
「半分冗談じゃないって気があるから。つい癖で。」
「それはウソだろ。ていうかお前らここのこととかいろいろ言ってやれよな。１年生は分かんないんだから。」
今いる3人を叱ってからその人はこう説明してくれた。
「とりあえず名前だけは言っとくわ。俺は名寄真佐哉。よろしく。」
「あだ名ナヨロンな。」
「余計な事言うな、善知鳥。まあいいか。多分お前らも強制的に善知鳥にあだ名つけられると思うから・・・。とりあえず中のこと説明しとくけど、お前らの後ろにある棚と木の棚でちょっと隠れてるところ以外は開拓していい。今言った部分開拓すると死ぬからやめとけってことをまず最初に言っとく。で他は、その後ろの白いケースと、こっちのボックスの中にはモジュール作りのための道具。まあ作らなきゃ関係ないけどな。それで木の棚の下にあるのが、ボンド水と工具。と、無いとは思うけど間違ってボンド水飲むなよ。飲んだら食道と胃が固まるから。まあ今言っとくのはこれだけかな。」
辺りを見回して、
「お前ら自己紹介だかなんかやったか。」
「やってないよ。」
「じゃあやれよ。１年生来てるのにゲームとか携帯は失礼だろ。」

「分かったよ。じゃあ名前くらいは言っとくわ。」
それまでＰＦＰをいじっていたサヤという人がゲームを一時中断して、
「俺の名前は北斎院大智（きたさやだいち）。漢字難し（むず）いからサヤとかって呼んでくれていいよ。」
「あたしは善知鳥茉衣（うとうまい）。電車のこととか全然分かんないけど、分かんないことあったら聞いて。でこっちの彼女がハクタカの追っかけの・・・。」
「ちょっ、善知鳥（うとう）先輩。余計なこと言わないでください。」
「えっ、だってそうじゃん。」
「そうじゃありません。」
「顔真っ赤で説得力無いよ、アヤノン。」
「だから、善知鳥（うとう）はそういう余計な説明しなくていいんだって。」
「ええ。いいじゃん。」
「いやそれがよくない。」
3年生が言い合っている間にまた一人やってきた。その人を見て、
「アヤケン。オヒサァ。」
僕達を見ると、
「新入部員。」
「ああ、そうだよ。」
「じゃあ、名前は言っとくな。綾瀬健斗（あやせけんと）。部活じゃアヤケンで通ってるからそう呼んでもいいよ。」
ざっと自己紹介を済（す）ませる。
「そういやあ、お前らの名前聞いてなかったな。1年何組でどこに住んでるかと名前言ってもらうか。まずそっちののっぽのほう。」
「1年5組の佐久間悠介（さくまゆうすけ）です。涼ノ宮（すずのみや）に住んでます。」
「涼ノ宮かぁ。案外近いね。」
今度は指を僕のほうに向けて言えと促す。
「1年5組の永島智暉（ながしまともき）です。小楠（おぐす）の中瀬（なかぜ）っていう所に住んでます。」
（小楠（おぐす）の中瀬（なかぜ）・・・。永島（ながしま）・・・。）

「佐久間悠介に永島智暉かぁ。分かった。」
「部員は全員で6人って言ってましたけど、今ここにいるのは5人ですよねぇ。」
「前職員室の前であたしと話した人がいるでしょ。あの人が6人目だよ。名前は鷹倉俊也っていうんだけどね。ハクタカってみんなに呼ばれてるからそう呼んでもいいよ。」
噂をしているとその鷹倉先輩が来た。
「彼がさっき言った鷹倉俊也君。前あってるから分かるよね。」
「ああ、はい。」
その後佐久間は足早に帰り、僕はしばらく部室においてあった車両で遊んだ。
「永島ってどんなあだ名がいい。ないならあたしの独壇場で決まるけど。」
「ああ、じゃあ。ナガシィでお願いします。」
「分かった。永島イコールナガシィだって。皆覚えろよ。」
「・・・。」
「そのあだ名って何か関係あるんですか。」
「別に関係ないよ。ただ鉄研の文化みたいなやつ。この部活の部員は全員友達だからさぁ。先輩と後輩の関係っていうのも少しは大事なんだろうけどあたしはそんな固いこと言わなくていいと思ってるだけ。」
「・・・。」
「は・・・反応無っていうのも少しつらいんだけど。」
「善知鳥先輩インパクトありすぎなんですよ。1年生からヒカレル対象だと思いますけど。」
「そうか。ねぇ、ナガシィあたしってそんなに個性的か。」
「えっ・・・。」
「ほら、永島が困ってるじゃないか。」
「いやあ、ごめん。いきなり難しい質問しちゃって。まぁそんなに固くならなくていいってだけ。いいよ、あたしに限ってはタメ口で

も。」
「タメ口聞くんならナヨロンのほうがいいんじゃないか。こいつ電車詳しいし。」
「それだけでそうするなつうの。」
「ウソ。それは冗談。」
「どこまでが冗談で、どこからが本当なんだよ。」
「よし、質問変えよう。担任誰。」
（こいつは人の言うこと聞いてるのか・・・。）
「えっ。四ツ谷先生ですけど。」
「うわっ。四ツ谷かよ。」
「四ツ谷かぁ。お前まだよかったな。」
先輩たちがこういうのは十中八九あのことだろう。そのことを先輩に聞いてみると夏休みや冬休みに1日5ページ出されるということは本当。そして、出さないといつか付けが返ってくるということを聞いた。
「へぇ。そうなんですか。」
「まぁ、ナガシィならどうにかなりそうだね。バカそうだし。」
（いや。こいつバカじゃないだろ。）
ふと時計を見るともう18（6）時だ。
「あっ、すみません。今日はこれで。」
「ええ。もう帰っちゃうの。もうちょっと長くいればいいのに。」
「帰るって言ってるのに引き留めちゃいけないだろ。」
「次の活動日いつですか。」
「明日だけど。」
「じゃあ、明日も来ます。失礼します。」
ドアを閉めて帰路についた。
その後の部室では・・・、
「すごいのが来たな。」
名寄がつぶやいた。
「すごいって。ナガシィなんかすごいところでもあるのか。」

「いや、あいつ自体がすごいって意味じゃない。永島の家がすごいって言った方がよかったかな。」

「どういう意味だよ。」

「あいつ、小楠の中瀬ってところに住んでるって言ってただろ。たぶん間違いないと思う。あいつ遠江急行の社長の孫だ。」

今回からの登場人物

北斎院大智　誕生日　１１月１９日　血液型　Ｂ型　身長　１６９ｃｍ

綾瀬健人　誕生日　３月３０日　血液型　ＡＢ型　身長　１６７ｃｍ

名寄真佐哉　誕生日　９月３日　血液型　Ｏ型　身長　１７１ｃｍ

善知鳥茉衣　誕生日　６月４日　血液型　Ａ型　身長　１６５ｃｍ

5列車　岸川高等学校鉄道研究部（ＫＲＣ）（後書き）

珍しく連続投稿です。今後連続投稿は恐らくないと思いますが、読んでくれる人には感謝。

6列車　彷徨い娘

部室の窓を割るほどの絶叫が5秒間続いた。
「マジ。ていうかふつうそういう人って北星とかに行かされるんじゃないの。」
「行かなかったんだろ。あすこは完全な進学校だし。」
「そりゃあ置いといて、なんでそう・・・ってさっき言ったか。」
「でも、ナガシィってそういう風に見えないよね。」
「いや、あの性格でそう見える方がすごいと思う。」
「もうその話やめればいいじゃないですか。同じ部員なんですから。そういう目で見ない方がいいですよ。」
楠がこの話を辞めさせてからはいつもと同じバカ騒ぎに戻った。なお、この部活のクオリティーはバカ騒ぎにある。
その頃運動場のほうでは・・・。
「友紀はソフト部でしょ。私もソフト部に入ろうかな。」
「そう。留萌は入ろうって思ってるんだ。木ノ本は。」
「えっ。まだ迷ってるけど・・・毎日練習はきついなぁ。」
「おい。中学のときだってそうだろ。だいたい運動部なら毎日練習しないとダメでしょ。」
「榛名が言いたいのは中学の途中から部活来なくなってたし、続けられるかどうか不安ってことでしょ。」
「それもあるけど・・・。」
（入るか入らないかは別として一度鉄研部も見に行ってみるかなぁ。）
ソフト部が練習する風景はもはや白黒でしか映っていない。色づいて見えていたのはオープンキャンパスで鉄研がやっていたあの展示だった。ただ、女の子が鉄研に入っていいのだろうか・・・。その口論が続いていた。
翌日。

「永島。ノートやってきたか。」
「昨日言ったじゃん。やる気ないって。」
「いや、いちばん最初ぐらいはやっといたほうがいいって。1か月くらいやってゴールデンウィークのあたりから面倒になりましたって言えば通るって。多分お前だけだぜ。1日目からやってないっていうのは。」
「・・・。」
ちょっと心配になったが、そうでもなかった。逆にやってある人のほうが珍しかったぐらいだった。
「出して損じゃないのか。宿毛。」
「いや。損とは思ってない。でもあれやるのは骨がいるってことは分かった。書くスピード速い俺でも2時間はかかったぜ。さすがに90行はきついなぁ。」
「そんなこと言わないで。よけい痛みがひどくなる。」
その放課後。
(鉄研かぁ。)
壁に貼り付けてあるポスターを見てふと思う。そう言えば岸川に来てから鉄研のこと以外正直考えたことがない気がする。
(女の子でも見に行っていいんだ・・・。よし。)
決心をきめてポスターが指示する部室のあるところまで行ってみることにした。だが、体育館のところまで来て足が止まる。ここに来るとバスケット部の目がある。鉄研を見に来たと思われたくないというのも少しある。
すると、今来た方向から一人走ってくる人が見えた。矢のごとく自分の前を通り過ぎて、ドアノブに手をかけた。
(鉄研部員・・・。)
その人からは何かと自分と同類のような気配がする。思い切って声をかけてみた。
「ねぇ。君、鉄研部員。」
顔をこちらに向ける。

「そうだよ。・・・見学に来たの。」
とりあえずここははいと返事をする。そうでなければここに来た意味がない
「そう。じゃあ、昇降口で靴替えてくれれば。そうすれば、ダイレクトで帰れるから。」
「・・・分かった。替えてくるけど、私部室の場所分かんないんだけど。」
「分かった。戻ってくるまで待ってるよ。」
待たせては悪いと思いすぐに皮靴に替えて戻った。戻るとさっきの人が約束どおり待っている。その後はその人に促され、靴をスリッパに替えて、バスケット部の隣を通ってステージ裏の通路を通って階段を上がる。左側のドアに手をかけて開けようとすると鍵がかかっている。
「開けんの面倒くせぇなぁ。」
独り言を言って、その場に座った。しばらく立ったままでいたが、
「ねぇ。カギ取りに行かなくていいの。」
「そのうち先輩が来るって。それまでこのままでいいよ。」
するとその先輩が来た。先輩もまた面倒くさいと言ってその場に座る。次の人もそうだ。誰か取りに行く人はいないのだろうか。すると下から怒った声がする。その声を聞くと先輩の一人が腰を上げて、ドアを開けた。
部室内に入ると携帯電話使い放題。同じ一年生と思われる人は木の棚のほうから車両を取りだして、机の上に置かれているモジュールで遊び始め、他の人は携帯電話をいじるかＰＦＰでゲームをし始める。
「よーす。皆。」
後ろからすごく大きな声だ。ただ、今後ろから入って来た人は男子ではない。女子の声だ。
「おお、新入部員。これでナガシィとユウタンと合わせて３人目かぁ。」

「えっ、マジ。」
「サヤ先輩今気付いたんですか。」
「しょうがねぇだろ。こいつはスゲェ鈍感なんだから。」
「まだ部員になるとか限らないです。今日は部活見学に来ただけみたいですから。」
「へぇ。でもうれしいよ。名前なんて言うの。」
「木ノ本榛名(きのもとはるな)です。」
「榛名(はるな)ちゃんかぁ。で、ちなみに榛名ちゃん電車好き。」
「・・・まぁ、少しは。」
「へぇ。あたしは電車全く分からないけどよろしく。善知鳥茉衣(うとうまい)よ。それで、そこでゲームやってるのがこの部活の部長の北斎院大智(きたさやだいち)で、奥で携帯いじってるのが綾瀬健斗(あやせけんと)で、もう一人携帯いじってるのが・・・。ねぇ、サヤ。ハクタカって名前なんだっけ。」
「3年生分かってて2年生分かってないってなんですか。鷹倉俊也(たかくらしゅんや)です。」
少々あきれ気味になっているのは分かる。
「それで、そこで遊んでるのが、同じ1年生の永島(ながしま)・・・。」
「智暉(ともき)です。」
「そう。智暉君だ。」
(なんてハイテンションな部活だよ・・・。)
「まあ、部員は後2人いるんだけどねぇ。今日ナヨロンとアヤノンとユウタンはどうした。」
「ナヨロンは補修。」
まずアヤケン先輩が答える。それに続けてハクタカ先輩が、
「絢乃(あやの)は日直(にっちょく)。」
と答えた。
「じゃあ、来るっていうことだね。」
「佐久間(さくま)は帰ったと思います。」
「帰ったって。面白いのに帰るなんて本当にやなやつだな。」
「まったくだ。この部活に来なくて何が面白い。」

「そこまでいう人はごく稀だと思います。」
「そうか。」
「ぼ・・・僕の場合は家でも十分楽しいですけど。」
「それはそうだろうな。」
振り向いてみるとそこにいたのはナヨロン先輩だ。
「あれ、ナヨロン補修じゃないの。」
「補修だけど、その道具ここに忘れてったみたいで探しに来ただけ。」
「多分、これだろ。はい。早くしないと補修に遅れるぜ。」
サヤ先輩がその補修道具をナヨロン先輩に手渡す。
「大丈夫。もう間に合うとか思ってないから。後、これサンキューな。」
その後楠(くすのき)先輩も合流。僕は昨日と同じ6時くらいまで遊ぶ。6時になると時間だと言って帰ろうとした。見学に来た木ノ本(きのもと)もほぼ同時に帰ると言った。
部室を出て、足早に階段を下りる。
「永島(ながしま)君。ちょっといい。」
まだ部室のドアの前に立っている木ノ本に止められる。
「いいけど、何。」
「私って・・・鉄研(てっけん)に入ってもいいと思う。」
（なんじゃそりゃ。）

今回からの登場人物
木ノ本榛名(きのもとはるな)　誕生日　8月13日　血液型　O型　身長　160cm
室蘭友紀(むろらんゆき)　誕生日　7月1日　血液型　A型　身長　162cm
留萌(るもい)さくら　誕生日　7月20日　血液型　A型　身長　157cm

6列車　彷徨い娘（後書き）

こういう感覚って書きづらい・・・。
思い切って女子鉄も出してみました。

7列車　またまた新入

いきなりそう聞かれても・・・。僕には入ればいいじゃんと答えるしかない。
「入ろうと思ってるなら、入ればいいじゃん。」
「でも、私女の子だよ。女の子が鉄研(てっけん)に入るってなんか変じゃない。」
「変じゃないだろ。先輩の中でも女子いたじゃん。」
「あの2人は違う。マニアじゃない。・・・あの人たちは旅行ができるからこの部活に入ったって言ってたじゃん。でも私は入るならそんな理由で鉄研(てっけん)に入らない。私は言っちゃえばマニアなの。」
「ならなおさら・・・。」
「でも、女の子が鉄研(てっけん)とかそういう部活に入っていいのかって。」
一度降りた階段をまた上る。
「そんなの関係ないよ。なんに興味持とうが、どんな部活に入ろうがそれはその人の自由だろ。木ノ本(きのもと)が好きなようにすればいい。」
「・・・。」
「もし入りたくないなって思ったら、中学で入ってた部活にでも行けばいいじゃん。もちろん、その部活が自分にとって楽しければの話だけど。」
今度は上った階段を下りる。
「永島(ながしま)君。ありがとう。ようやっとどうすればいいか分かったよ。」
「そう。んじゃあサイナラ。」
階段を下りてさっきの勢いで帰っていった。ステージの向こう側にチラッとその姿を捉えて、
（なんに興味持とうがその人の自由かぁ。）
翌日。
「蘭(らん)。ちょっといい。」
「何。木ノ本(きのもと)。入りたい部活でも決まった。」

「うん。私鉄研はいる。」
「・・・。やっぱり。そうだよね。ソフト部来たって木ノ本にはきついだけだもんね。」
「まあね。そういえば、さくらはどうするって。」
「留萌はソフト部入るだって。まあるもいを辞めて鉄研に行きそうなところはあるけどね。」
「・・・。」
しばらく友達の室蘭友紀を見つめた。
「どうした。あたしの顔になんかついてる。」
「ううん。なんか蘭はこうなること分かってたのかなぁって。」
「分かったかぁ。分かってたらあたしは神だね。・・・でも、そうなるのかなぁ。木ノ本中学に入ってからだんだん元気がなくなってきたじゃん。だから木ノ本が好きな鉄道でどうにかなるかなぁってね。」
「やっぱり分かってたじゃん。」
「いや、でも女子の入る部活じゃないって敬遠するとは思ってたけどね。最初はマジで敬遠してたし・・・。」
「途中経過はダメダメでも結果オーライだろ。」
「だな。・・・鉄研入るからには楽しんでこいよ。そこでいい彼氏とかもできるだろうし。」
「さぁそれはどうかな。」
「まさか、もういるとか。」
「えっ・・・。い・・・今はいないよ。」
「まあ今はそんな話どうでもいいか。」
話は授業によりここで中断にされた。でも伝えたいことはちゃんと伝わっているだろう。
その後木ノ本はもう一人の親友留萌さくらにも鉄研に入るということを伝え、同日。部活登録届を提出した。
その頃5組では・・・。
「永島。今日は出しといたほうがよかったんじゃないのか。」

「確かにそうかもな。でもどんな奴でも続いて1か月だろ。早い奴は三日坊主で終わるにきまってる。」
「お前の場合はやらずじまいだもんな。」
「だってやりたくないもん。あんなのやるくらいなら家でずっと模型いじってるほうが楽しい。俺がここに来た理由は・・・。」
「鉄研やるためであって、勉強は二の次だろ。それは分かってるけど、出さなかったやつお前だけみたいだったから絶対ホームルームの時にたたかれるぜ。」
「たたかれようがどうってことねぇよ。ていうかそれで定期テスト俺の上に行ってくれるやつがいれば俺にとっては大歓迎だけどな。」
「それは、俺か。それとも、また未知の人間か。」
「できれば、お前。」
「ないな。お前の上あきらめたわけじゃないけど、絶望的だと思う。」
宿毛の言ったことは当たった。
「永島。お前だけだぞ。ノート3ページ出してないのは。お前はできるんだからこれやってもっと上狙うべきだ。」
(狙い気ないのに。)
「はい。じゃあ、さらっとやって持ってきます。」
とか、適当に返事をしておいた。
「あれ言ったら余計ヤバいんじゃないか。」
「ヤバいな。でも出す気はない。死ぬから。」
「その死ぬっていうのは当たってるな。俺もう9ページやって出してるんだけど、あの9ページだけでもしんどいって思った。あれは永島の言うとおり続く人でも1か月だと思う。」
「だろ。やらないでもそれが伝わってくるんだから異常だって。それならノート代を払わずに自分の小遣いにしたほうがよっぽど賢い。」
(永島にとってはそれが賢い選択なんだな。)
「つうか宿毛はあれやり続けるの。」

「あれ1冊終わるまではな。それ以降はやれない。つうかやらないと思う。」
「そう。んじゃあ。俺今日も鉄研やってくから。」
「おう。じゃあな。」
その後ろ姿を見送っている間
（永島のやつ。鉄研あるっていう日だけ元気だな。坂口と一緒じゃなくなったからか。いや。そんなことあまり首ツッコまないほうがいいか。あいつの選んだ道だし。）
その頃宗谷学園では・・・、
「萌ちゃん。今日何か部活見てく。」
「それだったら綾だけで行けば。私情報部に入る気もないし。」
荷物をまとめて、カバンを背負う。すると、すたすた昇降口のほうへ歩いて行った。その後ろ姿を磯部と端岡が見送る。
「萌ちゃんどうしちゃったんだろう。情報部にも愛想つかしっちゃったのかなぁ。」
「そうじゃないの。」
「ナガシィ君と一緒じゃないから。」
「それかなぁ。あたしはもっと別な理由だと思うけど。」
「例えば。」
「・・・。すぐには思いつかないって。萌の考えるパターンって永島君でないと分かんないくらいだと思うし。」
「そこまでかなぁ。」
「そこまでじゃない。つか話ズレてる。あたしが思うにもう部活には入りたくないんじゃないの。なんかに専念したいっていうのかなぁ。そんなこと読み取れるんだよねぇ。」
「なんかに専念したいって。何に専念する気よ。ナガシィ君との恋愛。」
「それじゃないと思う。永島君のことはそっちのけじゃないのは分かるんだけど・・・。」
（私ってこれからどうすればいいの。ナガシィと同じ進路に行くた

めには観光系の専門学校かなんかよねぇ。でも、どの学校に行けばいいの。それが全然分かんない。少なくとも浜松にあるっていう国際観光と大原はなしね。あんなところ言ったってろくなものにはなれない。なんかナガシィには知られたくないし・・・。どうすれば・・・。）

　またその日の放課後。鉄研の部室にさらに3人が押し掛けた。その3人は全員中学生で名前は背が高い順に諫早轟輝、空河大樹、朝風琢哉だそうだ。

「じゃあ、あだ名はイサタン、ソラタン、アサタンでいいね。」

「えっ。それはどう・・。」

「新入部員に拒否権はない。」

ナヨロン先輩が言っていた強制的というのはこういうことか。

「で、みんな何に詳しい。」

「僕は模型鉄ですから、それなりに電車のことは分かってますけど。」

まず諫早が口を開いた。それに続いて、空河がディーゼルに詳しいと言い、朝風は寝台特急に詳しいと言った。

「みんなそれぞれ詳しいものがあるんだな。」

木ノ本が傍らでつぶやいた。

「なんだ。自分には詳しいものはありませんみたいな言い方してるけど。」

「今はね。昔は寝台特急とか新幹線とかはだいたい分かってたんだけどね。小学校の3年生くらいになった時から女の子がこれに興味持っててていいのかなって考え始めてからはどんどん忘れてって、今分かるのは新幹線の形式か特急の名前だけ。」

「まあ鉄研に入ってて新幹線が分かんないんじゃ絶望的だからな。」

「何。ナガシィ。新幹線分かってなきゃ絶望的か。」

会話を聞いていた善知鳥先輩が自分の頭に手を置いた。そして、強く握る。

「いや、そういう意味じゃなくて、0系とか「こだま」とか。それ

ぐらいは分かってた方がいいってことです。」
「ごめんね、ナガシィ。あたしには0系も「こだま」も分かんないから。」
「いやそれでも「こだま」、「ひかり」、「のぞみ」くらいは分かってた方がいいですよ。日本人として。」
「何。ハルナンもそう思ってるのか。じゃあ、「こだま」とか分かってなきゃ日本人失格ってこと。」
「まあ、簡単に言えば・・・。」
「言っちゃうの。」
僕はこう答えたが、先輩たち。特に3年生は当然というような顔をしていた。
「・・・まぁ言われてもしょうがないとは思ってるけどね。膳所さんや青木さんにもそう言われたからなぁ。でもね、覚えられれば苦労しないわけよ。どうやったらナヨロンみたいにオタク化できるか分かんない。」
「おい。オタクって言うなオタクって。少なくともマニアの領域で止めといてくれない。」
「だってナヨロン完全にオタクじゃん。ＳＬのボイラーの形とかが違うからこれはなんとかっていうことふつうの人間が解るか。」
「それはお前の出してる例がマニアックすぎるだけ。いくら電車知らない人間でも１９６４年１０月１日に東海道新幹線東京～新大阪間５１５．４キロが開業したことくらいは分かるだろ。」
今度はアヤケン先輩が口をはさむ。
「あのう。そこのなんていうか分かんない先輩。いくらなんでも総延長は分かんないって。」
諫早も話に入ってくる。
「少なくとも、１９６４年１０月１日に東海道新幹線が開業して、東京～新大阪間が「ひかり」で3時間。「こだま」で４時間になったっていうは知っとくべきでしょ。」
「所要時間なんてド素人が解るかよ。だったらまだ総延長のほうが

ハードル低いって。」
「アヤケン先輩も諫早もやめろよ。１９６４年１０月１日までは一般常識としてその先は２人ともマニアックだ。」
木ノ本が止めに入る。
「だから、開業当時は最高速度２１０ｋｍ／ｈから始めたって言った方が分かりやすいだろ。」
「やめんか。アヤケンと諫早が話に入ったから話がこじれてるだろ。だから・・・。」
「サヤ先輩まで辞めてください。余計話がややこしくなります。」
僕が止めに入ってようやっと話が収まった。その後はまたまた電車の話で持ちきりにはならず、面白話で持ちきり。６時になるまで部室でバカ騒ぎ。木ノ本の話では先輩達は７時までバカ騒ぎらしい。でも、その時間までこの状態が続いても暇じゃないのはすぐに想像できる。

今回からの登場人物
端岡夏紀　誕生日　２月２１日　血液型　Ｏ型　身長　１６４ｃｍ
磯部綾　誕生日　１１月３日　血液型　Ａ型　身長　１４７ｃｍ
諫早轟輝　誕生日　１１月１７日　血液型　Ｏ型　身長　１５９ｃｍ
空河大樹　誕生日　２月１０日　血液型　Ｏ型　身長　１５１ｃｍ
朝風琢哉　誕生日　５月８日　血液型　ＡＢ型　身長　１４７ｃｍ

7列車　またまた新入（後書き）

このやり取りって知ってる人でないとウケないかなぁ・・・。

8列車　気持ち　決定

そのまた翌日。
「結局今日も出さなかったんだな。」
「やる気ない奴のやる気を底上げしてやったって無駄。ともかく俺にはやる気はない。何と言われようと絶対やらない。」
「はいはい・・・。」
「何。」
このところずっと思っていたことを永島（ながしま）に打ち明けてみた。
「永島（ながしま）。お前寂しくないのか。」
「えっ。」
「なんか知ってるから余計こう感じるのかなぁ。お前を見てると今のお前より中学の時のお前がもっとイキイキしてた気がする。」
「・・・。」
「今からいつものお前になってっていうのは無理っていうのは分かってる。そうしてくれてたのはあいつだっていうの分かってるけど、元気がないお前はお前らしくない。」
「・・・。」
「俺思ってたけど、お前はあいつのことが好きなんだろ。今からでも遅くない。あって気持ちを確認しあうだけでも自分の気持ちがもっと落ち着けるんじゃないかって。」
「・・・。」
「こんなこと言いたくないけど、何か言ってくれよ。ずっと黙ってるってお前らしくないから。」
「気持ちだけなら確認し合ったかもな。卒業式の時に。」
「・・・。なんだ。それなら。」
「寂しいっていうのは当たってるかもな。いつも話してたやつが今はいないんだから。」
「・・・。」

しばらく机を挟んだ状態でいる。
「永島（ながしま）。俺でもいいか。」
その言葉で顔を上げた。
「俺にお前の電車の知識ぶつけてくれ。俺電車のことはわかんないけど、覚えることだったらお前にも負けない。お前が持ってる鉄道知識を俺にぶつけて・・・。もっと言っちゃえば俺をあいつと思ってくれて構わない。それぐらいの気持ちで俺と話してくれ。そのほうが断然お前らしい。」
（宿毛（すくも）。）
「なぁ。頼む。暗いお前は正直見たくないんだ。」
「・・・。悪いけど、それはできない。半分萌（もえ）だからできったってところもある。それをお前が再現しようとしたって無理だ。宿毛（すくも）に電車のことは覚えられない。」
「なんでだよ。」
「じゃあ、聞くけどお前東海道新幹線がどっからどこまで走ってるかわかるのか。」
「そ・・・それは。」
「最低限今この段階でその話ができないと・・・。」
「決まったわけじゃない。今からでも間に合う。俺がそのこと全力で覚えれば1日で十分だ。掘り込んだところまで・・・。」
「だから無理だって言ってるだろ。その知識は萌（もえ）だから習得できたんだ。いくら頭がいいからって。お前の頭はそういう風にできてない。宿毛（すくも）は・・・、お前はいつもみたいにしてくれればいい。それだけでいい。」
「永島（ながしま）・・・。」
「自分で言うのもなんだけど、なんかこれだけで俺たちは終わらない気がする。今元気が少しないのは我慢の時だと思う。」
「・・・。」
「分かった。そんなに簡単に終わらない来いっていうのは俺もうすうす感じてる。・・・。でも・・・、どうしても我慢しきれなくな

ったら俺に言えよ。なんでも受け止めてあげるからな。」
「宿毛（すくも）・・・。ありがとな。分かった。どうしてもそうなったらお前に鉄道知識いっぱいぶつけるからな。」
「はっ。ぶつけるものは悩みじゃなくてそれかよ。」
「さっきそうしてくれって言ったじゃん。」
「・・・。そうだったな。」
その日の放課後。
「今日また新入部員が来たぞ。」
今日は一段とテンションの高い善知鳥（うとう）先輩である。
「また新入部員かよ。今年は善知鳥が言った通りブレイクしたな。」
「さぁ、新人入って来い。」
そう言われてはいってきた人は・・・。木ノ本（きのもと）はその顔を見ると、
「あっ、箕島（みしま）君。」
「えっ。木ノ本さん。」
「新入部員って箕島君だったんだ。」
その会話を聞いている善知鳥先輩の目は明らかに光っている。
「何ハルナン。まさかハルナンの彼氏だった。」
「そんなんじゃありません。同じ中学同じクラスだった人です。」
「なんだ。つまんないのー。」
「はい。そういうこと言わない。」
「まあいいわ。それより今日はもう一人部員が・・・。何勝手に入ってるんだよ。」
善知鳥（うとう）先輩がそう言ったとき全員その人の存在に気付いた。
「何か入ってきたし。」
「もの扱いしないでください。」
「いや。したくなる。」
「はい。サヤもそういうこと言わない。」
「とりあえずまずは名前だけ言ってくれるか。」
「1年4組の箕島健太（みしまけんた）です。よろしくお願いします。」
「1年7組。醒ヶ井瑛介（さめがいえいすけ）です。よろしくお願いします。」

「あだ名はミッシィ、サメちゃんでいいよね。考えるの面倒だし。」
「そんな安易でいいのかよ。」
「その前に先輩。サメちゃんっていうのはやめてください。」
「何。文句でもあるの。」
「・・・。いえ、ありません。」
善知鳥先輩は醒ヶ井の文句を人にらみで退けると今度は僕たちの紹介に入った。
「こっちが鉄研部員。」
と言ってから人数を数えて、
「いないのはユウタンだけか。まあいっか。この部活の天然部長のサヤとモジュールデザイナーのアヤケンとマニアのナヨロン。北陸大好きのハクタカとその人大・・・。」
「それ以上何も言わないでください。」
そう言わせまいと楠先輩がその口をふさぐ。
「ぷはぁ。分かった。じゃあ、言い方変える。鉄研のホームヘルパーアヤノン。後は鉄研一お調子者の1年生ナガシィと1年生の紅一点ハルナンとあんまり部活に来ない背の高いユウタン。これで全員よ。」
「・・・。」
「だから、善知鳥先輩のそのハイテンション差で1年生がヒイテますって。」
「じゃあどうすればいいのよ。あたしからこのテンション取ったら何も残らないんだからね。」
「それはよく分かってますけど・・・。」
「分かってるならそれでいいじゃん。」
そのやり取りを見ていた箕島が、
「なぁ、木ノ本さん。この部活っていつもこんな感じなのか。」
「こんな感じだよ。まぁ、1年生の中にもそういう人いるけど。」
その人に目を向けて、誰かということを言う。
「納得。」

そういうと同時に心の中で思うことが一つあった。
（部活内でのあだ名がナガシィって言ってたな。俺と同じ感覚でつけてあるとすれば、こいつの名字は永島か。まさかとは思うけど、永島ってあれじゃないよな。）
「普段からこういう感じなんだろうけどな。」
「普段からねぇ・・・。」
（これでもしあれだったら驚きだぞ。）
しばらく先輩たちと話していると部室のドアがまた開いた。
「おお、イサタン。」
「手を上げろ。」
諫早は手で拳銃の形を作ってあからさまにこう言った。それに乗せられて手を挙げる人は・・・。
「うわぁ。お前ら手あげないと撃たれるぞ。」
「そこまでじゃないだろ。諫早が作ってるのは指拳銃。弾丸が出てくるわけないじゃん。」
「サヤ先輩。死んでください。」
どこから取り出したのだろうか。諫早が手にしていたものがいつの間にか本物の拳銃になっている。
「あーっ、バカやめろ。」
「そこまで驚かないでください。エアガンなんだから。」
「そんなの学校に持ち込むんじゃない。あぶねぇから鞄中しまっとけ。」
「諫早・・・。お前休日とかになったら山に分け入ってサバゲーでもやってるのか。」
「そんなのやってませんよ。休日は家で自分の模型いじってますから。」
諫早はエアガンをかばんにしまいながら言う。
「・・・。」
続いて空河と朝風が来て、中学生全員がそろう。
「諫早。お前本当にエアガン抜いたのか。」

「ああ。抜いた。サヤさんの反応が面白かったけど。」
「イサタン。後で覚えとけよ。」
「はーい。ちゃんと忘れまーす。」
こういう部活でいいのだろうか。でも、こういう部活だからいいのだろう。
それから数日が過ぎていき、４月２０日。部活登録のあった新入部員は僕を含め８人。鉄研部は全員で１４人となった。
これから岸川学園鉄道研究部（略ＫＲＣ）の今期の活動が本格化していくのだ。

今回からの登場人物
箕島健太　誕生日　４月５日　血液型　Ａ型　身長　１５９ｃｍ
醒ヶ井瑛介　誕生日　２月２１日　血液型　Ｏ型　身長　１６５ｃｍ

８列車　気持ち　決定（後書き）

このところ連続投稿。あー死ぬー。
とまぁようやっとここまで来ました。そういえば舞台設定していませんでしたが、この物語２００８年スタートです。
ということは・・・なんですよねぇ。
これからこの先の展開を考えるためにまた不定期になるかもしれませんが、読んでくれる人には感謝。

9列車　基本事項

４月２４日。部活決定の日から４日。クラスの人ともなじんで、次はという段階。これからは部活の先輩やその仲間、高校生活になじむ番である。それの一環と言っていいのかはわからないが、鉄研部員１年生は５組に集合して昼食をとっている。

日も浅いことだし、全員自分たちの話になるのは当然のことだろうか。みんなのことは少しでもわかっておく必要がある。

「永島は何で電車が好きになったわけ。」

僕の右隣に座っている木ノ本が話しかけてきた。

「うーん・・・。なんで、好きになったか。」

「そうそう。だってここにいるみんなは電車のことが好きだから入部したようなもんでしょ。だったら知りたいじゃん。その理由。」

「それだったら、木ノ本が電車好きな理由のほうが聞きたいなぁ。」

これには全員興味を示した。木ノ本はちょっと話しづらいという顔をしたが、

「お母さんに憧れたから。」

と答えた。

「へぇ。木ノ本の母さんって運転手みたいなことやってるの。」

「うん。ＪＲの在来線の運転手やってる。よくそれ見にお父さんが連れてってくれたんだ。その時から電車のこと好きになった。」

「へぇ。」

「で、永島。質問には答えたんだし、私の質問にも答えてよ。」

「ああ。・・・自分でもよくわかんないんだよなぁ。それ。」

「えっ、何かきっかけあるでしょ。それとも物心ついた時から好きなわけ。」

「いや、そうじゃないんだけど・・・。いつ、どのタイミングで好きになったかわからないんだよなぁ。「パノラマスーパー」見たときからか、１００系を見たときからか。」

「「パノラマスーパー」はいつ見たんだよ。」
「多分、幼稚園の時。よく兄ちゃんに連れられて１００系見に行った時も幼稚園の時だったから。」
「なるほどねぇ。子供の記憶だし、あいまいになるよなぁ。佐久間は何で好きなの。」
「んなことしらねぇよ。いつの間にか好きだったんだから。」
「箕島は。」
「俺は、こういう部活もいいなぁって思って入っただけだから。」
「醒ヶ井は。」
「モジュールとか作れるって言ってたじゃん。だから楽しそうだなって。」
全員に目的はあるそうだ。
「おーい、ナガシィ。」
ドアのほうから大きな声が聞こえた。一様にその方向を見てみると善知鳥先輩が立っていた。
「なんですか。」
「今日、アド先生が集合って言ってたから、それ伝えに来た。」
「あの、それもう全員知ってますけど。」
「・・・。ならいいや。全員こいよ。」
とだけ言って、自分の教室のほうへ走っていった。
１年生も交えた今季最初の部活動。今までと同じように部室に集う。今日は何をするのだろうか。
「よーす。諸君。さぁみんな運べ。」
善知鳥先輩がみんなに指令を出す。その指令を聞くとすぐに先輩達は嘆いた。それも裏声である。嘆く必要はあるのか。そして、裏声である必要もあるのか。おそらくないだろう。
「じゃあ、１年生は全員外に出て、階段のところに並んで。」
名寄先輩が外に並ぶように促す。今日はどうやら荷物運びらしい。
部室前の階段に醒ヶ井、箕島、木ノ本、僕の順に並ぶ。すると、上からまず白いケースが大量に運び出されてきた。次はどこに置い

てあるかも分からない謎の物体の山。最後はいたるところに指の跡が付いている荷物。ぶっちゃけていうと金属の山。電車のおもちゃやそのレールなど。鉄道研究部に関連するものも含まれている。だが、中には・・・。

「なぁ、なんで卓球ラケットがあるんだ。」

木ノ本（きのもと）が回ってきた荷物の中にある卓球ラケットを発見する。

「ホントだ。なんに使うんだよ。」

荷物を渡されて、中を見てみる。すぐに見つかったラケットは1つ。だが、よく見てみると1つだけではない。3つある。他に卓球ボールも入っている。本当に何に使うのか分からない。すると上から、

「おーい。そっちにラケットいってない。」

北斎院（きたさや）先輩の声である。

「あっ、来てますけど。」

「ちょっとそれ、必要だから上にまわして。」

「サヤ先輩がラケットの入った箱上にまわしてだって。」

「なんに使うの、これ。」

「さぁ。」

用途不明のままラケットの入った箱を上に戻した。

しばらくの間部室から下ろされる荷物を床に置き続ける。安曇川（あどがわ）先生（アド先生）がその荷物をステージ裏にある狭い通路に置いて行く。狭い通路がさらに狭くなる。上からは「ゴミ」とか「あーっ」とかいう声に混じって、掃除機の音や、何か物を動かす音が響いてくる。一方階段のところからは上から運ばれてくる荷物にあだ名をつけて伝言ゲーム状態。もちろん前者の声も後者の声も何の意味もないと思う。

なんだかんだもう18時。その頃にもこの作業は終わりが見えない。醒ヶ井（さめがい）が用事で帰ってからもしばらくはこの状態のままだった。

体育館で練習しているバスケット部がランニングするころになると、上から先輩達が大量のゴミ袋を抱えて降りてきた。僕達1年生はそれと入れ替わりに自分の荷物を持って下に下りる。

「そんじゃあ。今日はこれで終わりだから、みんなオツ。」
サヤ先輩が簡単に締めくくる。
「で、誰がゴミ袋を捨てに行くか決めたいんだけど・・・。」
と言った瞬間に6つあるうちのゴミ袋を2つもって駆けだす人が一人。
「あっ、ハクタカフライング。」
鷹倉(たかくら)先輩を追って善知鳥(うとう)先輩が。続いて、サヤ先輩がまた2つゴミ袋を持って走りだそうとすると、
「ちょっと待てよ。それは俺の獲物だ。」
「離せアヤケン。獲物だったらまだそっちにあるだろ。」
「あっちのはゴミだから。」
「お前ゴミ袋にゴミって言ってどうすんだよ。ゴミ袋の立場がないだろ。」
「知るか。」
その頃僕の傍らにいる名寄(なよろ)、楠(くすのき)先輩は・・・。
「ナヨ先輩。プレゼントです。」
「んじゃあいってくるか。」
「あっ先越された。いい加減離せ。」
「獲物くれるまではなさねぇよ。」
「おい、ホモケン離せ。」
「サヤが渡してくれれば離すよ。」
「誰がこれやるか。」
「あのう。楠(くすのき)先輩サヤ先輩達は何やってるんですか。」
「毎回恒例のゴミ袋争奪レース。詳しいことは後で説明するからちょっと待っててね。」
すると楠(くすのき)先輩はサヤ先輩が左手で掴んでいるゴミ袋の一つを取って、さっさと走っていった。それを追うようにしてサヤ先輩がアヤケン先輩を振り切り、アヤケン先輩はそれを追っていった。僕達はというとただ唖然とした顔で見ていただけである。しばらくすると、毎回恒例ゴミ袋争奪レースに参加してきた先輩達が全員戻ってくる。

「んじゃあ、お約束が終わったところで全員解散。」
サヤ先輩が息を切らしながら解散命令を出す。解散命令が出された後楠先輩がこう教えてくれた。
「モジュールとか作ってると、そのゴミが出るから毎回ゴミ袋に固めて、サヤ先輩の前に置いとくじゃん。それでサヤ先輩がゴミ袋に話しに入ったところでスタートよ。体育館を出て、あっちの2・3年生のチャリ置場のあるところにダストシュートがあるから、そこまでダッシュするの。取られないようにね。それで、取られずにダストシュートにいれたら、その人の勝ち。取られたら取った人の勝ち。」
「うーん。よく解んないけど、ゴミ袋持ってダストシュートまで逃げろってことですよね。」
「そういうこと。面白いから次からやってみれば。じゃあね。」
「なぁ、永島。鉄研って本当に個性的だな。」
「ハハ、個性的すぎて少しついていけないかもな。」

4月25日。今日もまた部活。9時30分から開始ではあるが、先輩たちは全員パワフルである。北斎院先輩以外は全員集合済みだ。
「善知鳥先輩たち早いですねぇ。」
「そうかぁ。そんなことより、授業担当誰だか知りたい。」
なんでパワフルという話からこんな話になるのだろう。善知鳥先輩の話方は全く読めない。とはいっても聞かれたことだ。話すのが鉄則だろう。
「えーと、生物の担当が橋本先生で、・・・」
「サッカーボールじゃん。サッカーボールって最悪じゃない。授業の教え方とかくそ下手だよ。要点言うだけだし。それだったら教師いらないっていうくらいだから。」
「えっ、サッカーボールって。」
「だって、あのメタボ体系。完全にサッカーボールじゃん。人にけられながらダイエットすることをお勧めするよ。」

「善知鳥違うって。サッカーボールは袋井。」
「袋井。あれは、ラグビーボール体系。腹が出てて、縦に長い。で、ごめん他は。」
「英語は小林先生で、数学は青梅先生、情報が東中野先生。」
「数学青梅とか最強じゃん。」
「おめぇらいいな。青梅先生は指導力あるから。後の小林と東中野はどちらでもない区分。最悪でもないし、最高でもないってところかなぁ。」
理数系コースのアヤケン先輩はどうしても青梅先生にあやかりたいそうだ。
「あとは、国語アド先。社会は四ツ谷だろ。」
「何かとすごいな。でも、四ツ谷って嫌だろ。毎日ノート3ページ出されるんだから。」
「あっ、確かにそれはちょっと。僕なんか出してませんから。」
「早いなぁ。でも、テストとかでいい成績とると特進行けとかってうるさくなるぞ。」
「えっ、ナヨロン先輩も言われたんじゃないんですか。」
「ああ、言われた。でも、そんなことしたら遊べなくなるからなぁ。」
「どうせ遊び相手いないじゃないか。」
「うっさい。これからできるんだよ。これから。」
するとドアが開いた。見ると木ノ本だった。善知鳥先輩はいまぼくにしたのと同じ質問をして、ナヨロン先輩とアヤケン先輩はそれを聞いて楽しんでいる。そうしている間に9時30分になった。
「はい、みなさんお集まりですね。」
ドアを開けてアド先生が部室の中を覗き込んだ。
「あれ、北斎院君はどうした。」
「サヤだったら、まだ来てませんけど。」
「部長不在じゃあなあ、困ったもんだな。」
と言っているとサヤ先輩が息を切らして、部室に飛び込んできた。

「北斎院君。おはよう。」
というとアド先生はサヤ先輩の首を後ろからつかむような体制をとった。
「アド先生。それダメ。やっちゃダメ。」
「はいはい。これからは部長が遅れるということはないようにしてください。」
すると僕のほうを見て、
「永島君。木ノ本君。ちょっとそこの木の板とってくれないかなぁ。」
と頼んだ。いち早く木ノ本が反応し、白いケースの隣に無理やり押し込んで歩きの板を1枚取った。木の板は薄いベニヤ版。長方形の形になっている。木ノ本がそのベニヤ板をアド先生に渡す。
「あと綾瀬君。直線レールの入った箱持ってきてくれないかなぁ。」
「へーい。じゃあ、このゴミに植林終わったら行くから少し待ってちょ。」
その返事を聞くとアド先生は下に来て、と手招きをした。僕たちはそれに促されて、部室から出る。部室から出るとすれ違いに中学生の諫早と空河にあった。アド先生はその二人にも声をかけて、ステージに降りた。ステージに降りると、僕たちがいつも利用している奥の通路から折りたたみ椅子を取り出してきて、一人勝手に座る。僕たちはその前に思い思いに腰を下ろす。諫早と空河が合流して、数秒経つとアヤケン先輩が緑色の横30cmくらいある箱を持って下りてきた。アヤケン先輩はその箱を渡してすぐに部室へと戻っていく。それを確認してから、
「これがKATOというところから出ているレールです。」
と説明を開始した。アド先生が取り出したものには、当然だが、レールが2本規則正しく並んでいる。そのレールの下にある黒くレールと直角に並んでいるものが枕木。そういえば、今はコンクリートの枕木が主流だということがあったが、その中で「木じゃないじゃないですか。」とツッコミを飛ばしていたことをふと思い出した。

木でなければ、名称は「枕コンクリート」にでもなるのだろうか。
「これはＫＡＴＯ（カトー）から出ている最も標準的なレールです。これの長さが１２４ｍｍ（ミリ）です。ＫＡＴＯ（カトー）のほうはこれを基本にレールの長さが決まっています。例えば、これの２分の１のレールは６２ｍｍ（ミリ）。これの２倍のレールは２４８ｍｍ（ミリ）。その２４８ｍｍ（ミリ）のレールに６２ｍｍ（ミリ）足すと３１０ｍｍ（ミリ）という風になってます。さらに長さを調整するために６４ｍｍ（ミリ）とかっていう端数レールも出てますし、このような伸びるレールなどもあります。」
アド先生はまだ箱から出されていない伸びるレールを僕たちに掲示した。このレールには他と違って真中は枕木ではなくコンクリートをモチーフにした板が取り付けられている。そのレールの上には「７８－１０８」と書いてあった。元の長さは７８ｍｍ（ミリ）。最大は１０８ｍｍ（ミリ）になるということだろう。
「ただ、このレールはほかのレールより壊れやすいので、慎重に扱ってください。」
直線レールの説明は大体終わった。今度はカーブレールについての説明。
「これの裏側を見てください。」
アド先生はカーブレールをひっくり返すとその真ん中のあたりを指差した。そこには「Ｒ２８２－１５。」と文字が浮き上がっている。
「これの「Ｒ」というのはこのカーブのきつさを表しています。そしてこちらの「１５。」というのはこのレールで曲がれる角度を表しています。そして、カーブとカーブの間は３３ミリが基本になってます。だから、２８２ｍｍ（ミリ）の次は３１５ｍｍ（ミリ）、その次は３４８ｍｍ（ミリ）という風になってます。それで、この中に２１６ｍｍ（ミリ）のやつがありますが、それは製作には使わないでください。」
説明が終わると今度は箱に入っているレールと２本ずつ僕たちに渡した。
「つなげてください。」
そう指示があった。２本のレールを床に置いて、連結する。中には

空中のまま連結したりする人もいる。連結が完了すると、しばらくそのままでいた。

「それじゃあ、今度はこれを外してください。」

そう指示が出る。両方のレールに手をかけて引っこ抜こうとする。だが抜けない。

「このレールは両方に引っ張っても抜けないようになってます。だから、この継ぎ目をどちらかに折り曲げるようにして引き抜いてください。Ｎゲージのレールは両方に引っ張って抜けるやつやこれみたいにどちらかに折り曲げて抜けるタイプもあります。」

説明を受けた後はその通りにぬいていくだけ。これが完了すると後ろに置いてあったベニヤ板を取り出した。ベニヤ板を床に置いて、レールを3本つなげる。そして、板の上に置き、左右を合わせた。

「この板は２４８ｍｍのレールを3本つなげた長さになってます。２４８ｍｍを3本つなげると何ミリだ。計算せい。」

「２４８×3で、７４４ｍｍです。」

後ろからナヨロン先輩が覗き込んでいた。

「はい。今名寄君が言ってくれた７４４ｍｍというのがこの部活のモジュールの基本です。この中にレールが収まるようにしてください。」

その後レールのさらに詳しい説明を受けた後、自分たちで何を作りたいかということを聞かれた。僕としては家にいっぱいある分、何を作りたいかなんて言う欲望はない。だが、ほかの人は駅を作りたいとか山のある風景作りたいとか、川がある風景を作りたいなど意見は様々。その中でも採用されるのはごく一部。今回は山と川の融合と山と駅の融合。後は留置線のある風景を作ることとなった。

9列車　基本事項（後書き）

だんだん鉄道研究部らしくなってきました。

１０列車　製作

そういう風になったとはいっても僕は作り方を知らない。当然一緒に作ることになった木ノ本も知らない。これでは到底前に進むことはないだろう。

「ナガシィ。何作るの。」

「えっ、留置線のある風景でも作ろうかなぁっと思って。」

「そういうことで分からないことがあったらアヤケンに聞くのが一番だよ。あいつ器用だし。」

「ああ、はい。そうします。」

「おい、善知鳥。そういうところで俺の仕事を増やすな。まだ、あれ出来てないんだから。ナヨロンにでも頼め。あいつは車両だけだけど何も作れないってわけじゃないから。」

「ナヨロンに頼むとろくなことがないじゃん。古墳作るって言い出すかも・・・。」

「そう言ったのはサヤだぞ。それで俺が作ったんじゃないか。結局ごみの一員になったけどな。」

先輩と話していたら余計進まなくなる。とりあえず、家に広がっているレイアウトのことを思い出す。だが、家のレイアウトにはこういう風なものはない。自分たちに与えられているのは板3枚だけ。これが家にあるレイアウトみたいになるのだろうか。そう思った。

「まぁ、まず配線決めるかぁ。」

「そうだな。でも、どうやって配線すればいいわけ。」

「さっきアド先生がやってたみたいにやってけばどうにでもなるだろ。とりあえずポイントと直線レールがあればどうにかなるかぁ・・・。あっそれだけじゃどうにもならねぇ。ゆるくてもいいけどカーブも必要かぁ。」

独り言のようにしゃべっていると、

「ほれ。」

アヤケン先輩がレールを持ってきてくれていた。手に持っているのは２４８ｍｍレール１２本。

「線形が単純ならこれだけで足りる。留置線配置するっていうなら、もうちょっとこの直線レールと道床が片方ないレールと１２４ｍｍのポイントレール４番とかっていうふざけたやつが加わるから。」

そのレールはふざけているのだろうか。僕たちが探そうという前にアヤケン先輩はそれも探して持ってきてくれた。さっき言っていたレール。ポイントレールは皆さんお分かりだと思うが、片方道床が欠けているレールというのは見たことがないだろう。見てみるとそのレールは標準の半分くらいの長さで僕たちから見て左側の道床が斜めにカットされている。文字通り片方道床が欠けたレールだ。

「４番ポイントの直線側にこのふざけたレールをつなげて、その片方にＲ４８１のカーブを分岐側に組ませる。こうすると両方の線路がつくんだ。もしこの４番ポイントで、道床が欠けてないやつとやると片方ははまってももう片方ははまらなくなる。だからこんなふざけたレールがあるんだよ。」

さっきから聞いていればアヤケン先輩はそのレールのことをずいぶん迷惑がっている。だけど、その理由は問いてはいけないことにも思えた。とてもくだらない理由が返ってきそうだからである。

「お前らに必要なレールはこのくらいかなぁ。後、その直線レール。道床の色何かに揃えとけよ。その中でも茶色のやつは結構古いのだからあんまりあてにしないほうがいいぜ。」

とだけ言って部室に上がっていった。

アヤケン先輩から渡されたレールを使って配線をする。さっきアド先生が言ったとおりにして、直線レールをつなげていく。２４８ｍｍの直線レールを３本つなげたところで、１枚目の板の上に置く。すると、ちょうどぴったりとおさまるのだ。もちろんこのことには種も仕掛けもある。

「とりあえずはなったな。」

木ノ本の隣を見てみるとまだレールが余っている。それもカーブレ

ールとポイントレール。
「お前バカだろ。この中に留置線を配置しなきゃ意味ないだろ。これじゃあ、ただレール並べてはい終わりじゃん。」
「知らないよ。大体留置線はそっちに並べるんじゃないの。こっちには余裕が。」
「あるだろバカ。何のためにこの板があるんだよ。こっちには隙間がないんだよ。どこをどうやったらレールが並べられるんだよ。」
ちなみに今どういう状態でレールが並んでいるかというと、僕のほうはしっかりと板の端を一直線に、木ノ本（きのもと）のほうはそれに並行して仲良く並んでいる。
しばらくどうすればいいかを考える。もちろん方法はいくらでもある。真ん中に留置線を持ってくる、真ん中に留置線を持ってくる。このうち僕たちがとった策は真ん中だ。そのため、木ノ本（きのもと）が敷設した線路にカーブレールを組み込み、1本レールが入るスペースを作る。次に僕の敷設したほうの1枚目の終わりにポイントレールを組み込み、留置線につながる線路を作る。2枚目は3本のレールが並んでいる状態のまま右側まで進んで、2枚目終了直前に留置線が終了。3枚目は1枚目の逆バージョン。ポイントレールが組み込まれていないところだけは1枚目を違うか。その状態で配線が完了した。
配線が完了したところで、僕たちのものをアド先生に見てもらう。アド先生のほうは別にいうこともなかったらしく、配線はこのままでOKということだった。
「よし。じゃあ、ここまで進んだら、罫書きをしてください。」
「けがき。」
「このレールの配置をペンかなんかで板に写し取ってくださいってことです。さぁ、やって。」
いわれるがままそうやる。レールと板の接着しているところにペンを当てて、レールに沿って線を引く。そして、全部の線を引き終わったら次は継ぎ目の部分に今書いた線とは直角に線を引く。これで、どこに継ぎ目が来るのかがわかる。継ぎ目を書くまでが終了したと

ころで、仮置きした線路を板から外す。線路配置が決まったところで次の作業に入る。次の作業とは当然、家などの配置を決めることだ。

「家の位置決めろって言ったって、わかんないよなぁ。どこにどうやっておいていいかわかんないし。」

「こういう時ってどうすればいいんだろう。」

「永島（ながしま）って電車に詳しいよなぁ。こういう方面も詳しくないのか。」

「電車詳しいからってこれも詳しいなんてこたないよ。」

しばらく考え込む。するとさっきの言葉が思い浮かんだ。

「というわけで、聞きに来たんですけど。」

「はいはい。」

僕たちのモジュールのところまで来てもらい、アドバイスをもらう。

「なるほど、線路配置は決まったのね。」

そうつぶやくと、近くにあった家の模型から一つ取り出して、説明を開始した。

「これは、道路の形を想像しながら、建物を配置して組んだ。こういうところはどういう風になってるかなぁっとかってことを想像しながら、家の配置を決めていく。それが難しいなら、先に道路の形を決めちゃったほうがやりやすいよ。」

アヤケン先輩はそう教えてくれた。

アドバイスをもらったところで、家の配置に取り掛かる。まず道路を決めてからとも言ったが、お互い想像力に乏しいわけではない。頭を使って物を作る。

「ここの道路の感じは線路に沿ってずっと続いてるってどう。」

「いいんじゃない。それなら、ずっとこっちに続けていくでいいじゃん。」

「それでもいいけどさぁ、ずっと平坦ってなんかやじゃない。2枚目だけ丘にしちゃうとか。」

「でも、そんな道路あるのか。それだったらなおさらトンネルかなんかだろ。」

「それ言っちゃったら、道路がトンネルで並走してる鉄道がトンネルじゃないっていうところあるのかよ。私の知ってる限りじゃないぞ。」
「わかったよ。じゃあ、2枚目は丘にしちゃうでいいか。」
「丘にするのはいいけど、それだれが作るんだよ。私汚れるの嫌だからね。」
「汚れるのは俺も嫌だけど、それ言ったらものなんて作れないだろ。だったらジャンケンで決めようぜ。」
ジャンケンをやって結果は、
「永島（ながしま）。お前いかさまとかしてないよなぁ。」
「ジャンケンでどうやっていかさまするんだよ。」
「えっ、簡単じゃん。後だしとか、マインドスキャンとか、ジンクスとか。」
「ジンクスはないけど、マインドスキャンって無理だろ。千年眼（ミレニアムアイ）じゃないんだから。」
プラノコの歯を発泡スチロールに入れる。前後に動かすとキュ、キュっと音を立てる。
「ああ、この音ヤダ。」
「木ノ本（きのもと）、もうちょっと静かにやれないか。」
「あんたはいいよなぁ、耳ふさげて、私はふさげないのよ。ちょっと変わりなさいよ。」
「ヤダよ。」
「変われ。」
「ヤダ。」
すると楠先輩（くすのき）がやってきた。
「あっ、楠先輩（くすのき）。これ変わってください。」
「遠慮しとくね。あたしの専門は物作りじゃないから。」
あっさりと断られた。
次に来た醒ヶ井（さめがい）は、
「あっ、醒ヶ井（さめがい）、これ変わって。」

「おう、いいよ。」
快く引き受けてくれた。
「醒ヶ井君。こんにちは。」
醒ヶ井が来たことに気づいてアド先生が醒ヶ井の後ろからつかみかかる。
「こんにちは。ていうか安曇川先生やめてください。今切ってるところだから。」
そう言っている間にカット終了。
「これだけなら、俺じゃなくて、自分たちできれよな。おれもこの音嫌いだから。・・・ん。木ノ本。もしかしてそのためだけに俺に切らせたのか。」
「うん。思いっきりはまってくれてありがとう。」
何がともあれ、作業が完了したのだ。次は道路の配置だ。
「この発泡をこうやってくと道がふさがるんだよなぁ。また切らなきゃダメじゃん。」
「おい勘弁してくれよ。また俺に切らせるのか。」
「うん、分かってる人は分かってるねぇ。」
「分かりたくないんだけど。」
「大丈夫。おれたちも手伝から。だから、醒ヶ井はこっちのここから下を切り出して。俺と木ノ本で、こっちを坂みたいにするから。」
「おい、そっちそんなに人数いらないだろ。」
「気にしない、気にしない。」
「気にするよ。」
と話していると、
「みなさん。１２時ですので。お昼にしてください。」
とアド先生から指示があった。

１０列車　製作（後書き）

最初は不定期更新。この頃は毎日更新・・・。
いつかまた不定期更新に戻るかも・・・。
そんなのでも読んでくれる人には感謝。

11列車　バスケと走行テスト（前書き）

ストーリー中にある批判はあくまでもストーリーの中だけですので。
現実にそうということは一切ありません。

11列車　バスケと走行テスト

作業は一時中断。部室に戻って、弁当を食べる。
「ナガシィ、ハルナン、サメちゃん、ミッシィ、イサタン、ソラタン、アサタン。バスケットやらない。」
「おお、面白そうじゃん、やろやろ。」
サヤ先輩がそれに乗る。サヤ先輩に次いで、アヤケン先輩も乗った。
「おーい、バカタカとアヤノンはやらないのか。」
「バカタカって呼び方やめてください。つうか、いつから僕のあだ名は変わったんですか。」
「あたしは運動は苦手だからやめときます。一人プレイだったらしますけど。」
「えー、シュートだけ。つまんないじゃん。試合やろうよ。試合。」
「でも、それ下のバスケット部がいなければの話でしょ。」
箕島（みしま）が当然の質問をした。
「大丈夫。バスケットは午前中だけ。午後はあたしたちの貸切になる。」
弁当を食べ終わって下に行くと、さっき言ったとおりバスケット部はいなかった。
「ほれ、やるぞ。」
体育館のステージから飛び降りて、北の器具庫のほうへ走っていく。中からボールをつく音がして、善知鳥（うとう）先輩がドリブルしながら、出てきた。
「善知鳥（うとう）先輩。体操服とか持ってきてませんよ。」
「大丈夫。見られたら見られたでご愛嬌。」
「じゃあ、僕参加します。」
「おお、サメちゃんはすかさず変態を自嘲したぞ。ナガシィたちは参加しないのか。うまくいけば、女の子のパンツが見れるぞ。」
「そういう釣り方やめろつうの。」

「・・・。」
「榛名、参加するなら、あたしの体操服貸すけど。」
「えっ、でも。」
「いいって。どうせあたしは参加しないんだし。それに、モジュールも作ってないし。」
「・・・じゃあ、私も。」
「じゃあ、ちょっと上来て。ハクタカ。もしのぞきにきたら、頭から飛び降りてよ。」
「のぞかねぇよ。」
「ふぅん。あたしの時はのぞきに来るのに。」
「それは。お前の着替えてるタイミングが悪いだけだろ。」
「ねぇ、ナガシィ。本当に参加しない。」
「楽しそうだから、参加します。」
「よーし、4対4でやるか。」
やる人は全員体育館のフローリングに行ってスタンバイする。その姿を見ている人は、
「善知鳥のやつ。ああいっても中にハーフパンツはいてるよなぁ。」
「あれにつられる醒ヶ井って。ただの変態なんじゃないのか。」
「ああ、ただの変態かもなぁ。」
「もう集まってるし。」
「ハルナン。早く、早く。」
「楽しそうなのはいいんだけどなぁ。」
「ハクタカ。今日は珍しくのぞきに来なかったね。」
「だから、のぞいてるんじゃなくて、お前の着替えるタイミングが悪いって言ってるだろ。」
「それ言ったら、ハクタカの来るタイミングが悪いってことになるじゃん。」
「そうかもしれないけど、着替えるタイミングも悪い。」
「ハクタカ言ってることおかしい。だからバカタカって言われるんだよ。」

「いったな。クソアヤ。」
「ナガシィ。パス。」
「いただき。」
「あっ、サヤとるな。」
「申し訳ない。昔バスケットやってて。」
「少しは手を緩めろよ。」
「残念。はいスリーポイント。」
１０分後。
「つ・・・疲れた。この頃動いてなかったからな。」
「最後なんか体育苦手な善知鳥（うとう）にもボールとられてたもんな。」
「うるさい。ああ、暑い。服ぬぎてぇ。」
「脱げばいいじゃん。」
「女子がそんなにさらっと脱げばって言うなよ。」
「サヤ先輩、上から扇風機持ってきますか。」
「ああ、お願い。」
「はぁ、久しぶりにバスケットやったなぁ。１年生以来だっけ。」
「そうだな。猪谷（いのたに）さんがいた時以来だな。昔はバスケットがいないときは製作そっちのけでよくやったな。」
「サヤ先輩たちそんなことしてたんですか。」
「ああ、あのときは俺たちも若かった。」
「若かったって。もう年寄りみたいな言い方ですね。」
「人間１８になればおじいちゃんの仲間入りすんの。１８になると体が言うこと聞かなくなる。」
「サヤ先輩。そんなこと言わないでくださいね。」
扇風機を持ちに行った楠先（くすのき）輩が言った。
「だってそうなるんだからしょうがないだろ。」
扇風機の前に行って誰もがよくやることを始める。
「だから、サヤとるなって。」
「マジックカード。部長権限を発動。」
「トラップカード。無効を発動。」

「あー、バカたれ。トラップカード。カウンターカウンターを発動。」
「サイクロン。」
何を始めると思えば・・・。
「おいおい、何こんなところでデュエルしてるだよ。」
サヤ先輩と善知鳥(うとう)先輩がそんなことをしている間に扇風機はナヨロン先輩が占領していた。だが、僕には別のことを思い出していた。萌とよくやったのだ。カードはほぼそのままでモンスターカードだけ電車にしてやったことがある。あれについては自分でもよく考えたものだと感心するところがある。
それはさておき。１３時４５分から作業再開。
「これ、塗料で塗ったほうがいいよ。」
アド先生に言われて上から筆と塗料の缶を持ってくる。この塗料缶の固まったふたを開けると、中で塗料が固まっていた。カッピカピになっており、乾ききった土のようにひびが入っている。仕方がないので、体育館を突っ切って近くの水道まで歩いていく。水を入れて、筆で押したりすりつぶすようにしながら、水に浸らせていくと塗料が復活。ここまで来てようやっと塗る作業に入った。
発泡スチロールと板の道路と家の部分に塗る作業を施行すると、この先の作業が進まなくなると思ったが大きな間違いだった。塗料は一度塗っただけでは下地が透けてしまうらしい。そのため何べんも塗って色を濃くする。それが完了すると外に持って行って、干す。その間塗料の缶にふたをして、筆を洗う。この部活では筆を洗わなかったら制裁があるという。何ともおかしな風習がある。
筆を洗い終わってもとの位置に返す。これが終わると次は配置すると決めた家の組み立て。Ｎゲージの家屋は組み立てられ終わっているものからプラモデルのように自分で組み立てるものまで様々。僕たちが使うと決めたものはジオコレという中の数種類。近郊住宅地の全シリーズを網羅してモジュールに配置することにした。これを箱から出すと、地面と壁など数枚のパーツに分かれている。それ

を組み合わせて、地面となるところにさしていく。これをさし終わるときれいな近郊住宅ができる。このころには塗装した板のインクも乾いており、中に持ってきて、どのように置くか仮置きする。

「その住宅はそこかよ。面倒だから順番に並べちゃおうよ。」

「おいおい、そんな住宅地あるのかよ。」

「醒ヶ井（さめがい）ツッコんだら負けだと思っていいよ。」

「どういう意味だよ。」

「まあ、それでいいだろ。」

「これはこれでいいんだけど、ここどうする。変に余っちゃったけど。」

「工場にでもすればいいだろ。」

「えっ、ちょっと古臭い感じのこれにするのか。」

「いいだろ古臭くても。半分模型だからできることじゃん。」

「そうだな。」

「おい、そっちはもういいよ。こっちはどうするんだよ。そっちばっか決まったって意味ないぜ。」

「そっちどうしようか。」

「コンビニとか。トラックステーションでもいいんじゃないか。」

「えー、トラックステーション。」

「えっ、ヤダ。」

「いいよ、何も思いつかないし。」

「ああ、そう・・・。」

「永島（ながしま）君。他を決める前に線路つけちゃっていいよ。まず電気が通るかどうか確認して。」

アド先生がレールを取り付けていいという。午前中に決めたレールを元通りに直して、幅のある両面テープで張り付けた。レールをつけ終わると、バラストをまく。バラストとはレールの下にひかれている砂利のこと。あれは車輪からかかる重みを少しでも分散させる効果がある。一種のキャタピラなのだ。僕たちの取り扱っているレールは道床という部分があってその道床の部分がバラストの部分で

ある。まかなくてもいいのではあるが、まかないままだと木の板があらわになる。そのために薄くまく必要がある。さっきの両面テープと同じように上からバラスト（カラーパウダー）の入った容器を持ってきて、指でつまみながらまく。地道な作業がツボにもなる。

1枚にバラストをまき終わると板を立てていらないバラストを落とす。滑り台のように駆け下りていったバラストをさらにかき集めて、2枚目に転用。2枚目も同じ作業を行って余った分は3枚目に転用。3枚目で余ったバラストはごみを含まないように容器に戻す。

バラストをまき終わると車両の走行試験。順番が逆なのはご愛嬌。とりあえず、走れば今はOKだ。部室にある名鉄（めいてつ）「パノラマデラックス」とフィーダー、コントローラー、フィーダー線接続用の線路を持ってきて、試した。

コントローラーのコンセントを差し込み、コントローラーのパイロットスイッチが点灯したことを確認する。そして持ってきた「パノラマデラックス」を線路上に置いて、ディレクションスイッチを前進に入れた。そして、コントローラーのつまみをゆっくりと回す。

電気に反応した「パノラマデラックス」の顔が次第に明るくなる。ライトがついているのだ。そして、ピクッと前に動いた。するとぎこちないがゆっくりと動き出し、僕から見て手前側。板の端の線路を完全に走破した。

今度はディレクションを後進にして、同じように走らせる。こちらも良好。「パノラマデラックス」は順調に走った。

走るということが確認されたら今度はフィーダーをさしている線路を変えてテストする。「パノラマデラックス」もそっちへお引越しして、同じ動作を繰り返した。今度もよく走ったいたのだが、2枚目と3枚目を越えるところで、急に止まった。

「あれ、どうかしたの。今までよく走ってたのに。」

見ている全員が異変に気付く。「パノラマデラックス」を覗き込むと、顔がさっきと違って暗いことに気付いた。電気が行っていないのだ。「パノラマデラックス」を走っていた位置まで後退させると

「ギュイーン」とモーターが動いた。電気はある位置まではいっている。だが、進むとすぐに止まった。
「これの位置変えてみればいいんじゃないか。」
「いや、それじゃあない。」
今度は「パノラマデラックス」をどかして、走らなくなるところを検証した。すると、2枚目と3枚目の継ぎ目はジョイナーと呼ばれる部位が一つしかないことに気付いた。
「分かった。こいつだ。」
2枚目と3枚目を切り離した。切り離し終わると上に行って、アヤケン先輩に言った。
「アヤケン先輩。このジョイナーってどこにありますか。」
「ジョイナー。ああ、レールの入ってる箱から、ジョイナーのついてるレール出して、あーって取り外せばいいよ。」
なぜ「あー」のところだけ裏声だったのか。それはさておき、レールの入った箱を探す。レールの入っている箱を見つけたが、なかなかジョイナーのはまったものに出くわさない。出くわしてもなかなか外れない。だんだん外れないジョイナーにキレたくなってくる。
「あーっ、もう。なんで外れないんだよ、バカたれ。二つはまったの出てこいや。あったら返事しろーっ。」
全部独り言です。
「すげぇ。永島(ながしま)がどんどん鉄研色(てっけんしょく)に染まってく。」
善知鳥(うとう)先輩は何か別なところに感心している。
なんとか2つジョイナーのはまった線路を見つけて、持っているレールとつなげる。そしてすぐに外す。すると本来ジョイナーのはまっているほうにジョイナーがはまる。これで問題は解消だ。
そのレールを下に持って行って再びはめる。また走行テストを行うとこの区間もとおるようになった。内側の線路も電気が通ることが確認された。
そして時間は16時。今日の作業はここで終了した。

翌日。４月２６日。今日もモジュール製作である。今日はほとんど走ることを楽しむだけ。午前中はほぼそれだけで終わり、昼はまたバスケットボール。午後になって初めて、製作を進めた。今日は２枚目の住宅地づくりである。

「ここも近郊住宅だけだとなんか張り合いないよね。」

「それはないだろ。１枚目で近郊住宅を使っているいじょうそれはできない。どれもこれも同じようになるからなぁ。」

「醒ヶ井（さめがい）って本当にこれだけだよなぁ。」

「うるさいなぁ。」

「あと、変態っていうのもあるよねぇ。」

「だまれっつうの。」

「まぁ、それは置いといて、ここどうする。」

「近郊住宅から田舎に通じるところだろ。ここは結構古臭い建物にしとくのがいいんじゃないか。」

「確かにそれもあるけど、今は田舎から町につながるところって大体新しい家が建ってるだろ。反対に近郊住宅よりも近代的なもの建てたほうが効果的かも。」

「何。２階建てとか、３階建てのやつ。」

「そう。それくらいのほうが自然じゃないかってこと。」

「うーん。」

しばらくどうするか考え込んだ。しかし、何分考えても答えが出そうにないため、

「アヤケン先輩だったらどうするのが一番自然ですか。」

「えっ、自分が思ったとおりにやってくのが一番いいよ。道路配置が決まったら何も考えないでやっても何とかなるよ。」

という回答だった。道路配置が決まったら自分の勘。このつくり方って効果的なのだろうか。道路配置が決まったら自分の勘。このつくり方って効果的なのだろうか。それともアヤケン先輩だけに通じることなのだろうか。

結局アヤケン先輩が言ったとおりにやっていくことになって、古臭い建物を配置。実際あるかどうかは別として、その家の隣。２枚

目始まってすぐ（１－２）のところに畑を配置。そのあとは一列に家を並べて、反対側の切り出されたところに詰所を配置した。実際のところ、この詰所は郵便局もどきという設定となった。

概略ができたところで、家をベニヤ板に張る作業になった。模型の家を張る作業（ストラクチャー）はいくらでもあるのだろうが、この部活でとっている方法はストラクチャーの地面のふちに両面テープを張って張り付ける方式。こうすれば、確実に接着できる。

上から細い両面テープを持ち出して、裏側に張る。縁から反対側の縁まで行くとテープを適当な長さに切る。それを４回繰り返して、仮置きしたところに置いていく。１枚目の建物はすべて決まっているため、１枚目はすぐに完了。３枚目は設置が決まった建物は貼り付けていった。２枚目使う発泡スチロールと設置する建物を張り付けた。なんかとんとん拍子に進み気味である。

ここまで作業が完了すると醒ヶ井（さめがい）以外は堕落した。僕は中学生のほうの進行状況を見に行った。

「諫早（いさはや）―。どうだ進み具合は。」

「えっ、この山をハゲからモッサモッサにするために植林してるんですよ。」

諫早はアド先生をちらっと見てそう言った。

「なんですか。永島（ながしま）さんもやるんですか。水分たっぷりの山にするために。」

「いや、ただ見に来ただけだよ。ていうか。これ走行テストやった。」

「あー。やり忘れてた。・・・でも、７０００番台（２２３系　網干区（あぼしく））のくそったれだったらふつうに通りますよ。ゴミじゃないから。」

「７０００番台。どれかわかんないけど、まぁ大丈夫なんだな。」

「おいおい。それやめてくれよ。」

顔を上げるとナヨロン先輩の顔があった。

「俺が一番最初に作ったのもそうだけど、サヤが作った「安曇川（あどがわ）」。

Ｍｉｃｒｏ（マイクロ）　Ａｃｅ（エース）の車両が通らないっていうやつもあるし、テストはしとけ。でないとごみを量産することになるから。」

「あの。その二つ今どうなったんですか。」

「んっ。俺のはちょっと前にジェットピストルで破壊して、サヤのやつは・・・まだ残ってたかなぁ。まぁ、寮に行けばあるかないかわかるよ。」

「・・・。」

「じゃあ、明日７０００番台持ってきます。」

「いよ。今調べろ。部室に確か。サヤの際物があったはず。サヤに貸してもらえ。」

諫早（いさはや）はナヨロン先輩に促されて上に行った。上ではスピーカー全開で曲を聴いている。今はやりのＥＤＯとかいうやつだと思う。

「サヤ先輩。」

「んっ。何。」

「モジュールの走行テストやりたいんですけど。」

「ああ、分かった。俺の貸してやるからちょっと待って。」

サヤ先輩はそう言って開拓してはいけないといわれたところのものをどかして、中から車両ケースを取り出した。

「はい、諫早（いさはや）。「ふみさん特急」。」

（間違い方がひどいなぁ。）

「ありがとうございます。」

サヤ先輩がくれたのは富士急行（ふじきゅうこう）の特急「フジサン特急」の模型であった。それをモジュールに持って行って走行テストを行う。車両はスムーズに走り出し、つなぎ目にある鉄橋も難なくクリア。植林しすぎのように思える崖の部分も何の支障もなく通過した。次に線路を変えて、同じようにテスト。車両はまず僕たちが覗き込んでいる側の線路と別れて、奥に進路をとり、つなぎ目で鉄橋を渡る。そしてトンネルに入り手前側の線路と合流する。トンネルの中もさほど支障はないようだ。

「よーし。行け。「フジサン特急」。」

「諫早。いつまでそんな際物走らせてるんだよ。」
「なぁ、諫早。やめようぜ。横の富士山が気持ち悪い。」
「フジサン特急」の拒絶反応はナヨロン先輩だけではなかった。空河も嫌いのようである。
「気持ち悪すぎて吐き気がする。」
「電車見ただけで吐き気でもすんのかよ。」
「いや、電車は大丈夫。でもこれはダメ。」
イコール好みの問題である。
「確かにそうだな。名寄さんが「際物」っていった意味もわかる。サヤさんってこういうもの好きなんだな。」
「そう。サヤこういうの好きだから。」
「・・・。」
「際物好きで悪かったな。」
目線を後ろに向けるとサヤ先輩が立っていた。いつの間に下に来たのだろう。
「ナヨロンか。俺の際物伝説広げたの。」
「ああ。それがどうかしたか。」
「お・・・お前。」
「ああ、サヤ先輩もナヨロン先輩もなぐり合うんだったら外か向こうでやってくださいね。」
「大丈夫。なぐり合う気はないから。・・・よし、ナヨロン。上で平和的に話し合おうじゃないか。チャカとか、チャカとか、チャカとか。」
「それ絶対に平和的な話じゃないですよねぇ。」
さて、話を進めよう。と言っても今日は終わりまでこんな調子のままであった。そして一番最後に掃除。楠先輩曰く毎回恒例のごみ袋争奪戦も行われて今日の部活は終わった。

11列車　バスケと走行テスト（後書き）

作者が後ろ向きなのに後ろ向きじゃないってどうですかねぇ…。
話は変わりますがこれから先さらに濃くなっていきますが、読んでくれる人には感謝。
自分自身のって書いているいじょう面白いもの（多分）できてると思うのでこれからもよろしくお願いします。

12列車　原則

翌日。4月27日。
「・・・。永島（ながしま）。今日めちゃくちゃ疲れてるな。」
「いや、そうでもないよ。確かに休日なかったけどさぁ、意外と楽しいから。」
「へぇ。先輩とはもうなじんだの。」
「うーん。なじむというか。部活の先輩「もう鉄研色に染まってきた。」とかって言ってたからなぁ。」
「本当にその順応性には感心するよ。」
あきれたのと関心とが入り混じった顔だ。そういう顔をしているのは宿毛（すくも）である。
「ところで、静岡まで何円かかるか知りたいんだけど。」
僕はこの手のものには詳しくない。というか知らない。
「１２８０円。」
佐久間（さくま）が口をはさんだ。いいところに助け舟がいたものである。
「１２８０円かぁ。ありがとう。」
「ていうか、そんなこと聞いてどうすんの。遊びにでも行くの。」
「まぁね。」
「それよりも、もっと安く静岡に行く方法があるぜ。」
佐久間がそのあとなんといったかというと、
「それ、法律的にダメだろ。立派な犯罪だぞ。」
これがその言葉に対する宿毛（すくも）の答えだった。何を言ったかというところは想像に任せるとしよう。もちろん、いま言ったことは実行してほしくない。
その日の放課後。同じように部室に赴いた。部室の前には醒ヶ井（さめがい）がいた。もう一つカバンがあったが誰のものかはわからなかった。
しばらくすると、サヤ先輩と箕島（みしま）が来て部室を解放した。
中に入って、製作途中のモジュールを眺めてみる。この2日でだ

いぶ進んだものだ。今日はこれの製作をちょっと進めて終了した。
　一方。宗谷学園に入学した萌のほうはというと、今日は友達と街に出ていた。今は帰り列車の中である。ロングシートに肩を並べて、ちょっと前のほうを見てみた。そこは行き止まりになっていて、一人男の子が前を見てはしゃいでいる。
「萌、さっきから笑ってるけど、なんかあったのか。」
ずっとニヤニヤしてたのが気になったらしい。
「えっ、なんでもない。ただ、昔のこと思い出してただけ。」
黒崎も萌の見ていた方向を見てみる。何を見ていたかはすぐに分かった。
「にしても、電車の前ではしゃいでる子供を見て思い出し笑いするとはなぁ。」
「だって、なんか笑えない。ああいうところ見てると。」
「よくわからんなぁ。少なくともあたしはあれを見ても笑えない。」
「じゃあ、私だけかなぁ。昔の友達みたいだなぁって思うの。」
「へぇ。萌の友達って電車好きなのか。」
（それだから萌は電車に詳しいのか。）
「うん。幼稚園の時からずっと電車のことが好きでさぁ。浜松によく新幹線見に行ったり、家で模型で遊んでたり、インターネットで動画をあさったりとかね。中でも新幹線の１００系が一番好きでさぁ、連れてかれたときはダダこねて「帰りたくない。」って言ったり、小学校の修学旅行じゃ自分の座る席に座らずに１６号車のドアまで行って東京駅に着く直前までそこにいたりとかしてたからね。」
「それ、先生に叱られたよなぁ。」
「うん。でも、怒られた後も１００系見たらすぐに復活したりするから。」
「あたし電車のことは全くわかんないけど、その人にとっては特効薬なんだな。だから、ああいう風にしてる人を見ると過去のその人みたいに見えてくるのか。」
「過去のっていう意味じゃないんだけどねぇ。今もそういうところ

があるから。」
「その人って成長してるのか。」
「ぜんぜん。大きな子供だよ。でも、そういうところがかわいいんだけどね。」
会話は一呼吸置いたらまた始まった。
「そういえば、宗谷に入学したとき私驚いたわ。世界には同じ顔つきした人が3人いるとかっていうけどさぁ、マジでその人に会うとは思わなかった。」
「誰かと、その人似てるのか。」
「うん、鳥峨家大希君だったかなぁ。顔つきもそうだけど、声までそっくりだったんだもん。」
「・・・萌。まさかそれで鳥峨家のこと好きになったとかって言わないよなぁ。」
「いわないよ。・・・なに、梓、鳥峨家君のこと好きなの。」
顔が赤くなった。
「いや、そういう意味じゃないけど・・・。」
「へぇ。」
「な・・・何か疑わしいことでもあるのかよ。」
「ううん。別に。」
といったとき外を対向列車が通り過ぎた。すると頭を抱えて、
「はぁ。ここからだとパンタ見えないからダメだよなぁ。」
「何。パンタとかっていうやつ見ただけで車両の判別つくの。」
「うん。遠江急行なら菱形だったら1000系。シングルアームだったら2000系っていう風に決まってるから。ちょっと複雑っていえば遠州鉄道のほう。あれは基本1000形は菱形で2000形はシングルだけど、1000形のうちの1001がシングルアームになってるから。モーターしか違わないから紛らわしいんだよねぇ。」
自分の手で菱形とくの字を作ってパンタグラフを再現する。
「遠州鉄道って全部同じ車両だろ。あん中にも違いあるのかよ。」

「梓。マニアの前でそう言ったら殺されるよ。全然違うんだから。２０００形はＶＶＶＦインバーターっていう高い音の出るやつだけど１０００形はそんなのじゃないもん。それに乗り心地で言ったら１０００形より２０００形のほうが上。同じことは遠江急行の２００系と１０００系にも言えることだから。」

「あたしには、そんなこと言われても何もわからん。」

「とりあえず、聞けば分かるって。どんなバカでも。」

「それってさぁ。もしわからなかったら、萌があたしを馬鹿にする材料になるよなぁ。」

「そのつもりはないから安心して、梓。」

この後列車はすぐに駅に停車した。その時になる音に少し耳を傾けていたが、やはり梓には違いは分からなかった。

「何がどう違うの。あたしには全部同じように聞こえるんだけど。」

「逆にあたしにはなんでみんな同じに聞こえるかわかんない。どういう聴覚してるか・・・ああ、あとこれもあるか。そう思うこと。」

梓が少し首を傾けた。

「遠州鉄道って結構古い車両も持ってるじゃん。」

「持ってるじゃんって言われてもあたしにはわかんないって言ってるじゃん。」

「あれ。一番モーター音うるさいんだよ。あの中でよく寝れるなぁって思う。」

「へぇ、うるさいんだ。」

「本当にうるさいよ。時折その電車に乗ってくるんだけどさぁ、満員になった状態でも西鹿島側のところまでモーター音が聞こえてくるくらいだに。」

「いや、だからあたしに・・・。」

「あの中で寝れる神経がおかしいよねぇ。一度精神科医とか耳でも直してくればって思うくらいよ。」

「何。電車の中で寝ちゃダメなの。」

「梓。電車の中で寝て何が面白いの。電車に乗ったら根気でも起き

てることでしょ。」
「その考え方あたしには理解できない。」
「えっ、何で。これってふつうのことだと・・・。」
「いや、ふつうじゃない。ふつうじゃない。」
「そうかなぁ。」
「おい、自分。その考え方ふつうじゃないって思ったことないのかよ。」
「ないよ。だって、電車乗ったら携帯いじらない。音楽聞かない。あんまり人と話さない。寝ない。前ずっと見てるは鉄則じゃないの。」
（どんな五原則だよ。）
ふと前にまた目を向けてみるとさっきの男の子の姿はなかった。今止まっている小楠で降りたのだろう。ずっと普通に乗っている萌たちにとっては関係のないことだが、ここでは急行と普通の接続が行われている。ここで終点まで用がない人は急行に、途中駅に用がある人は普通に流れてくる。しかし、寝過ごして急行に終点鹿島まで連れてかれるといった客はよく見る。自分も４日前にやってしまったことだ。
「そういえば、あたしたち浜松から急行に乗ってこなかったけど、何で急行じゃダメなんだ。急行なら結構早く家につけるじゃん。」
「急行はダメ。寝過ごすと痛い目に合う。」
「痛い目って。もしかして、自分もやっちゃったのか。」
「うん。やっちゃったよ。目を開けたらなんか知らないところ走ってるなぁって思ってたらさぁ、間もなく終点鹿島ですって言ってたんだよ。でも２０００系に２連ちゃんで乗れたから結果オーライなんだけどねぇ。」
（転んでもただじゃおきないやつ。）
４月２８日。昼休み。
「ねぇ、永島。Ｎ７００系の喫煙ルームでバーベキュウとかやっち

やダメかねぇ。」
佐久間がネタを振った。思わずふいてしまう内容だ。
「やっちゃダメだろ。」
「でもやっちゃいけないとも書いて無いよねぇ。」
「確かに書いてないけど、そういうことするやつがいないからじゃねぇ。」
「なぁ、永島何。喫煙ルームって。」
木ノ本から質問が出た。ちょっと予想外だ。
「喫煙ルームって、Ｎ７００系についてるやつだよ。そこ専用で喫煙ができるんだ。」
すると頭を抱えて、
「ダメだ。この頃離れすぎてたから私の中の情報が古い。なんかいろいろなのとごっちゃになってる。」
「そのうち思い出すって。今はいわば我慢の時かなぁ。」
その頃先輩たちはというと、
「行先ってＡＴＭでいいんじゃない。」
「うーん。なんか思いつかないもんなぁ。じゃあそこにするか。」
「ＡＴＭに行って戻ってくるだけかよ。それだけじゃ能がないな。」
アヤケン先輩が口をはさんだ。
「だから、それだけじゃだめだからＫＯＤまで行って放物線に乗ってグルって帰ってくればいいんだよ。ＮＭＤまで。そうすれば時間がそんなにないだろ。」
「それだとまだ時間が余るだろ。大体何時の「ホームライナー」に乗ってくんだよ。って言っても1本しかないけど。」
ナヨロン先輩は時刻表を取り出して、ざっと目を通した。
「ふつうに無理だな。どっかで暇つぶさないと。」
「じゃあ、ＳＭＺのエスパルスドリームプラザとかどう。あそこ正直言ってみたいって思ってたし。」
「果たして、それに1年生が乗るかだな。」
「1年生が乗るか。そるかかぁ。鉄道好きには少々きついところも

あるかもな。移動意外。」
「そんなこと言ってたら旅行なんかできないじゃん。」
「確かにそうだけど。」
「まぁ、いまそんな話するのよそうぜ。乗るかどうかは別として、乗らないことはないだろ。初めての旅行なんだし。」
「そうだな。後は俺たちがどう味付けするかだもんな。」
「時間は俺に任せろ。善知鳥（うとう）じゃだめだし、アヤケンじゃこいつの読み方知らないだろ。」
「なんで俺じゃダメなんだよ。」
「サヤは間違えずにこれ読めるのか。」
「うっ。そ・・・それは。」
「だろ。だから俺に任せろ。えーと、全員昼抜きでいいよなぁ。」
「いいわけないだろ。」
さてさて、いったいどういう旅行になるのだろうか。

今回からの登場人物
黒崎梓（くろさきあずさ）　誕生日　１２月１２日　血液型　Ｂ型　身長　１５７ｃｍ

12列車　原則（後書き）

こんな5原則ふつう守れない。

１３列車　初旅行の工程

４月２９日。今日は岸川学園の寮で部活動である。岸川学園の寮（岸川寮）は正門を出て、南に歩いて行く。すると職員駐車場が見えて来る道を左に曲がって、近くにある神社の前を通ってすぐのところにある。ここの２階はほぼ鉄道研究部の貸し切り状態になっており、中の階段の右側にモジュールなどが保管されており、学習室のほうはほぼ自由に使っていいそうだ。

「えー、今日は５月２日の歓迎旅行にどこに行きたいかってことだけど、どこに行きたい。」

「って、１年生に聞く必要ないじゃないですか。もう行き先決まってるんだから。」

「ナヨロン。ちょっと書いて。」

「サヤ、ＡＴＭって浜松から東だよなぁ。」

「ナヨロン。それやばくない。編成に詳しいんだから分かるだろ。ふつう。」

「うっさい。知ってて言っただけだよ。」

黒板にうねうねした線を一本。それにつながった線を一本。その端に至り豊橋と至り東京と書いた。

「えーと。まずこれで浜松がどこか分かるか。」

「だいたいここじゃない。サヤ合ってるよねぇ。」

「合ってるけど、善知鳥が書くなよ。」

一呼吸おいて、

「まず工程を話す。５月２日に浜松駅改札口・・・言うの面倒くせぇなぁ。ハカグチに６時４５分集合。集合したら「休日乗り放題」とかっていう２６００円の切符渡して、７時０５分に出る「ホームライナー」に乗って静岡まで行く。そんで、静岡まで行ったら普通でＡＴＭまであーっていって、それから国府津とかいう・・・。」

「国府津な。」

ナヨロン先輩が訂正する。
「それはどっちでもいいから。で、その国府津とかいうところまで着たら御殿場線に乗ってあーって戻ってくる。そんで清水のエスパルスドリームプラザとかいうところであーって休んで、普通であーって帰ってくる。ざっと工程はこんなもん。説明終了。」
「にしていいわけないだろ。」
ナヨロン先輩とアヤケン先輩がすかさずツッコんだ。
「えーと、サヤだとまた端折りそうだから、俺から工程言っとく。」
説明はサヤ先輩からナヨロン先輩に変わった。
「まず、集合はさっき言った通り6時45分。この時間に集合できなかったやつはたとえサヤでも置いてく。それで今回の旅行で使う切符は「休日乗り放題きっぷ」とかっていうやつで、旅する。これが2600円。だから当日は2600円忘れるなよ。で改札とおって一番最初に乗る列車が7時05分発の「ホームライナー静岡」。それで終点の静岡まで行く。次が8時51分に発車する普通熱海行き・・・。」
「あーっ。」
サヤ先輩と善知鳥先輩が叫んだ。すると、ナヨロン先輩をどっかに連れて行った。
「しょうがない。今度はぼくが説明するか。」
説明のバドンはナヨロン先輩からアヤケン先輩に変わる。
「さっき言ってた8時54分発の熱海行きに乗って、終点熱海の到着が10時04分。次に乗る列車は11時30分発の普通だから、この間に食うもん食っとくように。まぁ、食いたくない人は別だけどな。で11時30分のふつうで途中の国府津で降りる。国府津で降りたら御殿場線の12時32分発の列車に乗って終点沼津が13時50分着。それで、沼津から14時15分発の普通で、途中の清水まで乗る。その清水到着が14時59分。そのあとエスパルスドリームプラザとかっていうところに行って、清水に戻って17時15分発の普通で終点浜松が18時41分。とまあ、こんな感じだ。

ああ、あと言い忘れてたけど「ホームライナー」に乗るためには３１０円必要だからそれも忘れるな。忘れたやつはたとえサヤでも置いてく。」

「はい、分かりました。」

すると、ナヨロン先輩を抱えて、サヤ先輩と善知鳥（うとう）先輩が戻ってきた。

「何二人でネタばらししちゃってんだよ。」

サヤ先輩に抱えられている状態だったナヨロン先輩がそこから抜け出して、

「ネタばらしじゃないだろ。いくらなんでも通じないって。」

「そうそう。ナヨロンの言うとおりだぜ。とりあえず工程はざっと話しておいたけど。」

「そうか。」

サヤ先輩はため息をつくと、

「よし、本当に分かったか今からおさらいする。まず「ホームライナー」って何て呼ぶか分かるか。」

ほとんどの人が手を上げて、自分の考えを述べる。まず醒ヶ井（さめがい）が、

「「ホームライナー」。」

「違う。永島（ながしま）。」

「ＨＲ（エイチアール）。」

「そうだ。ＨＲ（エイチアール）。」

「サヤ。ＨＲ（エイチアール）じゃなくて、ＨＬ（エイチエル）な。Ｈｏｍｅ（ホーム）　Ｌｉｎｅｒ（ライナー）だから。」

またナヨロン先輩が訂正する。

「んじゃあ次。ＡＴＭ（エーティーエム）ってなんだ。」

「現金自動預け払い機。」

「醒ヶ井（さめがい）バカだろ。違う。空河（そらかわ）。」

「熱海（あたみ）。」

「そう。次、御殿場線（ごてんばせん）ってなんだ。」

「御殿場線（ごてんばせん）。」

「木ノ本（きのもと）。いい加減気づけって。」

「あっ。分かった。突起、突起。」
「違う。」
「突起違うんじゃ分かんないよ。」
「放物線。」
「うわ、スゲェ。永島当てやがった。」
「感心するとこ違うだろ。」
ナヨロン先輩がツッコム。
「とまあそんな感じだ。全員覚えろー。」
「サヤ。まだ注意事項いってないだろ。」
「ああじゃあ頼む。諸君聞けー。」
「えーと、注意事項今からいいます。注意事項はまず車内へのマックスの持ち込み禁止。」
「善知鳥先輩。もしマックス持ち込んだらどうなりますか。」
「もし車内にマック持ち込んだら、窓開けて外に投げ捨てる。」
（今の車両ってだいたい窓あきませんよねぇ。）
「その2。車内でもし携帯とかが鳴ったら、その人の携帯壊します。どうやって壊すかって言うと、折り畳み式携帯はスライドして、スライド式携帯は折りたたんで壊します。」
「もし両方だったらどうするんですか。」
「もし両方だったらどうなりますか。」
「もし両方だったら窓開けて、外に投げ捨てるか。開かなかったら着いた駅でゴミ箱に捨てるか、車内のトイレに流す。」
（とにかく。まともな壊し方しないってことね。）
「その3。来た列車が吊りかけじゃなかったら、界磁チョッパヤダ吊りかけがいいって言うこと。」
「言わなかったらどうなりますか。」
「一番最後。やらなくていいだろ。だいたい、今の車両なんてVVFが多いんだから。」
「んじゃあ、VVVFヤダ吊りかけがいいで。」
「関係ねぇよ。とにかく言わなくていいってこと。」
「ちなみにナヨロンはその犠牲者です。」

「言わなくていいつぅの。」
最後はナヨロン先輩が善知鳥先輩を押し潰して、この話は終了。
「旅行とかはだいたい決まった。」
横で聞いていたアド先生が口を開いた。
「あっ、だいたい。」
「それで、北斎院君。自己紹介とかはしたの。」
「あっ、とりあえず名前だけぐらいは言いましたけど。」
「1年生に顔とか覚えてもらうために、もう一度やって。クラスと名前と一言でいいから。」
「あっ、分かりました。えーと全員席ついて。今から顔覚えてもらうために3年生から順番で自己紹介することになったから。とりあえず俺から始めるけど。3年5組。北斎院大智です。よろしくお願いします。」
「カッコすごく天然です。」
「一言余計。次、善知鳥。」
「3年5組善知鳥茉衣です。何か分かんないことあったら聞いてください。」
「3年8組綾瀬健斗です。よろしくお願いします。」
「こいつの作ったゴミモジュールいっぱいあるよ。」
「ゴミじゃないだろ。・・・3年6組名寄真佐哉です。鉄道には詳しいんで何でも聞いてください。」
「地図を読むのは苦手です。それと彼女募集中です。」
「一言余計だ。次、ハクタカ。」
「2年8組。鷹倉俊也です。よろしくお願いします。」
「「チャンダーバード」と「パクチャカ」にしか詳しくないぞ。」
「「サンダーバード」と「はくたか」だけで悪かったですね。次絢乃。」
「2年8組の楠絢乃です。よろしくお願いします。」
「自称。鉄研のホームヘルパーです。」
「違います。次、1年生。」

「１年５組の佐久間悠介です。電車は新幹線が興味あります。よろしくお願いします。」
「１年４組箕島健太です。よろしくお願いします。」
「１年７組醒ヶ井瑛介です。電車には全く詳しくありませんがよろしくお願いします。」
「１年４組。木ノ本榛名です。よろしくお願いします。」
「１年５組。永島智暉です。電車にはそこそこ詳しいのでよろしくお願いします。」
「次中学生。」
「１年Ａ組の諫早轟輝です。よろしくお願いします。」
「１年Ａ組。空河大樹です。よろしくお願いします。」
「１年Ａ組、朝風琢哉です。よろしくお願いします。」
これで部員全員の紹介が終わる。読者の皆様も少しは覚えてくれただろうか。
４月３０日。今日で部活決定が仮決定から本決まりになる。

13列車　初旅行の工程（後書き）

ようやっとここまで来ました。
これから2話程度の旅行シリーズになります。どうぞ自分がそこにいると思って読んでみてください。

本当に読んでくれる人には感謝。それと感激です。

１４列車　揺られて（前書き）

現実と大きくかけ離れているところがございますがこの中だけですので。
自己満足なところがあって本当にすみません。

１４列車　揺られて

５月２日。４月２９日にサヤ先輩から言われたプランで旅行。
６時４５分浜松駅在来線改札口を守るため、余裕を持って浜松駅に到着した。だが、余裕を持ちすぎたかもしれない。そこには僕以外誰もいなかった。しばらくそこからそんなに離れないところをふろふろと行ったり来たりを繰り返していると、
「ナガシィ。」
聞き覚えのある声だ。でもこの声は萌の声ではない。善知鳥先輩の声だ。
「ナガシィ早いなぁ。本当に鉄道好きっていう表われかもなぁ。」
「・・・。」
いうことは何もなかった。
またしばらく待っているとアヤケン先輩が、また数分後にはハクタカ先輩と楠先輩が、その数十秒後には醒ヶ井と箕島が、そのまた数分後にはナヨロン先輩が集合した。６時４０分現在、まだ集合していないのは木ノ本と佐久間と中学生３人。そしてサヤ先輩だ。
改札口が少し大きな荷物を抱えた人で込み始める。でも人数は少ない。荷物が大きいために込んでいるように見えるだけだろう。この２分前には西鹿児島からの「寝台特急はやぶさ」がお目見えする。その７分前には南宮崎からの「寝台特急富士」が参上する。両者とも東京と九州を結んでいる寝台特急の仲間である。
「よーす。永島。」
後ろから肩をたたかれた。振り向いてみると木ノ本だった。さらに諫早、空河、朝風の姿もある。
「お・・・お前らいったいどこから来たんだよ。」
「えっ。どこって、こん中からだけど。」
木ノ本は親指で改札口の向こうをさした。イコール。今の今までホームにいた。イコール。「富士」、「はやぶさ」を撮影していた。

「まさか。「富士」と「はやぶさ」の写真撮りに行ってたのか。」
「うん。それにしても大変だったよ。お祭りから逃げるために口実作って、昨日の２０時からここにこもって、「富士」と「あさかぜ」と「はやぶさ」と「出雲」と「瀬戸」と「さくら」と「みずほ」と「銀河」と「スーパーレールカーゴ」撮影してたんだから。」
「よくやるなぁ。」
「ああ、それにしても久しぶりにやったなぁ。だから今すっごく眠いんだよねぇ。ちょっと電車の中で寝ながら行くわ。」
「おい、まさか中学生も一緒だったとかって言わないよなぁ。」
「それは言わないよ。空河が来たのが６時００分ごろで、朝風が来たのが６時１２分ごろで、諫早が来たのは６時２１分だもん。」
（全員俺が来る前にホームに上がってたのか。だんだん木ノ本の撮り鉄根性がむき出しになってきたかも。）
「あっ、そう。」
６時４５分。まだ現場に現れていないのはサヤ先輩と佐久間だけ。
「サヤとユウタン。置いてけぼり決定。」
善知鳥先輩はそのことを喜んでいるらしく万歳をしている。
「相変わらずだな。あいつ毎回時間通りに来ないからなぁ。俺たちが１年生の時の歓迎旅行もボイコットするみたいな勢いがあったからな。」
「サヤ先輩ってそんなに時間守れないんですか。」
「守れるには守れるんだけど、こういうときはルーズになるっていうのかなぁ。ホント。遊びに行く時だけはこういう風になる。遊ばないときは真剣に時間守るんだけどね。あいつって変だよなぁ。」
「まったく。後輩を待たせるなつうの。鉄研部の部長が。」
先輩たちが口々に文句を言って遅れてくる部長を待っている。すると、３分遅れでサヤ先輩が到着。さらに５分遅れて佐久間が到着した。佐久間が到着するとみんなから「休日乗り放題きっぷ」の２６００円と「ホームライナー」の整理券料金３１０円を徴収。しばらくその位置で待っているとサヤ先輩とナヨロン先輩が「トイカ」

の宣伝が書かれている包みを持って戻ってきた。それを順番に渡していく。渡された包みを開けてみると、切符が2枚入っていた。横に長い水色が買った切符が「休日乗り放題きっぷ」。小さくオレンジ色っぽくなっているのが「ホームライナー」の整理券だ。その整理券が示していたのは6番B席。後でだれがとなりか確認してみると僕の隣は諫早(いさはや)だった。

6時55分。コンコースでやる作業はすべて完了。それぞれ改札口に上がる。「休日乗り放題」は普段皆さんが使っているきっぷとは違う。改札機を通らず、直接窓口のほうを通って改札を抜けるのだ。そのとき5月2日と書かれたハンコを押される。この後改札を通ることについては改札で駅員に提示するだけでいい。無人駅だった場合は車掌か運転手に提示すればOK(オーケィ)だ。

ハンコを押された切符はこの後熱海(あたみ)まで用はない。包みの中にしまって階段を上る。階段を上ると今度は右にかじを切って1・2番線ホームに上がる。

僕たちの乗る「ホームライナー」は1番線に控えていた。窓周りが黒。その下に入るオレンジ色の帯。JR(ジェイアール)東海の特急車両373系だ。これの3号車に乗り込み、発車の時を待つ。7時05分。「ホームライナー」は時間通り浜松(はままつ)駅を発車した。

浜松(はままつ)を発車した373系は快調に東海道本線を飛ばす。浜松(はままつ)を発車するとすぐに新幹線とはずれ、しばらくすると天竜川(てんりゅうがわ)を通過する。天竜川(てんりゅうがわ)を通過すると坂を上って鉄橋を通過する。

「永島(ながしま)。静岡(しずおか)まだ。」

後ろの席に座っている佐久間(さくま)が話しかけてきた。

「まだだよ。まだこれ天竜川(てんりゅうがわ)だろ。」

「えっ、これ天竜川(てんりゅうがわ)。もう安倍川(あべかわ)だと思ったよ。」

とぼけていることは知っている。弁当を食べているときによく話していることだが、本物を聞くとあきれる。

「んなことあるかよ。どこをどう曲げたらこれが安倍川(あべかわ)になるんだ

よ。」

「ハハハ。そうだな。」

話が終わると、窓のほうを眺めた。下流には東海道新幹線の天竜川鉄橋が見える。

「ちょっと行ってくるよ。」

後ろに流れていく浜松の風景にさようならを言って、外を流れる風景に見入った。

時折下り列車がこちら側の視界を遮る。その時には何系かということがふつうに気になる。

「前が３１３系で、・・・後ろが２１１系。」

諫早が側面の色で判断をつけた。読者の皆様にも簡単に見分けたポイントを説明しておこう。まず、３１３系のラインカラーはオレンジ一色。２１１系のラインカラーは湘南色と呼ばれる緑とオレンジのライン。そして、顔。鉄道は皆同じ顔という概念がある人はぬぐい捨ててほしい。鉄道にはそれぞれ個性があり、皆が皆同じではない。３１３系はオレンジ色のラインが入った顔、２１１系は湘南色のラインが入った顔をしている。もちろん。違いはこれだけではないが、今ここで説明してしまうと処理ができなくなると思うのでやめることにしよう。

「３１３系と２１１系か。ここら辺ってそういう編成ふつうにやってるんだな。」

「確かに。名古屋圏はこんなくそったれ編成やってませんもんね。」

「くそったれかよ。」

「ああ、くそったれはありませんでしたね。名古屋圏はこんなゴミ編成ないですね。」

「あんまり変わってない気が・・・。」

そんな話で１時間。「ホームライナー」は８時０３分静岡に到着。次に乗車するのは８時５１分発。普通熱海行き。これまでは少々時間がある。

３７３系「ホームライナー」から下車して、まず集合がかかる。

８時５１分発の列車に乗るためにここに集合しろということだった。
それの確認が終わると自由行動になる。
「なぁ、永島（ながしま）。おなかすかない。」
木ノ本（きのもと）が話しかけた。
「えっ、どうして。」
「だって、ご飯食べてないんだもん。昨日の晩御飯から何も食べてない。飲み物は飲んだんだけどね。」
「あっ・・・そう。よくやるなぁ。」
「よくやるなぁって、このくらい当然だろ。」
「俺は撮りに行ったりとかしたことないから、当然とか言われてもわかんねぇよ。」
「えっ。ないの。」
「そんなことより、なんか食べてこいよ。そこら辺にキヨスクだの蕎麦屋（そばや）だのなんかあるから。」
「それくらい知ってるよ。で、話が脱線したけど、永島（ながしま）もなんか食べる。」
「食べねぇよ。つうか、ご飯家で食ってきた。」
「そうかぁ。」
と言ったら階段の向こうにある蕎麦屋（そばや）に一人駆けていった。
ふと３７３系に目をやってみるとヘッドマークがさっきの「ホームライナー」から「ふじかわ」に変わっていた。案内には８時１７分発。「特急ワイドビューふじかわ」甲府（こうふ）行きとある。
携帯電話（けいたいでんわ）を取り出して、その写真機能を使う。３７３系を収めるとそのあとに収めるものはなくなる。
「「ふじかわ」かぁ。」
横を見るとさっき蕎麦屋（そばや）のほうに行っていた木ノ本（きのもと）が戻ってきていた。
「いつの間に戻ってきた。さっきまで蕎麦屋（そばや）のほうに行って・・・。」
「ああ、さっき食べて戻ってきた。こういうとき便利だよねぇ。あ

の手の蕎麦屋（そばや）とかうどん屋。ホームにあるから外に出る必要ないし。」

「・・・。そこまで食べるのが早ければ、おにぎりとかのほうが効果的なんじゃない。」

「それもそうかもしれないけどさぁ、気分によるんだよねぇ。今はおにぎり食べたいっていうと気じゃなかったから、そばにしただけだけど。それにそばとか麺類ってするする入って、早く食べ終わりそうな感じしない。」

「ああ、確かに。」

「だろ。こういうときはああいう店に駆け込み入店するのが一番いいと思う。」

（駆け込み乗車じゃなくて、駆け込み入店かぁ。）

それは一理あると思った。自分も麺類は好きだし、麺類だと早く食べ終わるという先入観もある。

という話は置いといて、８時４５分。自由行動は終了。さっき確認された位置に全員が集合する。しばらくすると３１３系を先頭に６両編成の普通列車が入線してきた。この列車で終点（あたみ）熱海まで揺られる。

「ナヨロン先輩。さっきから何見てるんですか。」

僕は純粋にナヨロン先輩が向けている目線が気になった。彼はさっきから３１３系ではなくて上を見ている。それもずっと向こうの上だ。

「いや、パンタの向きがどっちかなぁって思って。」

ピンポーン、ピンポーン。ドアが開いたので、ホームに人があふれる。ドアから吐き出される人の波が終わると今度は乗る人の波。さっきと同じで降りる人も乗る人も同じくらいなのでさほど混みようも変わりない。ナヨロン先輩は先頭のドアのところに荷物を置いて、さっきの説明を続けた。

「３１３系と２１１系（サンイチサン　ニイイチイチ）ってシングルパンタのつき方が逆なんだ。つまりどっち向きでついているかわかれば、後ろの車両（やつ）を見ないで判

別できる。」
ナヨロン先輩は手でくの字を作ってさらに続けた。
「これがシングルパンタとして、これが東に開いてる車両。つまり今乗った位置からすれば右に開いてたら３１３系。左に開いてたら２１１系っていう風になる。それで先頭車だけ判別したかったらヘッドライトの色を見ればいい。だいたい黄色っぽいヘッドライトしてる車両が２１１系。まぁ、運用のあれで、３１１系だったり３１３系の名古屋圏の車両だったりすることはあるけどな。それで、白のヘッドライトが３１３系２５００番台。ここら辺で白は２５００番台しかいないから、見分けやすいよ。」
「へぇ。」
「ナガシィ。そんなところ固まってないでこっちにくれば。座れるよ。」
楠先輩に呼ばれて、そっちのほうへ赴いた、
「ほら、ナガシィ座って。」
「えっ、でも。」
「いいの、いいの。あたしはこれくらい大丈夫だし。」
「やせ我慢するなつうの。お前こそ座っとけ。」
ハクタカ先輩が口をはさんだ。
「別に・・・。」
「いいから座れ。どうなってもしらねぇぞ。」
楠先輩はハクタカ先輩に無理やりという形で座らされた。
「チッ。アヤノンのやつうまく逃げたな。せっかくのいじる材料がなくなっちゃったじゃない。」
隣は善知鳥先輩。今のことはどうやらいじられるという立場から逃げたかったからだそうだ。気づくと列車はすでに発車しており、次の停車駅東静岡の案内を行っていた。
東静岡に止まって、すぐに発車。次は草薙と言っているころ、善知鳥先輩が話しかけてきた。
「ナガシィ。こうやってるのをひまだし、なんか話そうか。全員の

面白い話とか、いろいろ。」
こう持ちかけてきた。今の僕にはそんなに暇ではないのだが、さっきまで「ホームライナー」に乗っていたという反動が大きかった。
「別にいいですよ。」
了承すると後は一方的に善知鳥(うとう)先輩にペースになった。
「そうだなぁ。まず、アド先生の異名とかって聞きたいって思わない。」
「うーん。はい。」
「アド先生のもう一つの異名はねぇ・・・ハゲ友の会会長よ。」
「えっ。」
「だからその名の通りだって。アド先生今髪の毛ないでしょ。だからそういう異名も5年前の先輩がつけたんだって。そういう話。」
「アド先生のほかの話ってないんですか。」
「アド先生は何かと少ないんだよねぇ。でもほかの人だったらこういうの多いよ。例えばナヨロンとか。」
「ナヨロン先輩にもなんか異名みたいなのあるんですか。」
「ナヨロンの場合は伝説だよ。伝説。あいつ電車に異常に詳しいじゃん。」
「じゃんって言われても。僕はまだ付き合ってそんなに経ってませんから。」
「それでもわかるだろ。あいつ電車に乗ったら見るところが違うんだよ。パンダグラフとかっていう・・・。」
「パンタグラフです。」
「いいよそんなこと。あいつそれ見て、あっこれは何系だとかいうからね。他にあいつが入部したときに青木(おおぎ)さんっていう人たちと電車のこと話してたのよ。その時ナヨロン、エスエルの話して、知識で先輩たちを撃ち落としたからね。」
「えっ、ナヨロン先輩ってそんなに詳しいんですか。」
「詳しすぎだよ。ここがこうなってるからこれは何々だねとかって、もうどっかの先生みたいに言うから。」

確かに。どこか先生じみているというところはある。
「じゃあ、鉄道知識でナヨロン先輩に勝つって無理じゃないですか。」
「あっ、でも勝つことができる分野もあるよ。例えば、料金とか、距離とか、駅名とか。ここ覚えてるとナヨロンに勝てるよ。」
料金。駅間。駅名。すべて僕が詳しくないところだ。
「ダメだ。僕はナヨロン先輩には勝てませんね。」
「何。ナガシィも電車のことだけなのか。」
「はい。僕、新幹線を除外するなら２２３系が好きなんですけど・・・。」
「ごめん。あたしその時点でついていけない。そもそも２２３系って何。２１１系とかじゃなくて。」
「善知鳥（うとう）先輩。あまりそういうこと言わないほうがいいですよ。」
「それは分かってるよ。でもあたしには違いが分からないんだって。なんせ０系もわからない人よ。」
自慢げに言われても何の自慢にもならない。
「２２３系ってＪＲ（ジェイアール）西日本の新快速（しんかいそく）なんですよ。それの１０００番台と２０００番台の違いはテールライトがヘッドライトのすぐ下にあるかないかなんです。」
「えっ、それだけ。もっと顔が大々的に違いますとかじゃないんだ。」
「だって同じ車両ですよ。違いが少なくなるのは当然です。でも、視認性だけで違いが判断できるわけですから、まだまだ優しい間違い探しだと思いますが。」
「うーん。そうなのか。」
電車のことを話して首を傾げられることは今までなかった。そもそも萌はこの違いは理解していたし、２２３系すべての違いも分かっていた。それとも、僕が今までそういう人としか話していなかったからこういう結果になったのだろうか。
「ダメだ。やっぱりあたしには電車のことはわかんない。それより

まだまだ面白い話あるんだけど、聞きたくない。」
何かと停滞した空気を進めたいらしい。うなずいて話を進めさせて、
「ナガシィ。この部活の中で好きな人っている。」
「いませんけど。」
「うそっ。ハルナンのこと好きじゃないの。」
「好きとか嫌いとかいうわけじゃないですけど、そういう目では見てません。」
「なるほど。他の人かぁ。ならいいや。ちょっと掘り込んだ話しちゃってごめん。でも、この部活には部活内恋愛しちゃってる人いるんだよねぇ。」
興味はないのだが何か答えを返さなければと思って誰ですかと聞いた。
「アヤノンとハクタカ。二人とも幼馴染同士なんだけど、冷やかされると否定するから。」
「それって自分がただただ冷やかしたいだけじゃないですか。」
「その冷やかすのが面白いんだって。」
これはどう反応したらいいものか・・・。

１４列車　揺られて（後書き）

新入部員歓迎旅行。ようやっと鉄道研究部らしくなりました。
でもこういう旅行にいくとマニアの人の恐ろしい能力が発揮されるんですよねぇ。それがあらわになっている人が多いですが、これだけでとどまらない人も世の中には・・・。
あーあ。マニアのパワーって本当に恐ろしい。

15列車　熱海　国府津　清水

しばらく313系に揺られて熱海まで行く。途中にはパルプの盛んな富士。旧東海道本線。御殿場線との分岐駅沼津。新幹線の車両基地がある三島と主要駅が続く。三島を発車すると次は函南。函南を出ると次は終点熱海だ。ここ函南と熱海の間には丹那トンネルというトンネルが存在している。このトンネルを通りぬけると隣に東海道新幹線の線路が見える。そしてまたトンネルに入る。そのトンネルを出ると熱海のホームに滑り込む。

「やっとここまで来た。」

善知鳥先輩は体を伸ばした。

「よく耐えたな。」

サヤ先輩はそれに感心している。

「よく耐えたなって。よっぽど耐えきるのが珍しいみたいな言い方だな。」

「だってそうだろ。お前の場合寝てるかなんかしないとどうかなるだろ。」

この話を聞いていると善知鳥先輩がこの部活に入った理由がなんなのかわからなくなってくる。

「みなさん。集まってください。」

アド先生が集合をかけて、全員を集める。全員集まったら改札に向かい、朝渡された「休日乗り放題きっぷ」を駅員に掲示して出た。改札を出ると人盛り。歩くところが狭いからか東京よりも人がいると錯覚する。僕たちが出た出口付近には足湯と蒸気機関車が展示されていた。多分、日本に鉄道が走り始めたのころに走っていた蒸気機関車だと思う。その蒸気機関車の前まで来るとアド先生から指示があった。

「みなさん。これから自由行動にします。11時10分にここに集合してください。」

「はい。」
全員の声がそろう。それが済んだところで、みな思い思いに解散していった。
「さて、俺たちは昼飯にでもするか。」
佐久間が僕を誘った。
「昼か。早くない。」
「早くないだろ。乗る電車が１１時３０分なんだから。」
それもそうかと思いそれに同意することにした。熱海駅側には長屋みたいに建物が建っている。そこに２階はどうやら飲食店が並んでいるらしい。そこに入って、全員で昼を食べることになった。入ったところは２階に上がってすぐのラーメン屋。そこで昼をとったあとは何もすることがない。１回のお土産屋のあたりをふろふろと歩いて、家用に買っていくお土産を選んだ。それが終わったらさっきの蒸気機関車のところに戻った。
　そこにはすでにナヨロン先輩がいた。ただ、厳密にいえば違う。のんきに足湯に浸かっているのだ。
「ナヨロン先輩。」
声をかけた。すると振り向いて僕のほうを見た。少し驚いたようだ。
「永島か。善知鳥かと思ったよ。」
「善知鳥先輩だったら都合が悪かったですか。」
「悪すぎたよ。もしかしたら、この足湯に突き落とされるかもしれないからな。」
「そうなんですか。」
「いや、それくらいしてきかねないっていうのかなぁ。まぁ、そんなとこ。・・・ところで、永島今まで何してきた。」
正直に昼ご飯を食べてきたと答えると、
「そうかぁ。真面目だな。」
「えっ。お昼ご飯食べることって真面目なんですか。」
「そう真面目。いや、真面目すぎる。こういう業界にいくと昼なんてただ邪魔なイベントになるだけだぞ。永島もそういうタイプだか

らすぐに分かる。」
（そういえば、アヤケン先輩「昼食べたい奴は食べとけ」って言ってたなぁ。もしかして、アヤケン先輩も食べてないのかなぁ。）
「アヤケン先輩はいま何してるんですか。」
「んっ。確か綾瀬（あやせ）なら、海のほうへ歩いてったと思ったけどなぁ。何か写真にでもとってるんじゃないか。ギャルとか、ギャルとか、ギャルとか。」
「それしそうなのは断然ナヨロンのほうだけどなぁ。」
後ろを見てみるとさっき噂していた善知鳥（うとう）先輩だった。その姿を見るとナヨロン先輩はさっさと足湯から出た。
「どうしたナヨロン。」
「いや、何となく。」
一息おいて、
「ところでなんだよ。俺がギャルの写真撮りに行くって。」
「だってしそうじゃん。ナヨロン彼女いないんだし。それに初恋もないらしいし。」
「初恋はあった。フラれただけ。」
「どっちも同じじゃん。そんなことよりナヨロンで遅れてるぞ。このナガシィでさえ彼女いるくらいだぞ。」
このナガシィでさえって言い方はなんだ。
「へぇ、そうなのか。」
「ナヨロンいつまで、電車が彼女だって言ってるんだよ。」
「勝手に話進めるなよ。俺はそこまでじゃないぞ。・・・ところで、そういう善知鳥（うとう）には春が来たのかよ。」
ナヨロン先輩がそう聞いた瞬間善知鳥（うとう）先輩の顔が少し赤くなった。
「い・・・いえるかよ。恥ずかしい。」
少しは恥じらいというものがあるらしい。
　１１時１０分。サヤ先輩が１分遅れて集合場所に到着。これで全員そろった。揃ったところで改札口を通り抜けて、またホームに戻る。ホームで待っていると函南（かんなみ）側から白いヘッドライトをつけた車

両が接近してきた。ＪＲ東日本の一大勢力。Ｅ２３１系のお出ましである。乗車位置は８号車。１５両編成の車両のちょうど中間である。

１１時３０分。僕たちを乗せた１５両編成の車両が熱海を発車する。その隣には１８５系の「特急踊り子」など。東海道本線の特急列車が並んでいる。熱海を出るとしばし、外の風景に目を向けていた。

しばらくすると眼下に相模湾が広がるようになった。世界に比べれば相模湾などほんの点でしかないのだが、ここから見る限りはそんなことは思わない。かなたには地球の輪郭がわかるように少し丸みを帯びて見える。

「海だ。」

普段海に縁のない人のテンションが上がる。しかし、すぐにトンネルに入ってその視界が遮られる。

「このトンネル死ねばいいのに。何やってるんだよ。」

トンネルに文句を言ってもどうにもならないと思うが・・・。そのトンネルを抜けるとまた海が見える。しかし、今度は木に邪魔されてよく見えなくなる。これを何度か繰り返して、根府川に停車。その後早川まで相模湾を望み、早川から沿岸部を外れて小田原に。次の鴨宮は東海道新幹線が開業する前モデル線があったところである。ここから３０ｋｍ程離れている綾瀬までモデル線は伸びていた。ここで新幹線のための各種試験が行われたのだ。鴨宮の次は国府津。ここで東海道本線からは分かれる。

１２時００分。国府津に到着。８号車から下車して、Ｅ２３１系を見送る態勢をとった。しばらくするとＥ２３１系のドアは３回電子音がしてしまった。すると高い歌声を奏でて国府津のホームを後にいしていった。国府津を発車すると線路が左にカーブしている。そこに差し掛かるころにはスピードは７０ｋｍ／ｈを優に越しているだろう。こんなに早いものかという速さで走り去っていった。

それを見送ったら、御殿場線のホームに赴いた。ここに列車が来

るのはまだ先である。そのころ。さっきＥ２３１系が走り去っていったホームにはまた別のＥ２３１系が入線してきた。これもさっきと同じスピードでホームから走り去っていく。

「早いなぁ。」

ふと言葉が漏れる。

「あんなに早いものかなぁ。いっつも寝台特急とか見てるからあんなに加速率いいとはっきり驚くわ。」

木ノ本も意外な感じで話している。

「まぁ、そこは人それぞれだろうな。普段電車しか見てない人はあの速さがふつうと思って、寝台特急とかが発車するときはこんなに遅いのかって思う。だけど、それのほうが見慣れてる人はあれくらいの速さが速く見えて、寝台特急のほうがふつうに見える。木ノ本はそういう方面では正常だよ。」

ナヨロン先輩がさらに続けた。

「乗ってるぶんにはそういうこと考えないんですけどねぇ。」

「乗ってるときはそういうこと考えないだろうなぁ。他のに気をとられてるから。」

（他のに気をとられてるかぁ。そうかもな。）

「・・・。」

この会話が終わってしまうと3人とも黙ってしまった。全員見る風景に気をとられて、そういうことを考えないようにだ。

数分後。御殿場線の列車を待っているホームに電車が入線する。今度はさっきの３１３系と違い２１１系という車両である。違いは前述したとおりである。

「２１１系かぁ。乗り心地悪い奴だな。」

佐久間が２１１系を見るなり文句を言った。

「えっ。乗り心地悪いのか。」

「悪すぎだよ。こいつ発車したときにガックンガックンなるからな。」

この表現は相当悪いということらしい。

「佐久間。乗るんだったら前がお勧めだぜ。」
隣で会話を聞いていたナヨロン先輩が答えた。前の車両のパンタグラフを遠目ながら見てみると2つあった。僕にはそれが何系なのかわからなかった。
御殿場線に乗車して、発車を待つ。12時32分国府津を発車。しばらく外に目を向けていると隣に大量の線路が現れた。車両基地のようだ。そこには211系など御殿場線で活躍する車両が止まっていた。この光景を後にすると山に分け入り、風景的にはそんなに面白くない光景が続く。また数十分揺られていると目の前に富士山が現れた。今日の富士山は晴天に恵まれ頂上まで見える。その写真を僕は写真ではなく目に焼き付けた。しかし、そのころになると風景にも飽きてしまった。もちろん、こうなったらやることは一つだ。席を立って数人誘った。
乗った車両は3号車。隣の2号車に方へその数人を引き連れて歩いて行った。2号車に入るとシートの形が変わった。さっきまでのロングシートがクロスシートに変わった。
（なるほど。ナヨロン先輩が「前がいいよ」って言ったのはこういうことか。）
ここでようやっと白黒はっきりした。
そのころ、誘った諫早、空河、朝風はすでに一番前にかじりついていた。僕もその一員に加わって前を見る。さらに木ノ本、佐久間が加わって6人で前を見つめた。
この状態を終点沼津の手前までや手、沼津に到着する直前に元の場所に戻った。
「お前ら何してんだよ。」
戻るなりハクタカ先輩にそう聞かれた。
「大目に見てやれって。ハクタカだってわからないわけじゃないだろ。」
「確かにそうだけど。ガチでそれをやられると・・・。」
「何か不都合なのか。まぁ、普段裏声上げてるハクタカが言うのに

も説得力っていうものがないけどなぁ。」

「このぅ。」

沼津に到着。ここからは東海道本線を逆戻りだ。１４時１５分発の普通列車で、途中清水まで揺られ清水で下車。下車してからは清水の繁華街っぽいところを抜けて、東海道線をまたいで、清水の東側にある公園を通り抜ける。途中に踏み切りがあって、そこを２１１系が通過していくのが見えた。さらに歩いて静岡鉄道の鉄橋が見えるところまできた。そこをゆっくりと通り過ぎていく静岡鉄道の車両を眺めて、また歩き出す。そのあとはいろんなところを通って行ったため、どこをどう歩いたかなんて覚えていない。３０分か４０分くらい歩いただろうか。エスパルスドリームプラザに到着。しかし、鉄道好きの僕には何もすることがなく困っていた。ふろふろと中を歩いていると佐久間が僕の肩をたたいた。

「おい、永島。見てみろよ。フェラーリ乗り場。」

笑いが噴き出た。当の佐久間も笑いをこらえられないでいる。

「フェラーリって。フェリー乗り場じゃないか。」

「こっから乗れるのは、フェリーじゃなくて、フェラーリに変わったんだよ。」

こんな冗談誰なら受けるだろう。

１５列車　熱海　国府津　清水（後書き）

高い歌声ってモーター音のことですよ。
電車を人に見立てた描写がまた多く出てくるときがあるかもしれません。

また、電車にも感情があるんですよ。
読者のみなさん。これからはたとえものといえどいたわってやってと思う今日この頃です。

16列車　3cars　or　6cars

16時30分ごろ。エスパルスドリームプラザの2階入り口に集合。そこから今度は道を一直線に進んで清水に帰る。予定では乗る列車は17時20分発の列車である。帰路。僕、諫早、空河、朝風はさっさと歩いて一番先頭に立ち、その後ろに木ノ本、さらにその後ろに先輩たちが続く形になった。先輩たちとは距離が離れて、50mぐらいあったと思う。

しばらく歩いて、長い歩道橋らしく物が見えた。その西側に目を向けると清水の駅舎が見える。僕たちの前に現れた歩道橋は自由通路らしく清水まで伸びている。中学生たちはすぐにその通路を伝って清水まで走っていき、僕はそれを追う形になった。改札を通りに抜けて17時15分。十分間に合う。階段を下りてホームに向かった。ホームにはすでにその列車に乗る人たちの人盛りができていた。

その頃先輩たちは、

「17時20分。まだ間に合うけど・・・。」

「そうだな。最後の最後ぐらいゆっくり帰らせてくれよだよなぁ。」

「これじゃあ、死んじゃうじゃん。」

「できれば、もうちょっとあったほうがよかったなぁ。」

電光掲示板に書かれている「3両」の表示にため息をついていた。

17時19分。その列車が入線。そのころには先輩たちもホームに降りてきて、列車を待っていた。

「最後に乗る列車はこいつですね。」

諫早が乗り込み、空河が乗り込む。僕もそれについて乗り込もうとした時、

「待て、その列車に乗るな。」

サヤ先輩が待ったをかけた。

「おい、諫早。空河。降りろ。」

その声を聴いて、下りるように促す。すぐに反応した二人はホーム

に降りて、数秒後にドアが閉まった。間一髪である。ドアが閉まった２１１系はホームから走り去っていった。

「サヤさん。なんで今の列車に乗らなかったんですか。」

諫早が下りろといった意味を問いた。

「今のは3両だぞ。あんなん中に放り込まれたいか。」

「いわゆる。混むから乗りたくないってことだ。」

アヤケン先輩が解説する。

「なんですか。それ。今のに乗っていくっていう風になってたじゃないですか。だったらあれに乗るべきでしょ。たとえ1両でも。」

「大丈夫。こんなの日常茶飯事だから。お前たちに今後の部活の予定表渡してあるだろ。あれ。今までなかった日にやることってなかったか。」

善知鳥先輩の解説には何となく納得できた。４月の２４日以降あった部活は２５日、２６日、２７日、２８日、２９日。予定されていた日は２５日、２６日、２９日。２７日と２８日の部活は最初から予定になかった。それをやっているのだ。そして、２４日の部活も予定されていなかった。つまり勝手に行われている部活があるのだ。

「だから、予定表なんて気にしちゃいけない。予定表通りにやらないのがこの部活なんだから。諸君。分かったか。」

「こういう部活で、そんなにルーズじゃいけませんよねぇ。」

「いけないんだけどねぇ。でもすぐになれるよ。」

この後聞いた話だが、善知鳥先輩たちが入部したときからこの状態だったらしい。ほぼ伝統化してしまっているそうだ。

次に来る列車は１７時３７分発。普通浜松行き。これには行先の隣に6両とはいっていた。そのため、この列車に乗って帰ることになり、浜松到着は１９時０４分となった。

１７時３７分の列車は２１１系を先頭にする6両編成。パンタグラフを見ていたナヨロン先輩の判断では後ろは３１３系ということだった。

２１１系のシートに座って、ボーッと外を眺めていると新幹線の

線路が隣に現れた。静岡に着いたのだ。その静岡には長居せずにすぐに発車。この後「ホームライナー」で通過してきたすべての駅に停車しながら、浜松を目指す。その間はどうしても暇になる。
「永島。柿ピーでも食べる。」
「おう、食べる、食べる。」
柿ピーがなんなのかは別にして、今は何かしていたほうが暇ではない。そう思って佐久間から柿ピーをもらい食べる。
「木ノ本も柿ピー食べるか。」
「おやじか。お前は。」
「うるせぇな。いいだろ好きなんだから。」
数分後。
「結局木ノ本も食べるのかよ。」
「そうじゃないって。なんか食べてたほうがましってこと。なんかやることなすこと久しぶりすぎて体がついていけてない。」
「あー、そう。」
「あー、もうこれが夕ご飯でいいや。」
「えっ、柿ピーが。」
「だって、この後夕ご飯のことなんか考えたくないもん。それにお父さんには夕ご飯食べてくるねっていえばそのあとはスルーしてくれるし。」
「なぜお父さんにメール。」
「ああ、うちイクメンだったから。お母さんがJRで働いてるって言っただろ。だから、自動的にあたしの世話はお父さんになったわけ。」
「いや、育児休暇みたいなの取らなかったのかよ。」
「取らなかったらしいよ。お母さんが休んだのは私を出産する間の1年ぐらいで、私を産んだらすぐに職場に戻って運転やったんだって。」
「木ノ本の父さんよくそれ了承したよなぁ。」
「今考えてみるとかんなんだよ。お父さん昔よく私を連れて駅とか

に出かけてったから。だから、お父さんも鉄道マニアだったんだと思う。だけど理由(わけ)あって、仕事続けられなくなったんだと思う。」

「なんで仕事続けられなくなったんだよ。」

「そんなこと知らないよ。それに小さい時からそんなこと知っちゃったら運転手になりたいなんて思わないって。」

「・・・。」

掛川(かけがわ)を過ぎると東海道本線は新幹線と並走する。

「なんか来ないかなぁ。」

前の新幹線を見て、木ノ本(きのもと)がつぶやく。

「なんか来てくれるといいな。でも新幹線ってさぁ、なんか来てほしいなぁって思ってる時に来なくて、どうでもいいかって思ってる時に来るんだよなぁ。」

「あっ、それよくある。なんで新幹線ってあんなにＫＹ(ケイワイ)なんだろうなぁ。もうちょっと空気が読めればいいのに。」

「ハハ。空気読めか。・・・なんかわかる。」

すると前を新幹線が通過していった。特徴は鼻の先に光っていたテールライトだった。

「Ｎ７００系(エヌナナ)だな。」

「Ｎ７００系(エヌナナ)だな。はぁ。この頃あいつ多すぎ。」

「これからあの手の車両しかいなくなるんだろうなぁ。私Ｎ７００系(エヌナナ)あんまり好きじゃないんだよねぇ。まだ７００系のほうがかわいかったというか。」

「えっ、７００系かわいいか。俺あれ一番最初に見たときなんじゃこりゃって思った車両(やつ)だけど。」

「なんじゃこりゃか。そこは人それぞれだもんなぁ。・・・永島(ながしま)さぁ、自分が一番好きな車両って何。」

この手の質問には正直困る。それぞれでいちばんがあるためだ。例えばＪＲ(ジェイアール)北海道ならキハ２６１系「スーパー宗谷(そうや)」。ＪＲ(ジェイアール)東日本なら２５３系「成田(なりた)エクスプレス」など。他にもたくさんある。

「一番か。・・・答えるのに困るなぁ。」

「あっ。じゃあ、新幹線でいちばん何。」
「１００系と２００系のＨ編成。俺それが好きだな。」
「１００系はどういう顔してるかわかるけどさぁ、２００系のＨ編成ってどんな顔してる。いまいちよくわかんないんだけど。」
「Ｈ編成って、あの１００系の顔した２００系だよなぁ。」
佐久間が確認してきた。
「そうそれ。」
「あっ、なるほど。・・・じゃあ、永島って「グランドひかり」の１００系も好きなのか。」
「「グランドひかり」の１００系は好きじゃない。鼻の下にあるひげが・・・。」
「あれって空気取り込み口なんだってなぁ。俺もあんまり好きにはなれないなぁ。」
「あっ。そうなんだ。知らなかった。」
「えっ、永島なら知ってると思ったのに。」
「俺確かに電車には詳しいけど、そういう方面詳しくないんだ。それに今の今まで遠江急行の駅と遠州鉄道の駅全部言えなかったから。山手線の駅は全部言えるけど。」
遠江急行と遠州鉄道とは地元を走っている私鉄のことである。
「それふつう逆だろ。」
「だって、そうだったんだから仕方ないだろ。」
「でも、今なら言えるんだろ。」
「いや。まだちょっと怪しいところがあるけどなぁ。順番通りに言える自信ねぇし。」
こんな話をしながら２１１系に揺られた。浜松到着は１９時０４分。定刻通りに到着した。

翌日。５月３日。この間は浜松祭りも絡んで部活はない。毎日のように家の模型で遊んでいる。しかし、今日はちょっと携帯をいじって遊んでもいた。

「昨日、部活の歓迎旅行で国府津まで行ってきたよ。」
文面をこうして相手に送る。それの返信は、
「ふぅん。ところで、何か珍しい車両とか見た。」
「見てない。」
「そう。じゃあ、１００系とかも見てないんだね。ナガシィの好きなやつだけど。」
「確かに。でも本物見て失神しても困るから。」
「失神じゃないだろ。その前に死ぬだでしょ。うれしすぎて。」
「ハハ。そうかも。」
「でも、ナガシィいいなぁ。いろんなところに行けて。次行くときは何か撮ってきてよね。お土産はいらないから。」
「何がお土産はいらないだよ。いるじゃねぇか。」
「まぁ、いいじゃん。でも、このお土産だったら買う手間ないよね。」
「確かに。次臨地研修が夏にあるから、その時は何か撮って帰るよ。」
「じゃあ、どこ行くかわかったらメールしてよね。予約入れるから。」
「へいへい。」
そう送ってスライド携帯の端末を閉じた。
「さて、そろそろ貨物にでも変えるかなぁ。」
寝そべった状態から体を起こして、車両子に入る。これを何十回も繰り返してこの日を過ごした。他の日も同じで6日までの暇つぶしには困らなかったが、ゴールデンウィーク中に出された宿題は何もやっていなかった。とりあえず6日の午後に片づけて、次の日からまた部活だ。
5月7日。宗谷学園では、
「何、安希。」
「赤電って芝本から新浜松まで乗るといくらかかる。」
「赤電って何。」

「えっ。萌ちゃんそれでも電車詳しいの。」
「分かんないものはわかんないんだから。そもそも赤電(あかでん)って・・・あっ、遠州鉄道(えんしゅうてつどう)のことか。」
ようやっとその意味が分かった。
「４００円だよ。」
「４００円ね。そのあと名古屋(なごや)まで行きたいんだけど、名古屋(なごや)までいくらかかるかわかる。」
「ごめん。私詳しいの車両だけだから。」
「あっ、そうなんだ。じゃあ、「ひかり」か「こだま」どっちが速い。」
「えっ、「ひかり」だけど・・・。それわかんないってヤバくない。」
「ヤバくないって。これって知ってたほうがいいこと。」
「そういう意味じゃないけど、それくらいふつうじゃないってこと。ってごめん。話が脱線しちゃったね。」
（本当に萌ちゃんって電車のこと好きなんだな。これで、電車が彼氏とか言わないよねぇ。）
安希(あき)はそう思いながら、自分のクラスに戻った。
クラスに戻ると友達に話しかけた。
「ねぇ、梓(あずさ)。梓(あずさ)の言うこと本当だったよ。あれってすごいよねぇ。」
「すごいというかすごすぎだよ。前なんか、電車なんか見分けられてふつうみたいなこと言われたから。」
「えっ、電車って違いとかってあるんだ。」
「そうらしいよ。この前なんか電車来たのにあれには乗りたくないとかって言ってたし。」
「へぇ。」
今度はそのことを萌の中学からの友達に振ってみた。
「そのことだったらあたしたちはどうとも思ってないけど。」
「あれって受け流しとけばいいんだって。梓(あずさ)も安希(あき)も真剣に受け止めようとするからそうなるんだって。聞き流しておけば軽い反応で

済むから。」
「萌ちゃんって昔からああいう子だったのか。」
「いや、少なくとも小学校1年生の時はああじゃなかった。」
「小1の時は・・・。つまり小2からああなったっていうわけ。」
「そういうこと。萌よく電車に詳しい男子と休み時間中話してて、本人が言うにはそれだけで覚えちゃったらしい。新幹線のこととかいろいろ。」
「へぇ。」
お弁当を食べ終えて、机にのめっている萌の姿を見る。
「でも、このごろ元気がないんだよなぁ。彼氏と違う学校になったからかなぁ。」
「えっ、あれで。」
「あっ、梓(あずさ)たちが知ってるのは電車の話するときの萌だけ。中学の時とかもそうだったけど、授業とかになったらあれがふつう。だから、電車の話してる時のほうが生き生きしてるように見えるだろ。」
「・・・。」
「本当はその人のことが死ぬほど好きなんだよ。なのに、何で別の学校に行ったんだかあたしにもわかんない。」
「・・・。」
ところどころ聞こえてくる言葉を背中で受ける。ふと机の中からスライド携帯(ケータイ)を取り出して、端末を開いた。待ち受け画面は阪急800系。永島(ながしま)が好きな車両の一つである。
「・・・。」
5秒くらいの間8000系を見つめて端末を閉じた。
一方岸川学園では、
「結局ボイコットするとかみたいなこと言ってたけど、しなかったじゃないか。」
醒ヶ井(さめがい)が呆れたように言った。
「するわけないだろ。1年生のいない歓迎旅行ってなんだよ。まぁ、サヤ先輩がやりそうみたいだったけど。」

「善知鳥先輩が言ってたけど、サヤ先輩って時間にとってもルーズなんだって。それだから、歓迎旅行の時に「サヤがボイコットした歓迎旅行」だって先輩が言ったんだって。」
「鉄研の部長が時間守れないって死んでるよなぁ。」
「あれで、将来なんになるんだか知らないけどさぁ。」
「ハハハ。」
その頃3年生のほうは・・・、
「ハックション。」
「食事中にくしゃみするなよな。サヤ。」
「いや、誰かに噂されてる。まったく誰だよ。こんな時間に噂するゴミなやつは。」
「ゴミなやつって。それお前十八番だな。」
「ところで、今日部活あったっけ。」
「ないよ。」
「ないのかよ。ホントゴミだな。」
その頃部室では・・・、
「お・・・お前。のぞきに来たわけじゃないんだから、ハンマー投げることないだろ。ていうか、それで窓が割れたらどうするつもりだったんだよ。」
「そういうときは、のぞきに来たバカタカに弁償してもらうわよ。なんでそんなにあたしの下着姿見たいわけ。」
「見たいわけじゃねぇよ。ちょうど絢乃が着替えてることが多いんじゃないか。つうか、そんなに見られるのが嫌なんならあっちの更衣室に着替えればいいじゃないか。あっちなら見られないんだから。」
「今ちょうど体育でバレーボールやってるんだからしょうがないだろ。あたし教室じゃなくてここでお昼食べてるんだから。」
「一人で食事かよ。さびしい奴だなぁ。」
「別に。教室で食べるとバカタカと一緒に食べないのかって冷やかされるから。」

「教室に帰ってくれば同じだろうが。」
その言動にあきれ閉じた目を開けると、
「何胸見てるんだよ。体育の後は制服が透けて下着の解像度がいいみたいな目で見てるなよ。」
「それ、お前の一方的な考えだ。」
「黙れ、このバカタカ。」
絢乃（あやの）は机の上に置かれている小物入れの引き出しからボンド水を滴下する注射器を取り出した。
「バカやめろ。それはヤバいって。」
「バカタカ。どっちの目に打ってもらいたい。」
「どっちも嫌だわ。」
とまあ、今日も一日ふつうに過ごしている僕たち鉄道研究部（てつどうけんきゅうぶ）である。

今回からの登場人物
薗田安希（そのだあき）　誕生日　３月１０日　血液型　Ｂ型　身長　１５７ｃｍ

１６列車　３ｃａｒｓ　ｏｒ　６ｃａｒｓ（後書き）

この小説に出ているほとんどのキャラクターには電車からの由来があるんですよ。
今回の安希も東京～広島間を走っていた「特急安芸」からきてます。

17列車　中間テスト

5月9日。歓迎旅行(かんげいりょこう)が終わって最初の部活。ゴールデンウィークの時浜松では盛大なお祭りがあるため、ほとんどの浜松市民はそっちへ貸し出される。浜松祭りとして有名である。凧上げや屋台の引きまわしなどなど。いろんなことをやっている。

今日の活動は文化祭に展示するモジュールというものの製作である。モジュールとは小さなレイアウトをたくさん繋げて一つの大きなレイアウトにするためのパーツのことを言う。それを作っているのだ。僕達が作っているモジュールは中に留置線を設けた駅の様な風景のもの。まあ近くに駅はないためただの引き込み線と言った方がいい。それを作っているのだが、あれからほとんど進んでいない。

それから少し日がたってテスト期間になる。この時はどうしてもモジュールの進行はストップしてしまう。それよりも少し心配がある。

「永島(ながしま)。今回のテスト勝負しようぜ。」

友達の宿毛(すくも)に誘われる。

「おう、いいよ。今回は絶対負けないからな。」

「よく言うよ。でも、今回はいい勝負になるだろうな。英語に至れば中学の復習だもんな。」

「ハハハ。で、ソッコウで悪いんだけど、数学教えて。」

「おい、数学こそ俺が教えてほしいわ。」

「まぁ、そういわずに。」

「はいはい。そうしないと勝負になんないもんな。特にお前の場合は。」

宿毛(すくも)から数学、国語、英語、現代社会、生物。いろいろ教えてもらってテストで勝負する。４５分後。テストが始まり５０分のガチンコ勝負がスタートする。それを3時間。次の日に2時間。終わったらどうなるかというのは想像に任せよう。

テストが終了しテストが返却される。
「永島何点だった。」
宿毛に聞かれてテスト用紙を見せる。
「マジかよ。この点数チートだぞ。」
「宿毛は何点。」
「これ。でも永島の点数にはとどかないな。その点数取られると。他のので挽回しなくちゃいけないじゃないか。」
「大丈夫。俺も国語が足引っ張るから。」
「その割にはいつも勝ってるじゃないか。」
「永島。何点だった。」
佐久間が聞いてきた。
「まあまあだったよ。」
（こいつ。頭いいってこと知られたくないのかよ。）
数日後。テストの合計と平均点、クラス順位が出る。
「やっぱりこういう結果かぁ。今回もまいりました。」
「いい加減にしてくれよな。俺こういうの好きじゃないんだよなぁ。」
「順位だけはお前嫌いだな。俺が頑張ってるときにお前が手を抜いてくれればいいのに。」
「それじゃ勝負にならないだろ。」
「お前なら勉強しなくても大丈夫だって。」
「さすがに勉強はしないと無理。1時間くらい。」
「今回1時間も勉強してないよな。」
一方他のクラスでは、
「今回のテスト、5組の人が学年トップなんだって。」
「蘭それどこから。」
「興津先生の話をちょっと聞いちゃったから。名前までは聞きとれなかったんだけどね。でも、そんなに珍しい名前じゃなかったと思う。珍しいやつだったら覚えてるし。」
（5組って。もしかしてあいつかな・・・。いやいや。バカっぽい

し、ないよな。）
「心当たりとかってあるの。」
「いや別に。」
「だよねぇ。」
友達の室蘭にはこういったが、やっぱり気になった。
「だから聞いたんだけど。誰だかわからない。」
「何。どういうこと。」
「うちの担任の沖津さんの話だと5組の生徒が学年トップ亭ことらしいんだけど。誰か心当たりないかなぁって思って。」
「永島。宿毛君だよねぇ。学年トップって。」
「ああ、そうじゃない。宿毛頭いいし。」
だが箕島はこう思っていた。
（学年トップってこいつだぞ。木ノ本さんこいつが同じバカ友とかって思ってるのか。そして、同じクラスの佐久間はこの事実知らないんだ。）
「じゃあ、宿毛君っていう子が今回の学年トップなんだ。」
「ああ。多分ね。」
ふと、このとき室蘭が言った言葉が再生される。
（珍しい名前・・・。宿毛ってふつうに聞くような名前じゃないか。じゃあ、鈴木とかっていう名前だよねぇ。だったら覚えてないのも裏付けるけど・・・。）
だが、そう思っただけで声にはしなかった。
「ていうか。今日からだよねぇ。部活。」
「ああ、そうだな。」
「あー、これでまた文化祭まで休めなくなる。もうちょっと家でゴロゴロしてたいのになぁ。」
「ゴロゴロって。永島の場合それ毎日やってるだろ。」
「ゴロゴロしてるから休めるんじゃないか。あー、家で遊びてぇ。」
「永島の場合はもう遊ばなくてもいいだろ。普段から遊んでるようなもんなんだから。」

「ダメ。普段から遊んでるけど、遊び足りない。」
（いつまでこんな子供みたいなこと言ってるんだよ・・・。）
そのあと永島にどう話しかけていいのか。その言葉を失った。
６限目終了。これからホームルームをやって、掃除。今週は掃除担当ではないため、長いホームルームが終了したら、部室に即行で向かった。
「宿毛。永島とテスト勝負してたみたいだけどどうだった。」
「あ。ああ、それなら、永島の勝ちだよ。俺は今回も負けた。」
（えっ。）
その会話を聞いて目が点になった。
（永島。あのとき学年トップは多分宿毛だって言ってたよなぁ。まさか、そういうの知っててあいう風に言ったのか。知られたくないのかよ。いずればれることなのに。）
「あいつ生物で満点取りやがったからなぁ。俺も９０点台は叩き出したんだけどシクッチまってな。それがあっちの決勝点って感じなんだけどなぁ。」
「ところで、お前合計何点取ったんだよ。」
「えっ。俺が４７４点で、永島が４７５点だったけど。」
「はっ。おめぇら最強じゃん。」
「まぁ、今回は内容が中学からの布石で簡単だったていうところもあるけどな。」
「お前らその学力でなんでここに来たんだよ。」
「永島は鉄研やりたいから。俺は併願校落ちたから。」
「マジかよ。俺あんなバカっぽい奴に負けたのかよ。」
「気落とすなって。俺もこの頃勝ててねぇんだよ。」
「宿毛に勝てないってもう無理じゃん。俺勝ってこないじゃん。」
「あきらめんなって。俺もいつかは抜いてやろうって思ってんだ。あいつ１番嫌いだから。そうしてやれば、永島のほうは満足してくれるんだけどね。」
「だったそれだけ。」

「だって。そうしなきゃ永島がうるさいんだよ。」
「永島ってホントよくわかんねぇな。」
「・・・。」
その話を耳で受けながら、掃除を終わらせると家に帰った。

17列車　中間テスト（後書き）

こういう人いたらウザいですね。

またこれって案外敬遠されがちなんでしょうか。
登場人物のほとんどが鉄道に興味があること以外はふつうだと思いますが・・・。やっぱりその知識量が掘り込みすぎてますかねぇ・・・。

話は変わりますが、感想は受け付けておりますので・・・。感想がありましたらどうぞお書きください。そうしていただけると嬉しいです。

18列車　模型選び

テストが終了すると部活は再スタート。これから文化祭までピッチを上げる。6月に入ると衣替えで、男子も女子もポロシャツに夏のズボン・スカートに替わる。6月初頭。僕達のモジュールが完成。ここまでくれば何をすることがない。

「名寄君。文化祭で使う車両を決めたいんだけど。」

「分かりました。」

すると、

「永島。車両庫行くけど、一緒に行かない。」

「行きます、行きます。」

ナヨロン先輩についてまた岸川寮に赴いた。

岸川寮に入って階段を上がって右にかじをきると右側に5枚扉が現れる。ここには分けて鉄道研究部のものが詰まっている。

「とりあえず説明しとくけど、相談室4には展示で使うときのモジュールとかが入ってて、自習室1が車両庫。自習室2と3がモジュール保管庫。自習室4はどうでもいいもんが入ってる。」

そう説明してくれた。

アド先生が自習室1の鍵を開けて、ナヨロン先輩と僕が続けて入った。

「名寄君。6時間で4周回だから・・・。」

「10分に1回交代が1時間で6回。6時間で36回。それが4つで144回。それだけ選べばいいんでしょ。」

「そうです。」

「じゃあ、適当にやっときますから任せてください。」

それを聞いてアド先生は他の部屋に言った。

「あのう。ナヨロン先輩。ここにあるものって全部アド先生のなんですか。」

「ああ、だいたいな。時折OBが寄贈した奴があるだけ。」

「あっ、２２３系とか「サンダーバード」とかいろいろある・・・。」
「自分が走らせたいやつなんでも入れていいよ。でも時折・・・。」
「それじゃあ２２３系と「サンダーバード」と「２５３系（ネックス）」と１００系。」
「ああ、ごめん。言ってなかった。走らせたいって言っても新幹線（しんかんせん）はなしだ。新幹線（しんかんせん）が在来線（ざいらいせん）走ることになるからな。」
「でも、Ｅ３（イースリー）系とか４００系はありってことでるよね。」
「確かに。そういう言い方するとそうなっちゃうな。・・・入れたいのか。」
「はい。」
「分かったよ。じゃあ2本はエントリーでいいな。」
それからというもの僕達は2段ベッドの下を占領している箱の中から走らせたい車両を引き抜きまくった。キハ２８３系「特急スーパーおおぞら」。４８５系３０００番台「特急はつかり」。Ｅ３５１系「特急スーパーあずさ」。３８３系「特急しなの」。３７３系「特急東海（とうかい）」、「快速ムーンライトながら」。６８３系「特急しらさぎ」。７８７系「特急つばめ」。代表的なものはだいたい入れた。だが１４４も車両を選ぶとなるとどうしてもネタが尽き気味になる。３年もこの部活にいるナヨロン先輩でも困るくらいだ。
「そうだな。今回は３１３系の０番（サンイチサン）と２１１系の５０００番（ニイイチイチ）つなげて中央線（ちゅうおうせん）の快速やるっていうのもいいな。」
「ナヨロン先輩。去年の文化祭きて思いましたけど、３１３系に２１１系を連結した運用ってあるんですか。」
「あるよ。歓迎旅行（かんげいりょこう）の時にも乗っただろ。御殿場線（ごてんばせん）の列車。後ろは２１１系（ニイイチイチ）だったけど前は３１３系（サンイチサン）の３０００番（サンイチサン）だったじゃないか。」
「あのう、そんなこと言われても分かんないんですけど。」
「だよなぁ。３１３系（サンイチサン）ってややこしいからな。」
ため息をついて説明し始める。

「まず0番台が東海道線の快速で4両編成だろ。300番台がその2両編成バージョン。1000番台は0番台の中央線バージョン。1100番台はそれのLEDバージョンで、1500番台が1000番台の3両編成バージョン。2300番台は2両編成でダブパン装備準備車。3000番台はダブパンの2両編成。2500番台はここら辺の3両編成で5000番台が6両固定の快速用。8000番台は中央線のセントラルライナー用ってな感じだからな。まだいっぱいあるけど。」

「えっ。313系ってそんなに番台あるんですか。」

「ああ。でもこれなんか西日本の223系に似てるんだよな。」

「223系だったら分かります。0番台と2500番台が関空快速用で1000番台と2000番台が東海道線の新快速用。」

「あと6000番台のダブパン車が地下鉄東西線に乗り入れることができて、ワンパンのやつは221系との共通運用。5000番台は「快速マリンライナー」で5500番台が霜取りようにダブパンになった2両編成ってな。」

「あっ、223系の中にも知らないのがある。」

「永島なら知ってると思ったけどなぁ。知らないんだ。この部活に入ってればいやでも詳しくなる。」

話しながら車両を選ぶ。

「そうだ。永島。貨物列車だったらどれがいい。2軸貨車だけの古き良き国鉄貨物か、コキ50000形だけの旧高速貨物か、コキ100系だけのJRFの高速貨物か。もしくは鮮魚特急っていう「とびうお」か、タキ1000のタンク貨物列車か。」

「別に何がいいっていうやつはないですけど・・・。つうかそれだったら家にもあります。」

それを聞くとナヨロン先輩は何か思い出したようだった。

「あっ。そうだった。これ聞いてなかった。お前文化祭当日何持ってくる気。」

「えっ。考えてるのは「カシオペア」と「北斗星」と「トワイライ

トエクスプレス」と「出雲」と「瀬戸」・・・。」
「寝台特急のほとんどな。」
「あとは「雷鳥」と「しらさぎ」ぐらいかな。」
ナヨロン先輩はしばらく考えてから、
「なら。「出雲」はＤＤ５１（デデゴイチ）の重連で持ってきてくれない。あと他に「カシオペア」や「北斗星」の牽引機はなにが来る予定になってる。」
「「カシオペア」はＥＦ５１０の北斗星色で、「北斗星」はＥＦ８１の予定ですけど。」
「ＥＦ５１０（アオカマ）とＥＦ８１（ホシカマ）かぁ。分かった。それで「雷鳥」っていうのはパノラマグリーン。それとも非貫通グリーン。」
「それって何か重要ですか。」
「いや、自分の中にあるイメージを膨らませてるだけ。永島だったら分かるだろ。模型は想像だって。」
「はい。何となく。・・・パノラマグリーンですけど。」
「はい、了解。・・・「ネックス」のさぁ２５３系の１２両編成持ってこれる。」
「できるにはできますけど。」
「じゃあそれも頼む。で持ってくる寝台特急は「カシオペア」、「北斗星」、「トワイライトエクスプレス」、「出雲」、あとは九州特急の何か自分が好きなの・・・って言って分かんないか。「あさかぜ」とか東京から、大阪から九州に言ってた寝台特急のことこういうんだよ。それだけでいい。できれば、牽引機は全区間エントリーが望ましいけどな。」
「はい、分かりました。」
「大体こんなところかな・・・。これじゃあサヤ達のほう考えてなかったな。自分達のほうはこれで終わりでいいか。よし永島。サヤ達のほうも考えるぞ。」
他に残っていて有名な車両や特急は８８３系「特急ソニック」。

小田急のＨｉＳＥ（ハイエスイー）、ＬＳＥ（エルエスイー）。２０００系「特急南風（なんぷう）」。キハ８５「特急ひだ」。７８１系「特急ライラック」など。

「かわいそうだから２２１系でも入れといてやるか。あとＥ２５９系もこっち（こいつ）。２２５系もこっち（こいつ）。」

「こっちにも「北斗星（ほくとせい）」入れときましょうか。あとは「カシオペア」も。」

「そいつら牽引するＥＦ５１０（カシカマ）とＥＦ５１０（アオカマ）が「いやだ、いやだ。」っていってるぜ。」

「なんですかそれ・・・。」

「まあそれは冗談だけど。これも入れてやれＥＦ２１０（モモカマ）。」

「いや、ナヨロン先輩ここはＥＦ２００のほうがいいですよ。」

「ＥＦ２００（ハイカマ）。そいつやめとけ。スカイダイブ経験６回の強豪だから。」

「ともかくそれどういう意味ですか。」

「今は知らなくていい。そのうち分かる。」

そんなこと話しているうちにこちらもほとんどナヨロン先輩が決めてしまった。ここにはずっと所属していたから何がどうなっているのか分かっているのだろうか。それともただ自分の好みで選んだのか。

その日の帰りの列車。小楠（おぐす）に停車した時だった。

「あれ、ナガシィ。」

振り向くと萌の姿があった。同じ方面に通っているのだが、こうしてあったのは久しぶりだ。

「よーす。久しぶり。」

「なぁ、萌。あたし邪魔見たいだからどっかいってるか。」

萌の隣の人が聞いた。

「別にいいよ。ここにいても。」

「お前が小楠（おぐす）くるって珍しいな。」

「今日は友達とこっちに来ただけだから。」

「へぇ。」
「そうだ。ナガシィ。そっち文化祭っていつある。」
「確か、・・・何日だっけ。」
「そういうと思ったよ。ナガシィそういうこと気にしてないもんね。6月13日でしょ。」
「ああ、確かそう。」
「見に行くからよろしく。家から何か持ってくの。」
「「カシオペア」とか「北斗星(ほくとせい)」とか。まあいろいろ持ってくよ。」
「じゃあ、貨物も持ってくわけ。」
「貨物は持ってかない。学校にあるみたいだから。」
「そう。じゃあ26両はやらないんだ。」
外を浜松方面に向かう列車が通り過ぎる。
「何系。1000系。それとも2000系。」
「パンタ見えないから分かんねぇよ。多分普通だから1000系だろうな。」
「でも、1000系も2000系も関係なしに普通とか急行に使ってるよね。」
「確かに。最初から運用が分かってればこうやって苦労することもないんだろうけどな。」
「ハハ。・・・部活楽しい。」
「うん。先輩達はみんなハイテンションだし、1年生は多いし中学生からも入部があったくらいで。」
「へぇ、多いんだ。その中に女子とかいる。」
「いるよ。同じ学年の中に隠してなければお前と似てる人もいるんだけどなぁ。」
「・・・。」
このとき会話を聞いていた友達。黒崎(くろさき)には端岡(はしおか)が言った言葉が再生されていた。
(あのことって本当だったんだな。電車の話してる時のほうが生き生きしてるって。)

「へぇ、そうか。かくしてなければ私と同じね。中に入るんだね。そういう人。」
「まぁ、女子ならそういうところは意識しちゃう人もいるだろうな。」
「・・・。なんでそんな話すんのよ。暗くなるじゃん。」
「ああ、そうだな。じゃあなんか別な話でもするか。でも、何話す。」
「ナガシィ、２日に熱海行ってきたって言ってたじゃん。その時の話でもいいじゃん。」
「ああ、そん時の話かぁ。いいよ。」
話している間に芝本に到着。萌は小楠（おぐす）から乗ってきた友達と別れて、僕と帰路に就いた。
「文化祭に持ってくのは去年と同じで身分証でいいんだよねぇ。」
「ああ。多分それだけでいい。」
「それじゃ６月１３日見に行くから。」
そういって萌と別れた。

18列車　模型選び（後書き）

今回は会話がマニアックすぎてごめんなさい。
この先も時折このような列車が出てくるかもしれませんが、読んでくれる人には感謝。

１９列車　運び屋

６月８日。岸川寮に集合。
「おーい、諸君。運ぶぞー。やれーっ。」
サヤ先輩がみんなに指示を出した。するとまずアヤケン先輩が動いて、
「はーっ。」
相談室４から裏声。するとアヤケン先輩はとても大きく口を開けた木の箱を持って相談室４から出てきた。
「おめぇらもやれー。」
アヤケン先輩に促されて僕達も相談室４に入る。相談室４にはさっきアヤケン先輩が運んで行ったのと同じ箱が５つ。１年生は２人ずつでこの箱を運び出す。だが、必ずと言っていいほどドアから出るときに問題になるのだ。箱を長いほうのままドアを抜けようとすると閊える幅。縦に持つと今度は自分達が閊える。でも何とか抜けることができる。抜け出したら階段を下って寮の玄関まで輸送する。これをこの後何度も繰り返す。２階に戻ると今度は大きな箱の代わりに衣装ケース。部活では白い箱で通じている。これには引き出しの代わりにモジュールが入っている。それを２・３年生は２段。もしくは３段。１年生は１個ずつ運んでいく。
　しばらく同じ動作を繰り返していたが、モジュールを乗せる岸川のハイエースの荷台が満タンになったため、まずこれを学校に運んでいくことになった。
「えーと。一人乗ってください。」
先輩達は行きだそうとしない。むこうで何があるか分かっているのだ。
「えーい。全員右手を上げろ。」
何が始まるのか・・・。
「最初はグー、ジャンケン、ポン。」

何が始まるのかと思えば、ジャンケンかよ。
「はい、ハクタカ行ってらっしゃい。」
「マジかよ。」
「じゃあ北斎院君（きたさやくん）。上にしまってあるモジュール全部出してください。」
「へーい。」
ハイエースが寮から出ていったところで、僕達は2階に戻ってさっきから出している白いケースを下に運んでくる。玄関には白いケースが7段くらいになった山が2個くらい。
「おーい。こんなに積むんじゃないよ。」
アヤケン先輩が注意する。
「アヤケンその持ってる奴また上にのっけようぜ。」
「やるなつうの。」
「おっ、ナガシィいい所に来た。乗せろーっ。」
言われるがままに乗せる。
「バカ。下ろせ。もう乗せるな。」
「アケ先輩注意もいいですけど、運んでくださいね。」
しばらくすると第2陣でハイエースが戻ってくる。またハイエースが満タンになると第3陣に持ち越し、第3陣が来ると運び出したものはすべて乗りきった。荷物が全部乗ると僕達は歩いてホールのところまで向かう。
鉄道研究部が展示を行うホールは僕達1年生が授業を受けている南棟ではなく北棟というところにある。ここの1階なのだ。
ホールの北側には第1陣で連れてかれたハクタカ先輩と第2陣で連れてかれた楠先輩が運びいれたものが詰まっている。僕達は第3陣が到着するまで待っている。待つこと数分。第3陣のハイエースが到着。後ろから荷物を降ろして、いっしょに運んできた車両も運び出した。
今日の部活はここで終了。これからの1週間はずっと文化祭の準備である。

翌日6月9日。今日部活動はない。6月10日。今日から本格始動。

「まずは作ったモジュールを運びこんでください。」

アド先生の指示で部室にある作ったモジュールを運びこむ。運びこんだら8日に運び入れたところにまず入れる。

「ええ、次は・・・。名寄(なよろ)君。1年生ひきつれて特教6の机をここに運んで来てくれる。あと事務室に頼んで昇降口下の長机も出して。」

「分かりました。おーい1年生と中学生行くぞ。」

まずはアド先生に言われた長机から。ナヨロン先輩曰くめんどくさいらしい。その長机を運び出すと佐久間(さくま)がこういうことをやった。

「永島(ながしま)。バズーカ隊用意。ズドーン。」

「おいおい。」

それをホールに運び込む。軽いには軽いのだが、何回も往復すると手が痛くなる。3往復目で長机がなくなる。次は南棟1階の一番東の部屋特別教室6から机を運び出す。ここには2段重ねで学習机がぎっしりと埋まっている。

「うわぁ。ゴミっていうけにあるなぁ。」

「ゴミかよ。」

「とりあえずこれ運んで。一人2つずつでいけるだろ。・・・よし、行けーっ。」

今度は学習机を抱えて何往復。もう何回行ったり来たりしたかなんて数えてられない。ふつうなら軽い机でもずっしりと重く感じられた。

学習机が必要数に達すると次はモジュールが並ぶように机を並べていく。一つはホールにある長机とさっき運び出した長机で収まる。もう一つは学習机が長机の代わりになる。

「永島(ながしま)。その机こっちに持ってきて。」

「アヤケン先輩。これはどっちに持ってたら。」

「木ノ本(きのもと)。まだモジュールはいい。・・・ああ。あとそのゴミ落と

してもいいから。」
「ハクタカ。これ中にいれるから受け取って。」
「んっ。バカ。箱ごと中にいれようとするな。」
「ナヨロン。部誌間に合いそう。」
「サヤのバカ。なんで進めとかないんだよ。」
「おーい、ナガシィ。この・・・アヤケンこれなんだったっけ。」
「えっ。ああ、ゴミ2号だよ。」
「このゴミ2号をむこうのほうに運んどいて。そんでもってサメちゃん。このアヤケンのゴミ3号はあっちに運んどいて。」
「あっ。アド先生。３１３系の５０００番台のギアボックスください。」
「ナヨロン裏切るなー。」
「絢乃。フィーダーこの向きでここにいれといて。」
「はいはい。」
「こっち一般人通行不可ね。」
「なんですか。そのハルヒ的な。」
「あっ、そうだサヤ。今年はみんなでコスプレする。」
「いいよ。コスプレなんかしなくても。まあ帽子だけはかぶりたいけどな。」
「じゃあナヨロンは全身ね。あとは帽子だけでいいか。」
「勝手に決めんなよ。」
「大丈夫。あれ着て似合いそうなのは1年生の中にもいるし。それにナヨロンが着るとなんか渋くなるんだよね。ＳＬ好きっていうのがその渋さを後押ししてる感じで。」
「どういうやつじゃ。それ。」
「ねぇちょっと1年生集まって。」
善知鳥(うとう)先輩に言われて、ひとまずサヤ先輩達のところに集合する。
「ねぇ、みんな乗務員が着てる服、着てみたいって思わない。」
ちょっと考えるところがある。なおこの問いについては醒ヶ井(さめがい)と箕(み)島(しま)はヤダ。木ノ本(きのもと)、僕、諫早(いさはや)、空河(そらかわ)、朝風(あさかぜ)は帽子だけならと回答。

「でも、一つだけ問題があるんだよねぇ。今回は帽子だけっていってもこの数ないんだよね。去年作ったから8人分しかなくて。」
「善知鳥(うとう)もよくやるよなぁ。」
「逆を言うと家庭以外ダメダメだからなんだけどなぁ。」
「それは今関係ないだろ。でも何人でかぶるかなぁ。女子のやつはあたしのアヤノンの分しかないし・・・、男子のやつは6人分しかないもんな。うーん。よし。あたしの独壇場で決めよう。えーとサヤはかぶるでしょ。アヤケンは外回りってことが多いからいいでしょ。ナヨロンは向こうの内勤だからかぶって、ハクタカもかぶる。あとはナガシィかな。でもあと一人余ってるなぁ。・・・じゃあ残りはサメちゃんでいいか。」
「ここまで考える頭があるんだったらもうちょっと進路のこと深く考えろよ。」
「うるさいなぁ。いいだろ。で、あとは女子のほうか。ハルナンがかぶりたいって言ったから・・・。アヤノン別にかぶらなくてもいいよねぇ。」
「はい。」
「うーん・・・。やっぱりかぶせよう。」
「や・・・やめてください。あれかぶってるとなんか冷やかされそうで。」
「よし。かぶせよう。」
「嫌です。」
この時今まで部誌に取りかかっていたサヤ先輩が何かに気付いた。
「お前ら何やってんだよ。ちゃんと仕事しろ。」
「おいおい。それ今気付いたのかよ。」
「サヤ。本当に眼科か精神科医に行ったら。ヤバいよ。」
「眼科か精神科医に行くのはナヨロンだろ。この知識量と今更教師になりたいっていうこの頭どうにかし・・・。」
ポカッ。
「黙ってやれよ。」

「はい。すみません。」
今日はホール入り口手前に凹の集会を完成させるところまで進んだところで解散。この次は次の日にまわる。
６月１１日。今日は真ん中に設置する大周会の二つ目。この周回は長方形で組成させる。
「ナガシィ。この「綾瀬車両区」をむこうに運んで。」
ここで呼ばれた「綾瀬車両区」とはモジュールに付けられたタイトルらしい。
「で、ハルナンはこっちの「青木海岸」を運んでって。それで、ミッシィは「青木海岸」の片割れ運んで、サメちゃんはそこの「ピザ」お願い。」
ちなみに「ピザ」とは４５ｃｍ四方のコーナーのことである。
「あのう、善知鳥先輩。このコーナー・・・。」
「コーナーじゃないって言ったでしょ。「ピザ」よ「ピザ」。どこでもいいから運んどいて。」
本人はどうしてもコーナーのことを「ピザ」と呼びたいらしい。
「それで、・・・ハクタカ。お前の作った「鷹電」のやつってどこにある。」
「それだったらもう使いましたけど。」
「ここに１枚余ってんだけど。」
「善知鳥先輩バカですか。それは「鷹電」じゃなくて「貨物駅」ですよ。目玉あんのか。」
「ナガシィごめんね。ちょっとハクタカ待てー。」
「まったく。子供かよ。永島。この「貨物駅」持ってって。セッティングは俺がやるから、仮置きだけでいいよ。」
とまぁごたごたがありながらも何とか完成。ここで今日の活動も終了。続きは６月１２日に持ち越しである。

19列車　運び屋（後書き）

気づいたら文字数がえらいことに・・・。
このままいったら最終回までに文字数と読了時間が・・・。
自分でもこれはすごいと感心します。

あと展開が遅くてすみません。
それでも読んでくれる人には感謝です。
これからも根性で続けていきたいと思います。

２０列車　文化祭前日

６月１２日。いつものように朝学校に登校する。
「はぁ。永島いいよなぁ。部活でクラス展の準備逃げられるんだから。」
「何。逃げたかったらお前も鉄研とかに入ればよかったのに。」
「いや。俺はもう部活には入る気なかったからな。こういう時に限ってそういうのが裏目に出るとは。」
「そういえば、俺たちのクラスってどんなクラス展やるの。」
「お前ホームルームの時に言ってたやつすぐに忘れてんだな。そこまではっきりした頭だったら俺も持ちたいよ。・・・お菓子みたいなの作って売るんだって。」
「へぇ。」
「でも、永島の場合は来れないの前に来たくないだよなぁ。クラス展より部展のほうが楽しいだろうから。」
「まぁ、確かに。」
「ならこっちから見に行くか。その時は差し入れ持ってってやるよ。」
「気持ちだけにしてくれ。」
「分かった、分かった。気持ちだけってことで投票は鉄研部に入れとくからな。」
「えっ、何。投票って。」
「本当にはっきりした頭だな。何も聞いてない。ある意味感心するよ。」
「いやあ、それほどでも。」
「ほめてないってこと分かってるよねぇ・・・。」
「そりゃ当然。」
８時３０分。普段通り点呼。９時００分。文化祭準備開始。部活としての集合は１０時００分。それまでの間クラス展の準備をほん

の少しだけ手伝う。9時55分。南棟3階の部屋から目の前の階段を使ってホールに赴く。ホールにはもうすでに部隊は終結済み。僕達が最後に集まった。

昨日とおとといで模型を走らせる周回は完成している。今日やるのはこれから設置するプラレールの展示と周回に電気を流すための配線作業をすることだ。

「おーい1年生。むこうの武道場とかっていうところからベニヤ板持ってきて。」

サヤ先輩の命令でまずはベニヤ板。それを持ってくると次は学習机を等間隔で並べその上にベニヤ板をかぶせ、シートをさらにかぶせる。だが、このシートをかぶせる作業が以外と疲れる。

「ねぇ、善知鳥(うとう)先輩。ここ机ありますか。」

今机の上に乗っているが、足を降ろすところを間違えば机に頭を打つ。

「大丈夫。そこにはあるよ。」

善知鳥(うとう)先輩が机の下に入って上にいる僕に安全だと信号を送る。それが終わったところでゆっくり足を降ろす。下の地盤がかたい。机の上だ。端まで来て、飛び降りる。もちろん端まで机があるわけではないので、ここも踏み外したら机に頭を打つ。とりあえず何の事故もなく完了。

次はOBが持っているというプラレールを設計図通りに敷設すること。設計図にはレールに当たるところが線で示されており分かりやすい。そしてその線に少し交差するように書かれているのは継ぎ目のことだという。

「とりあえずやるかぁ。青木(おおぎ)さんもここもうちょっと詳しく書いてくれれば分かりやすいんだけどなぁ。」

「まあそれでもやるしかないだろ。今日は青木(おおぎ)先輩手伝いに来れないんだから。」

「んじゃあ。ナガシィ。このレール類とにかくつなげまくって。直線レール5本。」

プラレールは鉄道ファンたる者全員が通る道。いつもの手つきでレールを繋げていく。一方その時サヤ先輩達はプラレールをガンガン繋げていく。だんだん形ができてきて真ん中あたりに橋脚を１０個くらい積み上げたタワーが完成した。

「おーい、サヤ。そっちから何人か引き抜いていい。」

「ああ、いいよ。」

「永島（ながしま）、箕島（みしま）。ちょっとこっち来て。」

ナヨロン先輩に呼ばれて凹（おう）の周回にやってくる。

「これから配線ってやるんだけどさぁ。それやってくれない。そんでやって覚えろ。以上。」

「あの。名寄（なよろ）先輩。それじゃよく解んないですよ。」

「さすがにいい加減すぎたかな。」

と言って床に置いてある黒い箱を手に取って僕達に見せた。そこには青と白のコードの先端に端子が１個ずつついているコードとうける端子が３つついているコードの２種類が入っている。またそのコードの中には赤と黒だったり茶色と白だったりと色にバリエーションがあった。

「これをフィーダーってところにつないで、コントローラーのあるところまでつなげる。永島（ながしま）だったら分かるよなぁ。」

「ああ、まあ。」

「それで繋げる時にやっちゃいけないのは内回りと外回りをごっちゃに結線すること。そうしたらどっちかが逆走することになるからな。そこだけ気をつけてやれ。」

これだけ支持された。ようはつなげばいいのだ。

フィーダーというのはだいたいどういう恰好をしているかというと３パターンあると言っていい。まず一つ目は線路にコードの端をくっつけているタイプ。二つ目は線路に電気を流せるようになっている専用の線路にくっつけるタイプ。あともう一つは線路の特定の場所に差し込んでくださいというタイプ。学校にあるのは２番目にいったタイプ。このタイプのフィーダーはこの周回の中に４ヵ所。

コントローラーの位置からは柱の陰になってしまう部分。その次は一つ目のフィーダーのあるコーナーの反対側のコーナー。三つ目は二つ目のフィーダーがある一の反対側のコーナー。ここがコントローラーから一番近い位置にある。そして四つ目のフィーダーは三つ目のフィーダーの反対側のコーナーに設置してある。ここからさっきナヨロン先輩が見せてくれたコードをバンバンつないでコントローラーに結線した。

結線が終了したら次は電気が流れるかどうかのテスト。前にナヨロン先輩と選んだ中からＥＦ２１０を取り出して外回りの線路に乗せる。アド先生曰く機関車とマイクロエース製の車両が滞りなく走れば問題ないそうだ。

コントローラーの電源投入。ディレクションスイッチを前進にいれてコントローラーのつまみをまわした。だが、ＥＦ２１０はピクリとも動かない。ライトもついていない。

「どうしたんだよ。こいつ。」

「あっ。永島（ながしま）。そいつはゴミだ。モーターがいかれてるから。ＥＦ５１０（レトサン）にして。」

「あっ、はい。」

ＥＦ２１０を線路から外し、ナヨロン先輩が持ってきたＥＦ５１０を線路に乗せる。気を取りなおして、再び電源投入。するとＥＦ５１０は少しピクッと後ろに動いた。このままでは逆走になる。ディレクションを前進から後退にしてまたつまみをまわす。今度はちょっと前に進んですぐに滑り出した。コントローラーから離れて少しの間ＥＦ５１０の走っている姿に見入る。家でいつも見ている光景と分かっていても飽きない。

とりあえず何の滞りもなく一周。次はマイクロエースの箱を探してその車両を走らせる。とりあえず手に取ったのは７８３系という九州の特急車両。それを外回りに並べて同じ動作を行った。すると少しばかり突っかかってしまうところがある。そこを木の板で修復しながら、７８３系を何周かさせる。その間に問題も解消。次は貨

物列車などの編成もの。これが途中で連結を解除しなければ完了。なのだが、毎回どこかで貨物列車は開放すると言ったので、これに完璧を求めることはできないようだ。

とりあえず貨物列車も何の滞りもなく1周。これで電気系統は完了だ。

この時にはプラレールのほうも５０％がたで完了している。ふと時計を見ると１２時１３分となっていた。昼ごはんの時間だ。昼ご飯には持ってきた弁当。食べるのが面倒くさいと思いながら、流しこんで１３時０５分作業再開。午後はプラレールの準備。遊びながらやっていたため１５時ちょっと前に作業を完了。次は、体験運転のコーナーの設置である。

「諸君集まれ。」

善知鳥(うとう)先輩が全員を衣装ケースが積まれている前あたりに集めた。

「これから体験運転のやつを組み立てるんだけど、時間ないから全員でやろう。」

「だから、あれさっさと片付けとけって言ったのに。」

「さっさとっていう前に青木(おおぎ)さんいなかったからどう組み立てていいかわかんなかったじゃん。」

「てめぇら、時間がないならはじめようぜ。そんなところで時間くってるなよ。」

アヤケン先輩が話に歯止めをかけて、全員に複線の高架レールを手渡した。

「まずはそのレールつなげ。」

全員に行きわったたのを確認して指示を出した。

「あっ、待った。まだダメじゃん。おい、善知鳥(うとう)。白い子ない。白い子。」

「えっ、白い子。」

「ほら、アヤケン。白い子。」

「サンキュー。」

ナヨロン先輩から渡された箱の中には横２ｃｍ(センチ)くらいしかない直方

体の白い物体がたくさん入っていた。アヤケン先輩はその1個を取り出して、

「まず、この白い子を高架レールの下の子の部分に取り付ける。2個くらい取り付けて、取り付け終わったらほかの高架レールをつなげる。これやって。後、下についてる突起下になるように取り付けなきゃダメだぞ。でないと、あーってなるから。」

「あーってどうなるんですか。」

「深入りしなくていいから、まずはやれ。」

さっき言われた動作を行って高架の直線レールをつなげていく。

それを10何人でやると20本くらいの束が一気にできる。

「全員で直線レール量産してんじゃねぇよ。こんなにいらないって。」

そのことに気付いたアヤケン先輩が量産を止める。

「カーブレールだれかやれよ。カーブしない体験運転所作ってどうすんだよ。運転面倒になるだけじゃないか。」

「あたしそんなこと知りませーん。」

「知っとけ。」

「アヤケン先輩これどうするんですか。」

「多分6ペアぐらい、12本は使うかなぁ。それの束ねたやつをもう一度束ねて、4本にしたやつを俺にパスして。そのあとはどうにでもなるから。おい、善知鳥。橋脚のやつどこにあるかわかる。」

「橋脚ってあのラーメンみたいなやつか。」

「そう。食えるラーメンのやつ。それどこ。」

「お前の足元にあるだろが。」

「あっ、あった。ごめん。」

「アヤケン先輩。言ったとおりにやりましたよ。」

「あっ、サンキュー。うわっ、バカたれ。マガンなボケ。」

それを受け取ったら、新幹線のよく見る橋脚を3つ取り出し、線路の継ぎ目に取り付けてる。「カチャ」という音を立てて、何かがはまる。1個取り付ける作業が完了したみたいで、アヤケン先輩がそ

の位置から手を放した。すると橋脚は継ぎ目のところに礼儀正しくはまっている。さっきの音はこれがはまる音だったらしい。他の2か所も同じ作業で、はめ終わると、体験運転コーナーになるところの一番奥に置いた。

僕たちもただ見ているわけではない。僕は箕島(みしま)が4本にした高架レールを受け取って同じように橋脚を取り付ける作業を行った。

「アヤケン先輩。他のもやっておきますか。」

「いや、これはもういいよ。ていうか、そっちに駅作ってくんない。」

「何駅がいい。綾瀬(あやせ)駅とかでいい。」

「何でもいいけど、綾瀬(あやせ)駅はやめて。出来ればサヤ駅とかのほうがいいんじゃない。」

「それ関係ないだろ。はぁ。木ノ本(きのもと)。多分その箱の中に駅舎の建物があると思うから、それとって。」

サヤ先輩が指差した箱の中を探してみる。すると汚れた白い駅が出てきた。それの看板には「新大阪」と書かれている。どこをモチーフにしているかはすぐ分かるが、本物とは似ても似つかない。

「ありました。」

「サンキュー。後、そん中に白いプレートみたいなのがいっぱいあると思うからそれもとって。それに空いてる溝の部分にさっきの白い子を逆向きで入れて、ほかのプレートとドッキングさせる。それやって。」

サヤ先輩に促されて作業を開始。プレート同士をさっきのレールと同じ要領で取り付け、ほかのプレートを取り付けていく。それが4枚くらいになったところで善知鳥(うとう)先輩に手渡し、そのプレートをさっき掘り出してきた駅舎の上に設置した。さらにその上にレールとホームを設置。1面2線の島式ホームが現れた。

「よし、こっちは終了・・・。」

すかさずナヨロン先輩がツッコんだ。

「なわけないだろ。駅舎を境にして両方に垂れ下がってる高架駅が

どこにあるって言うんだよ。」
「狭い日本でも、そういうところくらいあるよ。」
「あるかもしれないけど、これはないだろ。駅舎過ぎたらすぐに地面まで下がるのかよ。実物にしても４０メートルくらいしかないぞ。」
「なぁ、善知鳥（うとう）。ボケるのもいい加減にしようぜ。こんな駅ないことには変わりないんだからさぁ。」
この駅舎から急速落下するプレートの下に橋脚を設置して、垂れ下がりをなくす。これで、さっきからアヤケン先輩がつなげていた高架橋と連結。１周する体験運転コーナーが完成。すぐに配線がなされ、カーブの下にあるフィーダー専用取付口に高架線用のフィーダーを取り付け、コントローラーと結線。Ｅ１（イーワン）系新幹線（しんかんせん）「ＭＡＸ（マックス）」と８００系新幹線（しんかんせん）「つばめ」をそれぞれ3両ずつおいて、電気が通ることを確認。両方ともスムーズに走ったため走行テストも完了した。そして、なんとか前夜祭に間に合わせた。

２０列車　文化祭前日（後書き）

話を作っていくとだんだんキャラクターに個性が・・・。
自分にはもうちょっと文才と考える能力が必要だと感じます。

なお次の話でも文化祭前のことなので・・・。本当に展開が遅くてすみません。この状態だと８月のイベントまで行くのにいったい何日かかるんだか・・・。

21列車　前夜祭

前夜祭。

「1年生諸君集まれ。これからも系の運転訓練やるぞ。」

運転訓練とは文字通りのことをする。なんで必要があるのだろうか。

「注意事項は急発進、急停車しない。脱線したらすぐに列車を止める。の二つよ。」

「善知鳥(うとう)が言えることか。」

「だから、2人ずつ来てまずナガシィとハルナン。次がミッシィとユウタン。次がサメちゃんとイサタン。最後がアサタンとソラタンだよ。」

凹(おう)の周回に入ってコントローラーのつまみを握る。線路上に置かれた車両はJR東海の車両311系と313系だ。つまみをゆっくり回すと311系のモーター車（3号車　モハ310形）だけがむなしく動き出した。

「列車は知らせてる時はもれなくマックスにしていいから・・・。」

ポカッ。

「しちゃダメだぞ。まあどうしてもこいつゴミだってゆう模型(やつ)があったらやっていいけどな。」

三つ目の注意を受けて1周。1周したら訓練生交代。箕島(みしま)に代わって運転訓練終了。

1年生全員の運転訓練が終了すると前夜祭に入る。その前に先輩達が配置を決める。

「ナヨロン。そっち何人必要。」

「明日青木(おおぎ)さんも来るっていうからこっちは後2人くらいでいいよ。」

「じゃあ、そっちにミッシィとナガシィでいいでしょ。でハルナンがこっちの内勤で、中学生は新幹線(しんかんせん)の体験運転でしょ。あとは外回りでいいでしょ。」

「それでいいな。」
「永島。箕島。ちょっとこっち入って。」
ナヨロン先輩に呼ばれて凹の周回に入る。
「えーと、次はここにある車両どれでもいいからここの線路上に並べて。」
「リレーラーとか無いんですか。」
「あるにはあるんだけどねあれ青木さんの私物だとかって明日手伝いに来る人がいうもんで、基本使わないほうがいい。」
「なんですかそれ。」
「気にしなくていいよ。ともかくリレーラー使わずに線路上に早く乗せられればいい。」
僕は２２３系を探して内回りに、箕島は何でもよかったらしく３７３系を手に取って外回りに置き始めた。これはなれないと少し難しい。特に機関車などの車輪の多い模型はすぐには言うことを聞いてくれない。僕はいつも家でやっている手つきで次々と車両を整列させていったが、箕島のほうはそうではないようだ。車両の高さに目線をおとして両手で丁寧に並べている。箕島が３７３系３両をレール上に設置し終わるとき、僕は２２３系８両のうち６両（３号車サハ２２３形）を置き終わり７両目（２号車　モハ２２３形）に取りかかっている時。作業スピードが浮き彫りになる。１０秒後ぐらいに作業を完了した。
「終わりました。」
「やっぱりやってる人は違うなぁ。」
ナヨロン先輩独り言のように呟いてから、
「永島。明日２２３系も持ってこれる。」
「別に必要なら何両でも持ってきますけど。」
「さすがだな。」
「おーい、諸君。」
善知鳥先輩がみんなを読んだ。
「これから、これでレールを磨いてもらう。」

善知鳥先輩が持っていたのは右手に綿棒、左手に「ＵＮＩ　ＣＬＥＡＮＥＲ」と書かれたボトルだった。これでやる作業は大体見当がつく。

「このレールクリーナーで線路を磨け。」

そう言っていった。

「さて、やるか。」

「正直これ面倒なんだよなぁ。」

「何。永島家に模型でもあるのか。」

「ああ、じいちゃんが作ったこれの１０倍くらいあるやつがな。」

「・・・。」

思わず顔が引きつった。

（さすが、永島家。それを作ったっていうと永島宗一氏か・・・。なんつう社長だよ。暇人なんだか。）

「へぇ。根っからの鉄道好きなんだな。」

「ああ。でも・・・、この構図ってちょっとやりづらいところもあるかも。」

やってみると案の定そういうところが出てきた。例えば凹の周回になっているほうでは駅構内。この駅の屋根は線路側に大きくせり出している。つまり綿棒が入り込める隙間が小さいく綿棒の頭も小さいため、レールと接地しにくいのだ。

「ナヨロン先輩、もうちょっと便利なやつってないんですか。ＴＯＭＩＸのクリーグングカーとか。」

「んな便利なものこの部活にあるけど、持ってきてない。時折、そこだけにレールクリーナーぶちまけるだけっていうのがあるから。」

「最低なクリーニングカーですね。」

「永島。その言い方はちょっと違うぞ。この部活はそういう不都合なことはゴミで片づけるんだ。」

「ああ、そうですか。ていうか、いまそんな話どうでもいいです。」

「ナヨロン先輩。これって他にどこやったらいいですか。」

「全部だよ。」

「全部。まだ、駅しかやってないのに。」
「ていうか、木ノ本もここに固まってるなよ。早くしないと6時までに終わらないんだから。」
「でも、時間通りに終わる例っていうのも少ないんですよねぇ。」
「そう。時間通りに終わるっていうのも少ないし、予定した日にやらないっていう例まであるからなぁ・・・。て、そんなことどうでもいいだろ。やれー。」
「はいはい。」
全体にレールクリーナーをやるのと同時進行で、モジュールには列車が走っている。今僕たちのほうには223系が走っている。
「永島。もうちょっとでそっちに列車が行くぞ。」
ナヨロン先輩から注意がある。僕はそれを聞いて手を引っ込めた。223系はぼくのほうに接近してきたのだが、あるところを境にしてガクッとスピードが落ち、ついには止まってしまった。それもありがたいことに僕の前だ。
「ナヨロン先輩。223系止まっちゃいましたけど。」
そういうと、すぐにナヨロン先輩が駆けつけてきた。
「あー、もうこいつダメだな。」
そう言ってモーターが入っている5号車（モハ223形）を抜き取って、床を見た。
「永島。ちょっとレールクリーナーと綿棒貸して。」
綿棒とレールクリーナーを渡すと、ナヨロン先輩は車輪を外して、車輪の一つに綿棒の頭を当てた。そのあと車輪の上のあたりから延びる緑色の棒を少し回すという作業を開始した。それを1台車3回。2台車6回繰り返して、再び線路上に戻した。
「永島。走るかどうが見て。」
そう言い残して、コントローラーのほうに行った。
「永島行ってる。」
「まだ行ってません。」
そういったすぐ後、223系のモーター車がピクッと動いた。そし

て、ぎこちなくではあるが前に進み出した。
「ナヨロン先輩。走りましたよ。」
「了解。」
それを聞くとすぐに２２３系を止め、前と後ろに話された車両を連結。８両にして、走らせた。８両編成もゆっくり動き出し、何とか走ることが確認された。
「永島（ながしま）。これなんて言うやつ。まぁ、特急じゃないのは見ればわかるけど。」
木ノ本（きのもと）が話しかけてきた。
「２２３系。関西の新快速だよ。これはライトの部分が広がってるから２０００番台だね。」
「他のとどう違うんだよ。」
「明日２２３系の１０００番台持ってくるからその時見せてやるよ。一発で分かる違いだぜ。」
「ふぅん。そんなに違うんだな。」
「ああ。だって、テールライトのついてる位置も大きさも違うからな。」
「なるほど。」
「おい、木ノ本（きのもと）、永島（ながしま）。話してるのもいいけどちゃんと仕事しろよ。」
「だってもうレールクリーナーは終わったんだもん。」
「なんか別なこと探してやれ。」
そう言われて、ほかのことを探す。だが、結局レールクリーナーの仕事に落ち着いた。今度はＥＦ５１０が牽引する貨物列車が走っている。
「なんかいっぱいつないでる。」
「おい、ナヨロン。加減しろよ。加減。つなげすぎだろ前夜祭なのに。」
「いいだろ別に。」
「１、２、３、４、・・・。」

木ノ本は隣でコンテナ貨車の数を数え始めた。何ともカラフルなものである。赤、緑、黄色、青、黒、ピンク。本物の貨物列車はここまでカラフルではない。

「１５、１６、１７。全部で１７両つないでる。」

「１７両か。なんか驚くような数字じゃないね。」

「永島が驚く数字ってなんなんだよ。」

「えっ、３２両とかそんぐらい。」

「３２両って。機関車にひけないだろ。」

「いや、引けるって。１６００ｔ（トン）級の貨物列車は計画上だけだけどあったわけだし不可能じゃないって。それに模型だったら脱線しない限り何両でも引けるんだから。」

「じゃあ何。４０両の貨物列車だって可能とかっていうの。」

「ああ、言う。だけどうちじゃできないんだよなぁ。２６両しかないから。」

「十分あるじゃないか。」

その話はナヨロン先輩にも聞こえてたらしい。

「なになに。永島コキ２６両あるの。じゃあ持ってきてくれよ。俺１７両じゃ物足りないって思ってんだ。頼む。」

「あっ、いいですよ。機関車どうしたらいいですか。」

「機関車は学校にあるやるでなんとかする。機関車って走ればコキ引けるんだからな。」

「なんですか。その走ればいいみたいな考え方。」

「だってそうなるだろ。模型の場合特に機関車は走りさえすればそのあとに何両続いても関係ない。だからそういう答えに行きつく。間違ってないだろ。」

「確かに。」

「うちのＥＦ２１０（モモカマ）で最高のやつに引かせる。東海道・山陽本線の長大貨物列車をやろうぜ。」

「いや、それだったら学校のコキも使って３２両にするべきです。」

「バカ、３２両なんてＥＦ２００（ハイカマ）が引ける量だぞ。３

３９０ｋｗ（キロワット）のＥＦ２１０（モモカマ）に引けるわけない。」
「・・・。考えてみればそうですね。ＥＦ２００って定格出力６０００でしったっけ。」
「そう。６０００ｋｗ（キロワット）だから引けるの。」
「それ実際やってませんよねぇ。」
「やる前に電気的問題があってな。今の電気事情のままじゃだめだからやれないだけ。もっと電気の供給能力が上がれば、やれるらしい。」
「持ってくるか持ってこないかっていうところから結構話が脱線してるんですけど。」
「あっ。そうだったな。じゃあ、悪いけどそれもお願いね。」
「はい。」
１８時００分。前夜祭終了。作業もやることがないため活動は終了した。
家に帰るとすぐに車両庫に走った。
（えっと、２２３系１０００番台とコキ２６両と「２５３系（ネックス）」と、「カシオペア」と「北斗星（ほくとせい）」。なんかたくさんあるなぁ。引き受けすぎたかなぁ。）
うすうすそう感じながらも執事に頼みに行った。
「お願い。明日の文化祭でこれを高校まで運んでほしいんだけど。」
「そういうことでしたら、喜んでお引き受けしますよ。車両を運ぶついでに坊ちゃまもお乗りになったらどうですか。」
「いや、送ってくれるのは芝本までいい。そこからは電車で行く。」
「はぁ、しかし・・・。」
「いいんだって。そのほうが楽しいから。じゃあ、箱はもう車に積んどくから。」
そう言って車両庫のほうへ走っていった。
その後ろ姿を見ていたのは執事だけではなかった。
「なんか、昔駿（しゅん）君に引き連れられて浜松駅まで行っていた時と変わ

らないな。」
「隆則様。」
「和田山。手伝ってやれ。」
「・・・。はい。隆則様。」

3箱目を運び出している姿を見ていると昔同じようにここに通っていたいとこのことを思い出した。今自分の息子はその人と同じ学校にいるのだということを改めて実感した。

今回からの登場人物
永島隆則
和田山

２１列車　前夜祭（後書き）

ようやく文化祭の前夜祭まで行きました。
これから２・３話かけて文化祭の中身。まだまだ先が長いなぁ。
ネットにアップしている原作を作りながら思う今日この頃です。

22列車　当日

6月13日。文化祭当日。文化祭は9時からであるが僕達はいつも学校に行くように登校しなければならない。結局家の車で送ってもらった。こういう措置は模型の輸送のためである。運転手も手伝ってケースをホールに運び込む。

「よーす、ナガシィ。早いじゃん。」

ホールには既に3年生と中学生が集まっている。皆考えることは同じなのだろうか。

「ナヨロン先輩。言われたやつ持ってきましたよ。中に言われてないのも入ってますけど。」

「あっ、ありがと。これで今日1日は持つな。」

中で僕の持ってきた箱を受け取って中身に見入る。

（うーん。「北斗星」と「カシオペア」と「出雲」と「富士」。あとはEF510（アオカマ）・・・。これは「北斗星」に対応してるんだよな。それとEF81（ホシカマ）。いや、これが「北斗星」か。あとの機関車はその通りか。で、永島の言ってた言ってないやつっていうのが「しなの」。でも10両って。まさかな・・・。）

「何かありましたか。」

「いやなんでもない。・・・それと一つ聞くけど、これ全部走るんだよな。」

「昨日走行試験やってきましたから大丈夫ですよ。全部走ります。」

展示場に箱を入れてから8時25分までホールで遊んで、8時28分に体育館入り。8時50分ごろまでの開会式を経て、9時00分から文化祭開始だ。

「永島。外に5000番（313系）と300番（313系）の併結入れて。」

「はい。内何にするんですか。」

「373系か、311系か。それとも2500番（313系）と2

１１系の併結か。迷うところだけど、ここは３７３系の「東海」だろ。」

「ですね。」

「箕島。俺たちが行っていいよっていったらすぐに走らせて。」

ナヨロン先輩はすぐさま３７３系の箱を探して、線路に置く。先に内回りの作業が完了し内回りから走りだす。だが、・・・、

「ヤベ。永島がパンタ車あっち向きで入れたってことはあれ逆じゃん。」

「名寄先輩。止めますか。」

「もういいよ。直すの面倒だから。そのまま行っちゃえ。素人にはわからん。」

「箕島。外線も行っていいよ。」

「よし、永島次だ。」

「えっ、早くないですか。」

「一つの列車の走行時間は１０分。１０分の間に入れ替えしないといけない。もたもたしてられないよ。」

「じゃあ、次は「しなの」行きますか。」

「うん。じゃあ「しなの」外に出して、内回りは・・・０番（３１３系）と２１１系の併結でいいか。並べて。」

「１０両でいいですか。」

「６両だろうが、８両だろうが、１０両だろうがなん両でもいい。」

持ってきた箱から「しなの」を取りだす。この「しなの」は基本編成６両と付属編成４両の１０両編成。編成は大阪～長野間で走っている「しなの」の運用である。今からナヨロン先輩が外に取りだそうとしているのは中央本線（中央西線）である快速列車。東海道線の静岡圏でもそうだが、ここでは３１３系という新型車両と２１１系という従来の車両の併結運転が行われているらしい。

作業をしている間に９時００分。一般客の入場が始まり、たちまちホールは子供たちでごった返す。

「さて、ゴジラが入って来たぞ。」

そういうのは何となく分かる。子供は何でもかんでも触りたがるというのがある。これは模型にとって強敵だ。触るということは脱線の危険性が増すということ。普段脱線しないところでも脱線するらしい。ひどい時には走ってる車両を押さえつけるため走っている車両すべてが横転することもあるらしい。

　とりあえずこのゴジラは外回りの人に任せるとして、９時０５分。内回りを３７３系「特急東海」から３１３系０番台（運用は１０００番台）と２１１系の併結に変える。外回りは東海道本線の新快速列車から中央本線の特急「しなの」に変える。ポイントを変えて「しなの」が発車していくのを見送ってまた次である。次はＪＲ東日本に移るらしい。２５３系「特急成田エクスプレス」とＥ２３１系（２０９系?）の総武線をこれまで走ってきた車両を片づけて線路上に出す。作業を行っていると、誰かに話しかけられた。

「おい、名寄いる。」

誰だろうか。その問いに答えようとしていると、

「青木さん。青木さん僕の独断でこっちだから入ってください。」

「マジかよ。そんでもって、これはどうにかならないのか。」

走っている「しなの」を指差した。

「素人には分からないから大丈夫です。」

「分かる人来たらどうするんだよ。」

「来ないことを信じましょう。」

「あのなぁ。」

どうやら今来た人は青木というらしい。左側に展開しているプラレールの持ち主なのだ。よくあんなに集めたものだと感心する。その人は机の下をくぐって僕達の周回に入ってくる。

「とりあえず紹介しとく。ＯＢの青木洋輔さん。」

「それだけかよ。・・・まぁよろしく。時折こうやってくるかもしれないから。」

「あっ、よろしくお願いします。」

「で、名寄。俺の「きたぐに」が入れる隙間はあるのか。」

「あっ、それ考えてなかった。」
「おい、考えとけよ。しょうがねぇ。サヤのほうで走らせてくるか。」
「それやったら「きたぐに」が死ぬと思います。」
「そうだな。じゃあ、次こいつを行っちゃえって。走らせてちょ。」
「へいへい。永島（ながしま）。外回り「雷鳥（らいちょう）」出して。」
「あっ。はい。」
TOMIX（トミックス）の「雷鳥（らいちょう）」の箱を開けて作業を開始したが、ナヨロン先輩が言ったあのことが少々気になった。
「ナヨロン先輩。これ持ってくるって聞いたときパノラマグリーンかパノラマグリーンじゃないかどっちかって聞きましたよねぇ。なんでですか。」
「パノラマグリーンだと支持率がいいっていうかなぁ。結構違うからな。」
「へぇ。そうなんですか。」
「ああ、それもあるけど。パノラマグリーンとそうじゃないやつの違いも見ておきたかったっていうのもあるかなぁ。まあ、それはさっき見て分かったけど。」
「どこがどう違うんですか。僕にはどうしても国鉄車は同じように見えるんですけど。」
「同じように見えるかぁ。まぁしょうがないよなぁ。大体そういうものしか作ってなかったていうのをあるからなぁ。」
外側に「きたぐに」を並べながら続ける。
「パノラマグリーンってふつうのやつに比べると窓が小さい。後、トイレのところにある行先表示がふつうのほうはドア側の客室窓上にある。だから簡単に見分けがつくよ。でも、中には変り種をあるからなぁ。パノラマグリーンの最終編成あたりだと思うけど、あいつはほかのパノラマグリーンに比べて窓周りが広い。だからちょっと見分けづらい。」
「へぇ。そんなに違うんですね。同じように見えるやつも似て非な

るものってわけですか。」
「まぁ。そういうところだな。」
「雷鳥（らいちょう）」を出している間青木（おおぎ）さんは今走っている「しなの」に目をやっていた。
「名寄（なよろ）。これ持ってるの誰だ。」
声をひそめて聞いた。
「永島（ながしま）。あいつだけど。」
「俺思うんだけどさぁ。これ明らかに南（みなみ）さんのやつだよなぁ。」
「永島遠江急行（ながしまこうきゅう）の社長の孫だし、南（みなみ）さんがその親戚ってことじゃないのか。」
「・・・。そういうことだよな。ものすごい大物が入ってきたじゃないか。それであの性格だから誰もそう思えない。そこがすごい。」
「ハハハ。」
その頃僕はというと、文化祭を見に来た鉄道マニアらしき人と話していた。
「この「しなの」は１０両だから大阪から来るやつですよね。」
「ああ、はい。」
「私も高校生の時にねぇ、この「しなの」で名古屋（なごや）から長野（ながの）まで行ったことがあってね。」
「へぇ、そうなんですか。」
「私が乗ったときはまだ３８３系じゃなくて・・・。」
「３８１系の時ですか。」
「いやいや。もっと前。確かディーゼルカーだったかなぁ。もう４０年位前の話かなぁ。」
そういうとその人は持っているカバンの中から携帯できるサイズのアルバムを取り出し、その車両を探していった。
「あっ、あった。これだよ。」
指差した車両の真ん中には「しなの」、その下にローマ字で「ＳＨＩＮＡＮＯ」と書かれている。今僕が親しんでいるヘッドマークとは全く縁のないものである。そして車両はどこかで見たことがある

ような顔をしている。車両は確かキハ１８１系。大阪(おおさか)～鳥取(とっとり)間を結んでいる「特急はまかぜ」と同じ車両のはずである。

「今じゃこれもねぇ、「はまかぜ」だけになっちゃったからねぇ。本当はこれにはもっと走ってほしいんだけどねぇ。」

名残惜しそうに語っている。この人はキハ１８１系(これ)のことが好きなのだろう。昔から親しんできた車両であることには間違いはないのだ。

「そうですね。」

なんか暗い話になっているので話を変えよう。

９時２５分。５８３系「急行きたぐに」、４８５系「特急雷鳥(らいちょう)」に交代。

「ナガシィ。」

誰かに呼ばれる。今度は誰だかしっかりと分かる。萌(もえ)だ。だが、それを聞いて唖然とする人もいる。それは3年生と2年生。あとは木ノ本(きのもと)である。

（今、ナガシィって呼んだよねぇ。この人。）

（まさか。ナガシィって他の人から呼ばれてたあだ名。気に入ってんだな。）

（彼女か。）

「よーす。「雷鳥(らいちょう)」走ってるじゃん。それも「きたぐに」と一緒かぁ。」

（この人分かってる。まさかとは思うけど編成違うとか言わないよなぁ。）

「それで次はなに走らせるの。「カシオペア」。」

ちょっとナヨロン先輩に目線を向けた。ナヨロン先輩は首を横に振って、持っている箱を掲示した。「ワム３８０００形」の貨物列車と今自分が手に持っている２８１系「関空特急(かんくうとっきゅう)はるか」が次に走る列車だ。

「まだ「カシオペア」は出さないよ。」

「最後まで出さないつもり。」

再びナヨロン先輩に目線を向ける。何もなかったけどいつか出すということだろう。
「この間には出るよ。」
「ふぅん。」
背をかがめてホームの中をのぞきこむ。
「ホームに停まってるのは「ワム」と「はるか」かぁ。」
（「はるか」はまだしも、「ワム」まで分かるなんて・・・。ふつうの人だったら「あっ、貨物列車だ。」で終わるリアクションなのに。）
「あの「ワム」って駿兄ちゃんの。」
「ううん。部活にも持ってる人がいてね。これその人の私物なんだ。」
（今この人駿兄ちゃんって言った。間違いない。南さんのことこの2人は知ってる。）
「んじゃあ、他のとこもさらっと見てくるから。また来たらよろしくね。その間に「カシオペア」走らせたりとかしないでよ。」
「しねぇよ。俺の独断でやってるんじゃないから。」
萌は模型を見ながら、隣の周回のほうへ歩いて行った。
（あの人って永島のなんなんだろう・・・。）
今度は木ノ本のいる周回に来て同じように目線をおとした。すると向こう側から緑色の先頭の車両がこちらに向かってくる。
「ねぇ、これって「スーパー白鳥」。」
おそらくこれは私に聞いたのだろう。
「ああ、ちょっと・・・。ハクタカ先輩。これって「スーパー白鳥」ですよね。」
「うん。そうだよ。」
「だって・・・。でもよく解るね。」
「昔からナガシィと電車のこと話してたから。特急だったら名前と使われてる車両。あとはナガシィが好きな車両くらいだけだけど分かるよ。」

（永島の彼女なのか。）
「それで、ナガシィの言ってた、隠してなければ私と同じっていうのは君かなぁ。」
（あいつそんなこと言ってたのか。）
「まあ違うってことはないよね。ナガシィと同じ上履きはいてるのこん中に何人もいたけど、女子っていうのは君だけだったからね。」
「・・・。」
「あっ、名前言ってなかったね。坂口萌。また展示とかで会うと思うからとりあえず覚えといて。」
「永島から聞いてるんじゃ隠すこともないか・・・。木ノ本榛名よ。同じ鉄としてよろしく。」
「木ノ本さんね。よろしく。」
ふと永島を見て、
「やっぱり彼女創るなっていう方が無理だよなぁ。」
「いや、別にあいつのこと彼氏とか思ってないから。」
「ふぅん。木ノ本さんがどう思ってるか知らないけど、ナガシィは私以外に彼女を創らない。これは断言できるんだけどねぇ。でも言っといてよかったかも。」
「・・・。」
「ただ、一つだけ問題があるんだよねぇ。まだ本当のこと言ってないし・・・。」
「おい、言ってないなら言えよ。」
「私が今言ったのはそういう意味もあるけど、違う意味もある。あいつには秘密にしといてほしいんだけど。」
その内容を聞くと、
「秘密にしとく必要があるのかよ。それ。正直に話した方がいいだろ。」
「そうは思ってるんだけどね・・・。ごめん木ノ本さん。この話はまたどこかで会った時にお願い。今はいろいろとまずいから。」
（今のことは全部本当・・・。）

永島（ながしま）のいる周回のほうに歩いて行く後姿を見ながら心の中でつぶやいた。

今回からの登場人物
青木洋輔（おおぎようすけ）　誕生日　１１月１日　血液型　Ａ型　身長　１５９ｃｍ

22列車　当日（後書き）

話がブレていてすみません・・・。
展開は考えたところで成り行きということが多いので、これからもそういうレが出てくるかもしれません。

そんなのでも読んでくれる人には感謝。
根性でまずは高校1年生の最後まで持っていきたいと思います。

23列車　話し合って・・・

一方僕達はというと展示に追われて、次に何を出そうか話し合っている。
「今はまだ11時。「カシオペア」とか行くには絶好の時間なんだろうけどな。」
「見に来てる人も多いし、今出しちゃえばいいじゃないんですか。12時になったら食料調達しにどっか行っちゃいますよ。」
「おい、名寄(なよろ)。ネタに困ったらこれ走らせればいいじゃん。」
「青木(おおぎ)さん。「ライトレール」はまだ。文化祭の最後の最後で暴走させるんだから。」
「「ライトレール」暴走させるって。それはどうだろうか。」
「でも、「ライトレール」はそういうところ走ってるんだよ。風景以外は問題ない。」
「いや、別な意味で問題があります。40km(キロ)／hしか出ない車両がなんで400km(キロ)／h出すんですか。」
「そこは御愛嬌。」
「そんなことよりもまだ走らせてないやつだっていっぱいあるじゃないですか。223系とか、223系とか、223系とか。」
「お前、223系好き(ニイニイサン)だな。」
「100系がいなければ1位ですから。」
「じゃあ100系暴走させようぜ。在来線だけど、ミニ新幹線がありならありだろ。」
「その片割れ何にするんですか。0系(レイチャン)ですか。0系(レイチャン)はちょっと。」
「何0系嫌なのか。」
「そんなことはないです。でも、両方ともここに持ってきてません。」
「なんでそんな話になったんですか。もう「カシオペア」と「北斗星(ほくとせい)」出しますよ。」

「いや、待て。「北斗星」は「北斗星」でもバリエーションを持たせた方がいい。例えば「夢空間」とか「夢空間」とか「ゆぅトピア」とか。」
「最後関係ないぞ。なんで「夢空間」って言ってて「和倉」になるんだよ。おかしいだろ。」
「青木さんもナヨロン先輩もやめてください。オヤジギャグにもなりません。」
「よし。永島。何に牽かせる気。ＥＦ８１（カシカマ）。それともＥＦ５１０（アオカマ）。はたまたＥＦ８１（ホシカマ）か。」
「「カシオペア」はＥＦ５１０－（の）５０２号機で「北斗星」はＥＦ８１－（の）１３３号機です。」
「分かった。並べろ。」
ナヨロン先輩の承諾を受けて内回りに「カシオペア」を外回りに「北斗星」を並べ始める。すると、
「ナヨロン。次なに行くつもり。」
サヤ先輩がモジュール越しに話しかけてきた。
「内回りが「カシオペア」で外回りが「北斗星」の1号だな。いや編成の向き・・・。」
「なあ、「カシオペア」こっちに貸してくんない。こっちからは「北斗星」貸すから。」
「んなカオスにしたいなら「トワイライト」でやればいいじゃないか。」
「「トワイライト」だったら珍しさがないだろ。」
「その前に「カシオペア」貸してほしいかは永島に聞け。こいつのだから。」
「ごめん。「カシオペア」貸してくんない。」
「それだったら毎回家でやってますから。それに撤去すんの面倒だから嫌です。」
「1年生に拒否権は・・・。」
「ある。」

すると、潔くあきらめていった。サヤ先輩のおかげで作業が停滞していたが、作業を再開。すぐに2・1号車（スロネE27－200形・カハフE26形）と牽引機（EF510－502）をレールにのせた。ナヨロン先輩の腕時計で11時01分「カシオペア」が出発。11時04分に「北斗星（ほくとせい）」が出発した。

「永島（ながしま）か。箕島（みしま）。どっちか昼食べてこい。」

「えっ、でも。」

「大丈夫。こっちが編成順に片しとくから。」

「・・・。」

「じゃあ。僕が行きます。永島（ながしま）。運転変わって。」

と言うわけで、まず箕島（みしま）が昼を食べに行くことになった。僕は箕島から運転を変わり、運転席についた。青木（おおぎ）さんとナヨロン先輩は次の車両について何にするか話し合っている。

「ナガシィ。次はなに走らせるわけ。」

「永島（ながしま）。お前の「出雲（いずも）」DD51（デデゴイチ）の重連で召喚して。」

「分かりましたけど。外回り何にするんですか。」

「外回りは泣く子も黙る「急行だいせん」だぜ。」

泣く子も黙るのか・・・。

「だって。」

「「出雲（いずも）」は聞いたことあるけど、「だいせん」って何。キハ58とか使ったやつ。それとも「きたぐに」みたいに583系使ったやつ。」

「おいおい。山陰本線は電化されてないんだぜ。583系走れるわけないじゃん。」

「あっ、そうか。・・・ああ、ちょっと私バカになったかも・・・。」

「それ分からなかっただけでバカになったって言うなよな。また1から覚えようっていう人もいるんだから。」

（木ノ本（きのもと）さんのことだな。）

「へぇ。1からね。」
「坂口じゃん。」
その声とともに来たのは宿毛だった。
「宿毛久しぶり。」
「宿毛。クラス展のほうどうなってる。」
「クラス展のほうはまぁふつうくらいだよ。やってる位置が悪いっていうことはないけど、なかなか客の量が上がらないっていうかなぁ。多分ほかのところと割れてるんだと思う。」
「クラス展何やってるの。」
「お菓子とかの販売。」
「楽しそうだね。」
「楽しそうだねって言っても坂口も来る気はないんだろ。ここにいるほうが断然楽しいから。」
「まあね。」
永島は「出雲」を線路上に出すために今は運転台にはいない。そのコントローラーを見つめていると、
「ねぇ、宿毛。これいじっていいと思う。」
「ダメだろ。いくら模型いじれるからってそれはダメでしょ。」
「いいじゃん。少しくらいマックスにしたって。」
その会話は十分聞こえた。
「おい。そのコントローラーマックスにするなよ。家じゃないんだから。」
と注意されてしまった。
「はいはい。ただの冗談だから安心して。」
「お前の場合どこからが冗談でどこからが本気なのかわかんねぇよ。」
「ほとんどは冗談のはずだから。」
「はずってなんだよ。」
「ハハハ。」
(永島のやつ。やっぱり坂口と話してたほうが生き生きしてるじゃ

ねぇか・・・。そうか。鉄研だからこういう機会があるのか。だったら俺が心配するまでもなかったかもな。）

一方、他の区画では。

「ねぇ。あの人ってさっきからナガシィと話してるけど、ナガシィの彼女かな。」

「善知鳥先輩には何でも彼女に見えるんですね。」

「永島のやつ。うらやましいなぁ。」

「何。サメちゃんもナヨロンと同じで彼女募集中か。」

「えっ。まだ一度も縁がないですから。て言うか名寄先輩も募集中って。彼女いないんですか。

「頭いいけど、半分電車が恋人状態だからな。それで縁がない。ところで、佐久間はどこに行ったか聞いてないか。」

「多分他のクラス展とかに行ったんじゃないんですか。」

「あのバカ。アヤノンだけに任せるんじゃない。アヤノンをいじれないじゃないか。」

（そのためだけに。）

また・・・、

「おーい、アヤケン。貨物ぶっ倒れた拾って。」

「なぁサヤ。これどこで落ちた。」

「ここの小楠貨物で倒れた。」

「小楠貨物かぁ。よく俺こんなゴミ作ったな。」

「ゴミかよ。」

「あいよ。落ちてたコキはこれで全部。」

「バカ野郎。コンテナも落ちてどっかに吹っ飛んでる。探せ。」

「えっ。その状態じゃ何かダメなのか。」

どういう状態か説明しよう。左側からコンテナがあり、あり、なし、なし、なしの順になっている。

「この状態じゃ※□△○※□△○になるだろが。」

解読不能のところだけ裏声でした。

「せめて、日本語しゃべれ。」

「日本語ですか何か。」
「ウソつけ。」
「ナヨロン先輩。また「雷鳥（らいちょう）」行くんですか。」
「バーカ。またって言う言い方は何だよ。国鉄って言うのはようは頭だ。どんな編成考えるかで走らせるパターンって言うのは何百にもなる。「雷鳥（こいつ）」には「だんらん」をいれて、一番後ろに「ゆぅトピア和倉（わくら）」をくっつけて、「雷鳥（こいつ）」に引っ張らせる。」
「そんな編成あるんですか。」
「あっただ。国鉄に正統性を求めるところでどうかしてるぜ。それがあからさまに出るのは客レとかディーゼルだな。キハ５８にキハ１０とかそういう方面を連結したとかっていう実績だってあるんだ。・・・いや、くっつけたのはキハ４０だったかな。」
「分かりました。ていうかそんなことどうでもいいです。」
１２時４２分。僕は持ってきた弁当を食べに一度管轄を離れた。弁当を食べ終わって戻ってきたのは１３時０３分ごろだった。
「昼食べてきました。」
「へーい。・・・永島（ながしま）。２２３系の２０００番台8両。内回りに出して・・・。っていっても、外回りどうするかなぁ・・・。」
「永島（ながしま）さん。次外回りなんか走りますか。」
諫早（いさはや）がクラス展をきり上げてやってきた。
「ああ、まだそれ決まってないんだけど・・・。内回りは２２３系の新快速（しんかいそく）が行くみたいだけど。」
「じゃあ、ちょうどいいですね。僕のこれお願いします。」
そう言ってＫＡＴＯ（カトー）の箱を差し出した。箱の背には「２２３系２０００番台〈１次車〉４両セット」と書いてあるが、表には「２２３系６０００番台４両セット（宮原（みやはら））」とシールで直してあった。
「ナヨロン先輩。諫早（いさはや）がこれ行ってほしいって。」
今の箱をナヨロン先輩にも差し出す。ナヨロン先輩も箱の背と表で表示が違うことを不思議に思ったかもしれない。だが、中身を見ると納得したようだ。

「諫早。これよくやったな。ダブパンってことは宮原にいる６００番（２２３系）だよな。」
「はい。」
「これだったら、もうワンセット繋げて、「丹波路快速」とか「直通快速」とかやった方が面白い。ここまでできてるんだし、これで終わらせるのはもったいないぜ。」
「名寄さんならそう言うと思って、もうワンセット持ってきてます。」
「えらい。なんか他に持ってる車両とかってある。」
「今はないですけど、家に２２３系のパンタを全部シングルにしたやつと同じ６０００番台の網干にいるやつと２１１系の３０００番台を無理やり５０００番台化したやつならあります。」
「うーん。なるほど。でもそいつらは次だな。」
「ああ、あと名寄さん。もしカーブとかでこけたら「こけんじゃねぇよ。ボケ。」とかって言っといてください。僕が許します。」
「はいはい。でもこれこけないようになってるだろ。明らかに重量感違うし。」
「ああ、はい。くっつける方はモーターぶち抜きましたから。」
その時にはもう編成を理解していたらしい。
「永島。新快速を１号車（クハ２２２形）からこっちの方向で入れてくから６０００番は８号車（クモハ２２３形）むこうで入れてって。」
ナヨロン先輩から箱を受け取って言われたとおりに並べていく。レールに置いて行く順番は８号車からではなく１号車から。こうしないといれずらい。なぜかというとこれを並べる線路の隣に建物が隣接しているからだ。
「ナガシィ。手伝おっか。」
「いや、大丈夫。それに、これ人のだし。」
「２２３系の・・・２０００番台。なんか顔似てるよねぇ。」
「いや、こいつは２０００番台じゃなくて６０００番台。モーター

車のパンタ2つだし、ちょっと分かりづらいけど乗務員室扉のところラインの下にオレンジのラインが入ってる。」
「ホントだ。２２３系も大家族だからなぁ。分かりづらいね。」
「でも、先輩の話聞いてると２２３系もそんなに親戚たくさんじゃないみたい。３１３系のほうがもっと親戚たくさんなんだって。」
「ふぅん。」
「ねぇ、ナガシィ。」
善知鳥(うとう)先輩に呼ばれる。
「何。ナガシィ、鉄研でもナガシィって呼ばれてるの。よっぽど気に入ってんだね。このあだ名。」
「・・・。なんですか。」
「そっちにさぁ１３８系か９８１系の「あずにゃん」ない。Ｅ２５３の「あずにゃん」走んないんだけど。」
（言ってることメチャクチャだし・・・。）
「Ｅ２５３系なんていうやつありませんけど、それに１３８系とか９８１系ってどこどう間違えたらそうなるんですか。」
ここで正しい答えを皆さんには知らせておこう。もちろん、そんなこと知ってるよという人もいるだろう。まずＥ２５３系と間違えられたのはＥ２５７系。１３８系と間違えられたのは１８３系。９８１系と間違えられたのは１８９系である。
「永島(ながしま)。探してるのはこいつらだ。渡してやれ。」
さすがナヨロン先輩。善知鳥(うとう)先輩の言いたいことはこの人にはしっかり伝わっているようだ。
「ナガシィ。パス。」
善知鳥(うとう)先輩が手を差し出す。僕も手を伸ばしたが、あと少しで届かない。
「ナガシィ、手伸ばせ。ゴムゴムのー、ピストル。」
「無茶言わないでください。ゴムゴムの実食べてるわけじゃないんだから。」
すると外回りをしていた楠先輩がリレーしてくれた。

「アヤノン。邪魔すんなよ。」
「善知鳥先輩。今自分何歳ですか。」
「善知鳥茉衣１９歳。永遠の少年・・・ああ、いやいや。永遠の少女です。」
「・・・。」
「アーッ。ＥＨ２００（ブルサン）の隣が困るー。」
何となくバルサンと同じ様な響きがする。
「・・・名寄先輩。内回りさっきからどこにいるか分かんないんですけど。」
運転業務についている箕島が疑問をぶつけてきた。
「えっ。新快速どっか行った。」
「ねぇ、ナガシィ。２２３系あすこで横倒しになってるけど。」
萌がそう教えてくれた。指差している場所は運転台から死角になるところ。行ってみると、２２３系は全車両が脱線していた。１号車（クハ２２２形）、２号車（モハ２２３形）、３号車（サハ２２３形）と６号車（サハ２２３形）、７号車（サハ２２３形）、８号車（クモハ２２３形）は完全に、４号車（サハ２２３形）、５号車（モハ２２３形）はフィーダーのふちに受け止められる状態で横倒しになっていた。
「手伝おっか。」
「手伝ってくれるのは家だけで十分。ここはいいよ。」
脱線の復旧作業として、まずは３号車と４号車、５号車と６号車の連結を解除。そのあと１号車から３号車と６号車から８号車はすぐに線路上に仮置きする。そして４号車と５号車も線路上に仮置き。車両を仮置きし終わったら随時車輪をレールに乗せる。
「あっ、２２３系だ。」
ふと顔を上げると自分の前にいるのは萌ではなく小学生だった。その小学生は今ここから見える範囲をざっと見渡して僕にこう聞いた。
「ここってこういう部活もあるんですね。中学からでも入れるんですか。」

「ああ、今年は中学から3人入ったからな。」
「へぇ。ここって頭いいほうがいいですか。」
「頭よくなくたっていいよ。僕みたいなバカでも入れたんだから。」
（んじゃあ。僕みたいなバカでも大丈夫なんだよなぁ。よーし。・・・。）
「おいおい。僕みたいなバカっていうのはウソだろ。・・・それとも、鉄道バカとしてのバカか。それだったら裏付けるね。」
「アハハハ。」
5号車のモーターを線路上に置くと引っ張られる感覚を覚えた。車輪が明らかに動いている。
「箕島（みしま）。コントローラー完全に止めてる。」
どうやらその声は箕島（みしま）にはとどかなかったらしい。まだ車輪が動いている。
「箕島（みしま）っ。止めてっ。コントローラーの電源切って。」
ちょっと声を張り上げていうと、青木（おおぎ）さんがそれに反応してくれた。
「箕島（みしま）。コントローラーのノッチオフにして。」
その声を聞くと箕島（みしま）はつかんでいる新幹線のようなコントローラーのアクセルをもとの位置に戻す。するとこれまで電気をとっていた223系の車輪も止まった。止まったことを確認して、改めて5号車を線路上に乗っける。左側の台車、右側の台車の順に線路に乗っけて、
「223系、行っていいよ。」
そう指示を出すと、またも青木（おおぎ）さんが反応して223系を走らせてくれた。
「こういう意味では家でやってるのより疲れるな。」
「いや、家でやってる時のほうがもっと疲れる。あれやるって言っても駿兄（しゅん）ちゃんと俺と萌（もえ）ぐらいしかいないじゃん。3人しかいないから脱線しても気づきづらいっていうかな。逆にこの人数でやってるから運転班としては大助かりってことじゃないかな。」
「ふぅん。」

一呼吸間をおいて、さらに話が続く。
「今走ってる２２３系ってちょっと短くない。家で走らせてるのが常時１２両編成でしょ。あれ８両編成だよねぇ。」
「常時１２両なのはうちのレイアウトが全線複々線だから。新快速ってほとんどが１２両編成で走ってるっぽいから。」
「いや、それは分かる。でも８両っていうこともあるのか。」
「あるんじゃないの。電車でＧＯ！に収録されてる新快速全部８両編成だし。」
「２００２年のデータだもんね。・・・外回り走ってる６０００番台だっけ。あれは何。」
「あれって多分おおさか東線の「直通快速」か福知山線の「丹波路快速」だろ。どっちだか知らないけど。」
「「丹波路快速」は名前聞くだけでどこに行ってるのかなぁってことは大体見当がつくけど、「直通快速」ってどことどこ結んでるわけ。」
「奈良と尼崎の間らしいけど。」
「奈良から尼崎までの直通ね・・・。なんかわざとらしい名前の付け方ね。」
「わざとらしいってなんだよ。」
次の車両選定に戻った。しかし、その頃にはもう決まっていたようで、内回りにＥＦ５１０牽引の貨物列車。外回りに「寝台特急トワイライトエクスプレス」がスタンバイしていた。

23列車　話し合って・・・（後書き）

２２３系のことが多く出てきますが、自分自身２２３系のことが好きだからです。
個人的には２２３系１０００番台がお気に入りですが・・・。

こんな話どうでもいいですね。
なお、これからも２２３系は大量に出てきます。
やっぱり好きなもの書いてる時が一番ノリノリですね。（笑）

２４列車　暴走　富山ライトレール

ＥＦ５１０と「トワイライトエクスプレス」が走りだしてからは、次に何を走らせるかの議論。

「在来線にＥ３（イースリー）系の「つばさ」と「こまち」を走らせて何とか時間稼ぎにして、次に旧国鉄いけばいいだろ。「ぎんりん」とか「ぎんりん」とか「ぎんりん」とか。」

「お前さっきから「とびうお」・「ぎんりん」にこだわり過ぎ。少しはもっとほかのやつにしろよ。あのキハ５８使って、多層建てでもやればいいじゃないか。」

「多層建てすか。やるのはいいですけど、相方が困り・・・。」

「そんなのいくらでもいるだろ。４８５系使って「つばさ」でいいじゃないか。」

「いくらなんでも、それはないでしょ。」

「あのう。内回りに「スーパーはくと」で外回りに「スーパーおき」か「はまかぜ」出せばいいじゃないですか。」

「ちょっと待て。今外回りに貨物列車出したんだからさぁ、あれを徹底的にいじればいいじゃないか。」

青木（おおぎ）さんが口をはさむ。

「えっ、ＥＦ５１０（レトサン）の後にＥＦ２１０（モモカマ）出して、ＥＦ８１（コチカマ）の重連でＥＤ７６（ナロカマ）の単機みたいなことするんですか。別に嫌とは言いませんけど、ずっとあれをまわしているっていうのはちょっと。」

「えっ、いいじゃないですか。面白いですし。」

「でもＥＦ５１０（レトサン）から始まるっていうのはちょっとって思うんですよ。そういうことするならなおさら「３０９９レ」か「３０９８レ」みたいなことするべきだと思います。」

「また面倒くさいこと思い付くなぁ。」

この後ナヨロン先輩から教わったことだが、「３０９８レ」と「３

０９９レ」は日本一長い距離を走る貨物列車らしい。走行区間は福岡～札幌まで。途中日本海縦貫線という短絡路線を通ってもその走行距離は２０００ｋｍ以上になるという。

「ていうか、貨物だったら他にもいじりようありますよねぇ。機関車変えるだけじゃなくて貨車変えてどうにかするっていうのも。」

「確かに一つの手だけど、変えるの面倒くせぇじゃん。」

「おいこら。鉄道マニアがそんなこと言っていいのかよ。」

「じゃあ、僕が変えるでやっていいですか。」

「ああ、それだったらやってもいいけど、何にする気だ。タキ。ワム。トラ。」

「タキ。」

「了解。並べろ。つってもその隣に困るんだよなぁ。そうなると、あの「トワイライト」もいじらないと。」

「ＥＦ２１０（桃太郎）に牽引させて、東海道線っていうことにしちゃえばいいじゃん。」

「それ言ったらほとんどの列車そうなるじゃないですか。２０９系の隣にＥＨ２００（ブルサン）のタキ走らせて根岸線とか。その隣にＥ２３１系走らせて湘南新宿ラインとか。」

「んなこと言ってたらはじまんねぇだろが。」

「あのう。外に１１３系とか行けばいいんじゃないでしょうか。」

しばらく黙っていたが、ポンと手を叩いて、

「その手があったか。」

そこ感心されても・・・。

その後もこんなギャグみたいな決め方をしながら、走らせる車両を決めてホームに並べる作業。こんなことをしている間にも時間はどんどん過ぎて１４時３０分になった。

「さて、そろそろやるかなぁ。」

「えっ、ナヨロン先輩あれ冗談じゃないんですか。」

「冗談なわけないだろ。やると言ったらやる。次の周回で、内回りキハ５６（キハゴロ）と外回りキハ２２（キハニニ）を停車させろ。

やるぜ。」
そういって車両の入った箱を詮索。箱を三つ取りだして箱を開けた。中には小ぢんまりとした白い車両が入っている。色はそれぞれ違って一つは赤、二つ目は緑、三つ目は紫だった。そのうち二つ。赤と緑をいつもの手つきで線路の上に置いて気動車の到着を待つ。気動車が到着するとポイントを直線に変更。
「箕島。運転変わって。」
珍しくナヨロン先輩がコントローラーのつまみを握る。すると、一気につまみをまわした。停車していた車両は勢いよくホームを飛び出していった。
「あっ。ナヨロンのやつ「ライトレール」走らせてやがる。」
モジュールに比べてとてもちっちゃい車両を善知鳥先輩が発見する。
「ナヨロン。それはあたしの専売特許よ。勝手に使うな。」
「うるさい。ときにはいいだろ。」
「おい、名寄。新しい仲間。」
「おお。万葉線。」
内回りを止めて同じ線路上に青木さんから貰った車両を置く。この車両は「ライトレール」とよく似ているが、少し違う。置き終わると再びつまみをマックスにした。すると、今度は外回りと駅の反対側に止めて紫の「ライトレール」を置いた。当然、こちらも置き終わると暴走させた。
　なぜか走らないけど、この「ライトレール」の暴走は子供たちには好評のようだが、部員には好評ではない。むこうの管轄の人が出てきて、レールの上に手でトンネルを作った。
「あっ、バカ。取るな。」
「ハクタカ。そっちの「ライトレール」取って。」
「永島。「ライトレール」死んでも守れ。」
なんなんだろうか。この状況。
「ハクタカ取るな。」
「ヤダよ。人には散々編成違うとか言っといて自分はこんなことし

てるんだから。」
「いいだろ。間違ってないし。」
「そこ違うだろ。根本が間違ってますよ。」
ハクタカ先輩は走ってきた内回りの赤い「ライトレール」の速度に合わせて、トンネルを作った右手を滑らせる。滑らせるのと同時に「ライトレール」を掴んで、レールの上から外し、自分達の周回へ持っていった。
「ちくしょう。一つ持ってかれた。楠(くすのき)。そっちに取られたの取り返して来い。」
「絢乃(あやの)。取ったらお前の恥ずかしい話クラスにばらすぞ。」
「この。バカタカ。」
「ちょっとアヤノン邪魔。取れないじゃん。」
「ちょっ、どこ触ってるんですか。」
「永島(ながしま)。箕島(みしま)。死んでも守れ。」
と言った時にはもう遅い。紫色の「ライトレール」は善知鳥(うとう)先輩に取られてしまった。
「サヤ、「ライトレール」取ったぞー。」
「オッシャー。」
「よーし。こっちもやるぞ。」
「家でやるときにはないすさまじさだね。」
萌(もえ)が話しかけてきた。確かに。家でやっている時はこんなことはない。ただ普通に車両がゆっくりと走っているだけである。もちろん、新幹線はゆっくり走ってないが。
「確かに。でも、楽しくていいよ。こういうこともあって。」
「ハハ。・・・ナガシィが持ってきたやつ大活躍だったね。」
「ああ、ちょっと持ってきすぎたかなぁって思ってたけど、そうでも無かったよ。先輩なんかもっと持ってきてもらった方が良かったかもなぁって言ってたくらいだし。」
「駿(しゅん)兄ちゃんの223系も持ってきてたけど、あれどうするの。横倒しになっちゃったし。」

「あれも部活のやつ。顧問のなんだって。」
「へぇ。顧問のやつねぇ。って顧問の先生持ちすぎじゃない。どのくらい持ってるのよ。」
「数えてなかったから分かんないけど、うちの父ちゃんくらい持ってるよ。」
「あっ、じゃあ結構持ってるんだね。」
「・・・。」
「今日部活の先輩といろいろ話してたけど何話してたの。」
「次にどれ出すか話し合ってた。」
「へぇ。」
「まぁ、それも話してたけど、電車の雑学とかもいろいろ話してた。」
「へぇ。例えば。」
「「雷鳥(らいちょう)」のパノラマグリーンとパノラマグリーンじゃないやつの見分け方とか。ＳＬのこととか。話してた先輩俺の知らないことも知ってんだもん。ついてくのが精いっぱいだった。」
「ナガシィ、でもついていけなくなることあるんだ。それなら私があの人と話したら全然じゃん。」
すると、後ろから声をかけられた。
「トモ。よーす。」
「駿兄(しゅん)ちゃん。来たんだ。」
「あっ、南(みなみ)さんお久しぶりです。」
善知鳥(うとう)先輩がいつのもテンションより冷えた口調で話しかけてくる。
「えっ、知り合いですか。」
「知り合いも何も、俺はここのＯＢなんだけど。」
「ウソ。」
「ウソって、ナガシィ気付いてなかったんだ。」
「ああ、今初めて知った。」
このころには全員気付いた模様で3年生と青木(おおぎ)さんが寄って来て何かいろいろ話し始めた。

「ナガシィ。バカ。」
「ああ、そうだったのか。暁フェスタに行ったときとかどっからか現れてくるから、なんでかなぁって思ってたんだけど・・・。」
「おいおい。いくらなんでも鈍すぎ。」
「ていうか。駿兄ちゃんくんの遅かったな。」
「なんかいろいろやってたんじゃないの。そうでなきゃおかしいって。ふつうならここに直行する人なんだから。」
「・・・。それもそうだな。」
「ナガシィ。いつになったら帰れるわけ。この後に片付けやるんでしょ。」
「ああ、１８（６）時くらいだと思うよ。でも。この部活予定表通りにやらないからなぁ。いつ終わるか分かんない。」
「それダメでしょ。」
「ハハ・・・。まぁね。」
この時木ノ本は二人の様子を見ていた。二人とも笑顔を交えて話しているのだが、なぜかその顔がいつもと違うように見える。ただ話しているだけなのに、ただ話しているように見えないのだ。
（永島には坂口さんの存在が大きいんだ・・・。坂口さんも言ってたこと。お互いを理解してるからあすこまでの自信になるんだ。でも、それを理解してるなら、なんであのことを永島に言えないの。）
その思いだけがつのった。
１５時。文化祭終了。そのあと部展、クラス展のグランプリ、優秀賞が発表される。クラス展の結果はグランプリ３年６組。優秀賞２年５組。部展のグランプリは吹奏楽部。優秀賞は生物部だった。
「あー。去年は優秀賞だったけど今年は優秀賞すら取れないってホントゴミだな。吹奏楽部のばか野郎っ。」
「まったくだ。」
「サッカーボールが表抜いたんじゃないのか。」
「え。なんで。」
「チート使ってたのがばれたんじゃないのか。」

「あれのどこがチートよ。部員のやつと後輩のやつかき集めて一気にどっさっと投票しただけじゃん。」
「はたから見ればチートみたいに見えるってことか。」
「まぁ、そういうこと。」
善知鳥(うとう)先輩とサヤ先輩は息を大きく吸って口に手を当てて、
「クソサッカーボールのばか野郎ー。」
「バカ。職員室に聞こえるだろ。」
「なんで。聞こえるように言ったにきまってるじゃんねぇ。」
「そうそう。このくらいしないと意味がない。」
「意味がないの前に全員片付けろ。」
青木(おおぎ)さんが仕切って、片付けさせるように促す。
「ところで、この箱４箱誰のだ。」
「あっ、それ永島(ながしま)の。」
「あ。すぐ片付けます。」
（萌(もえ)はもう帰ったんだな。）
心のどこかでそれを思った。１７時片付け完了。この後はアド先生のおごりで一人一人にペットボトルが配られ、５００ミリリットルのジュース、お茶を全員で飲み干す。それを飲み干し終わると、
「よーし。野郎ども。次は臨地研修だー。」
サヤ先輩が気合い入れに叫んだ。
その声に続けて、先輩たちが。１年生の大半もそれにつられて返事をした。
その帰り、正門を出ると予想してなかった光景を見た。
「萌(もえ)。まだいたの。」
「いいじゃん。一緒に帰っちゃダメ。」
「ダメじゃないけど・・・。まだいるとは思ってなかった。終わるの分かんない部活が終わるのってふつうまってるかなぁって。」
「まっちゃダメとかっていうことはないんだし。ていうか、そんな話どうでもいいし、帰ろ。」
「おう。」

さっきから頭の中に響き続けているものがある。坂口（さかぐち）から語られた道のり。あれは固い愛の証か、固い絆の証か。

今回からの登場人物
南駿（みなみしゅん）　誕生日　３月１５日　血液型　Ｏ型　身長　１７６ｃｍ

２４列車　暴走　富山ライトレール（後書き）

こういうのってないことは承知です。
作者が狂っててすみません。

なお、今回で文化祭のエピソードは終了です。これから1回別なレをはさんで夏の大イベント臨地研修の話になっていきます。現実と大きく違っても読んでくれる人には感謝感激です。

まずは高1の終了まで根性で書き上げるといった以上自分の精神力をもって根性で完成させていきたいと思います。

25列車　難読質問

6月14日。文化祭の片づけ。モジュールを随時量に運んで、車両のほうは図書館準備室に入れた。その片付けが終了すると、2階昇降口のちょうど下にあるピロティに集合するよう言われた。

「よーし、諸君。これからみんなを広報課と総務課と模型課に分けるからちょっと待っててね。」

前にナヨロン先輩が言っていた班決めである。だが、形式上その形をとるだけで、活動上関係ないらしい。

「えーと、まず醒ヶ井は総務課でいいだろ。後は、・・・。」

「少なくとも永島は模型課だな。」

「佐久間はなんかメカニック関係得意そうだし、広報課でいいだろ。」

「残りのミッシィとハルナンはどうするんだよ。」

「残りってそれだけじゃないだろ。中学生だってそうだ。ああ、あと諫早も模型課だったな。」

「なんか有能なやつが引き抜かれてるような気がするけど。」

「気のせいだって。」

「じゃあ、箕島は総務課で、は広報課・・・。」

「木ノ本広報課っておかしいだろ。木ノ本もどっちかって言ったら模型課じゃないのか。」

「おう、ナヨロン。さっきから人引き抜きすぎ。」

「分かったよ。じゃあ、あとはそっちで決めて。もう引き抜く当てもないから。」

「じゃあ、模型課はもう人回さなくていいね。」

「ちょっと待て。せめて3人。3人は模型課来てほしいんだけど。」

「引き抜く当てあるじゃないか。」

「それじゃあ、ハルナンも模型課で、アサタンが総務課で、ソラタンが広報課でいいね。」

「ああ、それでいいよ。」
会議が終わったらしくサヤ先輩がこちらを向いた。するとそれぞれにどこどこに行けと指示を出し完成まで持って行った。
「よし。そっちの一番左のやつが総務課。真ん中が模型課。そして、いちばん右が広報課だ。とりあえず何班にいるっていうのは覚えといてちょ。」
そういうことだそうだ。
「で、これからの部活のために全員に書いてほしいものがあるんだけど・・・。」
サヤ先輩はさっきから持っていた紙を全員に配った。その紙にはこんなことが書いてあった。例えば「ロングシートとクロスシートどちらが好きか」、「ここのＪＲに一言」など。他にも「川内」の読み方、４８という数字でピンと来るものなど５０個の質問が書かれていた。
「この質問に回答してくれ。出来たら、俺に渡して。これを俺たちの部員紹介のページにアップするから。」
「はーい。」
渡された問題に取り組む。内容は様々。最初は初歩的物から始まり、あとになればなるほど少しずつ内容が難しくなっていっている感じもする。
「なぁ、永島。これなんて読むかわかるか。」
木ノ本が聞いてきた。シャープペンがさしている文字は「川内」。
「あっ、それ東北の都市と同じ読み方するよ。」
佐久間が口を挟んできた。
「確かにそうだな。」
「東北の都市。何、盛岡とか仙台とか。」
「今思いっきり答え言ったよ。」
「えっ、ウソ。・・・。」
「答えは簡単なほうだな。」
「簡単なほうかぁ・・・。なるほど。そう読むのね。」

思いついたらしく、その答えを書いた。書き終わると、
「なんかこういうのって紛らわしいよね。ここら辺で言ったら新居町を「しんきょちょう」って読んじゃうってところかなぁ。」
「あれ駅の読み方「あらいちょう」じゃなくて新居町だからな。さらに紛らわしいぞ。」
「あれなんてまだまだ優しいほうだろうな。難読駅なんて日本中探せばいくらでも出てくる。同じ九州新幹線の難読駅といえば「出る水」って書いて出水とかっていうのもあるね。他に僕が知ってるのは・・・これかなぁ。」
紙の白紙を使って「長万部」と書いた。
「なにこれ。「ちょうまんべ」とかって読むのか。」
（この読み方って絶対坂口さん知ってるよねぇ。）
「いや。これふつうに読むってこと考えちゃいけない。難読だから。佐久間分かる。」
「え。これの読み方なんてわかるわけねぇよ。」
「醒ヶ井。箕島。これの読み方わかる。」
「知るかっ。」
「えーと、これって何「まんべ」だったっけ・・・。ダメだ。「長」の読み方がわかんねぇ。」
醒ヶ井、箕島の順に回答を得た。
「何やってんだ。」
後ろから善知鳥先輩が覗き込んでいた。
「これの読み方わかるかなぁってやってたんです。」
善知鳥先輩は「長万部」の文字を見るとすかさずナヨロン先輩を呼んだ。
「ナヨロン。これなんて読むかわかる。」
ナヨロン先輩にはすぐに分かってしまったみたいで鼻で笑っていた。
「簡単じゃん。「長万部」だよ。「カシオペア」とかの停車駅だよ。」
「ナヨロンそういう方面からのこういうのは得意だからなぁ。」

「よし、俺からも問題作ってやる。これなんて読むかわかるか。」
書いた漢字は2文字で「青木」。
「えっ、ナヨロン先輩。これバカにしてるんですか。」
「全然。これぞ簡単すぎて難しいっていう問題だぜ。阪神にはこう書いてすっごく意外な読み方させてる。まず、この答えは封じでおくか。全員これ「あおき」って読むって思ってるだろうが、これは「あおき」って読まない。」
「はっ。これ「あおき」意外に読み方あるのか。」
「バカ。善知鳥は黙ってろ。」
読者の皆様にはこれの答えを教えておこう。もうすでに出ています。分かっている人はもう言うまでもないでしょう。
「さぁ、どうだ。」
「ダメです。「あおき」意外思いつきません。」
箕島がギブアップするのを待っていたかのように全員ギブアップ。
「読み方は簡単なんだけどなぁ。」
そういうとナヨロン先輩は青の上に大の字を書いた。
「こいつは「おおぎ」って読むんだぜ。他にもこういうのはどうだ。」
今度は「杉津」と書いた。
「これは「すぎづ」。」
「違うんですよねぇ。これってもっと別な読み方でしょ。」
「ああ。」
「僕。これは分かります。「すいづ」ですよね。」
この問題には箕島が回答した。
「ああ、これ答えられちゃうと持ちネタがないなぁ。俺が知ってる難読駅って言ったらこれくらいかなぁ。」
「ナヨロン。それ嘘だよねぇ。」
「箕島は歴史関連が得意そうだ。それだったら「水城」とか出してもすぐ分かっちまうだろ。」
「・・・。」

「いや。水城はふつうか。それだったら原田のほうがわかりづらいかなぁ。」
「なことどっちでもいいわ。ていうより、みんな書けた。」
「あ、はい。お願いします。」
「みんな早っ。」
どうやら終わってなかったのは醒ヶ井だけだったみたいである。
それが全員書き終わったところでアド先生からまた新たな発表があった。
「えーと、今日から部長が北斎院君から鷹倉君に変わります。部長としての仕事はまだ引き継がないようですけど、新しい部長ですので、みなさん歓迎しましょう。」
みんなは拍手でそれに応対した。
「よっ。ハクタカ。よいよでしゃばって教えれるとでも思ってるのか。」
「思ってませんよ。むしろでしゃばって教えたいのは善知鳥先輩じゃないんですか。」
「って違うか。でしゃばって教えるのはアヤノンか。」
「えっ、何であたしになるんですか。」
「だってしそうじゃん。」
「絢乃は絶対にそういうことしません。」
「なんでハクタカがかばうんだよ。さすがにアヤノンす・・・。」
「それ以上何も言わないでください。」
「えっ、どうして。」
「いいから、何も言わないでください。」
数日後。岸川高校鉄道研究部のホームページを開いてみた。
（この「N-EX」。ナガシィだよなぁ。これも本当に好きだよねぇ。）
そのページには結構面白いことが書いてあった。

２５列車　難読質問（後書き）

全体的に文章が説明文であることを謝罪します。
作品上そうなってしまうというところがあるのでご了承ください。

関係のない話ですが、今自分が作っている原作は高１の１１月頃の内容です。まだまだ原作も発表分も先が長いなぁ・・・。
そんなのでも読んでくれる人には感謝。
読者のために根性で頑張ります。
・・・後書きがほとんど同じ内容ですみません。

26列車　まとまらない（前書き）

現実と大きく違う個所が多々あります。すみません。

26列車　まとまらない

正式な部員と認められた。そのような感覚に浸っているのもわずかの間。これから僕たちは本当にイベントに体を傾けていく時期になった。その鉄道研究部一大イベントというのは毎年恒例臨地研修である。

「サヤ、今年どこ行こうか。」

善知鳥先輩がサヤ先輩にどこに行こうかと聞いた。

「そうだなぁ・・・。去年は東北だったし、おととしは四国だったしなぁ。アヤケン、ナヨロンはどこがいい。」

「九州でよくない・・・。」

ナヨロン先輩が提案する。

「おっ、ナヨロンさえてる。」

「うっさい。」

「九州かぁ・・・。うん、いいかも。」

「よーし、みんなで九州に行こうー。」

「じゃあ、僕からそうアド先に言っとくよ。」

「サヤお願いね。」

「で、どうする。九州って言ってもどこに行くんだよ。」

「行くって・・・、博多か小倉あたりだよなぁ。」

「エー。」

「エーって・・・。病むこと確定なんだから文句言わない。」

「だって精神的に病ませるのはどうなんだよ。ハクタカ達はともかく1年生は耐えられないだろ。まぁあたしも耐えられないけど・・・。」

「そんなこと言ってたらどこにも行けないだろ。それにその心配はないよ。」

「どうして。」

「木ノ本は撮り鉄だからそんなこと考えなくていいだろ。永島は電

車が好きだから入ったんだから問題ない。他は・・・、どうにでもなるからいいや。」

「ナヨロンってそういうことよく一発で見抜けるな。」

「見抜いてないよ。勘なんだから。」

「そんなことはどうでもいいよ。」

「じゃあ、博多行くってアド先に言っていいな。」

「まだ、言ってなかったの。」

「善知鳥が嫌だって言うからだろ。」

「はいはい、分かったから早く電話してよ。」

今日の定例会はこれで終わった。

（また遠いところまで行こうとするなぁ。）

そう思っているのはアド先生だ。この頃は遠いところにしか行っていない。

「まあ、できるだけ抑えましょう。」

独り言を言った。抑えるというのは旅費。これができれば学校への申請は簡単である。

6月17日。今日は放課後に部活がある。今日からは夏の臨地研修についての話し合いだ。

「今年どこ行くんだろうな。」

僕から見える人全員にこの問いをしてみた。

「できれば東北がいいな。」

「四国かな。」

「やっぱ北海道だろ。」

「どこでもいいよ。」

木ノ本、箕島、佐久間、醒ヶ井の順に回答があった。言ってはないが僕もできれば東北がいい。

「ああ、どこになるんだか気になるなぁ。」

すると教室のドアが開いた。全員の顔がそっちを向く。

「先生じゃないんだから、みんなでこっち向くなよ。」

見ると楠先輩だった。もちろん顔はあきれていた。

「絢乃先輩。去年は東北のどこに行ったんですか。」
荷物を置こうとしている楠先輩に木ノ本が聞いた。
「去年は確か・・・。」
「「ばんえつ物語号」に乗ってきたよ。」
今度は楠先輩の後ろで声がする。声の主はハクタカ先輩だった。
「ハクタカ先輩達って結構いい所行ってますよね。」
「そうかもな。」
ハクタカ先輩はそう言って去年の旅行の説明を始めた。
「去年は東京まで各駅で出て、夜新宿から出る「ムーンライトえちご」に乗って新潟まで行って、その後「ばんえつ」に乗って、戻ってきたんだよなぁ。」
「それより「ばんえつ物語号」ってどんな感じでした。」
木ノ本が興味ありげに聞く。
「それは・・・。」
「ダメだよ、そんなこと聞いても。だってハクタカ「ばんえつ物語号」の中で爆睡してたもん。」
「ええ、なんで爆睡してたんですか。」
「「ムーンライトえちご」の中で徹夜してたんだってば・・・。」
（よくやるなぁ。）
「それでも、最初くらいは覚えてますよねぇ。」
「それもないね。座った瞬間に寝たから。」
（何やってるんだか・・・。）
この話が終わるころには3年生も中学生も集合していた。全員が集合するとすぐに本題に入った。
「今年はみんなで博多の病院に行くぞー。」
「オー。」
テンションの上がる先輩達。なんで博多にまでいって病院に行かなければならないのか。
「あのなぁ、普通に言えって。」
「そうそう、いくら1年生が鉄研色に染まったからって伝わらない

だろ。」
ナヨロン先輩とアヤケン先輩がツッコンでいたが、何か通じてきた。
「それって、今年の臨地研修は博多に行くってことですよねぇ。」
思ったことお口にしてみた。
「おお、さすがナガシィ。」
何となく分かりたくなかった。でも、九州に行けるのはうれしい。
「よーし。んじゃあ工程言うぞー。」
またサヤ先輩たち恒例のあれが後にはまっているのだろうか。
「まずハカグチに６時４５分集合。７時０６分に出るふつうで豊橋まで行って、豊橋から７時４９分発の特快米原行きに乗って米原で乗り換え。米原から９時５０分発の新快速で大阪まで行って、大阪で昼休憩。昼ご飯食べたくないやつは食べなくていいぞ。それで１２時００分発の新快速播州赤穂行きに乗って途中の相生で降りる。相生からふつうに乗って途中の糸崎で乗り換え。いと先から「シティラナ」とかっていう・・・。」
「略すなよ。」
「いいじゃん「シティラナ」で。そいつに乗って広島で降りたら１７時５５分発の「レルスタ」で博多に１９時０６分だ。」
「だから略すなって。」
「もうどうでもいいわい。次行くぞ。２日目は自由研修で、全員で乗るやつはオリオンとかっていうバスの２１時４０分発のやつ。こいつに乗って大阪が多分７時３０分。三日目は大阪に着いたら自由で全員で押しかけるのは１５時３０分発の新快速。これで米原に着いたら米原で乗り換え１６時５９分発の特快に乗って豊橋に１８時５９分。そのあとはふつうであーって浜松に戻ってくるっていう工程だぜ。」
「そんなんで通じだのかよ。」
「多分通じた。問題ない。」
「多分って・・・。おい。」
今ここにその工程を聞かされた。

「そんでもって、2日目と3日目は自由行動があるから、その班を決めてくれ。」

何とも展開の早い部活である。

その後、善知鳥先輩の言っていた自由行動の班を決めた。班は北斎院、善知鳥班。名寄、箕島班。綾瀬、醒ヶ井班。鷹倉、楠班。佐久間、諫早班。そして、永島、木ノ本、空河、朝風班となった。この班で行動し、いろんなところに行ってくる。班が決まると次はその中身を立てる。

「どこ行こうか。」

「そうだな。九州行けるんだし、いろんな所行きたいよな。」

「いろんなところって言ったって駅だろ。俺駅以外そんなに行きたいって思わないし。」

「それは私も同じ。城廻とかは箕島が喜びそうだけど、私たちはそういうがらじゃないしね。」

「向こう行くんだったら九州特急とか見れるか。」

「納得だ。お前好きだもんな。ほれてるものが違うと思うけど。」

「それ言ったら空河だって同じだろ。キハにほれてるじゃん。」

「・・・。」

「ほれてる、ほれてないっていう話じゃないだろ。今はどこに行くかだろ。全員どこに行きたいんだよ。」

「正直博多から離れたくないっていうのが本音ですね。」

「博多だとディーゼルが見れない。熊本とかそっちに言って「ゆふいんの森」とか「くまがわ」とか見たいなぁ。」

「私は「かもめ」と「つばめ」と「有明」と「ハウステンボス」と「みどり」の写真が撮れればいいなぁ。」

回答は朝風、空河、木ノ本の順。

「そんな都合のいいプランなんてあるかよ。」

「そうだけど。つうか、まだ永島がどうしたいかって聞いてないよ。」

「俺・・・。俺は鳥栖とかに行って寝台特急とか向こうに行く特急撮ってたいなぁ。」
「全員なんか写真撮りたいっていうのは変わらないんだな。」
「そうだな。」
「でも、具体的にどこに行きたいかっていうのは出てませんよねぇ。」
「それはもう出てるも同然じゃないのか。朝風は本音を言うと博多から離れたくない。空河はディーゼルカーが撮れればどこに行こうが関係ない。木ノ本は特急。俺は寝台特急と特急。それで、朝風が博多から離れたくないっていう理由は寝台特急の「富士」と「彗星」と「あさかぜ」、「出雲」、「瀬戸」意外完全網羅できるからだろ。」
「永島さんよく分かってます。」
あたりを見回して時刻表を持っている人を探す。
「醒ヶ井。時刻表貸して。」
「前にあるだろ。それでいいじゃん。」
「お前のほうが近いんだからお前がそっち使えばいいじゃん。」
強引にも醒ヶ井が使っている時刻表をもらって最初のほうにあるブルーのページをめくった。これの前のほうには新幹線。真ん中に新幹線と特急の接続。後ろのほうには特急のダイヤ。一番後ろには寝台特急の時刻が記載されている。僕が開いたのはブルーのページの一番後ろ。つまり、寝台特急の時刻表が記載されているページだ。白の青の境目のページを開くと載っているのは「カシオペア」「北斗星」「はくつる」の時刻。次のページをめくると左のページから「出雲」「瀬戸」「北陸」。右のページに「あけぼの」「ゆうづる」「日本海」「トワイライトエクスプレス」の時刻が乗っている。さらにページをめくると見開きに大きな時刻表が現れる。左ページは下り。右ページは上りの時刻。載っているのは「富士」「はやぶさ」「さくら」「みずほ」「あさかぜ」「あかつき」「彗星」「なは」。
「これで分かるな。」

「今思ったけど、寝台特急（ブルトレ）って結構いっぱい走ってるんだな。」
「今でも定期列車が１８往復３６本。不定期が2往復４本設定されてますからね。」
「計４０本か。多いなぁ。」
「そんなでもありませんよ。過去には「明星（みょうじょう）」と「ゆうづる」がそれぞれ7往復１４本設定されていた時代がありますから。」
「えっ。それだけで１４往復２８本。多すぎじゃない。」
「確かに多すぎですね。そのあと「明星（みょうじょう）」は４往復８本。「ゆうづる」は5往復１０本に整理されてますから。」
「それでも多いだろ。」
「そんな話今はどうでもいいだろ。それよりこっち。いつか仕上げなきゃいけないんだから。」
「そうだった。ごめん。」
「別にいいよ。木ノ本（きのもと）の場合そういうこと話してたほうが楽しいだろ。久しぶりなんだし。盛り上がればいいじゃん。」
「盛り上がるのはこれが終わった後。そう決めました。さっさと終わらせちゃお。」
「だな。」
今度は見れる寝台特急（しんだいとっきゅう）の整理だ。実際に行動ができるのは7時３０分から8時以降。その時に博多に来る寝台特急（しんだいとっきゅう）は物の見事にない。
「あっ。寝台特急（ブルトレ）のそんなに空気を読んではくれないみたいだな。」
「寝台特急（ブルトレ）のＫＹ（ケーワイ）。」
「まぁ、ＫＹ（ケーワイ）って言っても時刻表がこの通りですから。」
「そうですよ。どこかに行ってからまたとれるかもしれないじゃないですか。」
「そうだな。」
僕はしばらくその時刻表を見つめ続けていた。これは・・・。
「これって3日目にまわしちゃえばいいんじゃないか。」
「どういうことだよ。」
「3日目にまわすと東京発着（とうきょうはっちゃく）の寝台特急（ブルトレ）は見れないにしても大阪発（おおさか）

着の寝台特急（ブルトレ）は見れるっていうこと。」
「ああ、なるほど。」
「でもそれって大半を捨てるってことですよねぇ。」
「だってそうしなきゃダメだろ。いくらなんでも5時31分の「なは」はまず撮れない。」
「撮れないこともないんじゃないか。早起きすればいい話だし。」
「それはそうだけどね。」
「木ノ本（きのもと）さん。電車に12時間乗った後にまたホームに行ける自信あるんですか。」
「自信はないけど。ふつうに考えてできるってことじゃん。」
「やめとけって。木ノ本（きのもと）まだ体が慣れてないだろ。歓迎旅行の時も20（8）時からホームにいてずっと寝てなかったんだろ。電車の中で爆睡だったじゃねぇか。」
「そうでないところもあった。これからずっとそれしてけば・・・。」
「いつか体壊すぞ。やめろ。」
「・・・。分かったよ。今回はやんないことにする。」
「で、話し戻すけど、「さくら」や「はやぶさ」や「みずほ」まで待ってたら広い範囲行動できない。」
「「さくら」と「はやぶさ」と「みずほ」が博多（はかた）に来るのって何時だよ。」
「全部9時台。そん中じゃ「さくら」が一番早くて、「はやぶさ」が一番遅い。」
「でも9時ならまだいろんなところいけるよねぇ。」
「・・・。」
「確かにそうですけど、もうちょっと現実ってものを考えたほうがいいんじゃないんですか。大体「さくら」、「はやぶさ」、「みずほ」が時間通りに来るっていう保証はないじゃないですか。」
「それは安全神話の日本が何んとか・・・。」
「何ともならない時だってあるってこと。事故と天災にはどこをど

うあがいても勝てない。」
「そうですよ。もし寝台特急が事故を起こさなくても貨物が事故を起こしたら同じことですよ。」
「そう。だから、今回は東京発着の寝台特急は切り捨てていいと思う。ここでも見れるんだから。だったら見れない大阪発着のやつを見たほうがいいだろ。」
「・・・。」
「それもそうですね。普段見れるやつ見たって機関車が変わってるだけだし。」
「でも、機関車変わってるんだったらそっちも見たくない。こっちじゃ見れないんだしさぁ。」
「確かに見れないけど・・・。」
全員黙り込んだ。ここ浜松で見れる機関車はＥＦ６６をはじめとする直流専用の電気機関車。九州で見れるのはＥＤ７６などの交流電気機関車。ＥＦ６６やＥＦ６５には青を基調とした塗装。ＥＤ７６は赤をまとっている。それだけでも違うのだが・・・。
「ダメだ。好きなもの同士集まりすぎてるからこういうときまとまんねぇ。」
結局今日は何も進まなかった。

26列車　まとまらない（後書き）

今回から臨地研修シリーズの話です。
ストーリー中に出てくるみたいに寝台特急がいっぱい走ってたらなぁ。新幹線より乗ってて飽きません。

27列車　立案（前書き）

残酷な発言がございます。

27列車　立案

翌日。

「今日も2日目、3日目の打ち合わせかぁ。なぁ、木ノ本。なんか考えてきた。」

話題を木ノ本に振ってみた。

「考えてみたんだけどさぁ、昨日鳥栖に行くっていう話に最後なってたじゃん。だったら鳥栖まで行ってそこでしゃさつでもすればいいと思う。」

「しゃさつ。」

木ノ本の言葉にあった「しゃさつ」という言葉が気になった。まさか・・・。

「おい。まさか人殺すなんてしないよなぁ。」

「するわけないじゃん。永島ならすぐに通じると思ったけど、通じなかったかぁ。」

「なんだよその言い方。まるで俺が鉄道バカみたいに聞こえるじゃないか。」

「実質そうじゃん。」

「まぁ、否定しないけど。で、何それ。」

「車両撮影。略して車撮。」

「・・・。紛らわしい略語作ったなぁ。車両撮影。略して車撮かぁ。」

「そう。すごいだろ。」

「どこもすごくないけどな。」

「それをスパッというなよ。」

「そんな話はどうでもいい。で、どんなの考えてきたの。俺はその工程知りたい。」

「まず、8時12分の快速で鳥栖まで行く。後は車撮大会。戻ってくる列車は鳥栖を15時23分に発車する快速。そのあと16時0

9分発の博多南線に乗って博多南まで行って総合車両所を見てみる。
それで帰りは18時04分の列車っていう感じなんだけど。」
「・・・。」
「なんか反応してよ。」
「別に悪くないんじゃない。それで通してみる。」
「通すのはいいけど、まずは朝風と空河の反応見てからだろ。」
「多分反対しないと思うけど。」
「いや、空河が反対しそうで怖いんだよ。空河ってディーゼル好きだろ。私の計画の中ディーゼル出てこないから・・・。」
「鳥栖で「ゆふいんの森」も見れる。それがキハ71だかキハ72だかは知らないけどな。」
「なんだ。なら問題ないじゃん。」
「だから、きっと大丈夫だよ。朝風が見たい寝台特急も見れるしな。」
このことを早速空河たちに振ってみた。
「なんか反対とか。こんなところ行くなんてゴミじゃんとかっていうところない。」
「別にないです。「ゆふいん」見られるだけでも十分ですから。」
「ないです。木ノ本さんありがとうございます。」
「いやあ。それほどでも。」
「浮かれてんな。通らなきゃこれボツ。また1から作り直さなきゃいけないんだから。」
計画を手帳サイズのノートに書いてアド先生に提出してみた。すると・・・、
「なんだよこれ。鳥栖まで行って写真撮って戻ってくるだけかよ。」
ダメだししたのはアド先生ではなくサヤ先輩だった。
「えっ、ダメですか。」
木ノ本が聞き返す。
「ダメってわけじゃないんだけど、行動が小さいっていうのかなぁ。俺たちは門司港のレトロうんたらとかっていうところまで行こうと

思ってるんだよ。」
「永島。門司港ってどこ。」
「えっ。門司港って・・・、」
鉄道知識が０に等しい木ノ本にはどういう説明をしたらよいのか。
ちょっと考えて、
「山陽新幹線の小倉って知ってる。」
「小倉。・・・。小倉。」
どうもわからないみたいである。他に通じる言い方は・・・、
「九州渡ってすぐ。」
「・・・。イメージわかないけど、何となくわかった。それの近くなのか。」
「うん。」
「そっちの話は済んだか。」
するとサヤ先輩はさっきの説明を続けた。・・・。いや、違う。
「俺たちそこに行くまで「クソニック」に乗ることになった。」
「「クソニック」って・・・。サヤ先輩その呼び方やめましょう。」
「いいだろ。別に。「ハイパーに問題起こす」やつらに乗るよりはましだ。」
これには首をかしげた。僕が知っている中で「ハイパー」がつく電車や車両が見つからない。それがわからないようだと察したようで、ナヨロン先輩が耳打ちしてくれた。
「７８３系。あれの愛称「ハイパーサルーン」。」
（なるほど・・・。）
「サヤ先輩。話が脱線してます。」
「えっ。あっ。話それてた。ごめんごめん。」
「ところで、この計画は変えたほうがいいってことですか。」
木ノ本はそう聞いていたが、僕にはもうこれでは通る気はしなかった。
「もういいよ。また計画練ろうぜ。」
「なっ、永島。」

木ノ本は僕を呼び止めようとした。しかし、さっさと席に戻った僕を見ると僕たちのほうへもどってきた。

「聞こえてたと思うけど、この計画じゃあ通らなかった。なんか他にいい案ある。って言ってもすぐには出ないよなぁ。」

「・・・。」

「永島。」

考え込んでいるさなか誰かに呼ばれた。僕を読んだ人は佐久間だった。振り向いてみれば僕のすぐ後ろにいる。

「何。」

「お前らどこに行くってなってる。」

「鳥栖に行こうっていう話になってたけど、どうも通りそうになかったから鳥栖に行くことはやめた。お前らはどこ行くの。」

「「つばめ」に乗って熊本まで行ってくる。」

「「つばめ」っ。」

班全員の声がそろった。「つばめ」は博多と西鹿児島を結ぶ特急の名前。使われている車両は787系という車両で全体がシルバーに塗装されている。外見は何となくロボットを連想させそうな顔をしている。

「あ・・・あれに乗るのか。」

「ああ、それもここだけの話・・・で乗る。」

「おい。それはやっちゃダメだろ。」

「考えてることが幼稚というかなんというか。見つかったらどうするんのよ。」

「え。見つからなければどうということはない。」

「・・・。」

(いや、そういう問題じゃなくて・・・。)

なお、今ここで話されていたことは絶対に真似しないでください。犯罪です。

「熊本って言ってたなぁ。熊本行って何するんだよ。」

「あすこって路面電車走ってるじゃん。それにでも乗ってこようか

なぁと思って。」
（熊本（くまもと）・・・。）
「へぇ。そうなんだ。」
佐久間（さくま）とも会話はここでお開き。自分たちの計画に戻ったが、何も進行しないのは変わりない。なら・・・。
「先に3日目の計画作っちまおうぜ。」
「そうだな。2日目迷ってったってしょうがないもんな。」
「じゃあ、3日目どうするか・・・。」
全員頭を回転される。中に浮かんでくるのは昨日言った「あかつき」「彗星（すいせい）」「なは」をこの日に見る。
「まず、寝台特急（ブルトレ）を見るのは必須だろ。」
「そうだな・・・。ん・・・。」
一つ気がかりなことが浮かんだ。もしこれが本当だったら・・・。
「バスが大阪（おおさか）に着くのって何時だっけ。」
「ゴミバスが大阪（おおさか）に着くのは7時30分ですよ。」
「・・・。」
「どうかしたのか。」
「まずい。俺たち寝台特急（ブルトレ）にも見放されたかも。このままいったら「あかつき」と「彗星（すいせい）」は見れない。」
「え。行ってる意味がちょっとよく分かんないんだけど。」
「おいおい。これくらい理解しようぜ。」
「木ノ本（きのもと）さんにもわかるように説明します。まず「彗星（すいせい）」の大阪（おおさか）到着が7時16分。「あかつき」の大阪（おおさか）到着が7時24分。」
「あ。なるほど。そういうことか。・・・。って。えー。」
「死ねばいいですね。そのバス。」
「ほんとだよ。でも、バスのおかげで間に合うかもしれない。」
「なんで。」
「よく考えてみてくださいよ。鉄道は1分1秒でも遅れたらいけない。その代りにバスはそれに縛られない。どうしても高速道路の道路状況に左右されるからです。つまり、渋滞が続いていれば7時3

0分以降の到着になるということ。もし道路がスカスカですいすい通れる状態なら到着は7時30分より早くなる。」
「つまり、朝風（あさかぜ）が言いたいのは道路がスカスカの状態であることを祈っとけってこと。」
「まぁ、そんな感じです。僕が思うにバスはゴミですから。」
バス好きの人ごめんなさい。
「よし。もし渋滞はまったらいらない車ロケランで破壊するか。」
まず木ノ本（きのもと）がそれを言った。
「ダメですよ。ロケランで破壊したら残骸が残るじゃないですか。」
「何。残骸を残さないで車を吹き飛ばす方法でもあるのか。」
「核爆弾に決まってるじゃないですか。いらない車はすべて核爆弾で破壊する。」
「それ、私たちまで被ばくするからやめような。」
「分かった。残骸が残らなきゃいいんだろ。」
「うん。まぁ、そうだな。って永島（ながしま）も核爆弾で破壊するとかっていうこと思いついたのか。」
「いや。核爆弾だとどうしても俺たちが被ばくするじゃん。バスにクレーンをつけていらない車を放り投げる。今は車社会車社会とかって言ってるけど、これからは鉄道社会になるんだぜ。地球にたまりすぎた車を一掃するにはもってこいのイベントじゃないか。」
「それ余計時間かかります。世界の車一掃するなら、全部の車の床下にプラスチック爆弾かTNT（ティーエヌティー）を下にくっつけて、ある段階で爆破する。こうすればエンジン死ぬ。燃料タンク死ぬ。基盤死ぬの3弾攻撃が可能になる。」
車好きの人ごめんなさい。
「それやったら全員鉄道利用に切り替わるな。」
「鉄道利用に切り替わってもどうせ新幹線（しんかんせん）利用でしょ。」
「なんか不満なのか。朝風（あさかぜ）。」
「不満に決まってます。そんなことしてもどうせ早い乗り物にしか流れないんですから。もっと旅を楽しむとかっていうこと考えない

んですかねぇ。だから現代人は視野が狭いんですよ。この年で言うのもなんですけど、僕は昔を見直す必要があると思いますね。」

（この年って。まだこいつ12だぞ。言うことはすでにおっさん化してる。）

「さっき視野狭いって言いましたけど、僕本当に現代人は視野狭いと思うんですよ。なんでそんなに早くいきたいって思うことだってありますから。」

「早くいって何が楽しいってことだな。」

「そうです。今は楽しいなんてどうでもいいっていう人がたくさんいるから新幹線がもうかって、それに並行してひっそりと生きている路線がどんどんさびしくなってく。」

「でも、その対策は見つからないってことだよなぁ。」

「そうなんですよねぇ。どこどうやったらまがった心が折れるのか。その答えが見つからない。」

「そんな話どうでもいい。さっさと3日目上げちまおうぜ。」

そのあと話し合って3日目の計画を立てた。結果は車両撮影の王道となった。

部活終了後。

（はぁ。今日はすっかり遅くなっちゃったなぁ。結局2日目の私の案はボツ。他にどんな計画立てろっていうのよ。はぁ。）

心の中で溜息したかしないかの時。誰かにぶつかった。思いっきり頭と頭が衝突した。

「痛っ。」

思わず声が出る。おでこをこすりながら、

「ごめんなさ・・・。」

目を開けてみると、どこかで見たことのある顔だった。

「坂口さん。」

相手も目を開けると、

「木ノ本さん。」

お互いの名前を呼びあった。

２７列車　立案（後書き）

今回は本当に謝罪するレだと思います。
と言っておきながら、主人公たちがあんなことを言っているレのほうがなんか楽しい気がします。

話は変わりますが、このレの前までの文字数を原稿用紙の４００字で割ってみました。その結果原稿用紙に空白なく文字を埋めても３３８枚相当になることが分かりました。いつの間に自分ってこんなに書いたんだろう・・・。

28列車　進路の密勅

頭をぶつけた彼女は坂口だった。先日行われた文化祭でもう顔は知っているが、こうして会うのは初めてだ。

「ごめんね。ちゃんと前見て歩いてなかったから。」

坂口がまず謝った。

「いや。分かるよ。ここに来たら絶対あっち向いて歩くのがふつうだからなぁ。」

ここは遠鉄百貨店と浜松駅前のＭＡＹ　ＯＮＥの間。遠鉄百貨店側から見て左手側に遠鉄バス浜松駅前。右手側には浜松駅の１番線が顔をのぞかせている。坂口も木ノ本もここを通る時は必ず浜松駅側を見たまま歩き、何か列車が来るというアナウンスが聞こえたら足を止めてくるまで待つ。それが４月からの日課になったのだ。

「あっ、やっぱり木ノ本さんもやるんだ。」

「ここを通るときにタダで通るなんてことできるかよ。」

するとホームからアナウンスが聞こえてきた。しばらくそのアナウンスに耳を傾ける。その声はこういっている。

「間もなく、１番線を、貨物列車が、通過します。黄色い線の内側までお下がりください。」

「貨物かぁ。どうせＥＦ２１０（桃太郎）だろうなぁ。」

「そうとも限らないんじゃない。ＥＦ６６とかＥＦ２００が貨物列車引くことだってあるし。それにＥＦ６５だってゼロじゃないよね。」

（ほんと。前会った時もそうだったけど、坂口さん進路間違えたんじゃないのか。このレベルだったらふつうに岸川に来ていいレベル。今鉄研やっても十分通用する。）

「じゃあ訂正。高い確率でＥＦ２１０（桃太郎）だ。」

１・２分その場で貨物列車の通過を待つ。すると豊橋側から甲高いホイッスルの音が聞こえ、前面が青で、パンタグラフの形がＶ字形

になっている機関車を先頭に貨物列車が通過していった。
「ＥＦ２１０（桃太郎）。」
「違うよ。ＥＦ２００だよ。今のは。パンタグラフがＶ字形になってたでしょ。ＥＦ２１０のシングルパンタはああいう風になってないよ。」
（パンタグラフだけで機関車の違いが分かるってどういう人・・・。）
いつか自分もそうなるんだと薄々感じながら、いま隣にいる同じ女子鉄を見つめる。
「どうかした。私の顔に何かついてる。」
「いや。そんなことないけど・・・。ていうか、どっか座って話さない。ずっと立ってるってつらいでしょ。」
「そうだね。どこ行こうか。」
「そこら辺のベンチでいいだろ。」
これは坂口のほうは嫌だったらしい。
「だってお腹すいたもん。それとも、家にごちそうが待ってるの。」
「それない。ちょっと待って家に電話する。」
坂口に断わって家に電話し、夕食をどっかで食べていくという確約を取り付ける。その後坂口と一緒に近くのマックスに入った。
テーブルに座ると対岸に座ろうとしている坂口の姿が目に入る。
そして、文化祭で言った言葉が再生された。
（私・・・。将来は運転手になりたいと思ってるんだ・・・。）
その時彼女はこういった。永島も将来は運転手になることを見据えているのだろう。そして彼女もそうなりたいと思っている。こういう状況なら同じ岸川に通学するのがふつうのはず。なのに、なぜ彼女は岸川ではなく宗谷に通学しているのか。そのことがどうしても気になった。
「なぁ、何で永島と同じ岸川じゃなくて、宗谷に通ってるんだ。」
いつの間にかその口が勝手に開いていた。
「ナガシィがさ、私の夢をかなえるためには宗谷に行くのが一番だ

って言われたから。」
（理由はそれだけ・・・。）
「なんで。坂口さんが成りたいのは電車の運転手でしょ。今それに一番近いことができるのは岸川じゃない。なのに。なんで宗谷なんだよ。」
「・・・。」
坂口からの回答はなかった。また言葉をつづけようとすると、
「あのさぁ。木ノ本さんならいえることかもしれないけど、将来自分が電車の運転手になりたいって言える。」
「・・・。そ・・・それは。」
ほんの少し前の自分が思い浮かぶ。少なくともその時の自分にはこんなことは言えなかった。
「私には・・・ナガシィには口が裂けても言えるようなことじゃない。ただ・・・。ストレートに言えばいいだけなんだけど、どうしてもこれはなんか言っちゃいけないような感じがする。」
「なんでだよ。」
（永島が見てたのは坂口さんの表面だけなんだ。だったら早くその気持ちに気付かせてあげなきゃ。永島は・・・私が入部を決めたときこういった。何に趣味持とうがそんなの関係ない。なら、何に成ろうがそんなの男女関係ない。そうもとれる。）
「あんたの彼氏はこういってたぞ。何に趣味持とうがそんなの男女関係ないって。同じことだろ。何に成ろうがそんなの関係ない。何ためらってるわけ。本当になりたいって思ってることなら話すべきだろ。」
「・・・。」
また坂口からの回答はない。しばらく黙り続けて、
「本当のことだから、いつか話さなきゃいけないとは思ってる。でも・・・、ナガシィにはずっと嘘ついてきたことになる。普段そう見えなくてもナガシィ嘘とか嫌いなの。ずっとナガシィをだまし続けた、私を簡単に認めてくれると思う。」

（あいつならそんなこと気にしないと思うのに。やっぱり古い付き合いだから。それならこういう状況でどういう答えが返ってくるかはわかるはず・・・。なるほど。返ってくる答えが怖いから言えないんだ。）

「怖いんだな。」

「うん・・・。」

坂口（さかぐち）の声は一段と小さくなった。

「分かるよ。」

同じような境遇にずっと立たされていた自分を語りたくなる。

「私もずっとそう思ってた。私は成っていいのかって。周りの大人はさぁ、みんなその考えに拍車をかける感じでそんなのになるなとか、もっと女の子らしいことしなさいとかって言ってくる。どんどん周りに道を崩されて、ついにはそんなのになっちゃいけないって思えてもきた。でも、ちゃんと見方もいるんだってわかった。私の母さんもそうだけど、ちゃんと自分が好きなように導いてくれる人もいる。今の私はあいつのおかげでいるようなもの。」

「・・・。」

坂口（さかぐち）は黙ったままでいる。木ノ本（きのもと）がさらに続けようとすると、

「もういいよ。」

坂口（さかぐち）がその先の言葉を遮った。

「ナガシィが言ったこと半分は本当だった。閉じこもってなければ私と同じって。でも私も同じだったんだなぁ。ずっとその重圧に押しつぶされて言えなかった。」

萌（もえ）は自分に言い聞かせるように独り言を言った。言い終わると瞬きをして、

「木ノ本（きのもと）さんのおかげで私も迷いが晴れたと思う。ナガシィの言うことは当たってる。これからはもう迷わない。自分が思ったように進む。」

「・・・。」

「でも・・・。思ったように進むって言っても私はどこに進んでい

いのかわかない。浜松にある国際観光とか大原とかに行ってもろくなものにはなれない。だから、木ノ本さんにナガシィの進路のことを詮索してもらいたいんだよねぇ。」

ずっこけそうになる回答だった。

「なんで。すぐに永島に話すとかじゃないの。」

「今話して何がどう変わるのよ。私がただその進路に行きたいって言っても変わるのは3年後。だったらそこまでにやること、知っておきたいことがあるの。」

（確かに。坂口さんには鉄道関連の進路でどんなものがあるかなんてわからない。そのために永島の詮索・・・。）

「調べてほしいのはナガシィの進路のこと。進路がわかれば後は私が何とかする。もちろん、その時に言わなくちゃいけないことも話す。それに、もしそれまでの間に話すきっかけができたらその時いう。」

「でも永島の進路がわかっても、行きたいって思ってる学校がいくつもあったらどうするの。」

「そこは、大丈夫。ナガシィは行く学校は必ず一つだけに絞る。そこ以外行く気ないから。」

これも疑わしい情報だ。でも、永島が岸川を単願で受験したということは・・・。なら坂口がこういうことも分かる。

「だから、答えが出るのは少なくとも3年生の春。その時までに進路が決まってなかったらその段階でそれは言う。」

「でも、そこまでは永島には話さないってことだよなぁ。」

「それはそうだけど・・・。でも、進路のことなんて今から考えてる人なんて私以外いないと思うし。」

（そういう問題じゃなくて・・・。）

「それに、私を本気にしてくれたのは木ノ本さん。私、今までこんなに本気でこの進路のことなんて考えたことなかった。でも今は違う。夢を実現させるためならなんだってする。でも、そこまで行く工程を知らなかったら何にもならない。協力してほしいの。」

「・・・。」
ため息が出た。心のどこかで、押されきった感覚があるからだ。
「分かった。同じ進路を志す仲間として協力する。」
「決まり。じゃあ、メアド交換しよう。」
坂口はポケットから携帯電話を取り出した。形は何かどこかで見たことがある。・・・。永島の携帯電話と同じなのだ。
「あれ、同じ携帯。」
「あっ、そうなんだ。ナガシィの場合性能とかそういうので携帯選ばないからなぁ。多分形だけで見ればこれかなぁって思ったんだけど、マジで同じとは思わなかった。」
「・・・。」
（坂口さんには永島の思考回路全部がコピーされてるのか。）
「て、そんなことどうでもいい。」
自分が言いだした言葉に歯止めをかけて、赤外線受信の機能を起動させる。
「ああ、あと。私のことは萌って呼んでいいからね。」
自分も携帯を出そうとしているときにそう言われた。
「木ノ本さんって何て呼ばれたい。部活の中じゃハルナンだったよねぇ。でもハルナンは嫌だよねぇ・・・。じゃあ、榛名ちゃんでいい。」
「・・・。なんでもいいよ。つうか、いまその話関係ないでしょ。」
この後二人はアドレスを交換し、進路が確定するまで永島には秘密で計画を推し進めていくことを正式に決めたのだ。
翌日。宗谷学園では・・・、
「うーん。確か今日浜北で入れ替えた編成が１００１で、上島で入れ替えたやつが２００３で、八幡で入れ替えた編成が１００７と１００５で、乗ってきた編成が２００４と２００２。今日は１００１と１００５と２００２が車庫に入って、２００３と１００７と２００４がふつうに走る・・・。」
今日はなぜか独り言を言っている。それが気になって黒崎が話しか

けた。
「今日はどうしたの。なんかさっきから１００１がどうの言ってるけど。」
「えっ。ああ。帰りに乗る電車何かなぁって思って。」
（やっぱりそれなんだ。）
「帰るときに乗る電車なんてわかるの。」
「そんなの簡単だよ。たくさん乗ったらどういう運用してるか一発で分かるし。」
（それが一発で分かるって。相当イッテルよなぁ。）
「でも、遠江急行だけはわかんないなぁ。あれ先頭の右側のところに小さく編成番号が書いてあるだけだから。あれさえわかればどういう運用してるかわかるのに。」
「・・・。」
話には到底ついていけないと思いその場を離れた。
「１５時４２分に来るのが２００３で、５４分に来るのが１００７。１６時０６分に来るのが２００４。部活もやってないからそこまで待つのはちょっとなぁ。」
「・・・。」
席がちょっと離れている萌の友達。端岡に今のことを振ってみた。
「ねぇ、夏紀。萌どうしちゃったのよ。」
「何。何か変なことでも言ってるの。」
「変なことって言えば、少し変かなぁ。さっきから１００１がどうのこうなとか一人で喋り捲ってるし。」
「・・・。」
「ねぇ、早くどうにかしたほうが・・・。」
「いいよ。あのままで。」
端岡から返ってきたのはまずそれだった。
「多分、何かに目覚めたんだと思うなぁ。元気がないってちょっと心配してたけど、あれだったらすぐに立ち直るね。」
「・・・。なんだよそれ。萌が独り言多い時は元気っていう一種の

バロメーターか。」
「そんな感じかなぁ。」
「何に目覚めたんだろうなぁ。」
黒崎（くろさき）が端岡（はしおか）に聞いた質問の回答は薗田（そのだ）から返ってきた。
「きっと電車の運転手だよ。」
「えっ。まさか。あれって男の子が成るもんだろ。ふつう女の子が就くような・・・。」
「確かに。女の子が就くとしたら新幹線（しんかんせん）の乗務員（クルー）とかだろうな。」
「でも、今ならそんなの関係ないんじゃない。ていうかそこで差別とかしてたら絶対問題になる。それに私たちに偏見があるかもしれないじゃん。」
「・・・。そうだな。」
「ああ、もういいや。２００３（こいつ）で。」
「・・・。」

28列車　進路の密勅（後書き）

ちょっと強引過ぎたかなぁ・・・。
でも、アマチュアの小説ですし、アマチュアみたいなまわし方っていうのもアリなんですよねぇ・・・。

本編中で結構バカにしてることが多いですが、現実でも同じということは全くありません。

29列車　工程　テスト

その日の放課後。岸川学園では・・・、
「今日は2日目の工程上げちまうぞ。」
僕がみんなをまとめる。
「ところで、みんな何か考えてきた。」
「全然浮かびません。ディーゼルに乗ろうとするとどうしても。」
「大体形は考えてきたんですけど、自分が納得いくようには。」
「あっ。考えるの忘れてた。」
「まぁ、木ノ本の場合無理ないよなぁ。昨日考えてきたのがボツになったわけだし。そんなにポンポン考えが量産できるような人じゃないしね。」
「・・・。」
何か今日は永島と話しづらい。萌があそこまでしたい理由が自分の中では一つしか見つからないからだ。自分のほうははるかに彼女より短いのだが、そう思ったことがあるというのは事実だからだ。しかし、話さなくてはならない。鉄道の話に置いて口数が少ない自分は異常。心配かけまいと思って口を開いた。
「そんなの誰でも同じだろ。あれ、相当自信あったんだから。・・・。そういう永島は何か考えてきたのか。」
「全然。」
（即行否定かよ。）
「でも、昨日佐久間が熊本行くって言ってたじゃん。あれの行先だけパクって行こうかなぁと。」
「行こうかなぁって。熊本にですか。」
「パクっててことはずっと各駅ですよねぇ。」
「ああ。そんで、いちばん最後のほうは木ノ本の案も少し入れた。で、これで本当に回れるのかわかんねぇから、今から時刻表で調べるってわけ。」

「こら。ちゃんと調べてから来いよ。つうかちゃんと考えてきてるじゃないか。」
「まあまあ。そう怒らずに。じゃあ、醒ヶ井。時刻表貸して。」
「だから。前にある時刻表取ってくればいいじゃん。」
「お前のほうが前の時刻表に近い。それに取りにいくの面倒だし。」
（さすが。金持ち出身の人だなぁ。）
「いいよ。私が取ってくる。」
これをやり続けていてもらちが明かない。そう思った木ノ本が時刻表をとってくる。その時刻表を渡されて、
「えーと。鹿児島本線、鹿児島本線。えーと。あった。」
見つけて開くのをやめたところ、開かれたのは鹿児島本線「上り」のページ。このページは「上り（八代ー門司港）　その3」となっている。前にページをめくって、鹿児島本線「下り」のページを出す。
「えっと、まず。8時11分発の快速荒尾行きで、荒尾が9時26分。」
小倉方面からきている快速列車は大牟田の一つした。荒尾という駅でその先に時刻の表示がない。これはここ荒尾が終点だという証。当然列車を乗り換える必要がある。荒尾をさした指を右に動かす。右側に行けばいくほど時刻は遅くなる。一本「特急つばめ」を挟んで9時44分。普通列車八代行きがある。これに乗ると途中熊本には10時32分。この先八代まで行こうと思えば八代まで行ける。だが、あえてここでとめることにしよう。
「熊本まで来て10時32分かぁ。この先どうするんだよ。」
「熊本って市電があるんだよ。」
「しでん。」
木ノ本にはそれがわからなかった。まだ元の知識量に戻ってない。
「路面電車ですよ。木ノ本さんそんなことも分かんないんですか。」
「空河。後でシバカレたい。」
「嫌です。」

「その話は置いといて、それ乗りつくして、帰りはどうしようかなぁ。全部乗りつくすって言ってもそんなにかからないよなぁ。なら、１３時５７分発の普通鳥栖行きに乗って・・・。」

出る言葉がなくなった。終点鳥栖到着は１６時０５分。長いのだ。

「これ快速運転やってくれませんかねぇ。」

「やっちゃくれないだろうな。」

「この間だけでも「つばめ」とか「有明」とか使いましょうよ。」

「金かかるからやめよう。よし。そんでこれに乗ってって、鳥栖が１６時０５分。これで言って一番早く行ける列車が快速小倉行き。こいつに乗っていくと博多に１６時５８分。これに一番早い博多南線は・・・。」

ページを白い部分の真ん中あたりから前よりの青いページに変える。東海道・山陽新幹線の下を探っていたが、博多南線の表示はどこにも見つからない。散々探して、いま開いているページは「東海道・山陽新幹線上り　その７」。仕方がないので、ページを前に送って青いページよりも前のページを開いた。ここにはいろんな情報が乗っている。それはホテルや臨時列車の時刻など様々。しばらくめくっていくと東京首都圏の拡大された路線図が出てきた。もう１ページめくると北海道がでかでかと載っているページ、次は東北地方、関東地方、中部地方、近畿地方という風に分かれている。これの九州地方が乗っているページを出して、博多南線をおった。

（４４４ページ。）

ページ数を記憶して、そのページまでページをめくる。そのページには左上に小ぢんまりと博多南線が載っていた。

「これで一番早い博多南線が１７時２９分で、博多南着が１７時３９分。これで返ってくるときは・・・。１９時０４分のやつでは方が１９時１４分。完璧。」

とりあえずこんな感じで頭の中にあった案はこれでようやく実体化した。

あとはこれをアド先生に提出するだけ、

「はい。分かりました。」
この反応は通ったということと受け取っていいらしい。
「永島君。３日目はどうするつもりですか。」
「えっ。３日目は大阪か新大阪に缶詰めのつもりですけど。」
「ナヨロンじゃあるまいしよくやろうとするな。死ぬぞ。やめとけ、やめとけ。」
そういったのはサヤ先輩だ。
「人を鉄道バカみたいに言うなつぅの。」
「そう言ったって何の説得力もないわ。どこからどう見たって鉄道バカじゃないか。」
「・・・。」
「おいおい。二人ともやめろ。」
アヤケン先輩が仲裁に入った。
「ナヨロンはどこからどう見ても鉄道バカっていうの認めろよ。」
「本人否定してるところであっさりというな。」
「そして、サヤは鉄道好きの天然の際物好きって認めろよ。」
「際物好きってなんだよ。」
「・・・。」
「まぁ、そんな話どうでもいいや。でも、このプランからすると、「ＲｅｄＤｉｅｓｅｌ」とか見ないんだな。」
「「レディー」。」
この言い方には疑問を持った。まず何を言いたいのかが分からなかった。
「あの、名寄先輩。」
何か心当たりがあるらしく、空河が名寄に話しかけた。
「もしかして「キハ２００」のことですか。」
「すっ・・・すごいなぁ。通じるやつがいた・・・。」
さすがにこのことまでは予想していなかったようだ。面喰っていた。
キハ２００というのはＪＲ九州のディーゼルカーである。この車両は働く線区ごとに色分けされており、赤と青と黄の３色がある。

今、ナヨロン先輩の言ったのは赤いキハ２００のこと。他の色は「ＢｌｕｅＤｉｅｓｅｌ（ルディー）」「Ｙｅｌｌｏｗ Ｄｉｅｓｅｌ（エディー）」とあだ名をつけているようだった。

６月２４日。佐久間（さくま）の班が原案を出し、これで全部の班の自由行動の計画が出された。これでテスト前の部活は終了。次の部活はテストが終わってからになる。ここまでくれば一時は安心していいそうである。後はただ、その日が来るのを待つだけだと言っていた。

７月上旬。そうそうテストだ。

「なぁ、宿毛（すくも）。ここ教えてくんない。」

数学？の教科書を持って宿毛（すくも）のところまで行く。

「お前なぁ。数学じゃなくて国語勉強しろよ。国語。」

「いいじゃん。国語なんてどうにでもなりそうだし、それにこれわけわかんねぇ。」

「分かんないとかって言っておきながら、理解してる。お前に多いパターンじゃないか。」

「そ・・・それで教えてくれないとでもいうのか。」

「いや、そういうわけじゃないけど・・・。」

「じゃあ、教えて。」

「はいはい。」

（学年トップが縋り付いてる・・・。）

そう思いながら、宿毛（すくも）とのやり取りを見た。

１時間後・・・、

「宿毛（すくも）、今度はこれ教えて。」

「はっ。それ教えるもんかよ。覚えろよ。お前の短期記憶最強なんだから。」

「いいじゃん。なんか問題出して。」

「問題かぁ。じゃあ、生殖細胞（せいしょくさいぼう）ができるときの分裂の名称。」

「減数分裂（げんすうぶんれつ）だろ。」

「正解。次。相同染色体どうしが平行に接着するようになった染色

体は。」
「えーと・・・。二価染色体。」
「正解。問題出すまでもないだろ。」
「いいからもっともっと。分かんないから。」
「ウソじゃん。」
ずっと問題を出し合って7分後。
「あ、覚えらんねぇ。」
「ウソつけ。覚えてるだろ。永島。今回も生物１００点取ったら殺すからな。」
「大丈夫。今回は取れないから。」
「嘘くさいんだよ。」
「ハハハ。」
「ハハハじゃねぇよ。まったく。」
また1時間後・・・。同じことを繰り返して今日は終了。次の日も同じだった。そして数日たつと・・・、
（ゲッ。）
「おい。俺に縋り付くからこういうことになるんだよ。縋り付かなきゃよかったものを。」
耳元で宿毛が悪魔みたいな声でささやいた。
「結構できてたと思ったらまたこの結果だもんなぁ。なんで宿毛が上じゃないんだよ。」
「知るか。俺のほうはあれだけ勉強してきた結果がこれっていうほうに腹が立つ。」
「・・・。」
「まぁいいや。次で抜けばいい。」
「だな。次で抜かれればいい。」
（一番上っていうのがよっぽど気にくわないみたいだな。）
その昼・・・、
「今回も学年トップって宿毛君っていう子なのか。」
木ノ本がその話題を振った。

「あっ。木ノ本まだ知らなかったんだ。」
木ノ本の対岸に座っている箕島が口を開いた。
「宿毛っていう人が学年トップっていうのは嘘なんだよ。本当の学年トップは・・・。」
箕島は視線を永島のほうに向けた。
「それ言うなって。」
「マジ。学年トップってこいつなのか。」
「そうだよ。」
疑問には佐久間が答えた。
（マジかよ。今までずっとバカっていう方面で同類って思ってたのに。そもそもなんでそんなに頭いい人が岸川に来てるわけ。）
「まぁ、ほかの高校狙う気もなかったし、行くの面倒くさかったし。」
「ここは面倒じゃないんだ。」
「うん。ここはね。遊ぶために学校来てるし。」
「そりゃ目的が違うだろ。」
「まぁ、いいじゃん。人それぞれ目的が違うっていうのはふつうだし。」
（こいつの場合それがふつうって言ってもふつうじゃないように聞こえる。）
その日の放課後。ソフトボール部。
（ダメだ。なんかやる気しない。でも、夏の大会も近いんだし、どうにかついて行かなきゃ。でも・・・。なんだろうこの気持ち。今までそんなにきつくなかった練習がこんなにきつく感じるのは・・・。）
この頃木ノ本の表情がとてもうらやましく思えるのだ。

２９列車　工程　テスト（後書き）

ようやっとここまで来ました。

結構現実と違うというところは目をつぶりたくなくなるほどでしたかねぇ・・・。

３０列車　浜松～米原

８月８日。ついにその日がやってきた。
（今日から行ってくるのかぁ。）
それを思いながら萌にメールを打った。
「今日から、博多に行ってくるよ。」
文面はそれだけにした。
６時２１分。浜松駅の改札前に到着する。集合時間は６時４５分。
まだたっぷりと時間がある。
「おーす。永島・・・。」
木ノ本が既にそこにいた。
「木ノ本早いな。」
「だって４時に目が覚めたんだもん。」
「早っ。」
「早って。しょうがないだろ。」
「・・・。」
「お前ら、早すぎだぞ。」
横から声がした。ナヨロン先輩だ。
「ナヨロン先輩。おはようございます。」
「つうか、永島気付かなかったのか。同じ列車に乗ってたのに。」
「あっ、そうだったんですか。」
「張り切ってるなぁ１年生諸君。」
今度は善知鳥先輩の声だ。
「そう言う善知鳥も張り切ってるなぁ。」
「だって博多（ＨＫＴ）いけんだよ。そりゃあワクワクするって。」
「まあ、新幹線ではいけないけどな。」
「ああ、そこだけ嫌だな。」
「・・・。」
６時４０分までの間にサヤ先輩と佐久間以外は全員そろった。

「サヤのやつ何してんだろう。」
「いつものことだろ。サヤって時間通りに来た例ないじゃん。」
アヤケン先輩と善知鳥先輩がまだ来ないサヤ先輩に文句を言っていた。その会話を聞いている傍らでナヨロン先輩がその姿を探した。
「あっ、来た、来た。おーい、サヤこっちだぞ。」
そう呼ぶとサヤ先輩が走ってきた。
「ナヨロン。俺そこまでバカじゃないぞ・・・。」
集合場所まで来るとそう言っていた。
６時５１分。佐久間が６分遅刻してきた。だが、これで全員集合する。全員の集合が確認できるとアド先生が全員に「青春１８切符」を渡した。
「１８切符」を渡されるといさんでホームに向かった。よく聞くことだが、「１８切符」には年齢制限があるみたいなことを思っている人が多いらしいがそんなことはない。それを補足しよう。ここから７時０６分発。普通岐阜行きに乗車する。ホームに上った時間は６時５５分。まだその列車は４番線にいない。
「永島。」
ホームに上がると佐久間が聞いてきた。
「何。」
何のことだろうと思った。
「列車まだ。」
「・・・。」
何を言うのかと思えば・・・。
「まだに決まってるだろ。乗る電車が出るの７時０６分だろ。まだ１１分あるし。」
醒ヶ井のツッコミが入った。
７時０５分。４番線に列車が入線してきた。東京方面に顔を向けていると、黄色っぽいヘッドライトの車両がこっちに入ってきた。
「３１１系だ。」
入って来る列車を知っている僕はただつぶやいたつもりだった。だ

が、そうとう声が大きかったらしい。皆からはどうしたというような顔で見られてしまったが、そんなことは関係ない。

「へぇ。３１１系っていうんだ。２１１系かと思ったよ。」

これには驚いた。撮り鉄の木ノ本なら分かっていると思ったからだ。

「えっ。木ノ本しらないんだ。」

「私、こういう奴あんまり知らないんだ。３１３系は分かるんだけどね。」

と言っていた。

３１１系が４番線にブレーキ音を立てて止まった。停まって１秒くらい経つとドアが開く。その開いたドアから降車する客を待って車内に乗り込んだ。車内は半分くらいの混みだった。３１１系の転換クロスシートはほぼすべて埋まっており、僕達は仕方がなく、ドア付近に固まった。

「４番線ドアが閉まります。ご注意ください。」

「東海道線、下り、普通列車岐阜行きです。ドアが閉まります。ご注意ください。」

ピンポーン、ピンポーン。発車前のやり取りが聞こえてくる。ドアが閉まると３１１系はカックンと揺れて浜松駅を発車した。ここから終点博多までは１２時間の工程である。

７時３８分。まずは豊橋までコマを進めてきた。ここ豊橋では特別快速米原行きに乗り換える。そのために移動をしなければならない。そのためにドアの前にスタンバイした。

７時３９分。豊橋に到着。３１１系が入線したホームは７番線。ここからダッシュで隣の５番線に行く。

ピンポーン、ピンポーン。ドアが開いた。ドアが開き切るのを見計らって飛び出した。

７番線を見ると始まったばかりのマラソンのように人でいっぱいだった。

（サヤ先輩達は。）

考えながら足を動かす。何秒たっただろうか。ハクタカ先輩の姿を

とらえた。その後ろ姿をおって階段を駆け上がる。階段も人でいっぱいだ。走って上るのは少しきついくらいはいるだろうか。ハクタカ先輩の姿を見失わないように走ってその後を追った。

階段を上るとハクタカ先輩の姿が左に消えた。特別快速の発車するホームは5番線。5番線は7番線の北側にある。僕も階段を上りきると左にかじをきった。そのころにはハクタカ先輩は5・6番線に通じる階段を降りようとしていた。そこの階段へ僕も急ぐ。こっちの階段はほんの少し空いていた。人の間をかいくぐり、階段を駆け足で降りた。階段の中腹。踊り場まで来ると5番線に停まっている特別快速が姿を現した。その時、ハクタカ先輩がそこに吸い込まれるように入っていった。

5番線に停まっていたのは313系という通勤電車だった。この車両はJR東海の通勤電車でその顔と言っても過言でないほどの車両が在籍している。今のった車両は5000番台という区分で、車両と車両の間に車体間ダンパを装備している。そうそう、さっき降りた311系はこの313系が登場する前の特別快速に充当されていた車両である。そのため、この二つは内装が非常によく似ている。

車内に乗り込むと開いている席を急いで探した。もう40%（パーセント）くらいの席が埋まっている。乗り込んだドアから一番近い席に腰を下ろした。

「永島さん。隣いいですか。」

空河に声をかけられた。ずっと僕の後ろをおっていたのだろう。僕は「窓側はいい」と言って空河に譲った。

7時49分。313系のドアが閉まり、軽快な音とともに動き出した。列車は車体をよじって上り線から下り線へと入って行った。この時に途中停車駅の案内があった。

蒲郡、岡崎、安城と停車していく。安城まで来ると立っている客が僕達の前の視界を遮った。このころになると、何となく席を立ちたい気分になった。

「んっ、ナガシィどうした。」

「いや、何となくたっていたくなっただけで・・・。」
「座っとけって。こっから長いぞ。」
サヤ先輩の言うとおりだ。まだ1時間くらいしかたっていない。
「いえ、サヤ先輩達も座っとった方がいいですよ。」
「いいよ。後輩に言われて座る先輩がどこに・・・いた。」
サヤ先輩の顔が引きつっていた。見てみるといつの間にか善知鳥先輩が僕の座っていたところに座っていた。
「いいじゃん。立ってるの疲れたんだから。」
「いや、そうじゃないだろ。」
「いえ、いいです。僕は次の座りますから。」
「永島、そう思っとかないほうがいいぞ。」
僕から見ると左側にいたナヨロン先輩がそう忠告した。
「えっ、なんで。」
「関西の新快速って結構需要あるみたいだから、座れないかもよ。」
「２２３系なら座れなくてもいいって。」
（何、すべては車両。）
「ふうん。永島って２２３系好きなんだな。」
「はい。僕が一番好きな車両ですから。」
「じゃあ、一つ聞いていいか。」
「なんですか。」
「２２３系なら「関空快速」か「新快速」か。どっちがいい。」
「断然２２３系１０００番台です。」
その後ナヨロン先輩とはこんな話になった。
８時３７分。名古屋に到着する。名古屋では客の入れ替えがあり、僕は自分の席に戻った。善知鳥先輩はというと開いた他の席に移っていった。
木曽川あたりに差し掛かったころだっただろうか。隣をグレーとオレンジのラインが目立つ車両が隣を通った。
（「しなの」かなぁ。でも、なんでここに・・・。）
頭の中に考えを巡らせていた。

９時０９分。大垣（おおがき）に到着。ここで後ろにくっついていた３１３系を切り離して、さらにその先を目指した。この列車が終点米原（まいばら）に到着したのは９時４８分だった。そして、この先にコマを進めるためには２分後に発車する新快足姫路行（しんかいそくひめじゆ）きに乗車しなければならなかった。

３０列車　浜松～米原（後書き）

今回は結構説明文が多くなってすみません。後これまでより作風が固いと思われますが、読んでくれる人には感謝。

31列車　裏切りと「トワイライト」と死亡

9時48分。米原に到着。2番線に入線すると反対側3番線にはすでにシルバーの車体が構えていた。構えていたといってもドアが開いているわけではなかった。

（発車時刻でもないのに、なんでドアが閉まっているのだろうか。）と思いながら、313系から降りた。隣に行くと、なるほどと納得できた。隣にいる223系に乗り込む人は一様にドアの横にあるボタンを押して乗車していった。ここでは半自動でドア開閉を行っているらしい。

9時49分。僕の班が全員いることを確認した。

9時50分。ティントゥーン、ティントゥーン。開いたままだったドアが一斉に閉まった。ドアが閉まると甲高い息抜きのような音がした。ブレーキが解除される音だ。この音が頭の遠くで聞こえるようになると、床下のモーター音を発し始めた。音階が少し変わろうとしているころには既に米原のホームを後にしていた。

傍らに「300X」「WIN350」「STAR21」が見えてくるころ、大阪までの途中停車駅が告げられた。この案内の途中に新快速は右にかじを切り、新幹線の高架橋をくぐって、次駅彦根へと急いでいた。

「ナヨロン先輩。さっきのこと聞いとけばよかったと思いました。」

足の裏が少し痛かった。

「だから言っただろ。新快速は結構需要があるって。大阪までこのままだって思っといた方がいいぞ。」

ナヨロン先輩にはそう怒られた。

この先、この新快速に揺られること83分。11時13分に大阪駅に滑り込んだ。この列車にはそんなに長い間乗っていたという感覚がなかった。むしろ、新快速の方が新幹線よりも速いのではないかと錯覚したくらいだった。

ホームに降り立つと衝撃的な事実が目に飛び込んできた。
（ウッ・・・ウソだろ・・・。）
後ろに連結されていたのは僕の好きな２２３系。１０００番台。
（そんな・・・。１両後ろだったら、こいつに乗れていたのか・・・。）
何も言うことができなかった。
１１時１５分。１０００番台の後姿を見送って、全員が集合しているところに行った。
「聞け諸君。１２時発の新幹線に乗るからな。みんなここに集合しろよ。」
善知鳥先輩が右手を上げてみんなに教えている。
（新幹線・・・。新快速じゃなくて・・・。）
「それでは、皆さんお昼にしてください。ええ、ここには１１時５５分ごろに集合してください。」
アド先生の説明を受けて解散した。
「なあ、善知鳥。今お前新快速じゃなくて、新幹線って言ってただろ。」
「まあいいんじゃないか。俺達には間違えられても通じるし、どんなバカでもここから乗る列車は新幹線じゃないってわかるから。」
耳の遠くで聞こえている。
「永島、「トワイライトエクスプレス」見に行かないか。」
誰かにそう話しかけられる。
「永島。」
木ノ本が僕を覗き込んだ。その時になって今話しかけてきたのが木ノ本だと分かった。
「なっ・・・何。」
「何じゃないよ。「トワイライト」見に行かないかってこと。」
「ああ、「トワイライト」かぁ。うん、見に行こう。」
僕はすぐに賛成した。
１１時３０分ごろだっただろうか。大阪駅の１０番線に「寝台特

急トワイライトエクスプレス」が入線してきた。編成はＥＦ８１－１１３号機を先頭に１０両の２４系寝台客車が続く。この列車も寝台特急と呼ばれているため、ブルートレインの仲間である。しかし、その車体はブルーではなく深緑で、ブルートレインと呼ばれた時の面影は車内で寝ることができる以外残っていない。

「永島。これ乗りたいって思わない。」

「ああ・・・。」

（できれば萌と一緒に・・・。）

いつか乗りたいと思いながら、先頭のＥＦ８１を携帯に収めた。

「木ノ本達も来てたのか。」

その声が「トワイライトエクスプレス」の方からした。ナヨロン先輩とアヤケン先輩だった。

「はい。」

「「トワイライトエクスプレス」。いつか乗りたいよなぁ。」

「やっぱり乗るんだったら、一番後ろですか。」

「そうだな。乗るんだったら一番後ろだな。」

一番後ろの車両はスイートルームと言って「トワイライトエクスプレス」に二つしかない部屋の一つがある。

「まあ、その前に名寄は彼女ができるかどうかだけどなぁ。」

「うっさい。」

「木ノ本、俺たちは行こうか。」

「あっ、うん。ナヨロン先輩達も早く戻ってきてくださいね。もう集合まで5分くらいしかありませんよ。」

木ノ本がそう言っているのが聞こえた。

４番線に足を運んでいると向こうから走ってくる人影があった。

サヤ先輩と善知鳥先輩だった。

「あっ、ナガシィ・・・「トワイライト」今停まってる・・・。」

「はい、停まってますよ。」

「そう、ありがと。行くぞ。」

「サヤ待ってよ。」

そんな後姿を見送った。

「サヤ先輩達って何してたんだろう。」

「さぁ。お昼でも食べに行こうとして、それで失敗したみたいな感じだよなぁ。」

そう話しながら、４番線に通じる階段を上った。

１２時００分。大阪を発った。ここからはまた２２３系新快速にお世話になる。この新快速は播州赤穂行き。途中で乗り換えをしなくても相生まで行くことができる。

この列車に乗り込んで見ると、座れる席が全くなかった。僕たちはアド先生の誘導で空いているごくわずかな席に座った。僕が席に掛けるときにはドアが閉まり大阪を発車していた。この新快速に乗って３０分くらいがたった。兵庫を通過したくらいだっただろうか。ふとした拍子に意識が飛んでしまった。

目が覚めた。今走っているところがどこなのか。それが気になった。外に目を向けてみる。当然のことだが、僕の知っている建物は一つもなかった。次に、車内に目をやった。僕の位置から見て左斜め後ろ。佐久間、諫早、空河、醒ヶ井が固まって座っていた。だが、全員寝てしまっている。

（他の人はどこにいるんだろう。）

と思って車内を見回す前に次の停車駅が目に入った。

（かっ・・・加古川っ。）

「ご乗車ありがとうございました。加古川ー、加古川です。・・・。」

（イカン。神戸発車してから寝ちゃった。）

そう寝てしまった自分を悔やんだ。

僕の座っている2号車の座席には夏の太陽がギラギラと入ってきている。まだ瞼が重い。こういう状況だとまたいつ寝てしまうか分からない。そのため、ドア付近の椅子の背もたれに取り付けてある、補助椅子に掛けようかと思った時、加古川に到着した。

加古川では何人もの客が降りていった。そのうちの一人が荷物を

忘れて取りに来ていたが、取りに来た直後にドアが閉まってしまうという災難に遭っていた。

加古川を発車すると僕は補助椅子の方に移った。

補助椅子を前に引き倒して座る。

「なんじゃこりゃ。」

つい声が出てしまった。この補助椅子には何か空洞の様なものを感じた。座るとそこにクッションがないかのように沈みこんだ。そして、そこには金網の様なものしかないという感覚しか生まれなかった。

１３時０１分。姫路に到着。ここから新快速は堂々（どうどう）の１２両編成から８両編成になる。僕達の乗っている基本編成がそのまま播州赤穂まで行き、おいていかれる付属編成は新快速か普通として大阪方面に折り返していくのであろう。１３時０６分。新快速播州赤穂行きが姫路を発車した。

途中の相生に着いたのは１３時２４分だった。降りて見ると何とも小さな駅である。とても新幹線の停車駅とは思えないくらい小さかった。相生のホームに降り立つとまた乗り換える。１３時３０分発。普通三原行きに身を任せて途中の糸崎まで揺られる。車両は１１３系だった。

「体質改善車かぁ。」

停まっていた１１３系を見てナヨロン先輩が言っていた。

「ダイエットって。」

「だってこの車両は延命手術を受けてダイエットに成功したんだよ。」

「あのナヨロン先輩。それダイエットじゃなくてリニューアルって言うんじゃないんですか。」

「体質を改善したら、全部ダイエットしたんだよ。」

読者の皆様にとってはこんなことどうでもいいだろう。しかし、僕達にはどうでもいい問題ではない。これから２時間以上普通に揺られるのである。いくら電車好きといっても２時間以上普通に乗って

いるというのは抵抗がある。これが新快速とかだったら話は変わるのだが・・・。

１３時３０分。相生を発車する。この列車で前述したとおり2時間以上揺られるのだ。

何分だっただろうか。岡山に着いた。

（まだ岡山かよ。）

心の中でそれを嘆いた。いくらなんでも長過ぎる。これなら、サヤ先輩が言っていた博多まで行って、病院に行くという意味が分かった気がした。

さらに1時間がたった。今いる駅は大門。まだ1時間以上乗車していなければならない。ふと周りを見回してみた。ほとんどの人が眠りに就いていた。

（できることなら、俺も眠りたい・・。）

そこから４１分が経過した。ようやっと乗り換え駅、糸崎に到着する。

（やっとここまで来たのかぁ。）

降りると同時にため息をついた。ここからは少しは楽になるのだろうか。１６時１４分発の「快速シティーライナー」に期待することにした。

だが、その期待もすぐに打ち砕かれてしまった。「快速シティーライナー」に充当されている車両はさっきまで乗っていた１１３系。好きでも嫌いでもないが、また同じ車両というのには抵抗がある。

１６時１４分。「快速シティーライナー」糸崎発車。

そこから何分経っただろうか。瀬野まで来た。ふと外に目をやると見たことのないオレンジ色の電気機関車が止まっていた。

「なんだ。これ。」

誰かに問いかけたわけではないが、ナヨロン先輩が反応してくれた。

「ＥＦ６７。瀬野峠用の後押機関車だよ。「セノハチ」って聞いたことないか。それがここのことだよ。」

「「セノハチ」。」

首をかしげた。
「ああ、知らないんだ。永島なら知ってると思ったんだけどなぁ。そうか。永島でも知らないことがあるのか。」
自分に言い聞かせるように言った。
「山陽本線を敷設した山陽鉄道が、ここだけは経済性を優先しましょうって作っちゃったんだよ。そしたら、22.6‰（パーミル）の急勾配になっちゃってね。この勾配は山陽本線を走ってる貨物列車は上ることができない。だからああいうのが走るのを手伝ってくれてるってこと。」
そう教えてくれた。
この列車が途中の広島に着いたのは17時28分であった。

３１列車　裏切りと「トワイライト」と死亡（後書き）

まだまだ。この先は飛ばせたからいいですけど・・・。

32列車　ようやっと

広島のホームに降り立った。全員の顔は疲れ果てていた。と言ってもすごく元気な人もいた。

「ようやっと新幹線に乗れる。」

善知鳥先輩が体を伸ばした。

「やっと「レールスター」のお出ましかぁ。」

（１００系も見れる。）

「はい、皆さんいますね。それでは乗ります。私の後に付いてきてください。」

アド先生の誘導で新幹線の改札を通り抜ける。ここからは本当に楽ができる。そして、僕が今まで乗ったことのなかった山陽新幹線広島～博多間を乗車するのも達成できるのだ。

１７時３５分。新幹線のホームに立った。ここの構内に響き渡る音。それらが新幹線というにおいを僕に運んできている。そのにおいを堪能していると誰かが僕の背中に手を当てた。

「永島。１７時４９分発の「こだま」があるぞ。もしかしたら１００系じゃない。４両編成って出てるし。」

（「こだま７５９号」・・・。間違いない・・・。１００系だ。）

４両という表示が僕の心を支配した。

１７時４８分。「こだま７５９号」が１２番線に入線してきた。黄色っぽく光る鋭く、キリットした細い目。１００系。この車両が４両や６両となってしまっている編成があるというのは未だに信じられない。１００系は１６両で白く美しい車体に２階建てが連結された新幹線車両である。僕としてはそっちの方が好きである。もしかしたら、どんなものよりも好きなのかもしれない。

「１００系じゃん。」

佐久間が隣でそう言っていた。

興味がないわけではないが、僕の前に姿を現した１００系は何と

なく好きになれなかった。
「ああ・・・。」
鈍い反応しかできなかった。
　１７時４９分。「こだま７５９号」博多行き発車。１００系が発車する後姿を携帯に捉える事が出来た。その後ろ姿は僕の思っているカッコよさよりも、悲しさと寂しさが入り混じった顔をしていると思った。
（なんだ。今のは・・・。）
この時、僕は１００系が何か訴えているように聞こえて仕方がなかった。
　１７時５４分。さっき１００系が発車した１２番線に「ひかりレールスター５７３号」博多行きが入線してきた。８両編成の７００系新幹線は、ＪＲ西日本独自の設備がある。その一つが備えられている４号車が僕達の乗る車両だ。
　１７時５５分。「レールスター」は何の揺れもなく発車した。広島を出るとすぐさま外に目を向けた。さっき感じたことが何度も、何度も頭の中に思い出された。好きなやつほど伝わってくるこの気持ちは何なんだろうか。それだけが頭の中に広がり、何も考えられなくなった。
　１９時００分ごろ。「間もなく終点博多です。」とアナウンスが入った。これで今日は終了ホテルに行って、あとは休むだけである。そのはずである。
　１９時０６分。博多に到着。ようやっと来たのである。
「皆さん。これからホテルの方に向かいますが、バスがあるそうです。乗りたい人は乗ってください。」
アド先生がそう教えてくれた。
「よーし、３年生は全員乗るぞ。２年生と１年生諸君は歩いてこい。」
「おい。少しは後輩に譲るとかしてやれよ。」
「いいだろ。あたしは早く部屋に入って寝たいんだよ。」

善知鳥先輩の振る舞いははっきり嫌ではあるが、1年生にはとても反抗できそうもない。
「頼んだぞ。ハクタカ、アヤノン。しっかり連れてこいよ。道迷ったりするなよな。」
といってバスに乗る人はそっちへそれていった。それていったといっても行ったのはアド先生とサヤ先輩と善知鳥先輩だけなのだが。
「はぁ、善知鳥先輩もああじゃなきゃいいのになぁ。」
「後で絢乃がそう言ってたって善知鳥先輩に言いつけていいか。」
「絶対言うなよ。」
「まぁ、言いたい気持ちは分からんわけじゃないな。あの性格がなければハイテンションでも問題ないんだけどなぁ。」
「おーい。それより俺達もホテルに行くぞ。」
「ああ、待って・・・。つうか、ホテルどこにあるか分かってんの。」
会話をずっと聞き流していたが、
「えっ。」
「ナヨロン分かってる。」
「分かってると思う。」
「だよなぁ。誰か分かってる人いないの。」
「アケ先輩大丈夫ですよ。どっか歩いてればたどり着きますって。」
「いやそうは言っても・・・。」
「いいんじゃないんですか。迷いながら、歩いて行くのも。」
「いや、それ問題でしょ。なんで、そういうこと考えてないんですか。それも全員。」
「ナヨロン先輩。地図見ればいいじゃないですか。」
「ああ、地図は貰った次の日にゴミと間違えて捨てちゃった。」
「おい、何捨ててんの。」
「なあ、ハクタカ。あたしのバッグに地図入ってると思うから出して。」
「はっ。自分で出せよ。」

「えっ。いいじゃん。バッグある方向にいたんだから。」
「なんじゃそりゃ。」
絢乃先輩が背負っているバッグのチャックを開けて中を探す。
「・・・。あっ、あったぞ。」
「ありがとう、ハクタカ。」
ナヨロン先輩のほうに歩いて行って、
「ナヨ先輩。これ見てくださいよ。」
「地図あったんだ・・・。アヤケン、見て。」
「おい。ふつう地図読めるだろ。」
「うっさい。」
僕と木ノ本は少し会話に入った。そして箕島たちはというと唖然とした顔でこのやり取りを聞いていた。
歩き出すと晩御飯の話になった。
「永島、木ノ本。一緒に博多ラーメン食べに行こうぜ。」
佐久間に誘われた。
「博多ラーメンねぇ・・・。」
「別に、そんなの食べに行かなくてもいいじゃん。」
「はっ。博多まで来てラーメン食べてかないってどうよ。」
「夕ごはんなんてコンビニで十分だよ。それに、博多ラーメンなんて浜松でも食べれるだろ。本場がどうとは思わないな。」
「そう言わずに、食っとこうぜ。」
「私はいいよ。そこにローソンあったからそれでいいし。」
「あっそ。永島は。」
「夕飯食う気しないからいいよ。」
「ああ、そうかい。なんで二人とも食い物にルーズなんだよ。」
博多の街を歩いて何分くらい経っただろう。ようやっと宿泊するホテルに到着した。もらったカードキーの示す部屋にすぐに入った。
夕飯を食べに佐久間達が出ていったことと僕の部屋に遊びに来たこと以外は平和にベットの上で休んでいた。
２１時３９分。だんだん瞼が重くなってきた。そして、いつのま

にか寝てしまった。

３２列車　ようやっと（後書き）

今回は短かった・・・。
本当ならそこのご当地グルメを食べたいと思うのがふつうですが、
そういうことに興味ない人もいると思いました。

こういうこと思うのは・・・だけかなぁ。

あと皆さんに報告します。累計アクセス回数１０００突破いたしました。ユニークのほうは２０１・・・。やっぱりネタがネタだったかなぁ・・・。

33列車　開けない

ふと目が覚めた。体を起こし、猫のように体を伸ばす。
（今何時だ。）
と思って携帯の端末を開いた。
（5時48分かぁ。）
もう少しで6時だ。もう寝てしまうのは二度寝の原因になると思って、少しの間部屋の中でゆっくりした。その間にメールが一通来た。確認してみると、木ノ本からだった。それともう一通来ていることに気付いた。誰なのかと思って確認してみる。
（んっ。）
迷惑メールとかいう奴でもチェーンメールとかいう奴でもなかった。だが、すぐに閉じてしまった。
6時55分。そろそろ朝御飯を食べに行こうと思って下の階に行った。今日は前に考えた自由行動を実行する日である。
「オッハー。ナガシィ。」
途中エレベーターで下に行こうとしている時善知鳥先輩とばったり会った。
「おはようございます。」
「そんな堅苦しくなるなって。」
肩を叩いて気持ちをほぐそうとする。
「そいえば、ナガシィ達どこに行くんだっけ。」
「熊本です。」
「そっか。熊本かぁ。何もないこと祈っといた方がいいよ。」
僕にはこういった意味が分からなかった。
7時41分。僕達の班はいつでも出発できる状態になった。といっても乗る列車まではまだ31分ある。その間ホテルのロビーで暇をつぶし、7時50分ごろ。ホテルを発った。
5分くらい歩いて、博多駅に来た。在来線の改札口を通り、僕達が

のる快速荒尾行きを待った。８時０７分。快速荒尾行きが博多駅の５番線に入線した。すぐに車内に乗り込み自分達の席を確保した。席を確保すると、みんなで入線した車両を取りに行った。この快速に充当されている車両は８１３系。ＪＲ九州のベーシック通勤電車だ。

「「赤い子」だったな。」

木ノ本が車両を取りに行ってきた僕達に向かってそういった。

「「赤い子」。」

「だってそうだろ。前面赤いじゃん。」

「ああ、納得。」

納得していいのかどうかは分からない。でも、一つ言えることがある。僕と木ノ本が考えていたことはさほど変わらないということだ。

その後、この列車が発車する８時１１分まで「特急ソニック」、「特急かもめ」に充当されている８８５系、８１３系と並ぶ通勤電車８１１系などを見た。ひっきりなしに電車が来るというのは、博多という九州の中枢だからだろう。そう思った。

この快速列車は南福岡まで各駅に停まる。そして、南福岡を過ぎると快速運転になり、鹿児島本線の主要駅にしか停車しなくなる。

雑談をしている間にも、８１３系は南福岡までコマを進めてきていた。ここ南福岡ではちょっと長い間停車していた。昔はこんなことも気にも留めなかったのに。今となってはこの小さな停車にも意味があるというのを理解できる。

「あっ、「つばめ」だ。」

ずっと外を眺めていた朝風がつぶやいた。僕もその方向へ目線を移す。すると視界にシルバーの車体が特徴の７８７系が通過していくのが見えた。

「佐久間、あれに乗ってったのかなぁ。」

ふとそんなことを思った。

その後は「つばめ」が通って行った方向とは逆の方向に目を向けていた。ずっと景色を眺めていたのである。今でも流れていく景色

を見ることは楽しいと思っている。しかし、なぜこれが楽しいのかと聞かれると答えられなくなる。たぶん、理由にできない楽しさがあるのだろう。南福岡の次。春日を通過すると春日の前に広がる広場が目に入ってきた。たくさんの人が何かの準備をしていた。たぶん、お祭りか何かだろう。準備中の屋台と上に架けられた提灯を見て直感した。

春日を通り過ぎると見るものが何もないわけではないが、ボーっとしている以外することがなくなった。ゲームとかはしないのと思っているだろう。ゲームなんて電車に乗ってするものではない。僕は電車に乗ってすることは景色を楽しむことだけでいいと思っている。暇ではないかと思っているかもしれないが、案外暇ではない。

９時１６分。快速列車に揺られるのはここまでである。ここは終点の荒尾ではなく一つ手前の大牟田。ここで列車を乗り換え、目的地の熊本まで行く。

「まずはここまで来たな。」

大牟田のホームに降り立って体を伸ばす。

「なんで、荒尾まで行かないんですか。」

空河はこの途中下車について疑問に思っているようだった。

「荒尾まで行っても、ここで降りても同じだからさ。」

僕はそう説明した。

「永島さん。次の「特急つばめ５号」がやってきますよ。」

電光掲示板に目をやっていた朝風が教えてくれた。

「おお、７８７系が見れるじゃん。写真撮ってこう。」

「まあ、熊本に行ってからでも見れるんだけど・・・。」

見れるんだけど。いずれ見る列車である。いつ見ようが関係ないか。そうは思ったが携帯は撮りださなかった。もっとしっかりと収めるためである。

９時２７分。１番線に「特急つばめ５号」西鹿児島行きが入線してきた。綺麗なシルバーの車体。これが９両連なっている。到着するとホームにアナウンスが流れる。

「大牟田ー、大牟田です。」
「クドイー。」
空河がこのアナウンスを聞いてこういった。さっきも聞いたのであるが、何か言い方がクドイ。
「ああ、確かにクドイなぁ。」
「まあ、お客さんに分かりやすいようにしてあるだけだからしょうがないだろ。」
「いや、それは分かるんだけどね・・・。」
９時２７分。「特急つばめ５号」西鹿児島行き発車。７８７系の後姿を見送って、僕達はまた自分達がのる列車を待った。
何分か経つと１番線に僕達の乗る９時４０分発。普通熊本行きが入線した。
「今度はどんな子かなぁ。」
入線してくる車両を凝視する。
「うーん・・・。「赤いようで赤くない子」かなぁ。」
「どういう奴だよ。」
「だってそうじゃない。」
「確かにそうだけどさぁ。」
「「赤いようで赤くない子」。」
中学生の方にはすぐにこの呼び方が浸透した。
今「赤いようで赤くない子」と僕が命名した車両は８１５系。８１３系や８１１系と同じ通勤電車ではあるが、編成は３両、４両編成ではなく２両編成。僕は地元を走っている遠州鉄道、通称「赤電」のでっかいバージョンを見ている気になった。
ドアが開き、車内に入った。８１５系の車内はこれまで乗ってきた８１３系とは違い横１列に座席が並んでいた。こういうシート配置のことを「ロングシート」と呼ぶ。いくら鉄道に興味がないとはいえこれくらいのことは覚えてほしいものである。
「変わったロングシートだな。」
木ノ本が「ロングシート」に目をやった。

「確かに変わってるな。」
そういうのはこれが今までに見たことのある「ロングシート」ではないからだ。僕達が思っている「ロングシート」はベンチが並んでいるようになっているもの。しかし８１５系の「ロングシート」は椅子が横１列に礼儀正しく並んでいる状態だった。「こんなことを考えているとすぐに席が埋まってしまう。」と思い腰をかけた。
９時４０分。普通熊本行きが大牟田を発車した。どのくらい席が埋まるか分からなかったが発車するとその答えが出た。席は埋まるどころか空いているのが目立つくらいだった。
「次は、荒尾ー、荒尾。」
大牟田を発車するとお約束のアナウンスである。
「荒尾では、ホーム側の全てのドアが開きます。」
「何今の・・・。」
「ふつう言うか。あんなこと。」
浜松の方では聞いたことのないアナウンスを聞いた。
荒尾駅に近づいた。
「間もなく、荒尾ー、荒尾です。荒尾ではホーム側の全てのドアが開きます。」
「さっきのあれといい、これもクドイですねぇ。」
「全部開くんだったら、言わなくていいじゃん。開かない駅だけ言えばいいのに。」
「これって、現実にそういう駅があるってことだよなぁ。」
「じゃあ、乗ってる間に全部開かない駅があるっていうの。」
「たぶんあるんじゃない。」
「それだったら面白いなぁ。」
ドアが開かない駅がある。そのことだけに期待した。
「次は南荒尾ー、南荒尾。南荒尾ではホーム側の全てのドアが開きます。」
次は違った。
「次は長洲ー、長洲。長洲ではホーム側の全てのドアが開きます。」

次も違った。
　その後も全部開かない駅があるかと思っていたが、「一番前のドアのみ開きます。」の様なアナウンスは僕の記憶では来なかった。
　１０時１５分ごろ。
「間もなく植木ー、植木。植木ではホーム側の全てのドアが開きます。」
「いい加減にしてくれませんかねぇこのアナウンス。」
「何言っても無駄だろうなぁ。この列車ワンマンだからアナウンスは全部コンピューターがやってる。コンピューターぶっ壊さないと黙らないね。」
「もういいでしょう。」
「うん、どうでもいいよ。つうか、「ホーム側の全てのドアが開きます」って完全にウケ狙ってるだろ。」
（いや、ウケ狙ってるはないと思うけど・・・。）
「１枚目と３枚目のドアが閉まります。ご注意ください。」
「んっ。どうかしたのかなぁ。」
「何か通過する（おいぬく）んじゃないんですか。ほら、本線の出発信号機が青になってますし。」
朝風が本線の信号を指した。
　数分経つとさっき大牟田で見た７８７系が放たれた矢のごとく通過していった。僕達のいる進行方向右側の席からは西鹿児島へと急いで行く７８７系が見えた。その姿を見えなくなるまで僕達はその姿をおった。
　７８７系が通過してから１分くらいがたった。僕達の８１５系も植木を発車する。ここ植木を出ると終点熊本までは４駅である。
　さっきと同じくすることがないのは変わらない。僕はボーっと外を見ていた。
（萌もつれてきたかったなぁ。・・・。）
「えっ。」
なぜか木ノ本が反応した。心の声ではなく、本当の声になっていた

ようだ。
「なっ・・・何か言ってた。」
（顔が赤い・・・。）
「別に、何も言ってなかったけど。」
「そっ・・・そう。ならいいや・・・。」
（知ってるよ・・・。私よりも好きな人いるって・・・。でも、すごいもんだよなぁ。学校離れちゃったらふつう終わるって。永島と坂口さんの間は一言じゃ語れない恋だよなぁ・・・。そう言えば、坂口さんから永島の進路聞きだしてって言われてるけど、まだ考えてないよなぁ。いや、考えてるはずがないかぁ・・・。）
１０時３２分。熊本に到着した。

33列車　聞けない（後書き）

エクセルの書いてある設定表を見てみたら、アヤケン先輩と永島は眼鏡をかけていました。文中にその描写がなくてすみません。

なお、今回みたいに場所が変わるとこういうこともあるんだということはよくある話だと思います。この話みたいに「すべてのドアが開かない時にそう言えよ。」とも言いたくなることがたまにありませんか・・・。

３４列車　熊本市電

１０時３２分。熊本に到着した。
「さて、こっからどうしようか。」
「とりあえず、市電に乗ってこないか。だいたいここにきて乗る目的がそれしかないだろ。」
「そうだったな。んじゃあ行こうか。」
皆を促して改札口を抜けた。
「市電に乗るのはいいですけど、どこまで行くんですか。」
「とりあえず、終点までだろ。」
「そうだな。」
「全区間乗りつくしはできないにしても、一番長い系統乗りつくしよっか。」
熊本の駅舎を出て最初に飛び込んでくる路面電車の電停に向かう。
「あっ、あの車両は。」
空河が入ってきた白い車両を指差した。
「超低床車（ＬＲＴ）かぁ。」
「何系とかそういうのは分からないけど、ああいうのもあったなぁ。」
話しながら、電停まで足を運んだ。
電停まで行くと、最初に来た健軍町行きの路面電車に乗り込んだ。車内に乗り込むとほぼ一番乗り状態だった。僕たちは誰も座っていない運転席の後ろの席を占拠した。
「超低床車（ＬＲＴ）に乗れて感激です。」
「これだけで感激してもどうだろうか。」
「そんなことより、財布の中身確認したか。」
「なんでですか。財布ならちゃんと持ってますし、パクられてもいませんけど・・・。」
「そうじゃなくて、１５０円しっかりあるかってことよ。もし５０

０円とかで運賃出したらお釣りが返ってこないぞ。」
「あっ、そっか。」
皆財布の中身を調べた。その後両替をしたのは僕と空河だけであった。木ノ本と朝風はちゃんと１５０円あったらしい。
路面電車に揺られて４２分。熊本市電の終点健軍町に到着した。
「ちょうどいい時間だし、お昼にしない。」
「そうだな、どっかマックスでも探して食べちゃうか。」
「いや、マックスはどうだろうか。せめてでもコンビニだろ。」
「うーん、そうか。空河、朝風。どっか行きたい所ある。」
「僕は昼が食べられればどこでも。」
「僕もどこでもいいです。」
（これだ・・・。）
「うーん、仕方がないからそこらへんでコンビニでも探すか。」
「探すって言ってもどうするんですか。ぱっと見、このあたりにはコンビニとかもないと思いますけど。」
「あっちのアーケードの方とかないのかなぁ。」
「ないと思うけどなぁ。パチンコ店ならあるけど・・・。」
「じゃあ、どうすんのよ。」
「さっきマックスがありましたけど。」
「ああ、じゃあそこにするか。」
というわけで健軍町の一つ手前健軍交番前まで歩いて行くことにした。しかし、そこにたどり着いてみると、
「なあ、永島。こんなに人たくさんいて、入りたいって思うか。」
「うん、確かに思わないな。」
「ここまで並んで物を食べるっていう人の気がしれませんね。」
「ここまで並んでると、食べる気を失せますねぇ。」
「うーん、じゃあどうしようか・・・。」
「まず、ここから出よう。それから考えればいいよ。」
なのでここにいたのは１０分くらいだったかもしれない。
「そう言えば、交通局前とかっていうところに車庫があったろ。あ

れ見ていかないか。」
「ああ、いいね。空河、朝風。どう思う。」
「別にいいですよ。」
「はい。」
全員一致。交通局前で途中下車することにした。
「そういや、乗務員の交代もここでやってたよなぁ。」
「ああ、そうだったな。」
そういう雑談をしながら、交通局前まで戻ってきた。
「案外暇なところだな。」
「何言ってるんですか。木ノ本さんの提案でしょ。」
「いや、そうだけどさ・・・。」
「でも、熊本市電っていっぱい車両あるんだな。一枚くらい写真撮って行くか。」
遠くに留置されている熊本市電の車両を携帯に収め、すぐに交通局前に戻った。
「で、こっからどうするつもり。」
「そうだな・・・。」
「もういいですよ。熊本駅戻っちゃいます。」
「熊本城とか行かないのか。」
「楽しめる人は楽しめますけど、僕たちじゃ楽しめませんよ。」
「まあ、それで集まったようなもんだしなぁ。」
「んじゃ、熊本に戻って昼飯でいいか。」
「それでいいよ。」
「確か構内にコンビニありましたよね。」
「ああ、あったね。」
「それで決まりでいいか。」
結局健軍町までいった意味は熊本市電に乗りたかっただけでしかなかった。
熊本に戻ってきて、お昼を食べて12時47分。ホームに入り、車両撮影を行うことにした。たぶん僕たちなら乗りきることができ

るだろう。
「永島、１３時０７分に「特急くまがわ」って言うのが来るけど、これ知ってる。」
「「くまがわ」。知らないけど。」
「あっ、それキハ１８５で運転されてる特急です。」
「空河詳しいなぁ。」
「この位常識ですよ。木ノ本さん。」
「あれ、キハ１８５ってＪＲ四国の車両じゃなかったっけ。」
「確かに四国の車両です。でも九州に走っているキハ１８５は九州が買ったやつなんです。」
「へぇ。そうなのか。」
「空河、本当に詳しいな。」
「これでも知らない方ですよ。僕が一番知っているのは北海道のディーゼルカーですから。」
「そこまで知ってれば困らないって。」
１３時０７分。「特急くまがわ」を撮影。その後は４・５番線に行って、僕達がのる列車をゆっくりと待った。
「おーい、隣に「つばめ」が止まってるぞ。」
「あっ、本当だ。」
「撮りに行かないのか。」
「もう、間に合わねぇよ。」
「ああ・・・。それもそうだな。」
それから何分経っただろうか。
「永島さん。あすこに７８７系いますけど。」
「どうせ、「有明」か「つばめ」だろ。」
「いや、そうじゃなくて・・・。」
僕の肩を叩いて、こっちに来てという動作をする。
「ホームに入らずに止まったままなんです。」

３４列車　熊本市電（後書き）

研修の２日目。これって作ってくと研修じゃなくて完全な旅行になるんですよねぇ。まぁ、実際がそうだったというところもありますから・・・。

35列車　トラブル

それから何分経っただろうか。
「永島さん。あすこに787系いますけど。」
「どうせ、「有明」か「つばめ」だろ。」
「いや、そうじゃなくて・・・。」
僕の肩を叩いて、こっちに来てという動作をする。
「ホームに入らずに止まったままなんです。」
「ホントだ。何やってんだろ。」
「ちょっと。大事な放送が聞きとれないだろ。静かにして。」
木ノ本は耳に手を当て、構内放送に聞き耳を立てた。しばらくすると、耳にあてた手を下した。
「なんて言ってたんですか。」
「よくは聞きとれなかったけど、人身事故だって。」
満面の笑みを浮かべていった。
「へぇ、人身事故かぁ。」
「なんだ。人身事故か。」
「人身事故ねぇ。」
しばらく沈黙があった。
「・・・はっ。人身事故。」
「事故ってやばくないですか。」
「列車遅れてるんじゃないんですか。」
「いや、電光掲示板見てみたけど遅れてないよ。」
「そんなにって何分くらい。」
「7分って書いてあるけど。」
「上りが7分ってことは事故があったのは下り線ですね。」
「なーんだ。下りなら、関係ないじゃん。」
事故が下り線であったということを知ると全員安心した。本当は安心してはいけないのかもしれないが・・・。

結局僕達がのる列車は１０分くらい遅れて熊本に入線してきた。
「行きは「赤いようで赤くない子」。帰りは「黒い子」かぁ。」
入線してきた８１７系に部活内でのあだ名をつけた。
「今度は「赤電」が黒になったバージョンかぁ。」
「永島さん。早く来てくださいよ。席とっておきましたから。」
空河の呼び掛けに応じて、僕達も８１７系に乗り込んだ。
そのころ名寄、箕島班はというと、
「名寄先輩どうするんですか。」
「ああ、ハマっちゃったな。」
「ハマっちゃったじゃなくて・・・。」
「なんでこう俺たちの行くところは何かあるんだ。」
名寄の口調はいつになく荒かった。
（そんな文句言ってる場合ですか・・・。）
綾瀬、醒ヶ井班はというと、
「アヤケン先輩どうするんですか。」
「まあ落ち着けって。」
「おちついてられますか。事故にハマったうえ、列車遅れてるんですよ。」
「そんなことより、この景色いいと思わないか。これをモジュールにしたらどうだ。」
アヤケン先輩は窓の外を流れる景色を見て手を右から左に動かした。
「アヤケン先輩。」
「何。」
「僕の話まともに聞く気ないでしょ。」
「ないよ。」
（こら。）
鷹倉、楠班は、
「なんであたし達の行くところはこうやって何かあるのかなぁ。」
「嫌われてるんじゃないの。」
「そうかもしれないけどさぁ。」

「そんなことより寝とけって。まだ先長いんだぞ。」
「ハクタカに寝とけって言われても、安心できなよ。」
「なんでだよ。線路のポイントが変な方向向いてない限り、死にはしないんだから安心して寝ろって。夜行バスの中で寝れなくても、知らないからな。」
「いや・・・。そうじゃなくてね・・・。つうか、それハクタカの方だろ。」
北斎院、善知鳥班はというと、
「サヤ、熊本の方で人身事故あったんだって。」
「はっ、ザマア。」
「いや、帰りの心配・・・。」
「いいよ。いざとなったら新幹線使うから。２０分でワープできるぜ。」
（あんたねぇ。）
佐久間、諫早班はというと、
「おい、あすこにＮ７（エヌな）がいるぞ。」
「それ、浜松でも見れるじゃないですか。」
「あっ、それもそうだな。」
会話を聞いていて分かるだろう。一番平和なのは佐久間の班である。
１３時５７分発の普通鳥栖行きに乗り込んで植木までやってきた。
「うわ。下り最悪だな。」
「「つばめ」停まってし。」
「佐久間さんも熊本きてますよねぇ。」
「ああ、事故のことかぁ。「つばめ」が遅れてるもんなぁ。」
「大丈夫ですかねぇ。」
「大丈夫だろ。心配しなくていいよ。」
その後はこの「８１７系」に揺られて鳥栖駅まで向かった。
その間に木ノ本達は寝入ってしまった。僕はというととりあえずこの班の班長として責任を全うしなければいけないと思い、眠いのを

我慢して起きていた。
８１７系に乗って何時間経っただろうか。次がようやっと大牟田である。さすが鹿児島本線の普通列車。１３時５７分に熊本を発車して、終点鳥栖の到着は１６時０９分。さらに、ここに人身事故による遅れが拍車をかけた。
途中、久留米だか、なんとかという駅に長時間停車した。本当なら、「つばめ」が追い越していく模様で、電光掲示板にはその案内が出ていた。しかし今になってはそんな表示何の役にも立たない。
結局あの時の停車もかさんで、終点鳥栖に着いたのは、定刻より３０分近く遅れていた。
「こっから快速かぁ。長かったなぁ。」
「寝てたのに、そんなに長く感じてないだろ。」
「うん。そうかもね。今度は永島が寝れば。」
「バッ、バカ。電車に乗って寝れるかよ。」
「まあ、そういうと思ったけどな。」
８１７系から降りて、対面のホームにいる８１１系に乗り込む。
「最後は「白い子」なんだな。」
「これで九州の通勤電車、ほとんど乗車しちゃったな。」
「へぇ。九州って思ったより電車少ないですね。やっぱ大半はディーゼルなんですね。」
「これが最後ですか。」
一言ずつ言って、車内に入った。
車内は思っていたより空いていた。４人掛けることができる転換クロスシートに座って発車を待った。
発車すると、全列車お約束の車内放送である。
「鳥栖駅からご乗車のお客様、快速小倉行きです。この先、基山、原田、二日市、大野城、南福岡、・・・。」
「なお、この列車は途中春日に臨時停車をいたします。」
「はっ。」
全員の声がそろった。

「あれ。朝、春日に停まりましたっけ。」
「んっ。停まらなかったと思うけど。」
「思うんじゃなくて、停まってない。」
「なんで停まるんだよ。朝通過してったんだから通過してけよ。」
「まったくだ。」
「あんな駅停まる必要ないじゃん。」
「何のために停まるんだろうなぁ。」
朝風の言った何のためにというのが引っ掛かった。とりあえず今日一日のことを整理してみる。すると・・・。
「もしかして・・・。」
皆の目線が僕に集中する。
「お祭りのために停まるのかも。」
「祭りのため。」
「うん。車内見てみても分かるけど、浴衣着てる人がいる。浴衣着てる人がいるってことは、どっかでお祭りがあって、それに行く途中だっていうこと。そして、朝春日を通過した時にお祭りかもしれない準備してた。」
「はい、その祭り死ね。」
「そのためだけに停まるんですか。」
「たぶん・・・。いや、絶対。」
「マジすか。ただでさえ遅れてるのに、そんな駅に停車してる場合かよ。」
当然、どんな文句を言おうが春日に停車することは確定なのである。文句も言うのはやめにしてと言いたいところだが、その春日駅が近づいてくると、また文句の嵐になった。しかし、過ぎてしまえば文句の嵐も治まった。
春日の次は南福岡に停車する。ここに停車すれば、戻ってきたという感覚が持てる。
「やっと南福岡か。戻って来たなぁ。」
「ああ。」

南福岡停車。ドアが開いた。
すると、またここでもアクシデントがあった。
「あの男の子どうしたんだろう。」
木ノ本がそうつぶやいた。一人で泣いている男の子が気になったらしい。
「んっ。ただ親とはぐれただけだろ。」
「永島、お前頭ちゃんとある。」
あきれられてしまった。
「どうかしたんですか。」
「ちょっと黙ってくれない。聞きとれないんだけど。」
こういうことがあると何でも聞き耳を立てたくなるというのは一種の癖なのだろうか。僕も同じように聞き耳を立てた。
「Tシャツの・・・が・・・刺さってるねぇ。」
「これ取り替えて・・・。」
「・・・わかりました。」
車掌と駆けつけてきた駅員が話している。
このやり取りが終わると、そこから目線をそらした。
「なんて言ってたんですか。」
「んっ。Tシャツのなんかがどうとかって言ってたけど・・・、よくは聞きとれなかったよ。」
「そうですか。」
「はあ、終わったんだったらさっさと発車しろって。」
「まあまあ。」
「お待たせいたしました。」
「待たせ過ぎだよ。」
「快速小倉行き発車します。ドアが閉まります。ご注意ください。」
ドアが閉まるとため息をついた。
「どうした。色々ありすぎたからため息でも出ちゃったか。」
「ああ。それもあるけど、善知鳥先輩が朝言ってたことがようやっと分かった気がした。」

「なんて言ってたの。」
「んっ。何もないことを祈(いの)っとけってね。」
「ああ、納得(なっとく)。」
博多(はかた)に到着(とうちゃく)すると、改札(かいさつ)を出た。

３５列車　トラブル（後書き）

事故は実際ありました。
今になってこのときあったことをちゃんと書きためておくべきだったなぁと後悔しています。

36列車　夜行バスで

博多に到着すると、改札を出た。
「どうする。17時29分発の博多南行きに乗ろうと思えばまだ乗れると思うけど・・・。」
腕時計を見て今後の予定を話した。
「もういいよ。どこにも行きたくないもん。」
「空河は。」
「別にいいです。」
「朝風は。」
「新幹線だったらいつでも見れますしね。」
「で、永島は行きたいのか。」
「別に。」
「んじゃ、入場券買って入って、新幹線でも車撮しるか。」
「140円払ってまで車撮に行くんですか。」
「もう動きたくないですよ。」
「そうだろうなぁ。私はまだ行けるんだけどみんながダメじゃあなぁ。」
「えっ。俺もダメじゃないけど。」
「・・・。」
「で、どうする。」
考え込んだ。皆の体力はすでに限界に達している。これ以上無理をさせることもないだろう。
「んじゃあ、終わりにするか。」
17時25分くらいだろう。僕達の自由行動はここに終了した。その後、バスの発着する筑紫口の方に足を運んだ。
「永島。」
筑紫口をもうちょっとで出ようとした時、誰かに呼ばれた気がした。
「永島さん。」

声のする方向を探してみる。
「あっ、あすこ。」
木ノ本が上を指差した。長い階段とエスカレーターの向こうにいるのは佐久間と諫早だった。僕達はそこまで続くエスカレーターを上り、上まで行った。
「佐久間来てたんだ。」
「人身事故とかって大丈夫だったか。」
「えっ事故って・・・。」
「・・・。しっ、知らないの。」
「ああ。そっち事故あったの。」
「あったよ。おかげで列車は遅れるわ、春日とかいうところに臨時停車がするわで散々（さんざん）だったんだからな。」
（いや、臨時停車の方はそれのせいじゃないと思うけど・・・。）
「それいつくらいにあったの。」
「たぶん13時30分とか、それくらいだよな。」
「そんとき俺ら、熊本にいないからね。」
「はっ。」
「さっさと「つばめ」で帰ってきてたから全く関係ないよ。」
（それ、普通で行ってた俺らがバカみたいに見えるじゃないか・・・。）
「でさぁ、「つばめ」ん中で・・・で乗ってきた。」
「何やってんだよお前ら。」
僕と木ノ本の声がそろう。
「フハハハハハ。スリル満点で楽しかったよ。」
あきれて言葉も出なくなった。
「スリル満点だろうがなんだろうが、何やってんだよ。」
「前々から、やるやるとは言ってたけど、本当にやるとは・・・。」
ここで言っていることは読者の皆様には実行してほしくない。
その後は21時に出る夜行バスまでゆっくりと待った。今度は待つ時間が長い。そして、僕は夜行バスの中で寝れるのかと思ってい

た。正直言うと僕が乗り物で一番嫌いなものがバスなのである。
「なんで「ムーンライト山陽」とか「ムーンライト九州」じゃないんだよ。」
同じ文句を言っているのは木ノ本である。なお、説明が遅れたが、
「ムーンライト山陽」は下関までなので博多には乗り入れない。
「ホント、バスって死ねばいいと思う。」
「バスってどこがおもしろいんですかねぇ。僕には全然分りません。」
朝風が話しに入ってくる。
「それプラス格安でしょう。」
空河も入ってくる。
「そうだな。アドの爺のことだから格安のやつだよなぁ。」
「夜行バスと「ムーンライト」だったら、まだ「ムーンライト」の方がましですねぇ。」
「だな。夜行バスって乗ったら最後監禁されないといけないからな。」
「もう、走るホテルじゃなくて走る牢屋だよ。あんなの乗ったら死んじゃう。」
「走る牢屋って。そこまでひどいのか。」
「ひどいってもんじゃありませんよ。ゴミです。ゴミ。」
すると、怒ったような口調になって続けた。
「僕一度に夜行バス乗りましたけど、寝れるようなもんじゃありません。床下からのエンジン音はうるさいし、縦や横に揺れまくって寝れません。で、寝れなかったら外見てればいいやって思って外見ようとすると、車内に明かりがちらついて他の客が眠れないだの。うるさいですよ。」
「朝風いいこと教えてあげようか。」
今度は後ろで声がした。この会話を聞いていたのだろう。ハクタカ先輩が立っていた。
「いいか、夜行バスって、麻酔薬を常備して乗るもんだぞ。あんな

のの中で寝られる人は神経がおかしいんだ。」

（うっ、そこまで言うか・・・。）

「えっじゃあ、ハクタカ先輩って眠り薬持ってきてるんですか。」

「んっ。ああ。麻酔薬ないと眠れないって。バスに乗った段階でこれ飲んじゃえば発車する時にはたぶん寝入れると思うから。」

「そんなの持ってきてたんだ。」

「うるさいな。ないと眠れないんだよ。」

「えっ、ハクタカ先輩って不眠症ですか。」

「違う。バスがゴミだから眠れないだけ。」

「違う」の言葉の後は胸を張って言っていた。そして、「ゴミ」を強調していた。

２１時２０分。自分達が乗るバスに乗り込み、発車を待った。

２１時５１分。発車時刻から1分が経った。まだバスはエンジンをフル回転させていない。その後5分経っても、１０分経っても、１５分経っても発車する気配はなかった。

「なあ、朝風。バスってこんなにトロイもんか。」

木ノ本が前の席にいる朝風に話しかける。

「トロイもんですよ。これだからバスは嫌いなんです。できれば「寝台特急」とか「寝台特急」に乗りたかったですけど。」

「まあ、乗してくれるわけないな。」

「そうなんですけどねぇ。」

「そんなに寝台特急に乗りたいのか。」

木ノ本の隣に座っている楠が朝風に聞いた。

「はい。寝台特急にはこんなのにない良さがいっぱいありますから。」

（こんなのに（バス）ない良さ・・・。）

「うん。朝風、君は立派だよ。」

「でも、なんでそんなこと聞くんですか。」

「んっ。ああ、ちょっと気になっただけだから。」

２２時１５分。ようやっと九州福岡を発った。

バスは発車するとすぐに高速道路に入った。高速道路に入るとすぐに車内灯が消される。車内灯が消えるのはいいのだが、どうにもならないものがあった。バスのエンジンである。この床下から聞こえてくる電車のモーター（吊り掛け）よりもひどいこの音はどうにかならないのだろうか。ずっと思っていた。しかし、こんなこと思ってもどうにもならないのは分かっている。その夜、僕はこれのせいで眠れなかった。

３６列車　夜行バスで（後書き）

これはひどすぎでは・・・。

言動は確かにひどいですが2日目終了。次からようやっと最終日に入れる。

37列車　大阪にて

時計を見てみる。指していたのは2時56分。
（あと4時間くらいどうすればいいの・・・。）
今この時間まで起きていたことは初めてだ。どっかで記憶が飛んでくれればいいのだか、なかなか思っているようにならない。僕はいつになったら眠れるのだろうか。下手をすると電車の中で寝てしまうことになる。どうしてもそれだけは避けたい。
後ろを見てみる。僕は夜行バスの真ん中くらいの通路側の席に座っている。後ろは真っ暗だった。霧に包まれているわけではないのだが、何だか怖く感じた。そんなに臆病なつもりではないのだが・・・。

それから何分経っただろうか。夜行バスはどこかのサービスエリアに入った。車内灯がつけられたが、起きたのは僕だけだった。
バスの外に出て伸びをする。ずっとバスという監獄の中にいたのだ。エコノミー症候群になる人の気持ちが分かる気がする。
「ああ、眠い。」
ふと声が漏れた。
（こんなんで耐えられるのか。）
自問自答した。
5時00分。今いるところがどこかは分からない。バスの進行方向に夏の太陽が昇り、バスの中を少し明るくした。
（早く着いてくんないかなぁ。）
今がとても暇な僕に5時という時間は牙をむいていた。
6時34分。大阪の中心部に到着する。本当はこんなに早く着かないのに・・・。
「皆さん。ここに14時30分に集合してください。」
バスを降りて少し歩いたビルの下で集合場所の説明がある。この集合の説明を受けたら、また自由行動だ。

「永島。「きたぐに」でも撮りに行くか。」
木ノ本が誘ってくれた。
「うん。早く行こうぜ。」
「あのう、「銀河」も見れるんじゃないんですか。」
「ああ、「銀河」もあったか。」
説明しよう。今話しに出てきた「銀河」とは、東京～大阪間を走っている夜行列車の名前である。２４系客車という「寝台特急」に使われている車両が充当されている。また、日本に数少なくなってしまった急行列車の一員でもある。
もう一つの「きたぐに」とは、大阪～新潟間を走っている夜行列車の名前である。この列車も「銀河」と並ぶ急行列車で、今も定期運行をしている貴重な存在である。この「きたぐに」に充当されている車両は５８３系。日本ではもうこれでしか味わうことのできない３段寝台も備えている。なので、この意味でも貴重な存在なのだ。
「何言ってるんですか。「銀河」撮れるわけないでしょ。大阪着７時１９分なんですから。」
朝風が入れ知恵する。
「あれ、「銀河」ってそんなに到着する（くる）の遅かったっけ。」
「ええ。それに7時１９分に大阪にいたら「彗星」をゆっくり見ることができませんよ。」
「うーん。「銀河」か、「彗星」か・・・。」
考え込む。
「僕だったら断然「彗星」ですね。「銀河」だったら浜松でも見れますから。」
朝風が言う。
「夜遅いけどな。・・・。やっぱ「彗星」かな。「彗星」は大阪でないと撮れないからなぁ・・・。」
「て、お前らがそんなことより、まず「きたぐに」だろ。」
やれやれ。僕がこの仲を仲裁していなかったら「きたぐに」も見れなくなってしまう。

大阪駅４番線に到着すると、
「「銀河」、撮れないのかぁ。」
木ノ本は不機嫌な顔をしてぼやいている。
「まったく。「銀河」も「彗星」もＫＹなんだよ。」
（いや、「銀河」や「彗星」に「空気読め」っていう方が無理なんじゃ・・・。）
「そんなこといいじゃないですか。「きたぐに」が見れるんですから。」
ちょっと考えてから、
「それもそうだな。」
「銀河」のことは吹っ切れてくれたのだろう。笑いながら、カメラを取り出していた。
６時４９分。４番線に「急行きたぐに」が入線する。入線してくる間、「きたぐに」をずっと見ていれなかった。黄色く光るヘッドライトがとても眩しかったからだろう。「きたぐに」はゆっくりと入線し、僕達の少し手前でブレーキをきしませ、停車した。
「５８３系かぁ。一度は乗ってみたいですね。」
朝風は目を細めて、５８３系の体を触っていた。
「朝風、ちょっとどいて。」
その声を聞くと朝風が５８３系から離れた。朝風の姿がカメラに映らないことを確認して、シャッターをきった。
「よく撮れたか。」
シャッターをきり終わると木ノ本が話しかけた。
「まぁ。」
「へぇ。」
木ノ本は携帯を覗き込むと、
「彼女か誰かに送ってやれよ。」
彼女という言葉に面喰った。
「バッ、送んねぇよ。つうか、送ったところで分かんねぇよ。」
「それもそうか。」

冷やかしだろう。木ノ本は少し笑っていた。
「あっ、そうだ永島。「きたぐに」に使われてるあの車両。なんていうんだ。」
木ノ本のその言動にはよろめいた。知らないはずはないんだけど・・・。
「さっき朝風が言ってただろ。５８３系って。」
「へぇ５８３系っていうんだ。私はてっきり「雷鳥」とかの４８５系だと思ったよ。」
「まあ、無理もないよな４８５系と５８３系ってよく似てるもんな。」
「よく似てる恰好してて、中身がすごく違うんだろ。ああ覚えづらい。」
その後独り言のように、
「ダメだ。結構長い間電車と離れてたから、記憶が何かと混ざっちゃってる。」
と言っていた。こういうわけは、自分の趣味を長い間隠していたからである。４月の時に言っていたが、僕ら以外で木ノ本の電車好きを知っているのは親と親友だけらしい。そして、その数は１０人もいないと言っていた。
「まあ、そのうちまた覚えるって。国鉄ほど覚えやすいもんのないから。」
「ナヨロン先輩からの受け売りか。」
「まあ、そんなとこ・・・。」
その後は「きたぐに」も車庫に回送されるまで写真を撮り続けた。
そして、回送される時は全員でその後ろ姿を見送った。
ＪＲ西日本色の５８３系が隣を通り過ぎていく。
「行っちゃいましたね。」
朝風が名残惜しそうに言った。
「できれば、国鉄色の方がよかったなぁ、俺あれの方が好きなんだけど・・・。」

その国鉄色という色は窓周りが青でそれ以外のところがクリーム色になっている塗装だ。

（こいつ、彼女いるのに「好き」とか「嫌い」とかふつうに言ってるよな。絶対、彼女に勘違いされるぞ。）

「どれくらい。やっぱ彼女くらいか。」

「そんなの比べられないよ。」

腕組をして目を閉じた。

「一つ言えるのは、１００系以下だってことだな。」

「１００系好きだな。」

「うるさいな。好きなんだからしょうがないだろ。」

（・・・。）

勘違いされるかどうかは別として話を進めよう。

「永島さん。今度は何車撮るんですか。」

「うーん、ちょっと待ってね。」

ポケットから臨地研修のために持ってきたカンニングペーパーを取りだした。このペーパーには電車の発車時刻だけが記されている。

「えーと次は・・・、「彗星」だ。」

「「彗星」来たー。」

朝風のテンションがハイになる。僕にも分からないわけではない。

読者の皆様に説明しよう。「彗星」とは、新大阪と九州の南宮崎を結んでいる寝台特急の名前である。使用客車は２４系寝台客車で、さっき見た５８３系が充当されていた時代もある。

「「彗星」かぁ。名前的にはカッコいいよな。」

「それどういう意味だよ。」

「まあ、そりゃおいといて・・・、新大阪まで移動しないといけないのか。」

「でる方法だったら、いくらでもありますけどねぇ・・・。」

「「サンダーバード（とっきゅう）」使わない。」

「はっ。佐久間バカだろ。」

ここにいる全員の声がそろう。

「そんな一区間だけ「サンダーバード」使うって。新快速や快速、ましてや、普通でも所要時間変わらないのに・・・。」
空河が文句を言ってると、
「分かってる、分かってる。使わねぇよ。」
「んじゃあ、7番か8番線に行くか。」
木ノ本が全体を促してくれる。こういうときは撮り鉄として頼りになるのだろうか。それとも・・・。
「ちょうどいい列車がないのか。」
来てみるとこのありさまであった。ほんのちょっとではあるが、発車する列車を待つことになった。
「早くしないと、「彗星」来ちゃうじゃん。もう電光掲示板にも出てるし・・・。」
「まだ、大丈夫だって。」
7番線を諫早が指差した。
「すぐに発車する列車あるじゃないですか。一区間だけだし、我慢して乗りますか。」
諫早の指の先にはステンレスの通勤電車が止まっていた。207系という車両だ。
「そうだな。ここは207系に我慢して乗るか。」
「はぁ。しょうがないかぁ。」
「7番のりばから、普通・・・。」
「ヤベ。もう発車しちゃうじゃん。」
「早く乗るぞ。飛び乗ろうが、滑り込もうがなんでもいいから。」
4枚あるドアに流れ込んだ。さすが、この時間帯（通勤ラッシュ）だと思った。車内は人でいっぱいだ。関西の人も多さをあからさまに見せつけられた。

37列車　大阪にて（後書き）

この物語には自分の理想も含まれてます。特にこんなにたくさんのあれがあったらなぁ・・・。

自分でも創作で鉄道会社を作ったりしていますが、そこに必ずあるのはあれなんですよ。寝台特急という響きだけで夢を感じます。

38列車　車撮

5分後。新大阪に到着。新大阪に停車すると押し出されるようにしてホームに降りた。

「ヤバかったなぁ。あの人の数。」

「ヤバすぎだよ。関西ってもっと車両増やせばいいと思うんだけどなぁ。」

「そういうわけにもいかないんじゃないんですか。」

「まぁ、そうだろうけど・・・。」

「前来たことありますけど、あすこまで人が多いのは通勤ラッシュだけで、昼とかそういう時間帯はそんなに混んでませんよ。」

「へぇ、そうなのか。」

「の前に、朝風っていろんな所行きすぎじゃない。」

「あっ、バレました。」

「おい。そんなことより「彗星」だろ。」

諫早に怒られてしまった。

「早くしてくださいよ。もう後5分くらいしかないんですから。」

「んじゃ、聞くけど、「彗星」って何番線に入線んだよ。」

「12番線です。このホームは13・14番線ですから、隣です。」

中学生の方が情報通だ。高校生の方がしきられてしまっている。

「分かった。早い所行こう。」

降りたホームから階段を使い線路の上に行く。さらにこの上は新幹線ホームだ。だが、今は新幹線などにかまっていられない。早い所「彗星」を達成しなければ。

11・12番線に降り立つ。ここは特急専用ホームだ。11番線には紀勢本線の「特急くろしお」「特急スーパーくろしお」「特急オーシャンアロー」と「関空特急はるか」が、12番線には山陰本線の「L特急北近畿」「特急文殊」。また北陸本線の「L特急雷鳥」「特急サンダーバード」が発着する。そして、大阪と九州各地を結

んでいる「寝台特急あかつき（あかつき）」、「寝台特急彗星」、「寝台特急なは（なは）」と「寝台特急トワイライトエクスプレス（Ｔｗｉｌｉｇｈｔ Ｅｘｐｒｅｓｓ）」、「寝台特急日本海」が発着する。

７時２２分。

「１２番のりばに、当駅どまりの、列車が、参ります。黄色い線の、内側まで、お下がりください。」

アナウンスが入る。「寝台特急彗星」の接近がここに告げられた。

全員の顔が曲がって何も見通せない大阪方面を向いた。

７時２３分。大阪方面から甲高い汽笛が聞こえた。

「「ＥＦ６５（ぼく）は今日も元気です。」って言ってるみたいだな。」

「ああ、そうかもな。」

そして、姿をあらわす。前を見ている黄色い二つのヘッドライト。真ん中に掲げられている寝台特急の象徴。ヘッドマーク。そして、その後ろに続く７両の青い車体。新大阪～南宮崎間を結んでいる「寝台特急彗星」だ。

入ってくる「彗星」を僕達はシャッターの嵐で出迎えた。「彗星」は僕達がそんなに移動しないよう加減して停まったのだろうか。ゆっくり、ゆっくりとスピードを落とし、ギギギギギという鈍い音を立てて、停車した。

（一度でいいから、運転してみたいなぁ。）

心の中でその日が来ることを願った。

「一度でいいから、運転室中に入ってみたいなぁ。」

僕の傍らで木ノ本がそうつぶやいていた。

「早い所撮ってくださいよ。「あかつき」がすぐに来るんですから。」

僕も木ノ本も我に返って、

「あっ、そうだった。ここまで来て撮り損ねたんじゃ来た意味がないよ。」

（ヤベ、お土産一個減るところだった・・・。）
我に帰った後は「寝台特急彗星」を牽引してきたＥＦ６５－１１２３号機と、ヘッドマークのアップ。２４系のトレインマークなどなど。ざっと撮れる部分は撮り終えてしまった。そして、僕達が満足したことを見計らったのか。「寝台特急彗星」は新大阪駅から走り去った。
「お疲れ様。」
その後ろ姿を見送りながら、つぶやいた。女の子がテディベアに話しかけるのと、何ら変わりはないだろう。ただ、話しかけている対象が違うだけである。話しかけると、電車が「ありがとう。」と答えてくれる気がするのだ。
「さて、今度は「あかつき」だな。」
「ああ。「あかつき」も仕留めてやる。」
仕留めるという言葉に朝風があきれる。
「仕留めるって・・・。動物じゃないんだから・・・。」
「よーし、どっからでもかかってこい。」
聞く気のない木ノ本を見て、
「永島さん。木ノ本さんって、カメラ握ると１０歳くらい若返りますよねぇ。」
「んっ。そうなのか。」
「そうなのかって・・・。木ノ本さんだけじゃなくて、永島さんもそうなんですからね。・・・。」
その後朝風が何と言ったかは分からなかった。
「あっ、やっぱそう見えるんだ。」
「・・・。あの・・・自覚したことないんですか。」
「ないけど、友達からよく言われてたから。目だけ子供のままだって。」
「・・・。」
「そんなことより、「あかつき」のためにスタンバらなきゃ。」
固まったままでいる朝風を促して、「寝台特急あかつき」の停止目

標まで足を運んだ。
　７時２９分。大阪方面にこっちに向かってくる二つのライトが姿を現した。それに向けてカメラを構える。
「間もなく、１２番のりばに、寝台特急、「あかつき号」、京都、行きが、参ります。黄色い線の、内側まで、お下がりください。」
　７時３０分。ＥＦ６５－１１２０号機に牽引された、１４系寝台客車１３両が新大阪に滑り込んだ。
「・・・」
木ノ本は一人１２番線の大阪側の突端で固まっていた。
　７時３０分。
「１２番のりばから、寝台特急、「あかつき号」、京都、行きが、発車します。ドアが閉まります。ご注意ください。」
「寝台特急あかつき」の発車が告げられた。このアナウンスが終了すると、１４系の折り戸が閉まった。ブルーの車体についていた赤いランプも消える。
「ポッ。」
「あかつき」が短く挨拶をした。「もうちょっと、頑張ってくるよ。」といっている気がする。
（頑張ってね。）
心の中で「あかつき」を送り出す。そのやり取りをしているうちに、「あかつき」はゆっくりと走りだした。傍らを通って行くＥＦ６５のモーターがうなりを上げる。何とも腹に響く地声である。
　この地声の後は、足から伝わる振動と耳にする勇ましい音を聞いて「あかつき」のラストスパートを見送る。
　ラストスパートを見送り終わると木ノ本と合流した。
「なーぁ、永島。」
「何。どうしたのか。」
「「あかつき」シクッタよ。」
「あっ、そういうことね・・・。」
するとため息をついて、

「私「あかつき」に嫌われてるのかなぁ・・・。」
「・・・。」
どう言えばいいのだろうか。それに困る。
「うーん。木ノ本は「あかつき」のこと好きかも知れないけど、カメラが拒否ってるかも。」
「えー。「レフちゃん」が「あかつき」のこと嫌いなの。」
（レフちゃんって・・・。）
「ようし、決めた。今日から「レフちゃん」を特訓させるぞ。」
（特訓って・・・。）
「あの、木ノ本さん。言いづらいんですけど、それ一眼レフを特訓しても意味がないと思いますが。」
「うるさい。撮った写真がブレるのは「レフちゃん」がゴミだからだ。だから、そのゴミ要素をなくせば大丈夫だ。」
ちょっと救助を頼みたい。
それから、ちょうどいいくらいの朝御飯を食べて、９時２６分に到着する「寝台特急なは」に備えた。
「「なは」が来るのって何時ですか。」
「９時２６分。」
「あっ、そんなに遅いんですね。」
「まだ、遅い方じゃないだろ。「さくら」が東京に着くのが１１時２９分だから、そういう意味では「さくら」が一番遅いよ。」
「「さくら」も遅いけど、「はやぶさ」と「富士」も遅いよ。東京着は遅くないけど、西鹿児島着と南宮崎着は１５時１０分と１３時２３分だから。」
「そんな時間について何するんだよ。」
「だから、飛行機とかに客が流れるんですよ。あんなののどこがいいんですかねぇ。」
朝風が腕組をする。
「飛行機はただ速いだけだし、夜行バスはただ安いだけだし、車は窮屈なだけだし、自分で運転するから疲れるし・・・。」

（まだ、自分で運転してませんよねぇ。）
「まあ、そこは人それぞれだから・・・。ただ速いだけに見せられる人もいるかもしれないし・・・。」
「これだから、地球温暖化に貢献するんですよ。」
朝風は寝台特急の話になると燃える。というのが今回の臨地研修で分かったことでもある。
　朝御飯を食べ終わるとすることもない。それも人それぞれなのだが・・・。
「１２番のりばに、「特急、雷鳥、５号」、金沢、行きが、参ります。・・・。」
この放送を聞くと木ノ本が１２番線の京都側に飛んでいった。今度こそ失敗しないためだろう。僕達もその後ろを追う。
「「雷鳥」って４８５系ですよねぇ。」
空河が聞いた。
「ああ、そうだな。」
「「雷鳥５号（５ごう）」ってパノラマグリーン連結してましたっけ。」
「知らねぇよ。俺そこまで守備範囲じゃない。」
しばらく間をおいて、
「ただ、一つ言えるのは・・・、今木ノ本が行った方向はもしパノラマグリーンが連結されてるとしてアウトだってこと。」
「あれ、パノラマグリーンって大阪側でしたっけ。」
「大阪方だよ。」
「そうでしたっけ。」
「そうだよ。」
「あっ、僕てっきり金沢側だと思ってました。」
「まあ、デビューした時に金沢方にあったからな。無理もないかも。」
後ろから。カン、カン。コン、コン。軽快に新大阪のレールをたたく。その音がだんだん自分の方に近づいてくる。

チラッと後ろを振り向く。
僕の視界に三つのヘッドライトをつけた顔がある。
（早く行かなきゃ・・・。）
そう思い走り出す。すると、すぐに追い抜かれる。追い抜かれてもなお、その後を追う。ついにその速度に追いつき、僕が抜き返そうとしている時には、４８５系は鈍い音を立てて止まるころだった。
先頭には既に木ノ本がスタンバイしていた。
「あれ、「雷鳥」ってパノラマグリーン連結してたよねぇ。」
「連結してるよ。」
「もしかしてこれハズレかな。」
そうつぶやいていた。
「ハズレかもしれないけどさぁ・・・」
と言った時「雷鳥」の発車が告げられる。
「もう発車かよ。早いなぁ。」
と言うと、カメラ片手に１２番線の京都側の突端に走って行った。
僕も顔を「雷鳥」に向けて見送る準備をした。別れるときになるとどんな列車でも名残惜しい。
「雷鳥」は信号が青のことを確認すると、ゆっくりと新大阪を発った。軽く継目を叩いて、重く継目をたたく。少し重々しいのはモーターを積んでいるからだろう。４号車、３号車、２号車。そして、金沢行きの最後尾。１号車が通過した。
（んっ。これは・・・。）
１号車が横を通った時あることが脳裏に映し出された。
「パノラマグリーンってふつうのやつに比べると窓が小さい。後、トイレのところにある行先表示がふつうのほうはドア側の客室窓上にある。だから簡単に見分けがつくよ。・・・。」
これは文化祭の時にナヨロン先輩が教えてくれたことだ。
今自分の隣を走って行った車両の特徴はナヨロン先輩に教えてもらったこと全てに当てはまったのだ。
（間違いない・・・。）

今から携帯を出しても間に合うはずがない。それなら・・・。今は恥ずかしいだのなんだの言っている場合ではない。
「木ノ本。後ろだ。後ろがパノラマグリーンだ。」
大声で、構えている木ノ本に情報を提供した。
木ノ本の横を４８５系が通り過ぎる。
しばらくすると、木ノ本が高く手を上げた。親指を立てている。口が動いていたが、何と言っているのかは分からなかった。
また、合流すると、
「ありがと。永島のおかげで失敗せずに済んだよ。」
とお礼を言っていた。
「失敗されちゃ困ると思ったからな。」
「でも、向こうに行く奴だったとはなぁ。テールライトだったのが惜しかったなぁ。」
「何だと、貴様。せっかく教えてやったのに・・・。」
「まあまあ。」
空河が止めに入る。
「で、今からどうするんですか。まだ1時間以上ありますよ。」
「ベンチとかに座ってればいいだろ。」
「絶対座ってれませんって。車両が来る度にどっか行っちゃいますよ。」
「ハハ、それもそうだな。」
結局、「寝台特急なは」車で新大阪の在来線ホームで待つことになった。その間に「雷鳥４号」が来たが、ハズレだと言って撮りには行かなかった。
９時２５分。
「１２番のりばに、当駅どまりの列車が、参ります。黄色い線の内側までお下がりください。」
「ようやっと来たな。」
「でも、車撮とかで時間使ってそんなに長くなかったじゃないですか。」

「来たぞ。」
「寝台特急なは」姿を視界に捉えた。
この後、「寝台特急なは」が回送されるまで撮影を続け、「なは」が撮り終わると、佐久間達と別れた。佐久間と別れた後何をしていたかと言うと、ほとんどの時間をホームで過ごしていた。具体的に何をカメラにおさめたかというと、「特急オーシャンアロー」の２８３系。「特急北近畿」の１８３系。「特急くろしお」の３８１系。「特急はまかぜ」のキハ１８１系などなど。大阪に集結するＪＲ西日本の車両のほとんどを撮りつくした。さすがに１２時を過ぎると精神的にもまいってしまい、大阪のベンチに腰掛け、来る車両を眺めていた。

38列車　車撮（後書き）

・・・。

ようやっと臨地研修にも終わりが見えてきました。

何とか頑張ってきましたが、まだコメントが一つもないという状況が続いています。書いてくれると本当に助かります。

それとも話が話で書きづらいですか・・・。

39列車　寝たら死ぬぞ

１４時３０分。朝言われた集合場所に赴いた。
「サヤ先輩と善知鳥先輩何してるんですかねぇ。」
疲れた言い方で今二人を待っている状態である。
「特にサヤの方は時間守った例がないもんな。」
「それ8日の朝も言ってました。」
しばらくするとサヤ先輩達が戻ってきた。
「ちゃんと時間を守ってくれないと困ります。」
とアド先生に叱られていた。まあ、当然のことだろう。
「遊ぶのもいいけど、程々にな。」
アヤケン先輩がそう言っているのが嫌でも聞こえてきた。
１４時４３分。大阪駅のホームに再び戻ってくる。今日何時間見たホームだろうか。ハッキリの光景を見るのは嫌になった。だが、来る車両によりその光景も新鮮になる。
１４時５８分。いくら車両でも新鮮に感じられなくなった大阪駅を後にする時間がやってきた。
最後に乗るＪＲ西日本の車両である。その車両に目を向けた。
（マジ・・・。）
飛びはねたくなった。僕達の乗る新快速長浜行きは２２３系－１０００番台だったのだ。
「運が良かったな、自分の好きなやつに乗れて。」
後ろでナヨロン先輩が僕の肩を叩いて言ってくれた。
乗り込むと人でいっぱいだった。１２両編成のはずではあるが、こんなに混むものなのだろう。
ティントゥーン、ティントゥーン。１４時５９分。２２３系のドアが一斉に閉まる。１５時００分。２２３系がブレーキのストッパーを外した。ここから米原まで８１分。浜松まで２６４分の行程のスタートである。

新快速は１３０ｋｍ／ｈで米原を目指す。１４時５５分発の快速米原行きとは途中の長岡京でごぼう抜きした。京都までコマを進めると乗客の入れ替えがある。ここで運転席の右斜め後ろ。一番前の補助席を確保した。

その後は、運転手と同じ目線で前を見つめていた。１２両編成ということもあって僕の視界は人で遮られていない。そのためゆっくりと前の視界を楽しむことができた。走っている途中、何本もの旅客列車と数本の貨物列車とすれ違い、そのたびに空河と「何か来たな。」と言い合っていた。

１６時２０分。

「ご乗車ありがとうございます。米原ー、米原です。」

このアナウンスで耳に残るものがあった。

「なお、ドア付近にございます、ドア開閉ボタンを押して、お降りください。」

「ドア開閉ボタン。」

ドア付近にあると言っていたボタンを探した。見つけると何とも分かりやすいものである。

「僕が押します。」

空河が緑色の「開く」ボタンに手を添えた。

「おう、任せたよ。」

１６時２１分。米原の６番線に入線。停車するとドア開閉ボタンの上にあった黒い部分に赤くドアという文字が浮かんだ。この合図で空河がボタンを押した。

ティントゥーン、ティントゥーン。聞きなれた音を立てて、ドアが両側に開く。開き切るのを待たずに、ホームに飛び出した。

ホームには他のドアから降りた人もいる。真ん中のドアから降りるアド先生を視界の隅に捉えてから、階段のある方向へ歩いて行った。

次の列車は１６時３０分発。普通大垣行きだ。この列車はすでに８番線に控えている。それに向かって階段を駆け上がり、人の波を

かいくぐって8番線に向かう。新快速から大垣行きの普通列車の乗り換えは案外多い。行く手を阻まれながら向かった。

8番線に来るとオレンジ色のラインの入った白い車体があった。117系という車両であることはすぐに分かったが、中身はよく知らない。

（117系かぁ。）

と思って片側に2枚しか付いていないドアから乗り込んだ。車内をざっと見まわしてみれば、ほとんどの席が埋まっていた。その中で空いている席を見つけ、そこに陣取った。

「おい、永島。そこ私と変われよ。」

顔を上げてみれば、木ノ本の顔がそこにあった。

「なんでだよ。」

「私、新快速の中でずっと立ってたんだからね。足が棒になってるから変わって欲しいなぁって事。」

「・・・。」

「なぁ、お願いだよ。」

「分かったよ。」

木ノ本に席を譲り、僕は立つことにした。この列車は途中醒ヶ井、近江長岡と終点大垣までの各駅に停まって行く。さっきまでの新快速とは違いゆっくりとコマを進めていく。そのため、この区間はクソがつくほど長く感じてしまう。

「あーあ、さっきまでスッゲーカットンで来たのに・・・。」

さっきの223系の姿が脳裏によみがえる。確かに大阪～米原は早すぎるのだ。110.5kmを81分で結んでしまうのだ。他だったら考えられない距離を通勤可能区域にしてしまっているのだ。

「まあ、しょうがないだろ。」

「そりゃ、分かってますけど・・・。」

諫早がさっき発車した柏原の方向に目を向けた。

17時04分。117系に乗車するのはここまでだ。大垣に到着する直前局地的な雨に見舞われたもののホームの屋根の下にいる僕

達には関係のないことである。
１７時０９分。今度はＪＲ東海の新快速の出番である。この３１３系の新快速で終点豊橋まで揺られる。僕は途中の木曽川までは起きていた。木曽川を過ぎると空いている席にフラフラと歩いて行った。ちょうど楠先輩の隣が空いている。
「楠先輩。隣いいですか。」
「んっ。いいよ。」
窓側に行きたいと言ったわけではないが、楠先輩は窓側の席を開けてくれた。
「ナガシィすごく疲れてるみたいだけど、大丈夫。」
「大丈夫です。」
「そう。なら・・・い・・・。」
楠先輩の声がはるか遠くで聞こえていた。
１８時３０分くらいだろうか。
「・・・シィ、ナガシィ。」
身体をゆすっているのは誰だろうか。
「どうしたんですか。」
「ああ、榛名。次で乗り換えだから起こそうとしてるんだけど、起きないんだよ。」
楠先輩の隣に目を向けると窓に頭を押し付けた状態で寝ている永島が視界に入った。
（夜行バスの中で寝れなかったって言ってたもんな。ここで噴き出たか。）
「なんかいい方法ないかな。」
ちょっと考えてから、
「入れ知恵してくれる人だったらいるかもしれません。」
携帯電話を取り出し、ある人にメールを送った。
１分後その内容の答え返ってきた。
「ナガシィが寝ちゃった時は、くすぐってやれば一発だよ。」
メールはこうなっていた。

（マジかよ。）
「で、どうだって。」
楠が聞いた。
「ああ、知ってる人が言うにはくすぐってやれば起きるって。」
「はっ。くすぐるって・・・。」
「んっ。どうかしたんですか。」
「いや、どうもしないけど・・・。」
「じゃあ、早くしてくださいよ。」
「間もなく終点豊橋ー、豊橋です。乗り換えのご案内をいたします。・・・。」
車内に聞きなれたアナウンスが流れる。
「もうすぐ豊橋に着くんですから早くしてください。」
なかなかやりだそうとしない楠を急かす。
「榛名、変わって。」
「えー。」
「早く。お願い。」
「わ・・・、分かりました。」
楠と場所を変わり、永島の横に行く。
（本当に起きるんだよねぇ。）
ためしに彼女の言っていたたたき起こす方法を試してみた。すると、
「な・・・。何。」
（起きた・・・。）
「豊橋だよ。降りるんだから、早く準備しろよ。」
「あっ、もう豊橋かぁ。」
と言って伸びをした。だが、一つ引っ掛かることがある。
（今の起こし方って、萌しかやらないはずだけどなぁ。うーん・・・。まあいっか。）
１８時３８分。３１３系は終点豊橋に滑り込み、僕達はここまで運んでくれたことに礼を言い３１３系と別れた。
次に乗る列車は１８時５０分発。新快速浜松行き。これが、最後

である。
「はぁ、ようやっと戻ってきたー。」
「そうだな。」
「永(なが)かったですね。特に今日。」
「本当だよ。ほとんどの時間ホームにいたんだもん。」
「そうか。私はそんなに永くなかったと思うけどなぁ。」
「そりゃ、木ノ本(きのもと)が月に何回もそういうことしてるからだろ。」
「おい、醒ヶ井君(さめがいくん)が知らないかい。」
アド先生が僕達に聞いた。
「ナニナニ、サメちゃんがどうかしたって。」
いつの間にか善知鳥(うとう)先輩達が僕の後ろに立っていた。
「まさか、乗り遅(おく)れたとかっていうことないよな。」
「いや、降(お)り忘れたかもしれないぜ。」
「精神(せいしん)が負けたか。」
「おい、みんな手を合わせろ。」
「えっ。」
ハクタカ先輩に言われるがまま、名古屋(なごや)方面に手を合わせる。横目で3年生を見てみると同じように手を合わせていた。ざっと確認したところ、手を合わせてないのは楠(くすのき)先輩と箕島(みしま)だけだった。佐久間(さくま)はというと、ここにはいない。別の車両にいる。
「バカ。何かってに後輩殺してんだよ。」
「えー、後輩殺しちゃいけないよ、ハクタカ先輩。」
するとアド先生の携帯(ケータイ)が鳴った。
「サメちゃん今どこだって。」
「今、蒲郡(がまごおり)にいるそうです。」
「あいつバカだな。降り忘れて３１３に蒲郡まで連れてかれたのか。」
「なんだ、死んだんじゃなかったのか。」
「ハクタカって後輩殺すの好きだな。」
列車の中でこういうことを話しながら、終点浜松に１９時２４分に

着いた。
「ウーン。アッ。」
３１３系から降りて、ほかの乗客の邪魔にならない位置まで行って伸びをした。
「戻ってきたー。」
改札を出て、ようやく解散のはずだったが、醒ヶ井がいないとなるとそういうわけにもいかないだろう。そう思っていた。
「１年生と中学生は帰ってもいいよ。サメちゃんだったらあたしたちで何とかするから。」
善知鳥先輩にそう言われたが、帰るつもりもなかった。
「いえ、いますよ。」
「そうか。じゃあ、今ここに残ってる人は私と同類だな。」
満面の笑みで言っている善知鳥先輩が少し怖かった。
「醒ヶ井のやつ電車の知識０だよなぁ。」
ナヨロン先輩が分かりきっていることを言う。
「へぇ、私と同じかぁ。でも、私は帰ってこれたけど。」
「あのなあ、それは俺がいたからであってだなぁ・・・。」
「大丈夫。何とかなるって。私でも何とかなってるんだから。」
「サヤ、諦めろ。何言っても無駄だ。」
「このやろう・・・。」
その後２０時１３分まで浜松駅の在来線改札前で醒ヶ井を待った。
この時間から推測すれば、豊橋どまりの新快速と浜松まで直通する新快速を乗り継いできたようだった。
「お帰り。サメちゃん。」
「まったく。２日目みたいに精神的に死んでくれれば面白いのに。」
アヤケン先輩が２日目に精神的にまいっていた時のことを言う。
「まったく。本当に死んでくれれば面白いのに。」
「アヤケン先輩もハクタカ先輩も心配じゃなくてそんなこと考えてたんですか。」
すかさず醒ヶ井のツッコミが飛んだ。

「はいはい、人を勝手に殺さない。」
「あっ、面白がってる途中なのに。」
（あーあ・・・。）
ハクタカ先輩と楠先輩は醒ヶ井が来るとすぐに帰って行った。まあ、ハクタカ先輩にしてみれば強制的に帰らされたと言った方がいいだろう。
「よーし。サメちゃんも帰ってきたことだし、私達も帰るか。」
善知鳥先輩が伸びをする。
「はぁ、ようやと終わりかぁ。よし、遠江急行班も帰るか。」
ナヨロン先輩が帰ろうと言う。
「はい。」
「じゃあ、アド先生。さようなら。」
「あっ、永島君。１８切符返してくれないかな。」
「あっ、はい。」
うっかり忘れるところだった。
「あれ、ナヨロン先輩は返さないんですか。」
「んっ。俺は何かと使うからね。」
アド先生に今回お世話になった１８切符を渡す。
「後、返してもらうのは醒ヶ井君だけだね。」
この言葉を後ろに受けながら、歩いて行った。

39列車　寝たら死ぬぞ（後書き）

臨地研修がようやっと終了しました。これからは9月などまた活動に入っていきます。

一つ思いましたが、これって説教してるように見えますかねぇ。説教してると思った方には謝ります。

とにかくここまで読んでくれた人には感謝。

４０列車　終了

臨地研修終了から数日。
「へぇ、行って来たのかぁ。榛名達ってホントに楽しそうだな。」
「さくらも来ればいいのに。」
「いや、私は練習あるし・・・。」
「そうか。そうだね。練習頑張ってこいよ。」
かるくさよならを言って別れる。
（榛名・・・。私ソフト部辞めて、鉄研いくことにしたから。友紀も榛名も分かってくれるよね。）
木ノ本の後姿を見送りながら、遠くで聞こえる足音を聞いた。
そして、僕は何をしているかと言うと、離れにある模型部屋に来ていた。
「智って本当にここ好きだな。」
「いいじゃん。駿兄ちゃんだってここが好きなんでしょ。」
「まあ、人のことは言えないか・・・。」
しばらくの間、自分の前を走る鉄道模型に目をやり、その迫力に惚れる。
「そいや、行って来たんだろ。どうだった。」
「夜行バスは寝れるようなもんじゃない。」
「それだけかよ。」
「先輩が言ってましたけど、夜行バスは眠り薬を持って乗るもんだって。なんかそれが分かった気がした。」
「ハハハ。それ鷹倉の言い分だろ。」
持ってきた３８３系「しなの」の模型をレールに置きながら笑う。
「まあ、いいじゃねぇか。楽しかったんだから。萌にもそのこと言ってやったらどうだ。」
「もう言ったよ。」
「だと思った。」

その後は持っている模型を走らせることだけにひたった。
　ずっと離れにこもっていた生活が終わる9月1日。４０日。多分それくらい。久しぶりに岸川学園に向かった。
　自転車をひたすら西にこいで遠州鉄道の芝本踏切を通過。また少し自転車をこいで行くと高架橋になっている遠江急行が見える。駅舎の下は程よい大きさのスペースがある。ここは駐輪場として活用されている。よっぽど東風が強くない限り雨は降りこまない。高架橋が大きな傘の役割をしている。ちょうど真ん中あたりに自転車を置いて、鍵をかける。鍵をポロシャツの胸ポケットに入れて、カードタッチ式の改札を通り抜け、階段を上がる。
「よーす、永島。」
階段を上がったところにいたのは宿毛だった。
「おーす。」
「ちゃんと来たな。お前のことだから、家でずっと模型いじってて学校に来ないかもなぁって思ったよ。」
「人をひきこもりみたいに・・・。俺そこまでひどくないからな。あくまで暇なときに遊んでるだけ。」
「暇な時って。毎日遊んでるようなもんだろ。毎日同じ遊びしてて飽きないのか。」
「飽きないんだからいいじゃん。楽しければそれでよし。」
「永島らしいなぁ。そういうのは・・・。」
しばらくホームから目の前にある線路を見下ろして、
「なぁ宿毛。今日って授業あったっけ。」
「あるわけねぇだろ。お前バカか・・・。バカかじゃないか。バカだったな。」
「ないか。よかった一瞬忘れたかと思った。・・・。話変わるけどさぁ、ここから乗るのやめない。」
「どうしてだよ。」
「いやあ。浜松行った時混むから。ずっと乗ってて分かったんだけど、鹿島側に乗るのが一番賢いかもって思った。」

「あっちだったら混まないのか。」
「大体ね。」
言い始めたか言い始めなかったぐらいの時に列車が接近してくるというアナウンスが入った。４０秒ほどたって西鹿島のほうから列車がやってきた。１０日ぶりに見た車両はなんかどこかで見たことのある車両に思えた。
（３１１系・・・。改めてみると似てるなぁ。兄弟。）
高架橋の線路の継ぎ目を「チャチャ、チャチャ」っと軽快にたたく音に混じってだんだん低くなっていく音が入る。
（２０００系。第６編成。）
入ってきた車両の浜松側１枚目と真ん中２枚目のドアの間を見る。そこに書かれていた数字は「２１０６」。遠江急行が所有する２０００系という車両グループ。第６編成の制御車。この数字だけでここまで読み取ることができる。もちろん、ここまで読み取れるようになったのは岸川高校に通い始めてからだが。他にどんな付番をしてあるかというとこの第６編成の場合浜松側から２１０６＋２２０６＋２３０６＋２４０６と付番されている。それぞれの車両の意味は制御車＋電動車＋付随車＋制御電動車。それぞれの数字でそのことを示している。
　さて、少し話がそれた。２０００系は小さくキーという音を立てて停車。僕たちの前には２４０６の一番西鹿島寄りのドアが前に来た。ドアが開くと同時に視覚障害のある人のためになる音が出る。車内に乗りこんで僕から見て左手に体を持っていく。こっち側には４人ほどが座れるロングシートがある。一方反対側はというとこちらも同じロングシートがある。違うのは長さだけである。
「宿毛。宿題片付けた。」
一番乗務員室に近いところに座る。
「ああ、生物の宿題ははっきりどうでもいいって思ってほんの数ページしか片づけてないけど、他のはちゃんと全部やった。」
「真面目なんだな。」

「・・・。何。永島は全部終わってないのかよ。」
「読書感想文以外全部終わってる。」
「・・・。お前。読書感想文一度も出したことないよなぁ。」
「だって面倒だし。それに四ツ谷のあれ見ると読む気にもなれないって。」
「だな。あれ見て読む気になる人がおかしいと思うよ。俺だってあれほとんど読んでないし、落ちて当たり前って思ってるけどなぁ。」
「・・・。」
「永島・・・。」
反応のない永島のほうを見てみると、永島は乗務員室のほうを向いていた。どこに目をやっているのか多少気になる。その視線の先をおってみるとメーターがいくつもあった。その中で真ん中にあるメーターがアナログとデジタルで８２ｋｍ／ｈと示していた。
（ああ。これ見てるのか。）
心の中でつぶやいた。
しばらくはしって芝本の次駅南高島に停車。数十秒の停車後発車。そして次駅美薗に停車。しばらく停車して、また発車。ちょっと走って小楠に停車した。
「永島。乗り換えないのか。」
宿毛が席を立ちながら言う。
「いいよ。たまにはゆっくり行こうぜ。急行混むし。」
「本当に人ごみ嫌いだな。」
「それもあるけど・・・電車に乗ってきてドア付近に固まる人も好きじゃないんだよねぇ。特に朝のラッシュの時とか。ドア付近メチャクチャ混んでるのにシートのところはすいてる。これある意味のいじめじゃない。」
「いじめって。誰対象に何をやってるんだよ。」
「えっ。降りる人対象に降ろすまいとしてる。」
「・・・。」
「でも、東京とか大阪とかそういうことないんだよなぁ。ここだけ

だよ。ドアに固まってそこから動かないの。」
「だから、東京と大阪とここを比べられても・・・。」
「ああ、あと時折クソＫＹなやつもいるよなぁ。電車の番号が見えないつうの。前通るんじゃねぇって。」
「だから・・・。」
そんな話をしていた。
その頃・・・、
（ヤバい。今日も間に合いそうにないや。また遠鉄かよ。でもまぁいいか。帰りはふつうに分かるんだし。）
小ぢんまりとしたスーパーの駐車場を横切って西側にある搬入口らしきところを自転車で通過。すると線路が自分の右隣にくる。ちょっと走ったところに駐輪場がある。そこに自転車を置いて、駅に向かった。
（今７時０２分。よかった３０系じゃなくて。）
内心そう思った。
ホームにはすでに友達がいた。端岡という人である。
「夏紀。よーす。」
「あっ、萌。」
「ああ。新学期そうそう遅刻かと思ったよ。」
（今この時間で遅刻を心配するのもどうかと思うけど。）
「遅刻って。まだたっぷり時間はあるじゃない。」
「いや、たっぷりあるように見えてたっぷりないんだよ。７時０４分の電車が行っちゃったら次は７時１６分。１２分待つのもつらいし、その列車の車両３０系だよ。」
「だから何。」
「だから何って。４両編成中にドアが８枚しかない車両に乗りたいと思う。この朝メチャクチャ混む時間に。」
「・・・。」
（ほんと。萌と永島君って同類だわ・・・。）
今日９月１日はこんな感じでスタートした。まだ、２学期の鉄道研

究部は指導しないが、そのうち指導する。僕は授業が始まる次の日より、その日のほうが待ち遠しい。もちろん。このときにはそれしか考えてない。

9月中旬。9月11日。お昼休み。

「今日部活あるって。さっきアド先生がそう言ってた。」

「へぇ。2学期も今日からスタートか。」

「永島。今日は塾でいけないって言っといて。」

「ああ、今日は髪切りに行かないと。」

「ごめん、今日はいけそうにないから。」

木ノ本、醒ヶ井、佐久間、箕島の順に回答を得た。

「バカたれ。それ伝えるの全部俺だぞ。」

「いいよ。私もいるし。醒ヶ井は女の子と遊んで、佐久間が床屋に行って箕島は・・・。」

「とても話せる内容じゃないから・・・。」

「なら家庭の事情と。」

「おい。ちょっと待て。俺が休む理由女の子と遊ぶってどういうことだよ。」

「だって、醒ヶ井って彼女募集中だろ。彼女募集するために自分から行くんじゃないのか。」

「誰がそんなことするか。」

「分かった、分かった。」

僕がその中を仲裁する。

「理由は「じゅくじょ」と遊ぶな。」

「おい、余計ひどくなってる。」

「大丈夫。響きは悪いけど漢字は塾に女だから。つまり同じ塾に行っている女の子。」

「・・・。」

「じゃあ、そう伝えておくから心配しないで。」

「心配だわ。ボケ。」

そんなこんなで放課後。
「さてと、私も早くいこうかなぁ。」
独り言を言って、カバンを腕に通した。さっさと立って教室から出ていく。
「・・・。」
「留萌。私たちも行こうか。」
「えっ。うん。」
（榛名。この頃とっても楽しそうだよなぁ。私もああいう風になりたい。なら・・・。）
心ではそう思っていても、体が言うことを聞かなかった。
いつものようにグラウンドに出て、練習をした。
（はぁ。なんで言えないんだよ。私のバカバカバカ。ただ友紀にそうしたいって言えばいいだけの話じゃない。なのに。なんで。こんなに言いづらくなってるのよ。）
「留萌。そっちに行ったぞ。」
そう言われた時にはもう遅かった。ボールは自分の足の間を通り抜けて行ってしまっていた。
「おい、今のボール取れないんじゃだめだぞ。どうしたんだ。」
「・・・。すみません。」
（留萌・・・。まさか、これって木ノ本の影響。だったら・・・。）
普段と様子が違う。このことはソフト部の誰もが気付いていることだろう。しかし、ここまで思っているのはおそらく自分ひとりのはずだ。
（久しぶりの部室だなぁ。）
そう思いながら、体育館の外側にあるドアに手をかけた。
「ちょっと。木ノ本さん。」
誰かが自分の名前を呼んだ。その方向を見てみると誰かが息を切らして、こちらに向かってきている。
「永島いる。」
その人はそばまで来るとそう言った。

「永島。あいつだったら部室にいると思うけど・・・。」
「ちょっとそこまで連れてって。」
彼はそう言った。
部室のドアを開けてみると先輩たちがいた。相変わらず集合だけは早いのである。
「おーす。ナガシィ。よく来た。夏休みに間死んでなかったか。」
「死んでませんよ。楽しいですから。夏休みの間は家の模型いじり放題。」
「・・・。」
そう言い切ったか言い切れなかったぐらいの時だった。部室のドアが開いた。振り向いてみるとそこにいたのは木ノ本と宿毛だった。
「宿毛。どうしたの。」
「永島。教室集合。」
「えっ、何で。」
「いいから。理由は後で話す。」
宿毛はそういうと僕のバッグを持ってすたすたと走っていった。僕はそれを取り返そうと宿毛の後を追った。
「永島連れて行かれちゃったよ。」
「ついに四ツ谷が本気を出したか。」
「嫌すぎるなぁ。」体育館から出て、駐車場を横切り、北校舎と南校舎の間を通り抜け、昇降口を通る。宿毛はそのまま教室のほうに行ったらしい。昇降口から右にかじを切って突き当ったら左にかじを切る。教室のドアに手をかけようとした時、クラスの人が全員何かやっているのが目に入った。
「永島。いくらできるからって抜け駆けはダメだぞ。」
そう言ったのはクラス担任の四ツ谷先生だ。四ツ谷は何かプリントらしきものを僕に手渡した。
「それにひたすら書け。２００ページになるまで。」
「・・・。」
（四ツ谷の夏休みノート２００ページと補修は本当だった。）

そう思いながら、自分の席に行ってシャープペンを走らせる。これはとてもきつい。今までノートを出した回数実に0回。クラスの中には宿毛以外に今でもこの死の学習ノートを出している人はいるらしいがその数は多い日で5冊。少ない日は2冊。もう出さなくてもいいのではないかという提出率だ。

何を書いていいのかわからない。だから、自分の持ちネタを書くことにした。これで少しはその痛みが和らぐ。書いているとだんだん右手と右腕が痛くなってくる。少し手を休めながら、自分にしか聞こえない程度の声で歌を歌いながら、乗ってやる。でもこの行数は多い。ためしにその行数を数えてみた。

「1、2、3、4、・・・56、57、58、59、60・・・。」

（数えるんじゃなかった。）

書く気が一気に失せた。しばらくシャープを置いてそのままでいる。ドアを開ける音がして、四ツ谷先生が教室から出て行った。すると、これまでシーンとしていた教室は少しにぎやかになった。先生という重圧がなくなったからだろう。

「永島。お前バカだろ。」

隣の宿毛が話しかけてきた。

「の前に教室に集合ってこのことだったのか。」

「ああ。四ツ谷返ったやつ全員連れ戻して来いって言ってな。俺が同じ中学だからっていう理由で連れ戻しに行けって言われたわけ。」

「なるほどなぁ。でも、やっててこんなにダルイもんってないだろ。」

「あるわけねぇだろ。俺も夏休み分50ページくらいは片づけたけど、それだけでも死んだ。」

「やる量がハンパじゃないんだよ。ノート一日5ページやってくるそんな勉強バカいるかつうの。」

「いるかもしれないぜ。一番やったやつは佐久間で185ページって言ってたからなぁ。」

「佐久間。何気にすごいなぁ。」

「うん。俺もそれには感心した。」
「宿毛（すくも）。これどこどうやったらごまかせるかなぁ。」
「ごまかすって。どうやってごまかす気だよ。」
「えっ。宿毛（すくも）が今までやってきたノートを自分がやりましたって言って提出する。」
「お前。セコイ。」
お互いシャープを走らせながら、文字を書いた。
「そういやあ、お前さっきから何書いてるんだ。」
「電車の駅とか名前とか。」
「そんなの覚えて何になるんだよ。」
「電車の勉強。」
「学校の勉強しろよ。」
「だってしたくないもん。あんなのやったって使うっていうのはほんの少ししかないんだからさぁ。だったら自分の趣味覚えたほうが１００倍楽しい。」
「ある意味うらやましいなぁ。そう考えれる頭が。」
「どういう人間でもそういうこと考えるよねぇ。ふつう。」
「考えるけどさぁ。」
「ああ。部活いきてぇ。家帰って模型いじりてぇ。誰だよ。夏休みノート２００ページとか言ったやつ。」
「それ。四ツ谷（よつや）の前で言ったら殺されるぞ。」
「あ、そうか。殺されたら元も子もないから、じゃあ、ボイコットして帰るか。」
「ボイコットねぇ。実際帰ってる人もいるけど、それやったらつけが怖いだろ。」
「ですねぇ。俺はそこまで度胸ある人じゃないし。」
話しながらでも、数行は埋まっていく。
「今まで何行書いたのかなぁ。」
「数えるなって。また書く気失せるだけだぞ。」
「・・・。１３。まだ１３行しか書いてないの・・・。もういいや。

やーめた。」
「だからやめろって言ったのに。」
「でも・・・。とりあえず出されたものはやるかぁ。」
「・・・。永島（ながしま）。」
「何。」
「時折お前のことが天才なのかバカなのかどっちなんだって思うときがいっぱいあるんだけど。」
「じゃあ、そこは俺イコールバカって思っててください。」
どこかで聞いたことのあるような声を出した。
「・・・。」
１８時。
「はい。それじゃあ、終わってください。」
ようやっとこのノート地獄から解放される。
「あれ、２００ページ終わるまでやるんだって。」
「無理じゃん。あの６０行のやつが２００ページ。・・・。１２００行。今日終わったのが６０行。単純にあと２００日かかる計算じゃん。ああ、気が狂う。そこまで持たせるための鉄道ネタないし。」
嘆きながら門まで歩いて行った。
「あれ、永島（ながしま）。部活にはいかないのか。」
「四ツ谷（よつや）のおかげで行く気失せました。」
「ある意味究極の兵器だな。」
「兵器かぁ。その兵器を核爆弾で破壊すれば・・・。あ、でも核爆弾だけじゃまだ手ぬるいか。戦艦大和（せんかんやまと）と武蔵（むさし）からの艦砲射撃（かんぽうしゃげき）とＢ（ビー）２９からの爆弾攻撃。これでこの学校は壊滅する。ハハハハ。」
（残虐化した。）
「あ。ついでに要らない車も処分するか。」
「・・・。」

４０列車　終了（後書き）

昨日でユニーク数「成田エクスプレス」（２５３）になりました。なんかうれしいです。ちょっと前は２２３でした。このままいったら４８５で止まったりして・・・。

補足します。タイトルが終了となっていてもまだ終わりませんよ。

４１列車　補修　掃除

９月１４日。
「ああ。今日もノートの補修かぁ。ボイコットしていい。」
「って言ってもしてないだろうが。」
「いや、そうなんだけどさぁ。・・・。ああ、やっぱり昨日実行しておくべきだったかなぁ。学校を核爆弾で破壊する。」
（言うことが怖いなぁ。）
「でも、それやったらおれたちまで被害出るだろ。そこはどうするんだよ。」
「なら、学校の周りにシールド発生装置置いて、まず学校以外をシールドで覆う。次でＢ（ビー）－２９をここまで飛ばしてきて、核爆弾リトルボーイ５００発を投下する。そのあとは大和（やまと）と武蔵（むさし）でお祭り。すばらしいショーじゃないか。」
「確かに。それができれば素晴らしいショーだけど。まずリトルボーイ５００発ってどうやって集める気だよ。」
「気合。」
「もっと現実性のある答えにしようぜ。せめて。」
「あっ。の前に自衛隊が正当防衛にやってきちゃうか。」
「やってきちゃうなぁ。」
「よし。やってきたら撃ち落とすか。」
「永島（ながしま）。そういう怖いことさらっと言わない。」
この日も１８時までやって全員を解放。その翌日も同じ。だんだん残る人が減っていった。残る人が減っているのは四ツ谷（よつや）先生がいない時を見計らって帰っている人がいるからだ。
「帰ってる人多いなぁ。宿毛（すくも）今やってるので何ページ目。」
「１９８ページ目。」
「マジかよ。もうちょっとで終わるじゃん。俺なんかまだ３ページしか終わってないのに。」

「どっかで打ち切りになってくれないかなぁ。」
「でもさぁ、宿毛(すくも)そこまで行ってて明日で打ち切られたら死にたいよねぇ。」
「ああ。マジでそうしたい。」
翌日。
「・・・。」
「・・・。」
「永島(ながしま)。昨日言ったこと本当になったな。」
「ああ。でも、終わってくれてありがたいけどな。」
「そういわないでくれよ。２００ページ昨日でやり終わった俺の立場がなくなるだろ。」
「まぁ、ドンマイ。」
「そういわれてもなぁ。慰めにもなんねぇよ。」
「・・・。とまぁ。俺は部活あるから行ってきます。」
「永島(ながしま)。今のお前が本当にうらやましい。打ち込むものがあっていいよなぁ・・・。」
永島(ながしま)がいたと思った方向を見てみると、すでに永島(ながしま)の姿はなかった。
（・・・。あいつらしいな。）
ふと永島(ながしま)の机の上を見てみると、筆箱が置きっぱなしになっていた。
（あいつ。また家で筆箱がないってパニクッテ探し回るんだろうなぁ。届けてやるか。）
その頃部室では、
「四ツ谷(よつや)のノート地獄からようやっと解放されたか。おい。衛生兵。早くナガシィを看病してあげて。」
善知鳥(うとう)先輩は楠(くすのき)先輩のほうを見て叫んだ。
「あの。衛生兵ってもしかしてあたしのことですか。」
「アヤノン以外誰が衛生兵なのよ。早く治療道具もってきて。」
「そんなのどうでもいいですから、ふつうでいてください。」
僕が善知鳥(うとう)先輩の暴走を止め席に着く。
「永島(ながしま)。お疲れ。」

後ろからナヨロン先輩が話しかけてきた。
「なんか数日見ない間にやつれたな。」
「そんなにやつれてますかねぇ。」
「うん。目が死んでる。」
「・・・。」
「まぁ、永島ならすぐに回復するか。こういう方面ならお前は困らないからな。」
褒められているのか、バカにされているのか。
「永島。これ。」
木ノ本が僕に向かって紙を投げた。それに目をやると今後の活動予定が書かれている。なお、今日の日付はどこにも書かれていない。
先輩たちが作った活動日なのだ。
「永島。それ当てにしてたら死ぬぜ。」
「もう半年もたちますから、予定表が当てにならないっていうのは分かってますけど・・・。なんで書いてない日までやるんですか。」
「いいだろ。楽しければそれでいい部活なんだから。」
「・・・。まぁ、そうですけど。」
そのあとはいつもと同じバカ騒ぎ大会。今日は部室が少し汚くなっているといったので、掃除をやった。でも、ただの掃除ではない。
「この四ツ谷死ねー。」
「バカたれ。言うことが違う。くたばれ。７００系。」
「なんでカモノハシがくたばらなきゃいけないんですか。かっこいいというのには少しかけ離れてるかもしれませんけど、かわいいじゃない。」
「あれのどこがかわいいんだよ。俺には全然わからん。ていうか、善知鳥カモノハシの意味わかってるか。」
「え。オーストラリアにいる動物のことでしょ。あれかわいいじゃん。」
「なるほど。カルチャーギャップな。確かにあれはかわいいかもしれないけど。リアリティのカモノハシはかわいくない。」

「もういいからそんな話。手が止まってる。」
「おーい。誰かゴミ捨てに行って。」
「おーい。これ必要なやついるか。・・。ゴミー。善知鳥(うとう)こいつもダストボックス行き。」
「はーい。サヤの手経由ダストボックス行きです。整理券をお取りください。」
「あの。これゴミですか。」
「バカ。この部活では迷ったら信じたことやればいいんだよ。1秒迷ったらごみ箱に捨てろ。」
「アヤケン違う。迷わずに捨てろ。」
「分かりました。これからは迷わずに捨てます。」
「ナガシィ。この発泡砕いてください。お願いします。」
善知鳥(うとう)先輩がちょっと小さめの発泡スチロールを構える。
「んじゃあ。E(イー)233のゴミー。」
「えっ。あいつゴミじゃないだろ。」
「サヤは際物好きなんだからゴミじゃないだけ。俺あれ好きじゃない。」
「だから。ナヨロンはいつまで電車が恋人って言ってるんだよ。」
「はっ。俺がいつそんなこと言ったんだよ。」
「だって今E(イー)231系は好きじゃないって言ったじゃん。」
(しょうもない間違い方だな。)
「バカ。俺はE(イー)231はすきとも言わないし、嫌いとも言わない。」
「じゃあ、なんだったら好きっていうのよ。」
「えっ。C62(シロクニ)。」
「お前はあれのどこに萌(もえ)えてるんだよ。」
「萌(もえ)てねぇよ。」
「・・・。」
「サヤ先輩。アケ先輩。ナヨ先輩。あなたたちのせいでゴミが散らかってます。」
「あー。バカたれ捨てろ。全部。鉄研部員の手経由ダストボックス

方面、ダストシュート行きです。整理券をお取りください。整理券をお取りください。整理券をお取りください。危険物は核爆弾以外持ち込んでいいです。」

「そんなことどうでもいいですから。」

「はい。アヤノン。これ持って。」

善知鳥(うとう)先輩が楠(くすのき)先輩の手に二つずつゴミ袋を持たせる。

「朝の忙しい主婦。」

「ハハハハ。」

「何笑ってるんだよ。バカタカ。お前が捨てに行けー。」

「はい。アヤノンこっちこっち。もっといいのあった。」

今度は楠(くすのき)先輩に8つゴミ袋を持たせる。もちろん、全部もてていない。三つずつ果てに。一つは左腕で抱えるように。最後は口にかませた。

「スーパー朝の忙しい主婦。」

「どっからこんなにゴミ袋集めたんですか。ゴミありすぎでしょ。」

しゃべったので口にくわえられていたゴミ袋が落ちる。

「落とすな。試験にも落ちるだろ。」

それを聞くと次は左腕に抱えていたゴミ袋を。最後は両手でつかんでいるごみ袋の手を放す。

「ハクタカ。まだ近くにいる。」

「さっきゴミ捨てに・・・。」

「はい。いますよ。」

「ちょっとゴミ袋三つもってきて。」

「よーし。ハイパー朝の忙しい主婦にしてやる。」

「やめてください。」

そう言った声が泣きそうだった。

「・・・。」

こんなことで18時まで。

「よーし。後はだれがこのゴミ袋を向こうまで持ってくか。」

「バスケ部いるから。直通運転できないな。」

「確かに。今ゴミ袋が11あるわけだし全員で分担しても一つは持ちことになるんだよなぁ。じゃあ、やっぱりジャンケンで決め・・・。」

「それ嫌です。」

ハクタカ先輩がまずダッシュ。善知鳥(うとう)先輩の足元に置かれているごみ袋を二つ持って階段を駆け下り始めた。

「あっ。ハクタカ。フライング。」

善知鳥(うとう)先輩も二つ持って部室から出る。

「はい。後は朝の忙しい主婦さんお願いします。」

「お願いされません。」

「バカ。い・・・今の確実に腹に入ったぞ。内臓飛び出るかと思ったじゃないか。」

「あっ。ごめんなさい。」

「はぁ。しょうがない。残りは俺たちで分担するか。」

「お先に失礼しまーす。お疲れ様でーす。」

僕と木ノ本(きのもと)と楠(くすのき)先輩はそれを聞くとさっさと荷物を持って部室を後にした。

「よし。俺たちも帰るか。」

「待て。貴様らは絶対返さん。」

「なんでだよ。ナヨロンだけで運べばいいじゃないか。」

「一人だときついんだよ。」

残りは残された3年生が処理することになったらしい。

４１列車　補修　掃除（後書き）

書いてませんでしたが、筆箱はちゃんと永島のところに戻ってきましたよ。

話は変わりますが、この小説は変に場面転換が多いと思います。恐らく僕自身の癖なのだと思います。この頃原作作ってて嫌って言うほどよく感じます。

そういう散らかったものでも読んでくれる人には感謝。

42列車　どうしたい

それから一週間。今は9月20日から9月23日までの4連休の真っただ中。9月21日。

「あれ。今日は留萌練習来てないけど。どうかしたのか。」

部活の先輩が室蘭にそう聞いた。

「えっ。」

練習の時はそんなのどうでもいいという感じだったが、昼になって全員それに気づいたらしい。

「練習休むってことあいつなかったのになぁ。今のところ出席率100%（パー）だったのに。」

「でも、ちょっとこの頃ダルそうなところあったよな。」

「ついに噴き出たかぁ。ふつうなら噴き出ないと思うんだけどねぇ。」

「・・・。」

「まぁ、毎日練習で体調崩したってこともあるかもしれないだろ。室蘭。今日練習終わったら今日どうしたか聞いてくんない。」

「ああ・・・はい。」

（留萌・・・。まさかとは思うけど・・・。）

心の中で思っているだけにしておいた。

19時。練習終了。全員友達と帰ったり足早に帰ったりするやつと帰り方は様々。室蘭はある程度のところまでは足早に帰って、携帯電話を取り出した。メール機能を起動させて、あて先を留萌にして内容を書いた。

「今日練習来なかったけど、大丈夫。風邪?」

返信はすぐにあった。

「ごめん。忘れてた（汗）」

文面はこうなっていた。しかし、練習は毎日ある。そして、この文面からして、博多先輩が言っていた体調を崩しているということは

ない。
（忘れるようなやつじゃないと思うんだけどなぁ・・・。）
今度は思ったことをそのまま文面にして、返信する。
「忘れるようなやつじゃないだろ。毎日練習してるんだし、ちゃんと来いよな。休みたいのは分かるけどさぁ・・・。」
またしばらくたって留萌からの返信が返ってくると思っていたが、その返信がなかなか返ってこない。いつもならすぐに返ってくるのだが・・・。
（なかなか来ないなぁ。もう返事来てもいい時間なのになぁ。なんで・・・。）
その頃留萌は・・・。
（なんて返信すればいい・・・。自分の中でイメージはできてるのに言葉にできない。）
返信の内容に苦しんでいた。いつもならすぐに言葉が浮かんでくるのだが、今日はそうはいかない。なぜか言葉にする部分がくすぶっている。
「・・・。」
（言わなきゃいけない。それは分かってる。それだけなのに・・・。）
（忘れてたって言ってもやっぱり風邪だったのかなぁ。ちょっと心配だし、電話してみるか。）
今度は電話帳を開いて、留萌の電話帳を出した。
携帯電話が鳴る。
（誰だろう。）
端末を覗き込むと携帯番号と室蘭友紀の名前がおどっていた。
「友紀からだ。」
言葉に出すつもりはなくても体が言うことを聞かない。携帯をとって決定ボタンを押して、耳元に当てる。
「留萌。」
電話の向こうから室蘭の声がする。

「さっきメールしたけど、返事とか返ってきそうにないから電話しただけだけどさぁ。大丈夫。」
「うん。大丈夫だよ。心配かけちゃってごめん。」
留萌のほうはいつもの応対をしたつもりだった。
（元気がない・・・。留萌はいつもと同じようにしようとしてるのかもしれないけど・・・。やっぱ何かおかしい。・・・。そういえば、このごろ留萌、木ノ本のことなんか友達じゃないように見てるのは・・・。もしかして、本当に。）
「友紀。」
「留萌。正直に答えて。ソフト部辞めたいと思ってるの。」
「・・・。」
自分が言いたいことを向こうから射抜かれる。
「何。なんでそんなこと言うの。別にやめたいなんて・・・。」
「どんなに自分の気持ちを隠せてもあたしにはわかるよ。」
「・・・。」
「やりたくないんだろ。だったら辞めろよ。」
そういうと返事は返ってこなくなった。さらに言葉を続ける。
「このところ木ノ本のこと気にしてるのには気づいてたけどさぁ、本心じゃあ鉄研行きたいんだろ。辛いソフト部続けてるより、そっちにいたほうが自分にとっては楽しいんだろ。」
「そんなこと言わなくても・・・。」
「今だからそういいたいよ。そんな気持ちで部活に来る人なんかと練習したくないから。」
言葉のたびに声が大きくなる。
「このごろ鉄研に言った木ノ本のことがうらやましいんだろ。自分もいつかは木ノ本たちと一緒に笑いたいって思ってるんだろ。でも、今のままじゃそれができない。」
「・・・。」
「素直になって。留萌はどうしたいわけ。」
「・・・。」

しばらく黙りこんだ。
「友紀って何でもお見通しだね。」
「・・・。」
「もしかして、私が岸川に言った本当の理由も。最初から。」
「ああ。オープンキャンパス行って以来なんか変わったところがあるとは思ってたよ。」
「そう・・・。なら、友紀は・・・。」
「認めるも何もないって。行けよ。」
「・・・。」
またしばらく黙っている。
「友紀。ありがと。友紀のおかげで目が覚めたよ。私ってバカだよねぇ。これだけのこと言うだけなのに、何十日もかかって・・・。」
「やっぱり女子鉄って複雑なんだな。あたしには何もわからないけど、これだけ迷うんだからな。」
「ハハ。」
「でも、留萌の母さんたち鉄研行くってこと許してくれるのか。」
「そんなの今考えても仕方ないよ。これからどうにでもする。」
「そう。・・・。留萌。また戻ってこいよ。」
そう室蘭が言葉にする。すぐにその意図が読めなかったが恐らくこういうことだろう。
「戻って来いって。もうソフト部に戻ることはないと思うけど。もしかして友紀もバカになったの。」
「・・・。そ・・・そうだな。」
「ハハ。友紀にもそういうところあるんだ。」
「・・・。」
「じゃあね。友紀。」
「ああ。」
そう言って電話を切った。
（バカはどっちだよ。言葉足りなかったかなぁ。）
ふと、自分が高校受験するときのことを思い出した。

「友紀早く、早く。見れなくなるよ。」
「何こんなところまで連れてきて。何か珍しいもんでも見れるわけ。」
連れてこられた場所は新幹線の線路沿い。新幹線は盛土でいまいる道をまたいでいる。
右からキーンという音がしてくる。すると木ノ本と留萌が手を合わせて、
「友紀が岸川に受かりますように。」
するとあたりを轟音がつつんだ。ちょっと視線を上げると黄色い車両が通り過ぎていくのが見えた。
「これで友紀はきっと岸川に受かるね。」
「えっ。どうして。」
すると二人は自分のほうを向いてニッと笑う。
「今見たでしょ。黄色い新幹線。あれ「ドクターイエロー」っていうんだけど、またの名を知ってる。」
当然知るわけがない。
「「幸せの黄色い新幹線」っていうんだよ。これで友紀には必ず幸せなことが起こるんだよ。」
（単純というか、子供というか・・・。）
「友紀っていま私たちのこと子供っぽいなぁって思ってるでしょ。でもそれでいい。それぐらいじゃなきゃ面白くないし。」
その時自分の後ろでそう言ったのが留萌だった。
（戻って来いって言ったのは電車が好きなことを隠してなかったあの時。あの時になって戻って来いってこと。子供っぽいって思われるくらいになって戻ってくればそれでいい。）

４２列車　どうしたい（後書き）

東海道・山陽新幹線沿線だったら「ドクターイエロー」。
なら、東北新幹線などの沿線だったら「Ｅａｓｔ　Ｉ」が同じ立場になりますね。

４３列車　新たなクルー

９月２３日。夜。
「何。話って。」
いつかは通らなければならないところである。いつもは共働きで家にいないことが多い。だからこの申し出を言うのが今日になった。
「私。ソフト部辞めようと思ってる。」
いきなりこんなことを言うと絶対反対される。それは承知だ。
「ダメに決まってるでしょ。さくら分かってるの。」
「分かってるよ。でも・・・。今のままじゃいつか行き詰まるのは自分でもわかってる。だからいっそのことやめて、違う部活に入部しようと思ってる。」
「違う部活って。何に入るつもりよ。」
「鉄道研究部。」
「ふぅん。それで、部費とかまた集めなきゃいけないものとかあるの。」
「部費は年間で１４０００円。私が入部するときは１０月ぐらいからだと思うからまずは７０００円。後年に１回いく臨地研修代が２００００円くらいかかる。」
「また、そんな・・・。」
話し始めようとした時、
「みずほ。お前席外せ。」
お父さんが部屋に入ってきた。
「あなた。」
（父さん。）
「みずほは席外せって言っただろ。聞こえなかったか。今この話にお前は邪魔なだけだ。」
「・・・。」
それを聞くとみずほはさっさと席を立ちどっかにいった。

「さくら。まず聞くぞ。本当にやりたいって思ってるのか。」
うなずく。
「そうか。分かった。やる気があるならそれでいい。」
「いいの。」
「ああ。その代りやる気がなくなったらさっさとやめろ。そんな部活入ったって仕方ないからな。・・・。さて、また俺の懐が寒くなるなぁ。」
「えっ。部費とかも出してくれるわけ。」
「・・・。節約すればそれくらいどうにでもなる。」
「父さん。そんなことしてくれなくていいよ。バイトするから。」
「・・・。」
そういうとすぐにリビングを出た。
思わず飛び跳ねたくなった。
その話が終わるとみずほがリビングに戻ってきた。
「あなた・・・。」
「いいんだよ。あれで。ずっと親の敷いたレールなんて走りたくないだろ。ようやっとやりたいものが見つかったんだ。それを反対するなんて親としておかしいだろ。あれでいい。」
「・・・。」
「俺はもう寝る。」
「えっ。寝るってまだ。」
「明日早いんだ。」
そう言ってさっさと寝室のほうに歩いて行った。
翌日。
「えっ。さくらがソフト部を辞めるっ。」
朝学校に行って一番最初に聞かされたことがそれだった。
「またどうして。」
「まぁ半分は木ノ本(きのもと)のせいって思ってたほうがいいよ。あんたが鉄研に入ってなかったら留萌(るもい)だってこういうことはなかったんだけどさぁ。」

「なんで私のせいなのよ。どんな部活に入ろうが自由じゃないんだっけ。」
「そりゃそうだけどさぁ・・・。」
噂をしていると留萌が教室に入ってきた。
「あれ。榛名早いじゃん。浜松駅で「富士」と「はやぶさ」撮って来るんじゃなかったの。」
「その前に何でソフト部辞めるんだよ。」
木ノ本は留萌に当然の質問をする。
「・・・。もうする気がなくなったから。じゃダメかな。」
「・・・。」
「木ノ本。そういうことはあまり詮索しないでおいて。」
すると室蘭は耳元で、
「中学の時にソフト部辞めてったあんたと同じ気持ちだと思うから。」
と耳打ちした。
(中学の時の私と同じか。・・・。)
「分かった。理由はそれでいいよ。」
「ところでさぁ、話変わるけど、いちばん早い部活っていつ。」
一番答えづらい質問である。活動日は決まっていない。プラス先輩たち。特に善知鳥先輩が増やす部活がいつあるかなんて分からない。
「いや、いつあるかなんて分かんないし。」
「なんで分かんないのよ。鉄研だろ。」
「鉄研でも分かんないもんは分かんないんだよ。」
すると誰かが木ノ本を読んだ。ドアのほうを見ると永島がそこに立っている。
「永島。何しに来たんだよ。」
「いやあ箕島に教科書借りようと思ってさぁ。箕島いる。」
「今日あいつ日直だし今はいないよ。」
「あっ。そうなの。・・・後、善知鳥先輩が言ってたけど、今日部活あるってさ。」

「そう。了解。」
木ノ本がそう言っているときドアのすぐ近くにはられている日課に目を通した。木曜日は国語総合、数学?、芸術、芸術、英語?、生物?。
「ダメだこりゃ。今日ないのかぁ。」
「えっ。何借りに来たの。」
「現代社会。」
「ああ。そうなのか。ドンマイ。」
ため息をついて帰っていった。
「今の人って誰。」
席に戻ると留萌が問いてきた。
「同じ鉄研仲間。昼になったら紹介するね。箕島君以外。」
「で、今日活動あるの。」
「ああ、今日はあるって。だから先輩たちも後で紹介するから。」
今の心配は先輩たちのカオスさに留萌がついていけるかどうかだけだ。
昼休み。
「今日から鉄研に入る友達の留萌さくらちゃん。」
「へぇ。「さくら」かぁ。」
「永島想像してるものが多分違うと思う。」
「あっ、バレた。」
「バレバレだよ。」
(さっきの人この人かぁ。)
「じゃあ何。もし名前があずさだったら想像するものが183系かE257系か知らないけどあの「あずさ」になるってこと。」
「まぁ、そんなところかなぁ。」
「て、話脱線してる。」
木ノ本が話の脱線を訂正して、部員の紹介を進める。
「永島の隣に座ってるのが佐久間君。佐久間君の隣が醒ヶ井君。後は中学生と2年生と3年生だから。」

「ねぇちょっと聞いていい。よく榛名から3年生は全員おかしいって聞いたけど、本当にそうなの。」
「うん。そういうところ多い人の集まりだよ。」
（こいつ。今はっきり言ったなぁ。）
「まぁ、今日部活あるんだし、その時になればわかるよ。」
というわけで、放課後。
「今日から皆さんの鉄研部に入る留萌さくらです。よろしくお願いします。」
「留萌さくら。留萌さくら・・・。うーん。あっ。あだ名はルモタンでいい。」
善知鳥先輩がまず勝手にあだ名を考える。
「えっ。あだ名なんて。ふつうにさくらでいいです。」
「さくらじゃふつうすぎるもんねぇ。サヤ。」
「また不法侵入部員かぁ。」
「あの。入ってきた人がヒクからそういうこと言うのやめましょう。」
「・・・。」
「さくら。これが鉄研の先輩たちだけど、ついてこれる自信ある。」
木ノ本が耳打ちした。
「多分無理。」
「ですよねー。紹介するけど、今さくらにあだ名つけたのが善知鳥茉衣先輩。サヤって呼ばれた人は北斎院大智先輩。その奥にいる人が名寄真佐哉先輩。通称ナヨロン先輩。多分話するならナヨロン先輩が一番いいと思うけど。そして、そのナヨロン先輩の隣にいるのが綾瀬健人先輩。通称アヤケン先輩。で、今ここにいないけど現部長の鷹倉俊也先輩と桜の隣にいる女の人が楠絢乃先輩。」
「そうか。本当にすごいインパクトのある部活だな。」
「ハハ。そうでしょうね。」
「ていうか、あの永島の適応能力ってすごくない。あんな先輩たちとふつうに話せてるわけだし。」

「いや、あんな先輩って。永島だって善知鳥先輩とはあんまり話さないよ。永島がよく話すのはナヨロン先輩のほうだから。」
「ふぅん。ナヨロン先輩ってなんかジャンルとかあるの。」
「車両鉄だからねぇ。それもディープな。」
「へぇ。あたしと同じだね。」
「いや、同じって思うのはどうかなぁ。さくらＳＬ分かる。」
「分かんないけど。なんで。」
「ナヨロン先輩そこまでわかるから。」
「へぇ。すごいなぁ。」
永島と話しているナヨロン先輩のことが何となく神に見えてくる。
「何かほかの人はそういうことないのか。」
「えっ。アヤケン先輩は物作りが得意で、部活のモジュールも結構作ってるらしいけど、完成するとその呼ばわりがゴミになるとか。」
「何それ。」
「サヤ先輩は電車が好きなのはわかるんだけど、時折間違うとか、鈍感とかそういうことがあって、善知鳥先輩は新快速を新幹線って言っちゃったり、「ムーンライトながら」の３７３系を３１３系と言い間違えたり・・・。」
「な・・・。それって間違うようなやつじゃないよねぇ。どこをどう間違えたら特急列車が通勤電車になるのよ。・・・。あっ、そうか。「ホームライナー」とか３７３系使ってるか。それで言い間違えるのね。」
「いや、善知鳥先輩そういうこと全然分かんないから。」
「・・・。ようするに天然ってわけね。」
「そう。天然。」
「おい。そこさっきからあたしのこと天然って丸聞こえだぞ。アヤノンの次のいじられ対象にするぞ。ルモタン。」
「えっ。どういうこと。」
「つまり、楠先輩の次にいじられる人。」
「いや、それ分かるけど、いじるって何するつもり。まさかコスプ

レ。」
「今のところいじるでコスプレはないから。」
「・・・。」
「コスプレかぁ。いいかも。」
「・・・。」
「じゃあ、コスプレするんなら何が・・・。」
そう留萌(るもい)に聞こうとすると
「ここをメイド部にするなー。」
男子全員が声をそろえて言う。
「演劇部にもしないでください。」
楠先輩(くすのき)も続けた。
「分かったよ。全員なんでそういうこと嫌いなのかなぁ。」
「文化祭の時に被った制帽だけならまだ許しますけど、それ以上は許せません。」
「それ以上って制服もダメなのか。真似て作ったやつ。」
「そういう方面だけに凝りすぎ。」
「だってあたし家庭科以外得意な教科ないし。」
「だからって懲りすぎ。」
「・・・。」
（私この部活でやってけるのかなぁ。）
鉄道研究部という船にまた一人クルーが加わったのだ。
数日後。宗谷学園では・・・、
「あれ。何か入ってる。」
下駄箱のスリッパの上に何かが乗っていた。

今回からの登場人物
留萌寛太(るもいかんた)　留萌(るもい)みずほ

４３列車　新たなクルー（後書き）

この部活動に萌えはありません。

４４列車　差出人ヘッドマーク

宗谷学園では・・・、
「あれ。何か入ってる。」
下駄箱を開けてみると何かがスリッパの上に乗っかっていた。取り出してみると手紙だった。差出人は結構几帳面な人らしく封筒の中に入っている。封筒を裏にしてみるとイニシャルがあった。ＨＭ。
「差出人ヘッドマークさん。」
なんとなくギャグってみる。
「これが逆なら差出人ミュージックホーンさんになるんだけどねぇ。」
封筒の封を切って中の手紙を取り出す。文面は・・・、
「突然こんな手紙を出してすみません。今日もし、放課後何も用事がなければ3時４５分に体育館裏に来てください。待ってます。」
となっていた。
「明らかにラブレターじゃん。このヘッドマークさん、私に彼氏いること知ってて送ってきたのかなぁ。」
「ラブレターだって。」
振り向いてみるとそこには薗田と黒崎がいた。薗田のほうはラブレターという言葉に反応したのか目を光らせている。
「そんなのに首ツッコむなよ。」
「えっ。梓だって気になるでしょ。もしこれが梓の大好きな鳥峨家君だったら。心配なんでしょ。」
そう言われると黒崎の顔が真っ赤になる。
「べ・・・別にそういう意味じゃないってば。それに、あたしは・・・。」
「ねぇ、萌どう思う。」
「図星だよねぇ。」
言い返せなくなったようだ。目線をそらした。

「まぁ。梓は心配しなくても大丈夫だよ。差出人はヘッドマーク。鳥峨家君のイニシャルはＴＤだもんね。」
「よかったねぇ。梓。彼氏は浮気してなくて。」
「う・・・うるさーい。」
そうはいっても、今こう言った自分が恥ずかしくなった。全員の視線がこっちを見ている気がしたからだ。
「ちょっと場所変えない。」
「じゃあ、美術室行こうか。」
「私入っていいの。」
「分かった。教室に変えよう。」
「教室なんかでこんな話できないじゃん。」
「それ言ったら美術室でもこんな話できないだろ。」
「・・・。」
「よし。やっぱり教室で話そう。男子全然いないし。早い人でも８時だし。」
というわけで、教室に来てみると普段しまっている鍵が開いていた。そしてなかには男子が一人。
「・・・。」
「どこに行っても話せない話題じゃないか。」
黒崎が声を潜めて話しかける。
「じゃあ、小声で話せばいいじゃん。」
「多分それ無理。男子もそうかもしれないけどさぁ、こういう話って話してるうちに声が大きくなってって、ヒソヒソ話にも何にもならないんじゃない。」
「ですよねー。」
そんなこんなで放課後・・・。
「結局これの差出人が誰かも分からなかったけどさぁ、本当に行く気。」
「うん。だってこの人のこと好きじゃないし。まぁ、嫌いでもないけど。それに・・・今日は１５時４２分も５４分も１６時０６分も

１０００形だったからある意味助かった。」
（この人に会いに行く真の目的はそっちかよ・・・。）
（この人かわいそうだな。）
そう思いながら萌の後をつける。お互い気になるのだ。萌が体育館裏に入り込んでいくと誰かが立っている。それも初めて会う顔ではない。クラスの萩雅紀という人だった。
「坂口さん・・・。」
（萩君。確か萩君の下の名前って雅紀だったか。差出人ヘッドマークさん。）
「あ・・・あの。こういうことといきなりいう・・・。」
「ああ。ごめんね。私好きな人いるから。」
（単刀直入・・・。）
「あっ。そうなんだ。」
「そうだから。萩君とは付き合えない。ごめんね。」
「・・・。なら・・・。」
そのあとにどう言葉が続いたのだろうか。萩はすぐに言うのをやめて坂口の横を歩いて行った。歩いていくと坂口の後ろをついてきた薗田と黒崎の姿が見えたようで、目線をそらした。その姿が見えなくなると坂口に駆け寄った。
「まさか差出人が萩君だったとはなぁ。」
よってきた黒崎がまず口を開いた。
「えっ。梓今頃。あたしはこのイニシャル見てすぐに萩君かなぁって思ったけど、あたしの知ってる萩君の字じゃなかったから自信持てなかったんだよねぇ。」
「だから。安希はそういうことに首ツッコまない。」
「ていうか。萌にも好きな人いるんだ。」
「えっ。」
萌自身すべてが筒抜けだったとは思わなかった。
「なんだ全部聞いてたんだ。」
「うん。まぁ。どうしても気になって。」

「まぁ。分からないわけじゃないけどねぇ。」
「ああ。せっかくだから携帯に録音しとけばよかったかなぁ。」
「だから。安希はそういうことしないの。」
「大丈夫だよ。梓。安心して。鳥峨家君がコクッたり梓がコクッたりするときは全部携帯に録音して、綾に送るから。」
「やめろ。ていうか、何であたし限定。」
「ダメじゃないでしょ。」
「ダメに決まってる。綾なんかにそれ送ったらクラス中に広がっちゃうじゃん。」
「大丈夫だって。あさひが広げたときは学年中だったじゃない。それに比べれば規模は小さいよ。」
「いや。それあったからトラウマになってるんじゃないの。ていうか、学年中に広がった話って何。」
「聞かなくていいし、教えなくていい。」
黒崎はそう言ったが薗田はそんな黒崎そっちのけでべらべらしゃべりだした。
「中学の時に林間学校みたいなの行った。」
「うん。行った。」
「ナイトウォークラリーとかやった。」
「うん。」
「梓ってこう見えてもお化けとか全然ダメでさぁ。ナイトウォークラリーやってる途中に同じ班の人がお化けの真似して梓のこと脅かしたのよ。そしたら梓涙目になって叫んでさぁ。それで友達のほうはドッキリ大成功みたいなこと言ってるじゃない。それ聞いて少しは梓も落ち着いたんだけど、さっきのショックが強烈だったみたいでさぁ。腰抜かしたのよ。」
萌の傍らで聞いている黒崎の顔がどんどん赤くなる。
「それで、みんなでどうしようってなってた時に鳥峨家君が「俺が集合場所までおぶってく」って言ってね。」
「このバカ安希。」

「それで助けられたことあるんだ。」
「そう。それでそのあとどうも梓鳥峨家君のことが気になったみたいでさぁ。でも、コクレないままなんだよねぇ。」
「・・・。」
「ふぅん。」
黒崎のほうに目線を向けると、
「見るなー。見るなー。見るなー。」
真っ赤な顔で叫んだ。
「ところで、萌が好きな人って誰。」
「えっ。この学校の人じゃないよ。」
「何、別の学校。」
「うん。今岸川に行ってるんだけどねぇ。梓見たことあるでしょ。鳥峨家君に似た人。」
「えっ。あったっけ。そんなこと。」
「あっ。覚えてない。なら、いいや。」
「岸川って言ったらソフト部だよねぇ。でも男でソフト部はないから・・・。」
「鉄研部に入ってるよ。」
「鉄研部。うわぁ。その人オタクだなぁ。」
「本人の前で言うと怒るんだけどね。」
「何マニアっていえってか。今更どうでもいいだろ。大体オタクもマニアもただ呼び方が違うだけじゃない。」
「ハハハ。でもそこは考慮してあげて。」
「よし。じゃあ本題に入るけど、その人とはいつからの付き合いなの。」
考えるまでもない。
「付き合いっていうわけじゃないけど、その人と知り合ったのは小学校1年生の時。最初のころはその人全然しゃべらなくて、なんか1年生らしくなかった。ずっと一人で外眺めててさぁ。」
「何。窓によさりかかってボーっとしてるって感じ。」

「うん。そんな感じ。授業中も先生の言うことまともに聞いてないって感じでさぁ４５分の授業中に必ず8回外に目をやるんだよ。」
「何か規則性みたいなのでもあったのか。それともその人の癖。」
「規則性みたいなのはなかったなぁ。最初は癖って思ってたんだけど、観察してる中でその人が外を向くときは必ずカタンカタンっていう音がしてるってことが分かったんだよねぇ。」
（さすが鉄研だな。）
「それで席が前後ろになった3学期に思い切って話しかけてみたんだよ。そしたら今までのイメージだと想像できないくらい明るくてさぁ。電車のことふったらそのあとは電車のこと語りっぱなし。最初は電車のことわかんなかったけど、そのうち私にもわかるようになってさぁ。最初はこんな感じ。」
（それで今がこれかぁ。）
「じゃあ、そのあとはどうなったんだよ。」
「そのあとはその人の家に鉄道模型のレイアウトがあるんだけど、そこで1日中遊んだり、その人の従兄に浜松駅まで連れてってもらったりしてもらった。そんなこんなで中学まで過ごしてさぁ。その人には好きとはいえなかったんだけど、今でもあいつ以外に彼氏創ろうとは思わないなぁ。」
「好きって気持ち確認してないのにか。それ絶対終わってるだろ。」
「そうかなぁ。私そういうこと思ったことないんだよねぇ。」
「なんで。」
「なんでかはよく分かんないけど・・・。」
「・・・。」
少し萌から離れる。
「なんでよく分かんないのに好きなままでいられるんだよ。」
「梓だったらよく分かるんじゃないの。鳥峨家君が持ってる雰囲気とか。多分そういうのじゃないの。」
ヒソヒソ話から切り替えて、
「じゃあ、もう一つ聞くけどさぁ。なんでその人にそんなにこだわ

るの。」
すると歩みを止めた。すると薗田たちのほうを向いて、
「それこそ好きだからだよ。」
それだけ返答する。
「なんかそれだけじゃないような気がするんだよねぇ。」
薗田が疑ってかかった。
「なんか将来その人と一緒になるとかって思ってるのかなぁ。」
ドキッとした。もちろんこのことを知っているのは木ノ本しかいない。それをなぜ薗田が知っている。もちろん、薗田と木ノ本に接点はない。木ノ本は浜松市の芦原地区。場所で言うと浜松工場のあるあたりに住んでいる。薗田は浜松市の高島。場所で言うと遠江急行芝本駅付近に住んでいる。
「一途にそうなる時を待ってるって感じしない。」
「・・・。」
「あっ。梓に聞いてもダメかぁ。梓も鳥峨家君と一途な恋愛してるんだからなぁ。」
「黙れ。」
（まさか。安希ってみんなの思考回路高性能コピー機。ああ、いつか私もナガシィの思考回路高性能コピー機になるのかなぁ。）
ふとそういう考えが生まれた。

４４列車　差出人ヘッドマーク（後書き）

今はこういうことってしないですかねぇ・・・。
でも、こういうことがあるからこそ創作なんですよねぇ。

４５列車　乗務員服（前書き）

発言だけですが・・・。

45列車　乗務員服

9月の末。岸川学園では体育祭が行われる。
「もうすぐ体育祭かぁ。やらなくていいのに。」
ため息が出る。
「本当だな。体育祭やる暇があるなら、車撮に行ってたほうがましだ。」
木ノ本が続ける。
今日は部室に集合がかけられている。そのため部員全員が集められているのだ。
「肝心の善知鳥がまだ来てないけど。」
「前やらせたコスプレレースでもやらせるんだろ。俺出るの嫌だからな。」
「なんでだよ。ナヨロンは3年連続で出ればいいじゃん。お前のあれ結構似合ってたぜ。」
「恥ずかしいんだよ。クラスの全員がいる前であの格好は。」
「確かに。俺ももうあの恰好だけはしたくないなぁ。」
アヤケン先輩も続ける。すると部室のドアが開いた。
「お待たせー。」
息を切らしている善知鳥先輩の姿がそこにある。片手には岸川のバッグではなく紙袋を提げている。
「善知鳥先輩。それなんですか。」
「えっ。ああ。これ。」
そういうと紙袋の中に手を突っ込み帽子を取り出した。ただの帽子でないのはすぐに分かる。
「ジャーン。」
そういうとあからさまに僕の頭のそれをかぶせた。前かぶせられた時と同じような感覚がある。前オープンキャンパスに来たときにかぶせられた制帽だ。

「・・・。これって運転手とかの制帽ですよねぇ。」
木ノ本が問う。
「そうだよ。膳所さんが持ってたやつ借り手あたしたち用に作ったやつ。男子のやつばっか大量生産してたからほとんど男子のだけど、女子のもあるよ。ほら。」
「・・・。」
「いくら得意教科が家庭科しかないって作りこみすぎ。これ凝っていすぎるんだよ。」
サヤ先輩が口をはさむ。
「しょうがないじゃん。部活やってる日以外暇なんだもん。」
「高校3年生になってそう言うのはよそうぜ。」
「あのう。善知鳥先輩。これをどうしろと。」
「えっ。決まってるじゃない。体育祭の文化部対抗リレーの時これかぶってレースに出るのよ。」
「・・・。」
「当然1年生がね。」
ちょっとの間自分に渡された制帽を見る。
（これをかぶって走るのかよ。）
「ああ、あと体育祭の時は冬服持って来いよ。」
「えっ。暑いですよ。」
「バカ。伝統事業だぞ。ワイシャツ着て、ネクタイしめて、冬のズボンで走る。これ鉄研の定番だからな。」
（知るか。）
（やっぱり私入る時期間違えたかも・・・。）
（よく絢乃先輩これやったよね。）
（・・・。）
（マジかよ。）
（なんで冬服。ふざけんな。）
「そういえばさぁ、去年の体育祭の部活どう対抗リレーって誰が出たっけ。」

善知鳥先輩が問題を振る。
「えっ。去年は俺とナヨロンとアヤケンとハクタカと膳所さんと上野さんが出た。」
その問いにはサヤ先輩が答えた。
「あれ。アヤノン出てなかったっけ。」
「出てないよ。制服の上がワイシャツでネクタイでも下はどうしたってスカートなんだからさ。それ以前にアヤノン出たくない出たくないってさんざん言ってたじゃん。それで膳所さんと上野さんが出たくない人を無理に出させるなって言ったんだぜ。」
「あれ。そうだったっけ。」
「去年のことぐらいちゃんと覚えとけよ。」
「まぁいいわ。で出るやつは・・・、ナガシィとミッシィとサメちゃんとユウタンとイサタンとソラタンとアサタンは出ること決定か。」
「おい。多すぎ。6人で十分だって。6人で。」
「あの。僕実行委員で運営とかの方に回らなきゃいけないので、多分出れません。」
箕島が断りを入れる。
「じゃあ、これで6人じゃん。これでいいよ。」
「ちょっと待って。」
そういうと善知鳥先輩は木ノ本と留萌に最接近した。
「ハルナンとルモタンは出たくないの。」
「出たくないです。とてもじゃないけど恥ずかしすぎて・・・。」
まず留萌が答えた。
「恥ずかしいって。将来運転手とかになったらいやでもこの格好しなきゃいけなくなるんだよ。」
「いや、そうじゃなくて。友達の前でこれをかぶらされるっていうのが・・・。」
「去年アヤノンだってそう言ったって。」
（なんの説得にもなってない・・・。）

「ハルナンは。」
「私だって出たくないです。」
（そりゃそうだよなぁ。部活入るときにも女子が入っていいのかって思った部活だよ。こんな格好できるわけない。蘭にもみられるじゃん。）
「なんだ。二人とも出たくないのかぁ。よーし。ちょっと男子全員外に出てくんない。」
「何やらせるつもりだよ。」
「着替えさせるの。だから男子全員外に出てって言ってるの。それとも、女の子の裸が見たい変態どもしかいないのか。」
「・・・。」
「ヘイヘイ。とりあえず全員外でろ。」
サヤ先輩が促して、部室の中は善知鳥先輩と楠先輩と木ノ本と留萌だけになる。
「さてと、男子がいなくなったところで着替えさせるか。えーとまずは、アヤノンから。」
「なんでまたあたしからなんですか。」
「いいだろ。こういうときはいつもアヤノンからって決まってるんだから。」
「そんな方程式ありません。」
「ていうか善知鳥先輩。冬服もないのにどうやって着替えさせるつもりなんですか。まさか下着だけになれとは言わないですよねぇ。」
「それは言わないよ。これを見ろ。女子の制服はあたしが大阪に行っている間に作ったんじゃー。徹夜して。」
（恐ろしい能力だな。）
その頃部室の外では・・・、
（さっきからの会話筒抜けだよ。）
「アヤノンってうざいんだよなぁ。あたしよりちょっと胸大きいでしょ。ハルナンはどう思う。」
「そこに注目しなくていいです。」

「早くこれ着ろ。」
「絢乃(あやの)先輩似合ってますねぇ。」
「本当は今ここにいる全員にも見られたくないんだけど・・・。」
「ちょっと写メらせて。そしてこの写真をハクタカに送る。」
「やめてください。こんな格好バカタカにも見られたくないです。」
「よし。次はハルナン。アヤノンそれ脱いで。でハルナン。ハルナンもポロシャツ脱いでね。」
「さらっと脱げって言わないでください。」
「何。もしかしてノーブラ。ノーブラじゃ見られたくないよねぇ。」
「そういうわけじゃありません。」
「・・・。」
「ああ。耳が痛くなる。」
「・・・。」
「なんか鉄研(てっけん)の男子肩身狭いですね。」
ナヨロン先輩に振ってみる。
「そうかもな。善知鳥(うとう)がハイテンションすぎるんだって。まぁ、あのハイテンションだけならムードメーカーとしての作用は抜群なんだけどなぁ。」
ナヨロン先輩は相当迷惑そうな顔をした。
「うわ。ハルナンもあたしより胸大きい。もしかしたら鉄研(てっけん)一貧乳かも。」
「これ絶対外まで聞こえてます。」
「・・・。」
「善知鳥(うとう)のやつ。後輩はお前の着せ替え人形じゃないつうの。」
また10分くらいたつと部室に入っていいといわれた。部室に入ってみると留萌(るもい)がさっき言っていた格好をしている。服の色は黒だから冬服だろう。
「サヤどう思う。」
「まぁ。かわいいんじゃない。」
とうの留萌(るもい)は顔が真っ赤だ。こっちを見ないでと言わんばかりに目

線をそらした。
「・・・。」
こういう描写はちょっと前に自分も経験したことがある。ちょっと前といってももう1年位前のことだが・・・。
「ナガシィ。ちょっとこっち向いて。」
「えっ。」
振り向いてみるとそこには萌と端岡と磯部の顔がある。
「うわ。萌マジでナガシィ君デコっちゃってるよ。」
「顔つきがちょっと女の子よりだから一見したら女子に見えるかも。」
二人がそう言っている。
「何。俺の顔に何かついてるのか。」
「えっ。まさか、ナガシィ君気づいてないの。」
そういうと磯部がカバンから手鏡を取り出し、
「あっ。」
鏡に映っていた自分は目のあたりまでかかっていた前髪をヘアピンで分けられていた。その時萌が僕の後ろに回って後頭部のあたりを指でなぞった。
「気づいてないとは思わなかったよ。ナガシィって結構鈍感なんだね。」
そう言われて後頭部に手を当ててみる。すると何か髪を束ねられている感覚がある。当てた手をずらしていくと束ねてある根元があることに気付いた。
「おい。萌。これいつやった。」
「朝のバスの中。ナガシィ寝たまんまで起きないんだもん。」
ということは・・・。今は16時。つまり僕は7時間以上このままでいたことに気付かなかったのである。
「お・・・お前。」
「ハハハハ。怒んないでね。」
「・・・。怒りたくなるわ。ていうか。俺、この格好で写ってる写

真ってないよなぁ。」
そっちのことが心配になった。この格好はよく家ではされているが、外でやられたのはこの時が初めてだ。
「さっき法隆寺で、学級写真撮ったわけだし、卒アルにはこの格好で載ることになるね。」
「こらー。」
「ハハハハ。ホテル着くまで取らないでよ。」
こういわれた時。僕は初めて萌(もえ)と話してて恥ずかしいと思った。
「・・・シィ。ナガシィ。」
「えっ。」
「何ボーっとしてるの。制服のルモタンにうっとりしてたのか。」
横から怒ったような顔で善知鳥(うとう)先輩の顔がのぞいている。
「してませんよ。」
（ていうかさくらにほれてたら問題だよなぁ。永島(ながしま)の好きなやつさくらじゃないし。）
「ウソだろ。」
「ウソじゃありません。」
こういうときには口調が少し焦るだろう。しかし、なぜか口調が焦らなかった。淡々と返答して、
「いいんじゃないですか。似合ってると思うし。」
「よかったな。ルモタン。みんな似合ってるって。」
「・・・。」
「さぁ。もう一度男子全員外に出てよ。これからルモタン脱がすから。」
善知鳥(うとう)先輩に押し出される形で部室の外に出る。
「さぁ、ルモタン脱いでね。脱ぐの大変だったらあたしも手伝うよ。」
「別に手伝ってもらわなくても・・・ちょっ。善知鳥(うとう)先輩パンツまで脱げちゃいます。」
「大丈夫だよ。脱げちゃうって言っても現実脱げてないから。」

「そういう問題じゃないでしょ。これじゃあ善知鳥(うとう)先輩が変態なんじゃないかって思っちゃうじゃないですか。」
「何。アヤノン。あたしは変態じゃないぞ。女子が女子を脱がしてどうするんだよ。」
「どうするんだよって・・・。今現実にそれをやりましたよねぇ。」
「スカートは板から次は上か。ワイシャツ脱ぐときはあたしの視界に入らないように脱いでね。もしそうしなかったらブラ取るから。」
「そういうことが変態に等しいです。」
「だってみんなあたしより胸大きいんだもん。なんかイタズラしたくなるんだよねぇ。」
「・・・。」
もちろん着替えているときの会話も筒抜けだった。

45列車　乗務員服（後書き）

どこの鉄道会社もそうだと思いますが、乗務員の制服は男女ともワイシャツ・ネクタイ・上着・ズボンなんです。もちろん夏服・冬服の違いはあります。

46列車　体育祭

数日後・・・。
「ああ。体育祭かぁ。ダルイィ。」
大きなため息をついた。
「ハハハ。また家で模型いじってたいって言うのか。」
宿毛(すくも)が隣で笑っている。
「それしたいよ。学校にあんな大きなレイアウト持ち込めないからさぁ。」
「確かに。持ち込めないな。まぁ、持ち込めたらそれはそれですごいけど・・・。」
「そうえいばさぁ、俺何と何と何に出るんだっけ。」
「それくらい覚えとけよ。」
教室に行って体育祭の選手名簿を開く。僕の名前は１００メートル走と騎馬戦に名前が入っていたが、騎馬戦は補欠だった。
「騎馬戦補欠かぁ。まぁ補欠でせいせいしたけど。」
「騎馬戦お前弱いもんな。中学の時は開始5秒くらいで落ちたっけ。」
「うん。まさか後ろにすぐ回り込んでくるやつがいるとは思わなかったもん。」
僕は手を頭の後ろに回して窓辺まで行く。窓から外を見てみるとグラウンドが見える。外は当然のことだが体育祭の準備が進行している。
「それもそうかもしれないけど、お前の場合はケンカとかああいうやつやりたくないだけだよなぁ。」
「・・・。まぁそっちのほうが大当たりだね。」
すると教室のドアが開く音がした。入ってきたのは同じクラスの女子。
「早いなぁ。いつもこの時間に来てるわけ。」

「ああ。玉名さんこそ今日はやけに早いな。」
「別に体育祭張り切ってるってわけじゃないよ。ただ、朝なら誰もいないかなぁって。」
「朝早く来るなら7時40分前に来ないと。」
「えっ。そんなに早いの。眠くならない。」
「眠くなったことはないな。勉強の時だけは別。永島の場合は夜見たい番組とかないし、それでさっさと寝ちゃうって感じだけど。」
「ふぅん。まぁ。人それぞれってことだね。あたしなんか今日の2時に寝たから眠くてしょうがないよ。」
「よく起きてられるなぁ。」
「はたから見たらそんな感じだよねぇ。永島君って結構夜遅くまで勉強してるって感じするけどそうじゃないんだ。」
その言葉には宿毛も僕も開いた口がふさがらなくなった。
「玉名さんそれ偏見。こいつテスト前あんまり勉強してないでクラストップだし、これまで四ツ谷のノート一度も出したことないぞ。」
「えっ。マジ。」
これには玉名さんもびっくりしたらしく目が点になっている。
「な。うざいだろ。普段こんな感じのオチャラケでクラストップだぜ。」
「いやぁ、それほどでも。」
(褒めたつもりはないんだけどなぁ。)
「・・・。でもさぁ、永島君って性格悪くないし女の子から結構モテてるんじゃないかなぁ。」
「確かに。性格は悪くないな。」
「なんだよ宿毛。その言い方は。」
「冗談だって。性格も含め全体的に悪くないって。実技を除けば。」
そう言い合っているところを見ていた玉名が笑いながら、
「永島君ってなんか一つ一つの行動が笑えるからさぁ、他クラスでも噂されてることもあるよ。」
「なるほど。この頃風邪ひいたかなぁって思ってた根源はそれかぁ。

」
「・・・。」
「俺って女子と話したことはあってもモテたことないからなぁ。・・・。女子からなんか言われたりされたりしたってことはヘアピンつけられたことがあるとか、でっかい子供って言われたりとか・・・。それくらいかなぁ。」
「へぇ。いじられキャラなんだな。」
「うん。俺結構いじられてるから。」
「それって全部坂口じゃないか。」
「しょうがねぇだろ。俺いじるのあいつくらいしかいないんだから。」
（鉄研の女子と以外話してるところ見たことないからなぁ。でも、その人と恋愛っぽいことはしてるんだ・・・。って十分モテてるじゃないですか。）
「ごめん。ちょっとクラティに着替えてきたいんだけど。」
「いいよ。行って来い、行って来い。」
そういうと玉名はクラスティーシャツとハーフパンツを持って教室を出て行った。恐らくトイレで着替えるのだろう。数分するとクラスティーシャツ姿で教室に戻ってきた。
ドアが開く。その音で僕は寝た姿勢から体を起こした。
「永島君。寝てたの。」
「寝てないけど、立ってるのダルかっただけ。」
「えらい違いだよなぁ。お前に鉄道が付いただけであれだけ変貌するんだからさぁ。」
「鉄研やってる時の永島君と普段勉強してる時の永島君ってギャップすごいよねぇ。まず部活やってる時と勉強してる時と声違うし。」
「そう。俺はそんなこと意識してないけど。」
（意識せずに変えれるんだからすごいよねぇ。）
なんか話が詰んだようで黙り込む。
「なぁ。そろそろ外いかねぇか。」

「宿毛君気が早い。まだだれも来てないじゃん。」
「そうそう。８時２５分くらいになったら行けばいいって。」
「永島君は気長すぎ。」
８時２０分までの間に僕も宿毛もクラスティーシャツに着替えた。それから運動場に自分の席を持って移動し、１年５組の所定の位置に席を置く。その頃には集まっていなかったメンツも集まった。運動場は色とりどりのクラスティーシャツが埋めている。それぞれのところで色が違ってカラフルだ。
それに目をやっていると誰かが僕の肩をたたいた。肩をたたいた人は新城という人だ。当然だがクラスメイトだ。
「お前１００メートル１位とれよ。」
そう話しかけてきた。確か新城は２００メートル走とホームルーム対抗リレーにエントリーしていた。相当足が速いということだろう。
「１位は取りにいかないけどビリも取にいかない。そこそこ頑張るよ。」
「そこそこって。お前クラス１位だろ。それくらい頑張れよ。」
「ヤダ。運動だけは頑張りたくない。」
そう返答しておいた。
９時。開会式で体育祭が始まる。最初は１００メートル走。さっさと終わらせてあとは休む算段。結果は８人中４位。半分くらいがちょうどいい。
そのほかの種目で５組はそこそこの成績。良くも悪くもないという中間を走る競技もあったが頭一つ出る競技もあった。そんなこんなで午前中の部は残すところ部活どう対抗リレーだけになった。最初は文化部。その次に運動部がやる。
言われていた冬服をクラスティーシャツの上から着る。いくら残暑がなくなったとはいえこの格好になるとさすがに暑い。まだブレザーがないだけましなのだが・・・。
「よーす。持ってきたなちゃんと。」
善知鳥先輩がいつの間にかこっちに来ていた。後ろには同じく冬服

に着替えた醒ヶ井、諫早、空河、朝風の姿がある。
「これで全員そろったな。よし。行けー。」
善知鳥先輩に押される形で入場門のところまで行かされる。
「あっ。言い忘れてた。これがバトンよ。汚さないでよね。ちゃんと走るときはこれしてよ。」
持ち出したのはやはり制帽。その制帽のつばの上にはヘルメットのような留め具が収納されている。よくここまで作りに凝ったものである。第1走者は諫早。これをかぶると嫌でも国鉄の職員に見える。
「よし。これでよーい、ドンって言った瞬間にチャカをぶっぱなすか。」
「それで俺の前に言ったら殺すっていうんだろ。」
空河が続ける。
「いや、動いたら殺すっていうんだろ。」
朝風が続ける。
「それプラス止まったら殺すっていうんだろ。」
ついでに僕も続けた。
「八方ふさがりじゃねぇかよ。それ。走っても殺されるし、動いても殺されるし、止まってても殺される。」
「いや。それって自分が動いてなかったらいいんだろ。チャリという選択肢があるじゃないか。」
醒ヶ井まで話に入ってきた。
「なんでですか。チャリ使ったら自分が動いちゃうじゃん。」
「考えてみろ。確かに動いてるけど動いているのはチャリであって自分じゃない。」
「よし。そう来たらロケランに吹っ飛ばすか。」
「違う。プラスチック爆弾で吹っ飛ばすんだろ。」
「いやいや。チャリの動力源をチャカでヘッドショットするんでしょ。」
「いやいや。核爆弾で吹き飛ばすんだろ。」
すごい会話だ。話した順番は諫早、空河、朝風、僕の順番。

「あなたは俺たちを殺す気か。」
中学生全員が声をそろえてツッコんだ。
レース開始。順番は諫早、醒ヶ井、空河、朝風、僕、佐久間の順番。諫早がまず１０人中４位につけ、醒ヶ井も１０人中４位。空河のところで一度５位に落ちたが、朝風が快進撃。３位につけ、僕のところでも３位をキープ。最後に佐久間ががんばって２位につけたが、パワーダウンで４位に落ち、そのままゴールした。
終わると制服の中に熱がこもってとても暑い。汗がじわじわにじみでてくる。
「あー。暑ーい。」
「永島君。ちょっとそのままでいて。」
「えっ。」
その声がしたほうには朝話していた玉名さんともう一人別の女子が立っている。
「ちょっと写真撮らしてもらっていいかなぁ。それあんまり見れないし、結構似合ってるし。」
結構似合っているというのは頭にかぶったままでいる制帽だろう。これはさっき佐久間が僕にかぶせてきたもの。さっきから頭に照り付けてくる太陽を少しさえぎれるならという思いでかぶったままでいるのだが・・・。
「マジ。これ暑すぎて死ぬんだけど。」
「そこをなんとか。」
「・・・。はぁ。分かったよ。」
「こいつと一緒に撮らしてもらっていい。」
玉名がそう言ってきた。いくら坂口が勘違いしないからってそれはまずい。それだけは断った。写真を撮影が終わったところで元のクラスティーシャツに戻る。本当に暑い。クラスティーシャツの中と外の空気を少し入れ替えて、かぶったままでいた制帽を善知鳥先輩に返しに行く。その間はもちろんかぶったままだ。
校舎側にいる３年生の観覧席に回って善知鳥先輩を探す。探し始

めて数秒すると見つかった。
「善知鳥先輩。これ返しに来ました。」
そう言うと、
「えっ。部活の後輩。」
善知鳥先輩のクラスの人と思われる人が群がってくる。
「そうだよ。」
「かわいい。」
「・・・。」
「なんか小学生がそのまま高校生になったって感じ。まさかの飛び級とか。」
「こんなに背の高い小学生いるか。いくら背が高いって言ってももうちょっと小さいだろ。」
「あ・・・あのう、これ・・・。」
「あっ。うん。ありがと。」
「ちょっと待ってよ、茉衣。せっかくだから写メらせて。」
「あっ。そういえばあたしもナガシィの写メ取ってなかった。」
（だからなんでそういう話になる。）
しばらく3年生にいじられまくって、自分の席に戻ってきたころには午前の部は終了していた。
午後の部はお呼ばれしない。騎馬戦はずっと補欠扱いのままだったので呼ばれることはなかった。後は男子・女子のホームルーム対抗リレーくらい。それの応援をやって体育祭は終了した。
「はぁ。終わった。今の時刻は１５時３０分。いつものやつじゃ帰れないね。」
「そうだな。まぁ、体育祭がいつもと同じ時間に終わるとは思ってないけど。この後終礼があって着替えて解散だろ。まだ１５分くらいはかかりそうだな。」
「うーん。帰るやつは１０００か２０００か。そっちのほうが心配だな。朝１０００系だったし。」
「心配することか。それ。」

その頃3年生は・・・、
「今日のあれなんだけどさぁ、あれ正直体操服のままでもよかった気がしない。」
「おい。おれ知らないぜ。それ1年生が聞いたら絶対キレるぞ。」
「サヤ。そこはあえて知っといて。」
左手に善知鳥(うとう)が縋り付く。
「ちょっと離せ。」
「知っておくって言うまで・・・。」
「はいはい。分かったよ。」
善知鳥(うとう)がサヤの左手を離すと、
「んじゃ、俺は知らない。そういうことで。」
「あっ。知っとけー。サヤのゴミー。」
なお。これが終了してもまだ新体力テストの持久走のほうが残っているのだ。

今回からの登場人物
玉名(たまな)　新城(しんしろ)

４６列車　体育祭（後書き）

こんな小説でも作ったことに意味がある。この世にあるすべてのものは何らかの形で意味を成す。たとえそれがどんな意味を持とうとも。

47列車　持久走

後期に入って最初の金曜。１０月２日。
「今日は持久走かぁ。」
隣に座っている宿毛がため息をついた。今は遠江急行１０００系第４編成の中。
「そうだな。お前制服の下に体操服着てるのか。」
「着てねぇよ。その代りっていう感じでシャツは着てるけど。」
「それって駄目だよなぁ。校則的に。」
「・・・。かたいこと言うなって。ていうより俺は持久走よりも四ツ谷が今日もノート出せって言わないかっていうほうが心配。今日はやってきてないから。」
「あっ。まだそれやってたんだ。」
「我ながらよく続いてると思うよ。」
「・・・。」
今日はまず学校ではなく持久走を行う。岸川学園では新体力テスト持久走は学校ではなく別な場所で行っている。浜松球状の近くにそのグラウンドがあるらしいが。
その場所は江急上島が一番の最寄り駅。その数百メートル東に遠州鉄道の上島がある。上島で１００４から降りて、改札を出て、駅の外に出る。駅を出るとすぐに道にぶち当たる。その道は幹線道路から外れているので車の数も少し少ない。
「そういえば、今日ふつうに金曜日だったな。」
その光景を見た宿毛が自分に言い聞かせるようにつぶやいた。
グラウンドのある方向に歩いていくとすぐに坂がある。その坂を上ると片側2車線の道路が現れる。確か名前は飛龍街道だったはずだ。僕は道には全く詳しくない。覚えている道といえば家から駅まで行く道と学校まで通う道だけである。
数分すると目的地であるグラウンドが見えた。そこにはまだだれ

も来ていない。来ていたのは陸上部の人だけ。クラスの陸上部員希望君も来ていた。すると希望は僕たちのことが目に入ったみたいでこちらに歩いてきた。

「よーす。お前ら早いなぁ。」

誰もが言ってくる第一声がこれなっている気がするが・・・。

「ああ。電車混むしな。」

「学校もいつもこれくらいに来てるのか。」

「うん。そのあとの混むから。４号車でも。」

「・・・。なるほどな。さすが鉄研だ。」

そういうと希望は後ろの観覧席らしきところを指して、

「あっちの席のところに俺たちの座る場所があるからそこ行っときな。」

と言った。

希望が言ったところに行ってみると１組から順番に紙が貼ってあった。ここに座れという意味である。全席指定であるというのはちょっと気に食わないが・・・。

８時３０分になるまでの間に１年生が集合しきったと思う。でも、自分がそう思っているだけに過ぎない。ふつうに遅刻してくる連中はまだいる。その人たちの集合が終わってようやっと本題である持久走に入った。

最初は当然のことだが準備運動。準備運動をしたら一周走る。もちろんアップなので飛ばす必要はない。それが終わると観覧席に戻って人休憩。その頃には最初に走る特進コースの男子が準備していた。

「はぁ。走るのダルい。」

「だるいとも言ってられないんじゃないか。これクリアしないと体力テストいい結果なんかでないぜ。」

「結果なんてどうでもいいよ。だって走れば問題ないんだもん。途中で歩いたりしなければいいだけじゃん。」

「・・・。根本はそこかもしれないけど。」

「1年5組と1年6組男子の前半。移動しなさい。」
アナウンスが入って僕の周りにいる男子が席を立ち始める。
「俺たちも行くか。」
宿毛(すくも)が促した。
観覧席からフィールドに降りて、今走っている1組男子・2組男子・3組男子の前半の邪魔にならないようにトラックの真ん中に入る。
「1位は間違いなく希望(のぞみ)だよなぁ。」
独り言を言った。
「希望(のぞみ)かぁ。そうだろうな。早そうだもん。」
そう言っていた会話は希望(のぞみ)には聞こえていたらしい。
「そうとも限らないってことはこの世の中多いんじゃないか。俺の予想じゃ1位は新城(しんしろ)だな。」
「なんで。」
「俺どちらかというと短距離だから。長距離苦手なんだ。だから1位は新城(しんしろ)。」
なんか意外だった。
3組男子の後半と4組男子が走り出したところで次が僕たちの番。
それまでの間僕は宿毛(すくも)と話していた。その中身は何のたわいのない話。その話の間にこのグループのトップがゴール。記録は5分を切ったらしい。しきりにそういうのが聞こえた。
次は僕たちの番だ。スタートラインに並ぶように促される。
「これってビリっていうのとトップっていうの嫌だよなぁ。」
「お前はクラストップなんだからこれでもクラストップ取りに行けよ。そうすれば女子にモテモテだぜ。」
「そんなことしたくねぇよ。目立つから。」
(いや。今でも十分目立ってると思うけど・・・。)
その会話を交わした直後。スタートの号砲が鳴った。
それと同時に全員が走り出す。この中では比較的前のほうにつけた。そのあとは前の人を見据えてただ引っ張られていくだけ。どこ

までついていけるかは持久戦だ。
　1周で４００メートル。2周で８００メートル。１５００メートルある持久走はこれを3周と4分の3周する。ゴールは観覧席の一番南寄り。ここまで走って順位表をもらい先生に提出する。それが僕たちのタイムとなる。
　1周目は少々速いペース。2週目からペースがだんだん落ちてきて、3周目ではへとへとの状態。これは自分の配分が悪いだけだ。そう自分に言い聞かせた。何とか走り切ってゴール。タイムはゴールする前にチラッと見た。５分５８秒。
　ゴールすると態勢が崩れた。ももに手を置いて息を整えようとするが、こんなすぐに息が整うわけない。足を動かそうとすると思うように動かない。とても足が重いのだ。そんな足で何とか記録員のところまで行って9と書かれたカードを提出。そのあとは周回遅れの邪魔にならないように観覧席側に戻る。
　戻っている間に宿毛（すくも）が話しかけてきた。
「はぁ。永島（ながしま）。お前何位。」
「9位。」
「そうか。7位。」
「そもそも体力テストで勝負って無理じゃん。俺よりお前のほうが成績いいんだから。」
「そうでもないだろ。数十秒くらい差があるんだったら別だけどこんな僅差で得点が違うってことはありえないんじゃないのか。」
「ありえねぇけどさぁ。ボール投げとか俺致命傷なのが多いしそういうところで逆転とか無理ってこと。」
「ハハハ。」
ところどころ途切れながら肺の中に酸素を送り込む。僕は靴のつま先をずりながら観覧席のところまで行った。
「はぁ。疲れたー。」
自分の荷物が置かれている席に座ると大きな声を出した。
「他がびっくりするだろ。ちょっと抑えろって。」

「はぁ。」
宿毛(すくも)がそう言ってもとうの自分にはその気はさらさらない。吐く息のついでに声も出した。
「ああ。この後授業だろ。」
「そうだな。」
「ああー。だるーい。なんで持久走走った後に授業あるんだよ。なくていいじゃん。帰らせろ。」
「・・・。今日部活とかないのか。」
「ないよ。」
だが、すぐにあることに気付いた。
「あっ。て。明日だった。なんで今日ないんだよ。」
すぐにだれた。
　１１時ごろ。ようやっと持久走が終了。ここから返れると思うのは大間違い。何度も言っているが午後は授業があるのだ。
「永島(ながしま)。学校までどうやってく。やっぱりバスか。」
宿毛(すくも)が提案してきた。路線バスはこれまで出雲(いずこう)工業のオープンキャンパスに行って以来使ったことがない。実に1年以上路線バスに乗っていないのだ。観光バスはというと臨地研修の時に乗った。そんな話はどうでもいいか。
「なんでバスなんか使うんだよ。混むじゃん。」
「そういう理由でバス使いたくないって落ち。」
「うん。」
「・・・。あっ、そう。じゃあ学校まで歩いてくのか。」
「まぁ歩いてくけど・・・。」
（そう言えば上島(かみじま)から涼ノ宮(すずのみや)って3分かかったなぁ。そんなに距離があるようには見えないけど結構あるのかなぁ。だったら上島(かみじま)まで戻って電車で行くっていうのも手かぁ。・・・。まてまて。確か今日は１０００系に乗ってきたんだよなぁ。もしここでまた１０００系が来たら。それに当たらないためにはこのまま歩いていくほうが賢いかぁ。）

「まぁ、どうした。」
「なんでもない。よし歩いて行こう。」
（これ絶対何か考えてたよなぁ。）
いつものこと。そう思った。
　1組から順番に会場を出ていく。会場の西側はちょっとした坂になっている。その坂を上りきると道が西へ延びている。それを曲がらずにまっすぐ行くと学校に通じている道に突き当たる。その交差点を左に曲がる。近くには欅町西のバス停がある。そこにはさっき出て行った人たちの姿もあった。バス停には帰りの岸川高校前みたいに人があふれていた。
「あすこまでしてバスに乗る気が起きるのが信じられないな。」
（おいおい。）
「バスは二酸化炭素を吐き出して地球温暖化に貢献してるんだぞ。そんなのに乗るなぁ。」
（そこまで言うか。）
「・・・。地球温暖化に貢献してるって。確かに二酸化炭素を排出してるならそういうことになるかもしれないけど貢献って。俺が思うにその貢献度数が一番高いのは車とかバスじゃなくて飛行機だと思うが。」
「よし。じゃあ、飛行機を核爆弾で・・・。」
「お前の破壊論は核爆弾以外ないのか。」
「えっ。他にもあるよ。ロケットランチャーとか対戦車ライフルとか火炎放射器とかマシンガンとかレーザーキャノンとか。」
（こいつにまともなんて言葉はないかぁ。俺がバカだった。）
　ずっとこんな話をしていたわけではないが、話をしながら学校を目指す。学校へ歩いている間に数回バスに追い抜かれていったがそのバスはほとんど岸川の生徒で込んでいた。そのたびに僕は「地球温暖化に貢献している。」という話をした。
　そんなことで30分ほど。岸川学園に到着した。1年5組のクラスにすぐに向かった。クラスには自転車で先に着いている佐久間の

姿もあった。
「永島（ながしま）。お疲れ。」
「ああ。疲れたよ。」
「そうだ。お前何位だった。」
「えっ。9位だけど。ていうか佐久間（さくま）もともと陸上部だったんだし、お前のほうが速いんじゃないのか。」
「そんなことないって俺は21位。」
「ウソ。俺より遅いんだ。」
「お前気づいてなかったのか。俺たちがゴールした後に佐久間（さくま）が走ってたこと。」
その時を思い出してみる。
「あっ。そういえばそうでした。」
「・・・。」
「俺時々わからなくなるんだよなぁ。本当は天才なのか。それともバカなのかって。」
「ハハハ。」
「だからそれはバカって・・・。」
「まぁ、そうなんだろけど。」
僕の言葉を遮るように宿毛（すくも）が言った。
「ハハハ。早いところ弁当くったらどうだ。」
「ああ。そうするよ。」
「あっ。」
その声に反応して佐久間（さくま）と宿毛（すくも）が僕のほうを見る。
「弁当持ってくるの忘れてた。」
「・・・。」
「それヤバいじゃん。」
「まぁいいや。昼くらい一度抜いたって死にはしないからなぁ。ハハハ。」
「・・・。」
（どういう考えで生きてるんだ。こいつは。）

これで新体力テストも終了。次は明日ある部活どうだ。

今回からの登場人物

希望（のぞみ）

47列車　持久走（後書き）

ある教科担当の人は言いました。

「テキスト（文字）としてとらえるよりピクチャー（絵）としてとらえたほうが覚えやすい。」

最もですね。この中に登場する車両・列車はすべて実在した。または実在しているものです。今はインターネットで簡単に調べられますから、本作のテキスト（説明文）をピクチャー（写真）としてとらえてください。写真を見たりすれば、少しはどこを説明しているのかつかめるのではないんでしょうか。

48列車　ミーティング

１０月中旬。テストを潜り抜けて、また部活どう再開。
「よーし。今日からまた部活どうだー。」
いつものハイテンションは善知鳥(うとう)先輩だ。
「そうだな。部活動がない日ってなんかイライラするからなぁ。これでそのイライラもなくなるかぁ。」
サヤ先輩もそれに共感しているようだ。するとドアが開いた。
「手を上げろ。」
そう言って入ってきたのは諫早(いさはや)だ。
「何度も同じ手は食いませんよ。」
「じゃあ・・・。死んでください。」
「イサタン声変わりすぎ。」
「お前が死んでくださいっていうと本気のように思えて怖いわ。」
「そうですか。」
そう言っているとまたドアが開く。今度はナヨロン先輩だ。でも、ナヨロン先輩はすぐにドアを閉めてどっかに行った。
「バカ。久しぶりに来たんだから部活やってけ。」
善知鳥(うとう)先輩が返ろうとするナヨロン先輩を止めに部室を出ていく。
しばらくするとナヨロン先輩を連れて戻ってきた。ハクタカ先輩と楠(くすのき)先輩も一緒だった。
「だから、いつも冗談って言ってるだろ。」
「久しぶりにやられるとね。そんなこと忘れちゃうのよ。」
「そりゃ、いろんな意味で問題だ。」
「そういえば今日アヤケンは。」
「アヤケン今日学校休んでるよ。」
「へぇ。死んだのか。」
「そう死んだ。」
「アヤケンのやつ。死んでんじゃねぇよ。」

「あのうそれ言うのはちょっと。」
楠先輩が「死んだ」という言葉を使わないように促そうとしているがそんなに効果は上がっていない。
「ハクタカ先輩。さっきから言ってる死んだってあっちの意味ですか。」
「簡単に言うと「休んだ人」。欠席したらイコール死んだことにされるから気をつけろよ。まぁ、俺は善知鳥先輩が死んでくれたほうがよっぽどありがたいけど・・・。」
「大丈夫だよ。あたしたちがいるのもあと半年ないんだから。」
（そう言われればそうだな。ナヨロン先輩と話せるのもあと半年ないのかぁ。言われてみればこの半年だけでも電車のこと結構教え込まれたなぁ。２２３系のこともそうだけど、もっと別の車両のことも・・・。編成も・・・。）
心の中で今まで萌と楽しく模型で遊んでいた時とは違うということを思った。
「そういえば先輩たちみんな進路とかって決まってるんですか。」
楠先輩が遊び人の先輩たちのことを心配したが、その必要はなかったらしい。サヤ先輩はすでに名古屋の中京観光専門学校合格している。善知鳥先輩は岸川学園のグループ大学。瀬戸学院大学への進学を、ナヨロン先輩は進学先だけは決まっていてあとは受けるだけだそうだ。そして今日死んでいる・・・いや、休んでいるアヤケン先輩は瀬戸学院大学を志望しているそうだ。
「中京観光って東京の帝京観光のグループですよねぇ。」
「グループっていうか姉妹校っていう感じだな。」
「結構いいところ入りますねぇ。」
「いいところって。頭がないからＡＯで受験したんだろうが。そこだったら実力に受かれつうの。」
「うるせぇな。いいだろ。合格しなかったら元も子もないんだし。」
「・・・。」
そんなことを言い合っていると

「みなさんお集まりですね。」
ドアから顔をのぞかせているのはアド先生だ。なんか久しぶりに見た気がする。いつもホームルームの時にあっているのだが・・・。
「まずは座ってください。ミーティングをします。」
そう言ってアド先生は部室の一番奥にある机まで歩いて行って腰を下ろした。座ると手に持っていた紙を全員に配布し始める。サヤ先輩からその紙をもらって目を通す。中身はこれからの予定。いつものことだが、この通りにやったためしはない。
「みなさん見て分かると思いますが、11月の1日と3日の暁鉄道が主催する暁フェスタと瀬戸学院大学と折尾町の展示が入っています。しかし、瀬戸学院大学と折尾町の展示が11月の14日でかぶっています。」
折尾町という言葉を聞くと先輩たち全員の顔がゆがんだ。何か嫌なことでもあったのだろうか。その顔をしている先輩たちをほったらかしてさらにアド先生が続ける。
「この14日の展示を分けたいと思います。」
そういうと、
「よし。なら3年生全員とハクタカは大学の文化祭言ってアヤノンと1年生全員で折尾町の展示やればいいと思います。」
まず善知鳥先輩が口を開いた。
「なんであたしだけ折尾町なんですか。嫌ですよ。」
「なんで。たくさん子供いるじゃん。」
「だから嫌なんです。」
「善知鳥先輩。独壇場で決めるのはやめてください。」
ハクタカ先輩が口をはさむ。
「ていうか折尾町にそんなにいらないだろ。」
サヤ先輩が続けていった。
「そうか。子供がいっぱい来るんだし監視がたくさんいたほうがいいだろ。」
「・・・。」

「じゃあ、何。9人いる高校1年生と中学生で折尾町の展示をやるってことですか。」
「はい。」
僕たちは何も話すことが泣くことが決まっていく。その結果は・・・となった。
「次。先に行われる暁フェスタの展示について話します。11月の1日と3日にかけて行われます。会場は暁鉄道の天竜暁駅です。ここの事務所の2階。3年生・2年生ならわかりますね。ここで行います。」
これまで言われている暁鉄道とは昔国鉄二俣線と呼ばれていた路線を第3セクター化して発足した鉄道会社である。地元を走っている鉄道の3つ目にあたるが遠州鉄道と遠江急行とはまた別。市や県が出資してこの鉄道を経営している。この路線を走っている車両はディーゼルカーでほとんどの列車がそれ1両で動いている。ディーゼルカーは最新であるが建造物には築70年くらいになる建物が多く一部は国の有形文化財に指定させているくらいだ。由緒正しい鉄道と言っても過言じゃないだろう。当然。僕たちが展示を行う場所としていま言われた事務所もその文化財の一員である。
「また階段急なあすこかぁ。」
「しょうがねぇだろ。それ。」
「話す前にちゃんと聞いてくださいね。」
楠先輩が3年生を抑える。
「ありがとうございます。それで次。瀬戸学院での展示ですが、教室は3021教室です。ここで行います。これも2年生は分かってますね。そして、折尾町の展示ですがこれは折尾町公会堂の1階で行います。これも2年生ならわかってますね。」
アド先生はハクタカ先輩に確認するみたいに言った。するとハクタカ先輩は他人事のように目線をそらした。
「ちょっとそれはどういうことかなぁ。」
そう言い終わると、

「それってまた新幹線使うってことですよねぇ。」
ナヨロン先輩が口を開いた。
「はい。そういうことです。」
（永島は分かるとして、他だよなぁ。少しはそういうことできる人がいたほうがいいかぁ。）
「じゃあ、新幹線のメンテナンスやったほうがいいんじゃないんですか。」
そう聞いた。
「あっ。じゃあ、明日お願いします。」
「はい。」
ちょっと明日という言葉は効いたらしい。
今日はこれからの展示と予定の確認。それだけで終わった。

48列車　ミーティング（後書き）

ようやっと半年たちました。あと半年分は根性で上がっているので、残り分を根性で上げたいと思います。

しかし、高校生のエピソードが終わると実質×ネタが尽きてしまうんですよねぇ。自分の経験が少ないからしょうがないのですが・・・。結構長い時間皆さんを待たせる結果になると思います。しかし、このストーリーはいつか完全に完成させます。

４９列車　いじるとA編成とB編成（前書き）

このレは濃いです。

４９列車　いじるとA編成とB編成

翌日。土曜日は１０時１５分に授業が終わる。授業が終わると即行で部室に行ったが、開いてなかった。部室の前でちょっと待つ。

「いい加減に自分で鍵取り行くとかしてくんないかなぁ。」

僕の姿を見て呆れているのは楠先輩である。

「ああ。じゃあ取り行ってきます。」

「もういいよ。次からそうしてくれれば。」

「ていうか楠先輩は鍵取りに行ってないんですか。」

「取りに言ってないから今ここでこうしてるんじゃない。」

ため息をついてその場に腰を下ろした。

「永島―。」

僕を呼ぶ声とともに現れたのは木ノ本と留萌だ。

「おー。二人とも鍵ある。」

「ありません。」

その言葉で僕も楠先輩も一気に力が抜けた。その場にしゃがみ込む。

そのすぐ後に箕島が現れて部室を解放した。その数分後には醒ヶ井とナヨロン先輩も集合した。

「ふぅ。永島。木ノ本。留萌。箕島。醒ヶ井。俺たちは寮に行くぞ。」

そう言ってナヨロン先輩が立ち上がる。

「えっ。それあたしここに一人になるじゃん。」

「分かったよ。来たいなら来てもいいから。」

「あっ。でも今日やるのって車両いじりですよねぇ。」

「ああ。」

「じゃあ。やっぱりやめます。」

「・・・。よし。じゃあ俺たちは行くか。」

促されて部室を出た。

寮に着くとまずはいつもの部屋と思ったが、ナヨロン先輩は文化

祭前に入った部屋のほうへ歩いていく。階段を上って右に曲がるとすぐのところにプレートがある。それをどかして、自習室1の鍵を開ける。どうやらアド先生から預かってきたらしい。その部屋には布団の敷かれていない2段別途と教員用机と折りたたみ椅子が2脚置かれている。この部屋に15箱ぐらいの折り畳みケースが収納されている。

　ナヨロン先輩はまず2段ベッドの下に置かれている折り畳みケースに手を伸ばした。それの一つをとって木ノ本に手渡す。外に運んでと指示を出されて、外に運び出す。それを何度か繰り返して、ようやっと新幹線の箱を引っ張り出した。新幹線の箱は2つ。この量からすれば少ないほうだろう。その箱を運び出し終わるとこれまで出した7箱をもとに戻す。それがすんだら今度は教室をいつもの学習室に変えた。

「よし。まずはどれでもいいから一つとってけ。」

そう指示される。その指示で僕たちは新幹線の車両ケースを一つ取り出す。もちろん僕はそう指示を受けると真っ先に100系のケースを選んだ。

「永島。それ「グランドひかり」だぞ。いいのか。」

「・・・。」

よく背表紙の文字を見ていなかった。ただ100系ということだけしか見ていなかった。

「・・・。」

「どうも不満そうだな。えーと。」

ナヨロン先輩がケースに入っている車両ケースの背表紙を確認しながら指をずらしていく。

「ほれ。こっちがよければこっちにしろ。」

「あ・・・ありがとうございます。」

今更ながらやさしい人だと思った。「グランドひかり」はナヨロン先輩と交換という形で僕のところに100系のJR東海編成がやってきた。ちなみに「グランドひかり」はJR西日本の編成である。

「よし。まずはこれの先頭車をとって、車輪を見ろ。」
ケースを開けてケースの一番上に入っている車両を取り出す。白くどがった鼻。横に入るつり目のヘッドライト。窓を包み込む青いライン。０系の登場時と同じ大きな窓。そして、模型でも貫禄のある車体。これらすべて１００系の特徴である。
「永島。好きだから見とれるのはいいけど・・・、ちゃんと聞いてくれよ。」
そう注意された。そのあと全員の顔を見渡していると、
（同類がここにもいた。）
「留萌。０系が好きだから見とれるのはいいけどちゃんと聞いてくれよ。」
留萌にも同じ注意をした。今視界に飛び込んできたことだが、木ノ本が手に取った車両は５００系「のぞみ」。醒ヶ井は７００系「ひかりレールスター」。留萌は０系「こだま」。箕島が３００系「のぞみ」。そして僕が１００系「ひかり」だった。ものの見事に東海道・山陽新幹線で活躍する車両たちであった。
「よし。まずはこいつらを裏返せ。」
ナヨロン先輩が「グランドひかり」の先頭車を１８０度回転される。逆さまになった「グランドひかり」は天井が床を向き、床が天井を向いた。僕たちもそれに倣い持っている先頭車を逆さまにする。
「そうしたらここを見ろ。」
そう言ってナヨロン先輩がスカートのすぐ後ろ。つまり運転席の真下にある台車を指差して、その車輪の軸を抑えて持つ。
「この車輪をゆっくりと回して、黒いところを探せ。」
どういうことだろうか。意味は分からないが言われた通りやってみる。すると僕の持っている１００系はほとんど黒い。車輪全体が黒くなっている状態で、車輪の銀が顔をのぞかせているところが全体の１０パーセントくらいしかない。
「そして、黒いところが見つかったらこれを使って車輪をきれいにする。この作用の繰り返しだ。」

ナヨロン先輩はレールクリーナーと綿棒を持ち出す。今の今までレールクリーナーは線路にしか使わないと思っていたがそういうわけではないらしい。レールクリーナーは鉄道模型のほとんどのものの掃除使用することができるそうだ。

僕たちは1本綿棒を手に取り、レールクリーナーを順番に綿棒につけてまわす。そして車輪に綿棒の頭を当て、綿棒を当てた反対側の車輪を指でゆっくり回す。1周するとさっきは10パーセントくらいしかなかった銀の部分が大部分を占めるようになった。当てた綿棒を見てみると真ん中らへんに長方形の黒い塊がついている。汚れが取れた証拠だ。この作業を何回も繰り返して一つの台車をきれいにしていく。綿棒は1両につき一本。もしくは台車1つにつき一本消費するくらい。ほぼ浪費状態だ。僕が2両目の車両の台車をきれいにしていると、

「どこまで進んだ。」

ナヨロン先輩が自分の作業をしながら聞いた。全員今やっている車両をこたえる。醒ヶ井(さめがい)は「レールスター」の3号車。留萌(るもい)は0系の2号車。木ノ本(きのもと)は500系の4号車。と回答。

「分かった。じゃあ、今やってる車両で一度作業やめろ。」

そう指示を受けた。

その車両が終了するとナヨロン先輩は次の説明を始めた。

「次は模型のM(エム)車のクリーニングな。お前らもその箱の中で一番重い車両探してみろ。」

そう言われる。僕はすぐにどれがM(エム)車かわかった。上から数えて3番目。3号車がM(エム)車だ。木ノ本(きのもと)には少し難題だったみたいで教えてときかれてきた。留萌(るもい)と醒ヶ井(さめがい)はちゃんと見つけられたようだ。

「全員見つけたな。まずは同じように裏を見ろ。」

これまでと同じように裏返す。車輪は今までの車輪とは違い真中は軸剥き出しではない。代わりに目に入ってきたのはギアだ。

「これで今までのやつと違いって分かるよな。この車輪をきれいにするにはまずこれを取り外さなきゃいけない。そのためには・・・。

」

車両を横倒しにして持ち、車両を持っていないほうの手を台車にかける。そして力を加える。

「はーっ。ってあれ。はずれねぇ。おい言うこと聞けーっ。・・・。まだ聞かねぇなぁ。・・・。はーっ。」

独り言を言いながら台車と車体を割くようにして台車をとった。台車には何やら付属品があるみたいで、緑色の小さな棒もくっついてきた。

「今やったみたいにお前らもやってみろ。」

今ナヨロン先輩がやったみたいに僕たちもやってみる。台車は案外簡単に取れた。そんなに力入らないみたいだ。

「よし。取れたら木ノ本(きのもと)はこの棒をまわしながらさっきと同じ手順で。永島(ながしま)と留萌(るもい)と醒ヶ井(さめがい)はさっきと同じ手順でやれ。そうすればきれいになる。そして、戻すときはさっきとは逆をすればいい。」

そう説明を受けた。

さっきと同じ要領でこのギア台車もきれいにしていく。それが終わったら今度は掃除を行っていない車両のメンテナンス。それが終わったら次の車両に行く。

「へぇ。「ドクターイエロー」もあるんだ。」

そういうと留萌(るもい)が覗き込んできた。

「んっ。どれどれ。って。それ0系タイプじゃん。これがいたのって2000年以前の話でしょ。懐かしいなぁ。」

「あれ。こんなのいたっけ。」

「いたよ。浜松工場(はままつこうじょう)の新幹線(しんかんせん)なるほど発見デーで見たことないの。」

「ごめん。記憶にない。」

「・・・。」

「今700系だもんなぁ。俺はあっちよりこっちのほうがいいかなあ。」

「永島(ながしま)分かってるじゃん。今の「ドクチャン」ってなんか好きになれないんだよねぇ。まぁ見たらテンションあがるのは同じだけど。」

「えっ。それふつうじゃないの。」
「ですよねぇ。健康そのものですから。」
「ハハハ。留萌って結構車両に詳しいって善知鳥から聞いたけど、どれくらい知ってる。」
「今そんなに知らないんですよ。中学の時に一気に忘れたっていう感じで。ああ、でも新幹線の試験で使われてたA編成とB編成とそれを新幹線の救援車にしたことぐらいはちゃんと知ってますよ。」
「そうか。お前A編成とか好きじゃないのか。」
「A編成は2両だけだし、0系と結構イメージ違うでしょ。B編成も同じ理由でそんなに好きじゃないんです。かわいいけど・・・。」
「まぁ。A編成よりB編成のほうがましってか。」
「どういうことですか。」
木ノ本にはこの意味が分からなかったようだ。
「A編成ってあの丸い鼻のところが光ったんだよ。B編成は光らなかったけど。」
「えっ。マジ。」
このことには僕もびっくりした。あれは最初から光らないものだと思っていたからだ。
「マジだよ。昔は白花のトナカイみたいな感じで鼻を光らせてたの。だけど光らせないほうがいいっていう考えに多分至って、量産車である0系にはそのシステムがないわけ。」
一つ利口になった。
「確かB編成ですよねぇ。当時最速の256km／h出したのって。」
僕も話に参加した。
「ああ、そうだよ。綾瀬と鴨宮の実験線でな。」
「でも、なんかもったいないって思いませんか。0系も260km／hまではメーターふってあるわけだし試作車のB編成でも260km／hは出たはずなんですけどねぇ。どうせならあと4km／h頑張って出しちゃえばよかったのに。」

「出せないB編成の事情でもあったんじゃないか。あれ計測してる時に蛇行動も観測したみたいだし、これ以上出すのは危険だって判断したんじゃないか。」

「説得力ないですね。」

「うん。ないな。」

さっきから僕たちが話しているA編成・B編成とは新幹線の試作車。現在の新幹線の礎を築いた車両である。容姿は0系とよく似ているがヘッドライトが縦に楕円形ではなく横に楕円形であること。運転室の窓が湾曲していたことなど。細部に0系との違いがある。またA編成は前述したとおり2両。B編成は4両と量産車である0系よりも身軽。さらに塗装にも違いがあり、A編成は車体の裾に細く。B編成は窓周りに太い青いラインが入っていた。この2編成による各種試験ののち1964年10月1日に東海道新幹線として開業するのである。なおこの2編成は営業運転には就かず東海道新幹線開業後は生涯を通して救援車としてもしもの場合に備えていた。しかし、安全神話の新幹線に救援車の出番はなく、いい意味で一度も出動せずに「ドクターイエロー」にバトンを渡したのだ。その後車両は廃車されているが今でも鉄道の博物館などでその模型を見ることはできる。

「・・・。」

しばらく黙って自分たちの作業を進める。

「そうだ。留萌、お前C編成って知ってるか。」

ナヨロン先輩が振る。

「C編成。」

この反応は分からないということだろう。

「なんですかそれ。初めて聞きましたけど。」

「これも試作車なんだけどな。A編成とB編成は有名だけどC編成は兄ちゃんたちに隠れてそんなに知られてないんだ。容姿はほとんど0系に似てるっていうけど6両編成っていうのが0系と違うところかなぁ。」

「へぇ。そんなのあったんですね。」
「・・・。そりゃ反応薄くなるよねぇ。うん。うん。」
自分に言い聞かせるように言っていた。

４９列車　いじるとA編成とB編成（後書き）

この話を作った後に調べましたが、B編成は救援車ではなく線路関連の計測車になっていました。訂正します。

A編成の救援車もB編成の計測車も今日の「ドクターイエロー」と同じく黄色に青のラインをまいている塗装でした。

昨日パソコンのほうのアクセス数で１０００突破しました。
ユニークは３００を突破。だんだん数が増していくのは嬉しいですが、このごろアクセス数は低迷したり、のびたりで安定していません。
ユニークアクセス数はアクセス数よりは安定しているのですが・・・。

５０列車　文化財へ（前書き）

初掲載の作品で連載して５０話です。
このシリーズの最後までまずは頑張ります。

50列車　文化財へ

日曜日。午前中に暁フェスタに持っていくモジュールを学校のハイエースに詰め込む。そして午後。

「はい。みなさん集まってますね。」

アド先生が全員の顔ぶれを見る。今日ハクタカこと鷹倉俊也先輩とアヤノンこと楠絢乃先輩はいない。今日は僕たちだけで活動する。

「はい。みなさん、今日は天竜暁駅に行きます。みなさん荷物を持って私の車に乗ってください。」

そう指示を受けた。とするとハイエースのほうはどうなるのか。

「あのう。バンのほうはだれが・・・。」

「バンは山科先生に運転してもらいます。なので心配ありません。それでは行きます。」

いつものように体育館から出て、正門から入ってすぐのところにある駐車場に車がいくつかとめてある。その駐車してある車のうち1台にアド先生が歩いていく。

「マジ。アド先生の車ってウィッシュじゃん。」

醒ヶ井が言った。

「へぇ。あれウィッシュっていうだ。」

僕は関心が内容に返事をした。その時アド先生は真ん中のシートを倒して後部座席に人が乗れるようにしている。

「はい。乗ってください。」

そう言われて一番最初にウィッシュに乗り込んだのは木ノ本だ。続いて留萌が乗り込み、助手席には箕島が乗り込んだ。残った醒ヶ井、佐久間、僕はというと真ん中の座席におしくらまんじゅうで乗り込んだ。

ふと外を見てみた。

「それじゃあ、山科先生。バンのほうよろしくお願いします。」

「はい。分かりました。」

すらりと背の高い先生が返事をした。彼が４月から名前しか聞いていなかった山科先生だそうだ。アド先生の呼ばれ方からして部活のみんなからはヤマ先生かシナ先生という呼ばれ方をしているはずだ。その人がバンに乗り込んだことを確認すると、アド先生も自分の車に乗り込み、ウィッシュのエンジンを起動する。まず最初にウィッシュが動き出し、山科先生の運転するバンが僕たちの後を追っていう形で天竜暁まで赴いた。

ゆっくり運転されるハイエースに合わせて４０分ほど。普段から見慣れている光景が僕の前に広がる。と言ってももうここは天竜暁地区。いろんな意味で見慣れたといえば見慣れた光景だ。飛龍大橋という天竜川に架かる橋を渡ってすぐの交差点を左に曲がり、またすぐのところにある交差点を左に曲がる。その道に入ったらまたすぐのところを今度は右に曲がり、さっきよりも少し長く走ったところでまた右に曲がる。すると僕たちの前には木造の建物と扇形の車庫が広がる天竜暁構内に入ってきた。

僕たちの乗るウィッシュは木造の建物の北側を通って、暁鉄道のディーゼルカーが止まっているすぐ隣に車を止める。ハイエースはというと木造の建物の入り口の前に止まっている。

その光景を見た人が木造の建物の中から出てきた。

「どうも。こんにちは。」

アド先生の姿を見るなりその人は話しかけてきた。

「こんにちは。今回もよろしくお願いします。」

「こちらこそ。よろしくお願いします。」

アド先生は僕たちのほうを向いて、

「紹介します。今回暁フェスタの運営を担当しています。富士史崇さんです。」

「よろしくお願いします。」

みんな声をそろえて頭を下げる。

「こちらこそ。よろしくお願いします。それでは安曇川さん。先日伝えました通り当事務所の二階に展示を行うということでお願いし

ます。」
この富士という人に後ろに立っている建物が暁鉄道の事務所らしい。僕から見てみるとこの事務所には隣接して2枚の引き戸があることがわかる。その右側の扉の窓には事務室と書かれている。ここが事務室である証拠でもあるが・・・。とは言ったが文字は剥げていたためあくまでも推測ということだけでとっておいてほしい。
話が終わると僕たちを促して、バンに乗せた荷物を下ろし始める。まずは事務所の前に置いておくだけ。さっさと仕事は終了する。空っぽになったハイエースを見て、
「安曇川先生。これから中学生の迎えに行ってきます。そろそろ模試が終わったころなので。」
とことわって山科先生がハイエースに乗り込む。とその瞬間だった。アド先生の携帯電話が鳴った。
ここからは電話内でのやり取りです。
「もしもし。」
「あっ。アド先生。今どこにいるんですか。」
「あっ、善知鳥君。どこっていま事務所の前ですけど。」
「分かりました。私たちもすぐそっちへ行きます。」
と言って電話は切れた。
「誰ですか。」
「善知鳥君だったよ。」
そういうと山科先生はほっとしたような顔になってハイエースに乗りなおす。そしてすぐ出て行った。それを見送って、
「それではまずは荷物を2階に置いてきてください。そしたらここにあるものを上に運びます。」
そう指示を受けた。
まずは荷物を2階に置いてくるため事務室の中に入る。僕たちが入った扉は左側から。入るとすぐ目の前に急な階段がある。その隣の部屋をのぞいてみたが何があるのかはすぐに分かった。僕の目線から見て左側に机。前のほうにはところどころにつまみがついてい

るパネルがある。このパネルにはこの天竜暁の線路配置が簡略化して書かれており、ところどころにあるつまみはおそらくポイント操作のために使う機会。ここからポイントを遠隔操作しているのだ。一瞬だけだったから認識できたのはこれくらい。階段を上がって左にある部屋に入る。部屋の天井の梁には進めて色の落ちた棒が2本貼り付けてある。一つは長方形と三角形を組み合わせたような形をしていて黄色い。もう一つは長方形のしっぽを三角形でくりぬいたような形をしている。そして黄色のものより少し長い。佐久間にはそれが気になったらしく、

「永島。これ何。」

と聞いてきた。

「多分。これ腕木信号の腕木だよ。」

「うでぎ。」

これには木ノ本も声をそろえた。僕はどんなものかわかるように何か令を出したい。そう思って窓のほうへ歩いて行った。確かエスエルの動輪と一緒に腕木信号もたっていたはずだ。

「ほら。あれだよ。あれが腕木信号。」

エスエルの動輪の隣に立っている腕木信号の腕木は黄色くここの天井にある黄色い色をした腕木と形も同じ。

「よくローカル線とかにあった信号だよ。今じゃほとんど見れないけどね。」

と説明を加えて、下に下りて行った。

下に下りていく間に箕島と留萌と醒ヶ井にすれ違った。階段はすれ違えるような幅ではない。箕島と留萌と醒ヶ井が通った後に僕が入れ替わりに下に下りた。ハイエースが止まっているところまで行くとアド先生にまず白いケースに入ったほうを運んでといわれた。その指示で僕は白いケースを2つ持って階段を上がる準備をする。上から木ノ本と佐久間が下りてきている。降り切るのを待って僕た2階へ上がる。2階へ上がるとまっていた箕島と留萌と入れ替え。醒ヶ井が2階の部屋で荷物を置いているところに遭遇する。僕も荷

物を置くとまた下に下りる。下からは佐久間と木ノ本が上がってきている。上がりきるのを待って、入れ替わりに僕が下に下りる。ずっとこの繰り返しだ。

2回この操作をやって下に下りると見慣れた顔がそこにあった。善知鳥先輩とサヤ先輩とアヤケン先輩だ。

「サヤ先輩に善知鳥先輩にアヤケン先輩。どうしたんですか。」

「いやあ、私たち受験あきらめた組だから手伝いに来た。」

頭の後ろに手を当てて善知鳥先輩が言った。

「じゃあ。まずはこいつらを運ぶかぁ。」

サヤ先輩はまだ残っている気の箱に目をやった。この箱の中には上野駅とその他S字モジュールが多数入っている。これらはそのまま持っていくには至難の業である。なので・・・。

「よし。お前ら1列に並べ。これから上野駅を運んでいくぞー。」

ということになった。並びは下から善知鳥先輩、木ノ本、留萌、醒ヶ井、サヤ先輩、佐久間、箕島、僕、アヤケン先輩の順。

「はい。まず上野駅13番線。」

「上野駅13番線。」

「上野駅13番線って・・・。「カシオ」と「北斗星」が来るところじゃん。」

「上野駅13番線かぁ。」

「上野さんの上野駅。」

「・・・。」

「上野駅。」

「13番線ホーム。」

「ああ、上野さんのゴミだ。」

ただの伝言ゲーム状態。もちろん言葉のとおり伝言ゲームにもなっていないが・・・。

上野駅モジュールを運び終わると次はS字カーブ。

「次。S字のトップバッターは綾瀬川。」

「綾瀬川。」

「綾瀬川・・・。まさか。」
「まさか・・・。何。」
「アヤケンの綾瀬川。」
「・・・。」
「綾瀬川。」
「綾瀬川。」
「あっ。俺の「特急ゴミ1号」。ダストボックス行き。」
こんな具合で運び上げた。最後に空になった箱は佐久間とアヤケン先輩が上まで運びまずはひと段落。次は山科先生が次のモジュールを持ってくるまでないが、長机を上に運ぶという仕事があった。それが終わるとぼーっと外を眺めていることができた。
それから30分くらいたつと山科先生が戻ってきた。
「さぁ。シナ先生が来たぞー。行くぞー。野郎どもー。」
（中には野郎じゃない人もいるが・・・。）
下に下りて諫早、空河、朝風を迎える。それが終わったら上に運び上げる。今度は白いケースだけ。どんどん上に運んで仕事を終了させる。これが終わると空河と朝風を連れてまた学校まで戻っていった。今度来るのはまた1時間後ぐらいだろう。

今回からの登場人物
山科雄哉（シナ先生）　誕生日　8月1日　　血液型　AB型
身長　169cm
暁鉄道職員　富士史崇

５０列車　文化財へ（後書き）

この「暁鉄道」は地元の「天竜浜名湖鉄道」をモチーフ。というかそのままです。ただ社名を変えてるだけにすぎません。

５１列車　違いを述べよ

その間・・・、
「永島さん。今度持ってくる車両なんかいるものありますか。」
諫早がそう聞いてきた。
「えっ。いる車両。・・・。諫早って何持ってたっけ。」
「２２３系の２０００番台のパンタを全部シングルにしたやつと２２３系６０００番台の網干と宮原。２２１系のモーターぶち抜いたやつ。後は３１３系の２５００番台と２１１系５０００番台。８１３系と２８５系「サンライズエクスプレス」１４両とキハ８５「ひだ」と３８３系「しなの」ですけど。」
全部どういうのかはわかる。
「やっぱりエントリーは宮原の２２３系６０００番台かなぁ。また８両でお願い。後は・・・。」
自分の中で考えを広める。
（いえには２２３系１０００番台と２０００番台の新快速がそれぞれ１２両である。だから２２３系のほうの問題はない。たけど大阪ならそれ以上も必要かぁ。ならなおさら、２０７系と３２１系のエントリーも必要だけど、それは学校にあった。だから３２１系を持ってくる必要はない。他には２５３系「ネックス」とかのエントリーかぁ。でも「ネックス」も学校の中にあったよなぁ。ああ、待て。確か学校のは動かない。やっぱり家から持ってくるしかないかぁ。後は寝台特急軍だけど・・・。何を持ってくるかなぁ。迷うなぁ。）
「あのう。他に必要なのは。」
「うーん。あっ。やっぱり網干の６０００番台もエントリーして。」
「分かりました。じゃあ、自動的に２２１系もエントリーですね。」
「えっ。」
そう聞き返すとこの会話を聞いていた留萌が呆れたように話しかけてきた。

「永島はもうちょっと頭いいと思ってたけど、クソ天然じゃないか。いいか。網干にいる６０００番台は性能を２２３系レベルから２２１系レベルの落としてあるの。そして、普段日常的に１３０出してる新快速の仕業には就かずにもっぱら普通で運用されてるわけ。その熱愛キスする相手が２２１系なの。」

（キスはキスでも熱愛って・・・。）

（熱愛キスかぁ。うまいこと言うかも留萌さんって。）

「あっ。そうだった。思い出した、思い出した。」

「やけに２２３系に詳しいなぁって思ってたけど詳しいのは１００番台と２０００番台だけなのか。」

「いやあ。ほとんどの車両はどこがどう違うかくらいしか分かんない。」

（こいつに３１３系の違いを行ったらパンクするよねぇ。）

「だから１００系も食堂車がついてたＸ編成と小窓の試作車とカフェテリアのついたＧ編成とダブルデッカー４つのＶ編成と６両のＫ編成と４両のＰ編成があることぐらいしか知らない。」

（・・・。十分知ってるじゃないか。１００系だけでそれくらい知ってれば一時はＯＫだよ。）

「じゃあ、永島。当然のことを問うけど１４系と２４系の違いって何かわかる。」

これは寝台客車のことだ。

「１４系は分散電源方式で、２４系のほうは集中電源方式。」

「・・・。なら４８１系と４８３系と４８５系と４８９系の違い。」

すべて特急車両。そしてすべての形式において同じ顔をした車両がある。

「そりゃもう簡単。４８１系が交流２００００ボルトの６０ヘルツで、４８３系が５０ヘルツ。４８５系は６０ヘルツと５０ヘルツ両方に対応してて、４８９系は峠越えの時にＥＦ６３と協調運転するための機器が４８５系に追加されてること。」

「・・・。なら、ＥＤ７５の７００番台とＥＤ７９の違い。」

「えっ。」
これは知らない。そもそもＥＤ７５の７００番台って何・・・。
「うーん。ＡＴＣがついてるかついてないか・・・。」
「・・・。ぶっちゃけたな。でも、言ってることは間違ってないわ。」
（さすがにＥＦ６５のＰ型とＦ型の違いまで言ったらわからないかなぁ。）
「私が見る限り、少しは車両知識あるみたいだわ。基礎レベルの。」
「まぁ。ナヨロン先輩と話して詳しくなったようなもんだし。最初は３１３系の番台区分なんか言われても全然わからなかったけどなぁ。でも今なら少しは分かるようになったおかげさまで。」
（こいつ。いったい何に詳しい。）
「とごめん。話脱線しすぎたなぁ。」
僕は諫早とも話に戻した。
「じゃあ、家から持ってくるのは６０００番台の網干と２２１系の網干と６０００番台の宮原でいいんですね。」
「ああ。それでいいよ。」
諫早とも一件はこれで終了した。
「永島。」
この話が終わったら今度は木ノ本だ。
「何。」
「私これ買ったんだけどさぁ。」
と僕にＫＡＴＯの車両ケースを見せた。横に書かれている文字は「ＥＦ５１０－５００番台　北斗星色」。
「あっ。お前これ買ったんだ。」
「うん。使うかなぁって思って。」
（これで家から「カシオペア」を持ってくる必要はなくなったなぁ。持ってくるとすればＥＦ８１－１３３号機の「北斗星１号」札幌行きのほうか。）
「ああ。出来れば使いたいね。」

「で、そのためにこれをくみ上げてほしいんだけど。」
と言ってきた。ということはこれの前面には4つの小さな穴が開いているということだ。
「しょうがねぇなぁ。でも、いまピンセットみたいなのないし、明日学校で渡すでいいか。」
「・・・。それでいいよ。」
木ノ本の了承を得たのでこれは家に帰って組み上げることにした。
でも、まだ家には帰れない。次の仕事をシナ先生が持ってくるからだ。

それから50分後。シナ先生の運転するバンが到着。時間は5時を過ぎている。だんだん外も暗くなってきている。そんな中でも作業をする。白いケースに入ったモジュールを2階に上げて作業終了・・・ではない。まだ仕事がある。今度はさっき運び上げた机を並べる番。モジュールを運び込んだほうの机を凹の形にその隣を四角い形状にする。さっき運び込んだ机とは別に最初からここに置いてあった机もある。その机も一緒に並べる。またその作業の最中に佐久間と醒ヶ井は運び込んだ階段のところに「いらっしゃいませ」の文字を張りに行った。はり終わったようで佐久間たちが戻ってくるか、変に笑っている。
「どうした。」
「ちょっと永島来てみ。」
佐久間に促されて階段の下まで降りてくる。すると上を見ろと言われたので上を見てみた。すると「いらっしゃいませ」はずが「らっしゃいませ」になっている。
「なんじゃこりゃ。これじゃあ寿司屋じゃん。」
「だろ。やっぱりお前もそう思うだろ。」
(これで笑ってたのかよ。)
そんなこんなで18(6)時。
「あー。暑いー。」
醒ヶ井がブレザーをパタパタ動かして空気を入れ替える。制服の中

に熱がこもっているのだ。
「じゃあ、野球拳でもする。」
「・・・。じゃあ、最初はグー、ジャンケンポン。」
結果は醒ヶ井の負け。その後5連戦やって・・・、
「おい。早くパンツ1枚になれよ。」
「醒ヶ井ここで脱ぐのか。それはもう変態だぞ。」
「あんたのパンツ1枚の姿なんか見たくないわ。」
「もういいんだよ。十分涼しくなったわ。」
その格好だが、ブレザーとワイシャツ以外脱いでいない。
「ねぇ永島。醒ヶ井がパンツ1枚になってくれないんだけど。」
「女子の前でそんな格好できるか。」
(そういえば。この部活って女子いたんだな・・・。)
「醒ヶ井。ルールはちゃんと守らなきゃダメでしょ。」
「守も何も限度っていうもんがあるだろ。」
時間がだんだん19(7)時に近くなっていく、すると・・・、
「ねぇ、アド先生。飯おごってくださいよ。」
「えっ。あ、もうこんな時間だ。」
時計を見たサヤ先輩が時間に驚いている。
「へぇ。久しぶりにこの時間までいたような気がするなぁ。」
アヤケン先輩も1学期の時が懐かしそうな顔をした。
「アド先生飯―。」
善知鳥先輩いう。それに続いてサヤ先輩もアド先生に飯をおごるよう迫った。
「・・・。」
善知鳥先輩もサヤ先輩も「アド先生飯―。」と言いながら手を動かして作業を進行されている。何とも器用な先輩たちである。
「飯―ってなんだい。まずは仕事をしろ。仕事を。」
「やってますよ。だから飯―。」
さっきから善知鳥先輩は飯―としか言わなくなってきている。そのあとは5秒に1回の単位で「アド先生飯―。」と繰り返している。

僕らもそれに便乗して、
「アド先生。飯ー。」
佐久間が乗ってさらに留萌と木ノ本も乗った。それにつられるような形で僕も乗る。
なんだかんだで１９（７）時。
さっきの攻撃が聞いたのかは知らないがアド先生のおごりで夕食のラーメンを食べた。その後・・・。
「永島君。君は遠江急行の鹿島駅に送っていけばいいかなぁ。」
と聞いてきた。
「いえ。遠江急行の芝本まで送ってってください。」
「・・・。はい。分かりました。じゃあ、当日は遠江急行の芝本に迎えにくればいいですか。」
「いえ。その時は遠州鉄道の芝本駅の近くにサークルエーがありますからそっちにお願いします。」
「分かった。ちょっとまたあとでまとめてくるから、詳しいことはその時でいいか。」
「はい。」
しばらく走って遠江急行芝本駅に来る。ここに自転車が置いてあるのだ。車を降りて、
「お疲れ様でーす。」
「永島。お疲れー。」
「永島。ＥＦ５１０。忘れないでよ。」
全員に見送られて、次は見送って別れた。

51列車　違いを述べよ（後書き）

このレも濃い。

模型の仕業を考える場合、妥協してはいけません。そもそも、模型いじっている中で妥協して走らせているものほど格好悪いものはないのです。

52列車　マイナススパイラル

その日。家に帰ったらすぐに離れに引きこもった。ピンセットを片手にそして木ノ本（きのもと）のＥＦ５１０北斗星色（ほくとせいしょく）を持って。

「ああ。面倒だなー。」

そう言ってクリアケースのふたをかける。中には衝撃吸収のマット。俗にいうプチプチマット。その下に青色の機関車が入っている。真ん中には流れ星。そして「ＥＡＳＴ（イースト）　ＪＡＰＡＮ（ジャパン）　ＲＡＩＬＷＡＹ（レイルウェイ）　ＣＯＭＰＡＮＹ（カンパニー）」と書かれている。流れ星の隣にはほんの数ミリの穴が開いている。ここにナンバープレートをはめ込む。ほとんどの鉄道模型はこのようになっていて、この穴に適当な部品をはめ込むという方式。当然部品もとても小さい。くしゃみとかで吹き飛ばしたら一巻の終わりである。

そんな部品をカッターで切りだして、側面と前面の横に長い穴にナンバープレートをはめ込む。これくらいは説明書を見なくても分かる。ナンバーはＥＦ５１０－５０１号機。家にあるＥＦ５１０が５０２号機だからだ。他にも５０５号機と５０６号機のナンバープレートもあったがなんか気に食わなかった。

ナンバーをはめ込み終わると次は前面に取り付ける手すりだ。この頃の模型はこの小さな部分まで別パーツになっているものが多い。そしてそのほとんどはユーザーが付ける。なくしてもいいように予備の同じパーツがあるが、なくしたら一巻の終わりであることに変わりはない。慣れてない人ならこれには1分くらいかかる作業。これを１５秒くらいでやってのける。全部で４つ。しめて1分だ。

「ふぅ。出来たー。」

すべてはめ終わるとため息が出た。本当にしんどい作業なのだ。今までにこういう経験は少なくとも２０回ある。１回目はよく覚えている。「寝台特急あさかぜ」の牽引を担当するＥＦ６６の前面の手すり、ナンバープレート、ヘッドマーク、そして模型の連結器「カ

プラー」を見栄えのいいものに換装したことだ。2回目は「あさかぜ」の客車24系のカプラーすべてを見栄えのいいカプラーに換装したこと。3回目は・・・。言っていったらきりがないか・・・。なお、この作業にはふつうに10分、5分はかかる作業。それを14両分やっていれば1時間などあっという間に立ってしまう。それほどツボになる作業ではないが、そうしないとあとあと困るのだ。

「さてと。」

そう言って椅子から立ち上がった。机の上に置いているごみを捨てて、次は暁フェスタに持っていく模型の選定である。

車両庫に言って自分が走らせたい車両を決める。もちろんのことだが新幹線を持っていくことはできない。持っていける新幹線車両は400系「つばさ」とE3系「こまち」と「つばさ」。そしてEast Iだけだ。それ以外が在来線を走るときは廃車か新車投入の時だけだ。

「えーと、「ネックス」と「北斗星」と・・・。」

箱の中をぐるっと見回してこの中にはもう目的のものがないことを確認する。次の箱に行ってキハ181系「特急はまかぜ」を、次の箱にいって「寝台特急はやぶさ」をその次の箱で223系1000番台を・・・。

「あれ・・・。」

ふと声が出た。

(あれ。1000番台どこだ。)

ふつうならこの箱に入っているはずの223系1000番台がどこにも見当たらないのだ。他の従兄の箱を探してもどこにもない。あったのはコキ100形の1300t級貨物だけ。

(どこにあるんだよ。223系1000番台の新快速米原方面長浜行き12両。・・・。仕方ない。1000番台の新快速姫路行き12両で我慢・・・。あれ・・・。新快速長浜行きだけじゃない。姫路行きもない。駿兄ちゃんのやついったいどこにしまったんだよ。まさか、僕には走らせたくないから隠したのか・・・。いや、そん

なこと今までなかったか。それとも、自分の箱にしまってないだけかなぁ。）

そのあと３０箱ある箱をすべて出して探してみたがどこにも駿兄ちゃんの２２３系１０００番台新快速姫路行きと米原方面長浜行きは出てこなかった。

翌日。

「・・・。」

「永島。どうした。目の下にクマできてるぞ。」

宿毛が心配そうに聞いてくると僕は顔を机に伏せた。

「い・・・いえにあるはずの２２３系１０００番台が見つからないー。」

（・・・。それだけ。それだけでこんなに落ち込むのか。）

「坂口に聞いてみたらいいんじゃないか。あいつなら何か知ってるだろ。」

「そうだな。そうしよう。」

「永島。携帯もってこい。」

前には四ツ谷先生がそれをよこせというそぶりをしている。

（バカ・・・。）

「ホウェ。」

この声は自分でもどこから出たのか疑問に思った。

１時間後・・・、

「あうー。今日俺ついてないー。」

「・・・。」

宿毛のほうはなんて話しかければいいのかわからないみたいだ。

（こういう時坂口ならなんて声かけていいか分かんだよなぁ。あいつってこういう永島になんて会話するんだろうなぁ。）

何かいい話ができるかどうか携帯を開いてうお座の占いを見てみた。

全体１２位。

（ダメだ。とても話せるような順位じゃない。）

さらに話題に困った。

放課後・・・、
「ごめん。昼言い忘れてたけど、ＥＦ５１０出来た。」
そう話しかけてきたのは木ノ本だった。
「あっ。」
カバンの中に手を突っ込んでみる。今度はどこにもクリアケースが見当たらない。
「・・・。」
「忘れてきたのか。」
小さくうなずいた。
「そう。じゃあ、明日持ってきてくんない。」
「ああ。分かった。」
そう言って僕は職員室に向かった。
（今日のあいつくらいなぁ。どうしたんだろう。）
いつもと反応が違う永島が少し不気味に思えた。
職員室経由芝本方面中瀬行き。家に着くと荷物を部屋に置き、私服に着替えて離れに行こうとした。かれこれ１０年使っている勉強机の上に置いてある離れの鍵を持って離れに歩いて行った。
離れに来ると、中から物音がする。この離れの鍵を持っているのは宗一じいちゃんと隆則父さんと駿兄ちゃんと僕の４人。じいちゃんは遠江急行の経営で忙しいし、父さんも同じように忙しい。なら・・・。
「開いてるぞ。」
中からその人の声がする。ドアをあると中に駿兄ちゃんがいた。
「よーす智。久しぶりだな。」
「駿兄ちゃん今日は休みなの。」
「ああ。だからここにいるんじゃねぇか。」
「・・・。」
さっきから「チャチャ。チャチャ。」と模型が線路の継ぎ目をたたいている音と「シャー。」と線路の家を走っている音がする。その方向に目を向けてみると、シルバーの車体の車両が走っている。そ

れだけで僕にはこれがなんなのか分かった。
「１０００番台（２２３系）。」
「ああ。ようやっと戻ってきた。こいつも長く出張してたなぁ。」
「やっぱり駿兄ちゃんだったんだ。昨日探したけどなかった。」
「なんだ。使うつもりだったのか。そりゃごめん。こいつも今日パワーアップして帰ってきたばっかだから。」
「パワーアップ。」
その言葉が気になった。駿兄ちゃんの持っている１０００番台は全車に室内灯を装備している。それに方向幕もすべて貼り付けてある。もうパワーアップする余地はないはずだ。
「どこがどうパワーアップしたっていうの。」
「だよなぁ。ふつうだったらもうパワーアップするところはないよなぁ。でもあったんだよ。一か所。」
そういうと駿兄ちゃんは１０００番台を止めて、４編成あるすべてのクハ２２２形（制御車）とクモハ２２３形（制御電動車）を背中合わせに並べて、
「今からパワーアップしたところを見せてやるよ。」
と言った。
いったいどういうことだろうか。クハ２２２が４両並んでいるほうに回ってみる。駿兄ちゃんがそれを確認して、
「これがパワーアップしたところだー。」
と言ってコントローラーのマスコンと常点灯を一気に最大出力にした。
「あっ。」
その違いにはすぐに気付いた。これまで黄色いライトだったクハ２２２のヘッドライトが本物と同じように黄色と白にはっきり分かれていたのだ。
「すぐに分かるだろ。これまでのライトとはもうおさらばだ。全部ＬＥＤに変えてもらったからなぁ。」
「ＬＥＤって。これ駿兄ちゃんが家に持って帰って改造したの。」

そういうと駿兄ちゃんは笑って、
「そんなこと俺がするかよ。これ俺がネットで見つけた模型店の人にやってもらったんだ。1両1000円で。それが8両で8000円。送料とかも合わせて1万以上したぜ。」
(だから。だからなかったんだ。)
「それってどこの模型店。」
「大阪のやつだよ。ていうかこの人起用だよなぁ。8両もこうしてくれたんだから。これで運転楽しもうぜ。」
「・・・。なんで教えてくれなかったんだよ。」
「本当はびっくりさせようと思ってな。」
「家に1000番台がないだけでも十分びっくりしたよ。」
「ハハハ。まぁ、入って来い。久しぶりに二人で運転やろうぜ。」
僕はすぐに中に入った。
「うん。もちろんそのお詫びとして1000番台走らせるからな。」
「はいはい。じゃあ、俺は813系でも走らせるか。」
「直流の隣に交流の車両が走るってないでしょ。」
「模型だからできるでいいんじゃ・・・分かったよ。じゃあ221系にしとくわ。6両たす6両で新快速。」
「そんな組み合わせあるんですか。」
「昔はあったんだろうぜ。昔は。」
「じゃあ、2000番台も走らせる。その隣に「雷鳥」走らせてやる。」
(ここは草津から京都の間かよ・・・。いや。山科から京都かぁ。短っ。)
そんな感じで車両を並べる。走る線路は外側から485系「特急雷鳥」、223系2000番台新快速姫路行き、221系快速米原行き、223系1000番台新快速米原方面長浜行き。それを30分間展開して・・・、
「満足したか。」
「うん。久しぶりにストレス発散したー。」

（そりゃ、よかったな。）
「で、２０００番台（２２３系）の付属編成の行先を湖西線経由敦賀行きにして、基本編成を近江今津行きにしてほしいんだけど。」
「はっ。お前。これ変えるだけでも結構時間かかるんだぞ。」
「こら。そういうこと言わない。」
（チェー。智に付け込まれたなぁ。当分はこれで雑用で扱われそうだ。）
「この野郎。後で覚えとけよ。」
「ヤダー。」
これで１０００番台の一件も落着。次は暁フェスタだ。

52列車　マイナススパイラル（後書き）

今まで出てきた脇役のフルネームを考えました。

玉名（たまな）　恵美（えみ）

新城（しんしろ）　隆彰（たかあき）

希望（のぞみ）　輝（ひかる）

和田山（わだやま）　俊彦（としひこ）

報告します。お気に入り登録が2になりました。なかなか調子がいいとは言えませんが、頑張ります。

５３列車　無線

１０月２１日。６時５２分。遠州鉄道芝本駅・・・、
（はぁ。今日も間に合わなかった・・・。２分差で出てくっていうのもなぁ。）
心の中でため息をついた。
列車は芝本を発車すると進行方向右手に分かれた線路と再び合流し、バラストの真新しい線路に入る。今芝本と次駅小林の間は高架化工事中。そのために仮線に付け替えられている。
（ああ。今日の組み合わせは２００３と１００５。この頃１００５にしか乗ってないよ。いい加減にしてくれないかなぁ。この車両好きじゃないんだよ・・・。つうか、毎日乗ってたらふつう飽きるし嫌になる。）
心の中で不服を爆発させる。そんなことをしてもどうにもならないのは仕方がないことなのだが・・・。
すると・・・、
「遠鉄電車。遠鉄電車。こちら遠鉄・・・です。・・・・。」
無線が入った。
（そういえば。この時間の列車ってよく無線入って来るけど・・・。でも、言ってることは最初の遠鉄電車と車両しか理解できないんだけどなぁ。）
そう思った。そう思う頃には無線の受け取り側からの無線が入る。
そしてそれにまた答える。
「おはようございます。１６列車です。２００４号、１００６号。・・・。どうぞ。」
（２００４・）
「おはようございます。１６列車２００４号、１００６号・・・了解です。」
そのあと無線発信元からまた通達があって無線が終了する。

（２００４って今はっきり言ってたなぁ。何がなんなのかはよく分かるけど、１６列車って何分の列車だろう。この先で２００４に会わないのははっきりしてるから、この後の列車よね。次の列車にしては無線が入るのが遅すぎるかぁ。なら次のはないわね。その次は３０系だし、あるとすればそのあとかぁ。）

さっきから語られていることについて説明しよう。遠州鉄道は地元浜松を走る私鉄。恐らく日本有数のバスのネットワークを作り上げていることで有名だろう。しかし、遠州鉄道にはバス以外に百貨店、タクシー、鉄道、建設会社といろいろな幅がある。その中の鉄道のことを説明しよう。今乗っている車両は遠州鉄道が所有する１０００形という車種の第５編成。新浜松側が制御電動車で西鹿島側が制御車。付番は新浜松側から１００５＋１５０５となっている。この前にいて、１００５をリードしているのが２０００形の第３編成。付番は２００３＋２１０３となっている。１０００形と同様新浜松側つまり数の小さいほうが制御電動車。数の多いほうが制御車となっている。そしてさっき無線の中で語られた２００４と１００６はそれぞれ２０００形第４編成と１０００が第６編成のことである。この中で一番新しいのは２０００形第４編成。まだ工場から出てきてまだ1年足らずしかたっていない本当の新米である。

そして、逆に古いのが今乗っている列車の2本あとにやってくる３０系という系列。顔は昔の湘南電車。窓が真ん中で2枚に分かれていて、ヘッドライトは車体の一番上にしかない。その中でも変わり種はいてモーターを１０００形と同じものにし、ライトを下にずらし、二つ目になったものだ。しかし、ドアは1両に2枚しかついておらず、その中には片開きのものまで存在する。そのため昼に通常営業に就くことはなく朝のラッシュ時のみ４両編成で働いている。

（うーん。どういう意味だろう。）

どうしてもさっきの無線の内容が気になった。

この列車に乗っていくと途中浜北と上島と八幡で列車の交換をする。それはこの鉄道が単線であることが関係する。そこであった車

両は順に１００７、２００２、１００３、１００４だった。
（今日動くのは２００２と１００３と２００３かぁ。さっきの２００４も気になるけど、２００２だよなぁ。）
今日帰りに乗る車両を決めながら学校への道を急いだ。
その日の放課後・・・、
１５時２８分に出る列車に間に合ったのでそれをホームで待つ。
しばらくすると列車が参りますとアナウンスが入り、西鹿島(にしかじま)側から列車が上ってくるのが見えた。特徴は菱形パンタグラフ。
（あれ完全に１０００じゃん。）
それだけで形式の判断はつく。しかし、それより掘り込んだことは分からない。それは近づいてこなければ・・・。
（もしこの時間が１０００だったら次の来るのも１０００かぁついてないなぁ・・・。んっ。）
近づいてくる列車に耳を傾ける。そして左上にある形式を確認してみた。車両はパンタグラフに似合わない歌声を奏でながら自分のいるホームの反対側に入ってきた。
（２００２．なんで。）
何が起きているのか少しわからなくなる。
（そうか。２００２今年の猛暑で頭がどうかなっちゃったんだ。それであんなに血迷ったパンタグラフを。１００１じゃないんだからやめてよね。これじゃあ余計複雑になるじゃん。）
止まる直前になって新浜松(しんはままつ)側からも列車がやってくる。特徴はシングルアームパンタグラフ。２０００形か１００１か。これはもう賭けの領域である。
車番を見て思わずガッツポーズをした。２００４。一番乗りたい車両だ。
「ヤッター。２００４。」
この番号を見たらすぐに新浜松(しんはままつ)側に向かう。列車に乗り事には変わりないのだが、乗る車両は制御車(せいぎょしゃ)より電動車のほうがいい。理由は楽しいからだ。もちろん、乗りこんだらやることはこいつの歌声を

聴くことである。
　列車のドアが開くのを待って車内に入る。乗りこんだところは電動車の真ん中のドア。それでもまだ運転席に近づく。電車に乗っていて真ん中の席ほど座っていてつまらないものはないからだ。
　進行方向右側には先客がいる。その人の前に荷物を置いて、そこが空くのを待つ。それまでは辛抱だ。しかし、次駅助信(すけのぶ)はこちら側に降り口が来る。つまり、この席が空く確率も高いのだ。
　車掌が笛を吹いて、
「ドア閉まります。」
と早口気味に言う。言い終わったら乗り込む乗客がいないことを確認してドアを閉める。ドアは電子音を2回発して閉まろうとした。
「梓(あずさ)。早く電車来てるよ。」
どこかで聞き覚えのある声だ。その声を聴くとドアがまた開く。あわただしく電子音は2回余計になった。そして、よく見慣れた制服を着ている女子が二人階段に一番近いドアから乗り込んだ。
「梓(あずさ)。安希(あき)。」
その二人は黒崎(くろさき)と薗田(そのだ)だった。顔を見るなり話しかける。
「よーす。」
二人は結構全力で走ったようで息切れしている。
「よかった。間に合って、これに乗り遅れたら12分待たなきゃいけなくなるからなぁ。」
薗田(そのだ)が制服内にこもった空気を入れ替えながら言う。
「はぁ。安希(あき)。なんで大声出すんだよ。恥ずかしいじゃん。」
「いいじゃん。間に合わないよりはましだったろ。」
「た・・・確かにそうだけど。」
「ハハハ。」
「そうだ。萌(もえ)だったらどうする。もし電車に間に合いそうで間に合わないっていう状況。萌(もえ)だったら乗っちゃう。それとも乗らない。」
「えっ。車両による。」
「・・・。」

（当然の答えかよ。）

「今乗ろうとしてるやつが１０００形だったら問答無用で見送るでしょ。まぁ、次に来るやつも１０００形だったらあきらめるけど・・・。で、もし２０００形だったらふつうに乗る。」

（・・・。萌の判断基準はなんなんだかわからん・・・。）

その会話をしている間にも列車は坂を下って、

「ご乗車ありがとうございます。助信―、助信です。降り口右側です。助信でございます。」

とアナウンスが入った。

助信に停車し、進行方向右側の席が空いたので、黒崎たちを促してそこを占領する。次駅曳馬は降り口が反対側になるので、この車両からの下車は少ない。一つ違うとすれば、八幡と同様入れ替えを行うということだろう。新浜松に向かう列車は１００３だった。

（あれ。これって朝見た・・・。これは折り返しで１５時５４分の西鹿島行きになるから、次の２００３が１６時０６分。・・・。）

朝あったことと自分の頭の中で整理する。

（この列車が２００３の３本前。ていうことは・・・。昼遠州鉄道で走る車両は６本。つまり、２００４はきょう２００３の３本前であり３本あと。だから、朝言ってたあれをかけ合わせて・・・。これの３本あとだろ。だから６時５２分の３本あと。７時２８分。７時２８分、西鹿島発７時２４分のやつが帰りの１５時３０分になる。・・・。じゃあ残りの１６列車っていうのは。）

ただひたすら考える。自分の頭の中に時刻表を広げて、

（一番最初５時３４分の始発が１列車とすれば・・・。次に出る５時５２分が３列車。次が５列車で、３６分が７列車。それで私が乗ってく列車は９列車ってことになるけど・・・これじゃあ７時２８分の列車は１６じゃなくて１５になっちゃう。どっか間違えたかなぁ。・・・。あっ。）

これですべてがわかった。さっきから言われている番号は列車番号

というもので世界で運行されているすべての列車において番号がある。それはある法則の元付番されているが、ここでは触れないことにしよう。なお、列車番号は時刻表で下りと書かれているものには1・3・5・7などの奇数。上りには2・4・6・8などの偶数が付番されている。そして遠州鉄道の上り下りは新浜松行きが上り。西鹿島行きが下りである。つまり・・・。

「なるほどね。分かっちゃうと案外簡単。」

とつぶやいた。

「何が。」

さっきから考え込んだままだった坂口は普通に気になる。黒崎と薗田が声をそろえて話しかけてきた。

「やっぱり毎日使うとこれぐらいふつうに分かっちゃうんだね。教えてあげるよ。」

（また電車のことだ。）

止める暇もなく坂口が続ける。

「この時間に来る列車は7時28分に芝本を発車する列車。6時52分の列車で上島で入れ替えるのが15時40分発。八幡で入れ替えるのが54分発。そして、6時52分の新浜松側の車両が16時04分。次の7時4分の新浜松側の車両が18分発。っていうこと。」

（何を言いたいのか全然わからん。）

「これで、いつどの時間に列車が来るのかわかる。いやあ、毎日使うんだし、それくらいの贅沢したほうが楽しいよねぇ。」

「・・・。」

それは贅沢っていうもんじゃないと思うが・・・。

「はぁ。でもわからないところがあることには変わりないかぁ。7時28分のやつって混むから嫌なんだよなぁ。」

というと今度は、

「あれって自分の降りたい駅の出口に一番近いところに乗ろうとするっていうのがふつうの流れじゃない。だから一番降り口から遠い

ところから降りれば、混まなくなるんじゃないかなぁ。」
「・・・。」
なんと回答していいのか。
「うーん。それって終点まで行く人は階段に一番遠いところに乗れっていうことだろ。」
「うん。そういうこと。」
「・・・。」
黒崎と薗田は顔を見合わせた。どう回答していいのかわからない。
普段から遠州鉄道を使っているがそんなことなど考えたこともない。
やっぱり鉄道マニアとごくごくふつうの一般人とは考えることと見ることが違うのだろうか。
「ダメかなぁ。」
「ダメっていうわけじゃないけど、それってただ人を均等にしたいだけだろ。」
「うーん。やっぱり終点まで行く人が多いってところかぁ・・・。あっ。」
今度は何を思いついたのだろう。
「混むと言えば、」
「混むといえば。」
「よく朝の列車ってドアに固まる人いるじゃない。あれって死ねばいいと思う。ムチャクチャ腹立つんだよねぇ。ドア付近メチャクチャ混んでるのに通路混んでないって。蹴り飛ばしたくなるわよ。」
「・・・。」
多分、坂口だったら乗客に対する文句で半日つぶれそうである。

53列車　無線（後書き）

この頃のアクセス数は後書きになんか共感しやすいものを書いた日上がるという傾向にあります・・・。

５４列車　進めます

１０月２４日土曜。今日はまた暁フェスタの準備だ。今僕たちは事務所の２階にいる。

「箕島君。そっちの「青木海岸」のモジュールをここに持ってきてくれるかなぁ。」

アド先生が箕島に指示を出す。今ここにいるのは箕島と僕と留萌だけ。木ノ本は昨日から寝台特急の撮影に出かけたらしく、今は富士にいるという。醒ヶ井はただあることを知らないだけ、佐久間は面倒だから来てないのである。今日に限って出席率が悪いのだ。

「永島君。「青木海岸」の３枚目どこにあるかわかるかなぁ。」

「あっ、ちょっと待ってください。」

そう返事して「青木海岸」の３枚目を探す。「青木海岸」とは文化祭の時に手伝いに来てくれた青木洋輔さんの作品らしい。それを示すものとしてタイトルに青木とはいっている。モジュールは海岸線を行く線路になっていてＳ字カーブが連続してある。ここを通るとき列車はうねうねと蛇のようにうねって通過していく。これが１両や２両といった単行では映えないが貨物列車など１０両以上の車両が連なる長大編成なら映える。鉄道好きのちょっとしたこだわりだ。

「ありました。」

「青木海岸」の３枚目は白いケースに埋もれるような形で白いケースの中に入っていた。前に置いてある白いケースをどかして中の「海岸」を出す。それをアド先生のいるところに持ってって２枚目と４枚目につなげる。

つなげ終わった時アド先生の携帯が鳴った。着メロはクラシックらしい。と言ってもクラシックということ以外は分からない。どっかで聞いたことがある曲なのだが・・・。

「もしもし。」

アド先生のいつもの対応だ。

「はい。ああ。じゃあそこからずっと東に行って、製材所のところをこっちに入ってきてくれるかなぁ。」
誰かと話している。多分誰か加勢してくるのだ。
「はい。待ってます。」
そう言って電話を切った。こういう切り口だと善知鳥先輩かもしれないが・・・。でも善知鳥先輩が道を教えてというのはおかしい。前にもこういうことがあったからだ。とすると電話口の人が誰なのかわからなくなる。
「アド先生。新幹線ってこんな感じでいいんですか。」
留萌がアド先生に聞いた。今留萌がやっていることは2面4線の駅の設置。ここに新幹線車両を置いて、体験運転をさせようというのだ。
「うん。それでいいよ。だけど、そのコードどうにかならないかなぁ。」
コードというのはポイントレールからのびているコードである。模型のポイントレールには手動で操作するものと電動で操作するものの二つがある。電動操作のものはポイントレールからコードがのびていて、それを専用のコントローラーに差し込み、さらにそれを模型を動かすコントローラーに差し込んで給電する。手動の場合は当然だが、このような設備は要らない。また、さっき殿堂ポイントもあるといったが、電動ポイントも手動で操作できるため結果を言うと手動だろうと電動だろうとそんなことは関係ないのだ。
「そんなことできるわけないですよ。これを根元から切るんだったら話は別ですけど。」
「そうかぁ。じゃあ、そのままにしといてくれるかなぁ。」
「はい。」
ガタン、ガタンという音が近づいてくる。時折通る営業列車だ。もし営業列車じゃなかったら、天竜暁構内で行われている列車の走行テストだろう。ここから右手に見える扇形車庫の向こうに隠れてすぐに引き返してくる。外からする継ぎ目の音はこの二つのうちど

ちらかしか考えられない。
「アド先生。こっちのほうは電気系統ほとんど完了しましたけど・・・。」
「じゃあ、走行テスト行ってください。」
「はい。」
僕は持ってきたケースの中に入っている車両をどれでもいいから抜き出そうとした。でも・・・。探し始めるとどれでもいいやという考え方はどこかに吹っ飛んでしまい自分の好みで選ぶようになってしまう。ちょうど手に取った３８１系「特急スーパーやくも」を走らせることにした。「スーパーやくも」とはもちろん列車の名前であるが、岡山と出雲市を結んでいる列車の名前である。ここには「やくも」が走っておりそれの停車駅を可能な限り減らし速達でこの間を結ぶ列車が「スーパーやくも」なのだ。名前は消えてはいないがこの列車はすでに「やくも」に統合されて存在しない。懐かしいといえば懐かしい列車だ。
車両ケースの留め具を外して中を見てみる。下のほうにしまってあった先頭はパノラマグリーン車。大きな窓は前にせり出している。そして、車体の薄紫と窓上にある「ＳＵＰＥＲ（スーパー）　ＹＡＫＵＭＯ（やくも）」のロゴ。これがこの車両のキーポイントだ。
これの上から数えて３番目（４号車　モハ３８０形）をレールの上に乗せて、コントローラーの電源を入れ、ディレクションを前進に入れる。つまみを回すとすぐに「やくも」は発車してくれなかった。この箱には「椚辻将利（なぎつじまさとし）　部活寄贈」と書いてある。買ってもらってから何十回も走ったことは間違いない。コントローラーのつまみを半分くらいまわしたところでようやっと発車してくれた。一周難なくするかと思ったが、やっぱりつかえた。古いうえに電気をとりづらいのだ。何とか一周させて、駅まで戻した。裏にひっくり返してみると汚れが所々についているのがわかった。車輪にはほとんど同じ位置に汚れがついているところもある。これでは車両に電気が行かないことも分かる。ちょっと前に教わった方法で車輪をきれ

いにしてもう一度走行試験をやった。さっきつかえたところは減速したものの通り抜けられるようにはなった。

誰かが階段を上ってくる音がする。床がギシギシなるのだ。

「手を上げろ。」

と言って入ってきたのは諫早(いさはや)だった。

「あっ。なんだサヤさんいないんだ。」

ちょっと残念そうに言うと、

「永島(ながしま)さん。持ってきましたよ。宮原(みやはら)のＭＡ編成と網干(あぼし)のＶ編成。このごろ走らせてなかったから走行試験やっていいか。まぁ、いいって言ってくれなかったら殺すけど。」

「諫早(いさはや)君。ちょっとこれ手伝ってくれないかなぁ。」

「黙れ。このハゲが・・・。あっ。ヤバい、言っちゃった。」

「おい。それはどういう意味だよ。」

ちょっと怒り気味の口調になる。

「ハハハ。サラって言っちゃわないように気を付けないと。」

「はいはい。」

「走行テストだったら僕がやっとくけど。ここの通電テストもしたいし。」

「お願いします。えっと脱線したら・・・。」

「分かってる。「なんで脱線するんだよ。バーカ。」って言っとけばいいんだろ。」

「はい。お願いします。」

と言ってアド先生が申し出た手伝いに入る。僕はＫＡＴＯ(カトー)の２２３系の箱を開けて、線路に並べる。モーターが入っているのは宮原(みやはら)の車両は６号車（モハ２２３形）、網干(あぼし)の車両は８号車（モハ２２２形）になっている。まずは宮原(みやはら)所属の「丹波路快速(たんばじかいそく)」のモーターを線路に乗せる。こちらは何の支障もなく一周。次は網干(あぼし)所属の快速(かいそく)加古川(かこがわ)行き。こちらも何の支障もなく一周した。あとは各種走行試験。機関車を筆頭に貨物列車を運転する。今回の周回は解放ひとつない。ごく稀の線路状況になった。

そんなことをしている間にも時間は１２時をまわった。
「それではお昼にしてください。また１３（１）時になったら作業を再開します。」
アド先生はそういってお昼を食べに行った。
「はぁ。食べるもん持ってきてねぇ。」
「おいおい。大丈夫か。」
留萌（るもい）が心配そうに聞く。
「大丈夫だよ。この頃の部活お昼は向こうで買うよって言っておきながら何も買わずに活動してるから。」
（なんか榛名（はるな）に似てるなぁ。）
「省エネなんだな。」
「・・・。」
「そうだ。走りました。僕の６０００番台（２２３系）は。」
「ああ。両方とも走ったよ。あれって行先見て思ったけど網干（あぼし）にいるやつ。あれは前に２２１系の６両つなげて走るんだよなぁ。」
「はい。」
「・・・。」
「どうかしたんですか。」
「いや。ただ。そうするんだなぁって思っただけ。」
立ち上がって僕のカバンのほうへ歩く。チャックを開けて中のものを取り出す。今日は必要ないとは思ったが２２３系１０００番台を持ってきている。
「うーん。１０００番台ですかぁ。」
「なんだ。１０００番台より２０００番台のほうがお気に入りか。」
「そういう意味じゃないですけど・・・。」
諫早（いさはや）は語尾を濁らせた。その時箕島（みしま）は模型にかからないところで弁当を食べ、留萌（るもい）は持ってきた車両の中身を開けては閉めてを繰り返している。
「なんじゃこりゃー。」
その留萌（るもい）がいきなり叫んだ。

「どうかしたんですか。」
「これ最後にいじったやつ誰だよ。」
留萌（るもい）が持っていた箱には「TOMIX（トミックス） Series（シリーズ） 381 Limited（リミテッド） Express（エクスプレス） SUPER（スーパー） YAKUMO（やくも）」と書いてある。
「俺だけど。」
なんか悪いことをしたように恐る恐る手を挙げてみた。
「なんだよ。これ。編成ムチャクチャじゃないか。国鉄の特急車両はどちらかの先頭車にドアの位置を合わせれば正解なんだよ。こんなムチャクチャな編成がどこにある。」
説明しよう。今ドアの位置は上から順番に右、左、左、右、右、右、左となっている。
「それにパンタ車の位置だってすごいじゃないか。これじゃあ編成無視の領域を超えてるぞ。2号車のパンタ車の隣がパノラマグリーンって。こいつはいつクモロ380になったんだよ。」
説明しよう。この381系という車両はパンタグラフ車の次。もっと詳しく言うとパンタ車のドアがついているほうにパンタ無しの電動車がくる。つまり下から2番目に入っているパンタグラフ車の右隣。編成において先頭車にあたる車両の位置に電動車が来なければならない。ちなみに「スーパーやくも」のパノラマグリーン車は電動車ではない。
「んなこと知るか。俺が触ったのはMのパンタ車だけだ。それ以外は何も触ってないぞ。」
すかさず抗議する。
「えっ。そうなのか。」
「そうだよ。」
「じゃあ、これ一番最後にしまった人って相当バカだよなぁ。ドアの位置までムチャクチャだし、編成無視にもほどがあるし。」
そう言いながら下から2番目と3番目の車両を出してくるっと回転させる。その状態で元に戻して、

「よし。これで完璧。」
と言って箱のふたを閉じた。その頃には僕が持ってきた１０００番台（２２３系）にも気づいたようで、
「これ。関西の新快速じゃん。」
と言っていた。
「知ってるのか。」
こういう問いをするほうもおろかだろう。留萌は車両鉄。ここまで有名な車両は知らないはずがない。むしろ知っているのがふつうのレベルの車両である。
「知らないわけないだろ。こんな名車。でも・・・私は０番台のほうがいいんだけどねぇ。」
ちょっと声を落とした。
「ああ。留萌って「関空・紀州路快速」のほうが好きなんだ。」
「０番台ってあのマアルイおめめのあれですよねぇ。」
諫早が続ける。そういうと留萌は小さくうなずいた。
「そういえば、留萌って一番好きなの０系だったよなぁ。だったら裏付けるかぁ。」
自分の中で勝手に結論まで持っていく。
「なるほど。じゃあ、丸いヘッドライトしてるやついってけば大体好きな車両にあたるってことですよねぇ。」
「・・・。」
留萌はしばらく黙っていたが、
「まぁ、そういうことになるかなぁ。だって四角いヘッドライトのやつってなんとなく男の子っぽいって感じしない。」
「・・・。」
しばらく考え込んだが、分からないわけではない。
「それにヘッドライトが丸いとかわいいって感じしない。」
それも分からないわけではない。
「うーん。やっぱり俺には女の子の感覚って理解できないわ。俺は昔からつり目のほうが好きだし。」

「だから１００系なんだろ。あれ試作車に至ればものすごいつり目じゃん。」
「・・・。」
「・・・。まさかの知らないなのか。」
大きくうなずく。
「なんの自慢にもならないぞ。」
というとため息をついて、
「いいか。Ｘ０編成は窓小窓で・・・。」
「あっ。なんだ。それのことかぁ。それだったらふつうに分かる。あれって量産車よりつり目なんだな。」
これでまた１００系について賢くなった。

５４列車　進めます（後書き）

書いてて思いました。
鉄道小説として風上におけなくてすみません。

報告します。１１月２１日を持って累計アクセス２０００突破しました。
今のところアクセス数２０５９（１１月２２日7時４７分現在）
ユニーク数３４０（１１月２２日7時４７分現在）です。
これからもがんばって書いていきたいと思います。

55列車　寂しくなる

午後・・・、
「永島。そっちの走行テストだいたいいいならこっち手伝ってくんない。」
留萌に聞かれた。
「分かったよ。」
そう言って新幹線モジュールが展開している周回に入る。こちらは在来線のモジュールが外に展開し、その内側に在来線が展開している。在来線が乗っている机と新幹線が乗っている机の間は人が一人。カニ歩きをして通れるぐらい。ここでの作業は簡単なことではない。そのため、在来線の運転設備は新幹線モジュールの中の設置し、新幹線の運転設備は在来線の外に設置する。これからやる作業はここをその状態に持っていくこと。
　在来線の机の下を通って、新幹線の机の下を通る。頭をぶちそうになるくらいの狭いところを通り抜けてくると、
「何もそこから通らなくても。そっちのほうがもっと広いじゃん。」
「それ先に言ってよ。」
「・・・。分かった。じゃあ次からそこから通ってくれ。」
とあきれられた。
　新幹線モジュールはこのごろ部活で作った盛土モジュールを何個もつなげて組成する。しかし、そのモジュールの高架部分を盛土と言っていいのかは別だが・・・。盛土というよりは擁壁と言ったほうがいいか。そんなことどうでもいいか。
　この擁壁モジュールは前述する通り部活の時に製作した。中には角材を適当な長さに切り落とした木材、もしくはすのこを2段重ねにしたものが入っている。その上に板を敷き、釘で固定し、複線レールを敷設。バラストをまいたものである。中には真ん中をその構造にせず、高架橋になっているもの。鉄橋になっているものの2種

類がある。それをランダムに並べて、新幹線（しんかんせん）の周回を完成させる。二人でやったのでその完成は早いものだ。１０分たたない間に直線部分だけの作業が完了した。

「アド先生。大体こっちはできましたけど。」

「はい。じゃあ、今度は配線やってください。」

留萌（るもい）はこういわれても分からない。今回が初めての展示なのだ。

「ああ、俺が分かるよ。」

その作業は僕が変わった。

「永島（ながしま）君いいかな。ここのカーブレールにはこのようにフィーダーを差し込む部分があります。」

その部分をアド先生が指差す。そこは何かはこのようなものが入る形状になっていて、その先には等間隔にレールの底が見える。アド先生はさらに説明を続けて、四角く、下が詰めのようになっているグレーの物体を手に取った。それには青と白のコードがのびており、その先には他のコードが結線できる形状になっている。

「これをここに差し込んでください。後はいつも配線をやる通りです。」

説明は終了。その説明の通りに高架用フィーダーを差し込む。差し込むと高架用フィーダーのほとんどの部分が隠れる。見えているところは取り外しの時に使う爪だけだ。このフィーダーの刺さった高架カーブを二つ作り対角線になるように配置する。残りはこれを必要としない。文化祭の時に行った作業だけで他のは完了。それを配置して集会を完成させる。周回が完成したら次は配線。配線が完了すると車両を乗せて走らせる準備をした。乗せた車両は外回り（外側から見て手前側）がＥ２（イーツー）系新幹線（しんかんせん）「はやて」。内側（外側から見て奥側）がＥ４（イーフォー）系「ＭＡＸ（マックス）」。

「よし。行くぞ。」

と言ってコントローラーのアクセルを自分のほうに引く。今使っているコントローラーは発車と停車しかできない非常に取り扱いやすいコントローラー。普段家で使っている「サウンドコントローラー」

の操作を非常に簡略化したものだ。
　電源を投入するとＥ２（イーツー）系とＥ４（イーフォー）系は同時に同じ方向へ動き出した。
「なんで「ＭＡＸ（マックス）」がそっちに行くんだよ。「ＭＡＸ（マックス）」はそっちじゃなくてこっちでしょ。」
僕の位置から見て左に動いたＥ４（イーフォー）系に留萌（るもい）がキレる。
「まったくバカだな。」
「バカはどっちだよ。」
まずは留萌（るもい）を抑えることだ。
「どっか配線間違えただろ。今のは「はやて」しか動いちゃいけない。「ＭＡＸ（マックス）」も動いたってことはどっか配線が違う。」
「配線違うって。これでどこを直せばいいんだよ。」
「それこそ探せよ。」
留萌（るもい）のほうはぶつぶつ言いながら、配線をチェックする。周回のほうには何も不具合がなかったらしい。とすれば・・・。
　コントローラーが乗っかっている大の下に新幹線（しんかんせん）の給電する配線がある。そこを調べてみると案の定そこだった。配線は片方からのびてきた線が分岐コード一つに集中していた。つまり左から来たコードは左の分岐コードに。右から来たものは右の分岐コードに刺さっていたのだ。これならすぐにそうなるのもわかる。もう一度留萌（るもい）にコードを調べてもらい、正しくコードをはめなおす。これで「はやて」が動いても「ＭＡＸ（マックス）」は動かない。
　試しなおすと今度はちゃんということを聞いてくれた。だが・・・。はめたほうは左に来たものが外回りで、今僕がいじっている右側が内回りになってしまったみたいだが・・・。これもどうでもいいか。
　次は線路に並べてあるＥ２（イーツー）系とＥ４（イーフォー）系を別の車両に変える。次に留萌（るもい）が引っ張り出してきたのは１００系「グランドひかり」と５００系「のぞみ」それを実際より１０両少ない６両並べて、オーケイが出たらコントローラーの電源を投入。

まず最初に走ってくれたのは「グランドひかり」のほうだった。
「こいつ変な音してるけど大丈夫か。」
発車したときから「グランドひかり」は「キューキュー」と音を立てて走っている。そして５００系のほうはというと動いてすらいない。
「留萌。５００系のほうって電気すらいってないか。」
留萌がロケットのような５００系の顔を覗き込み、
「電気は来てるみたいだよ。ライト付いてるし。」
今度はＭ車に回って、
「ちゃんとモーターも動いてるみたいだけど。動かないわねぇ。」
さっきから空回りしかしてないようだ。
「ちょっとそれ貸して。」
留萌から５００系を受け取り下を見てみる。でも・・・。どうなっているのかわからない。車輪はあの時きれいにしたから汚れはついていない。それ以外に問題があるのだ。恐らくギアが一個かけているとかそういう問題だろう。
「ダメだ。こりゃ俺でも分かんない。５００系はこれ動かないね。」
「そうかぁ。東海も嫌ってるけど、模型も嫌ってるとはなぁ。この地方って５００系走るなっていう運動してる人でもいるのかなぁ。」
「それは少なくともないだろ。うちにも５００系あるけど、バリバリ動いてるよ。」
「・・・。」
しばらくその５００系に見入る。
「永島。これ知ってる。」
いきなり留萌が話題を振った。
「こいつ。来年東海のほうに乗り入れなくなるんだって。」
「えっ。」
留萌が悲しそうな目になる。
「そうですよ。こいつは来年から８両になって山陽新幹線のほうで活躍することに・・・。」

なんかテンションが上がっている諫早を・・・、
「諫早。飛び降り自殺して。」
と言ってから続ける。
「まぁ、そうなんだけど・・・。永島はどう思う。」
なんか前にあったことと似ている。確かあの時は萌に・・・。
「東海道新幹線から0系がいなくなるんだって。寂しいよねぇ。」
と聞かれたはずだ。そしてその答えは・・・、
「そうなのかぁ。寂しいな。」
だっただろう。
「そうなのか。俺正直あいつは「のぞみ」のまま終わると思ってた。」
「・・・。そうだよなぁ。私だって信じたくないよ。500系の「こだま」なんて。あいつらしくない。」
確かに。500系らしくない。1997年に登場した15メートルにもなるロングノーズを有する500系。その体は全体的に丸くそれまでの新幹線のイメージから大きく離れた冒険者。合わせて9編成が製造され、初代「のぞみ」300系の運用から速達のものを受け持ち、東海道・山陽新幹線の東京～博多間を最速4時間49分で結んだ。それが今度は追い抜かれる立場に転向するということだ。
「・・・。」
どう言葉を発していいか分かんない。だが、留萌には結構衝撃的な事実だろう。
「前も500系見に行ったんだけどさぁ、「まだ俺は走れるのに。」って言っているようにしか聞こえなかった。なんでだよ。もっと走らせてあげれば・・・。」
留萌の声はどんどん悲しさ一色に染まっていく。
「・・・。」
声のかけ方も分からない。もし萌がこういう状態だったら・・・。
僕は声をかけられないということになる。でも、どうすることもできない。

「そうだな・・・。」
今はそれしか答えられなかった。何とか留萌を元気づけてやりたいが仕事が残っている。
「でも・・・、仕方ないって言えば仕方ないんだよねぇ。」
どうやらその結論に達したようだ。目つきは変わってないけど、今はこれでいいのかもしれない。
「・・・。そうだな。早く残ったこと終わらせちまおうぜ。」
車両を変えて、またテストする。
（５００系が「こだま」になると・・・。０系がいなくなる。ついにお別れなんだ。）
ＴＯＭＩＸの０系の箱を見ているとその上に涙がこぼれた。工場で触った・・・。お父さんと一緒に運転席に入った・・・。そして、家族と乗った・・・。それが遠い過去になる。
（さようなら・・・。）
みんなには気づかれないように泣いた。
１５時。今度は持ってきた車両で走るものの選定。
「えーと、３７３系は走ったと。」
車両ケースの中に箱を入れる。するとすかさず留萌が中身をチェックする。中に変な編成になっている車両がないか見るためだ。
「永島。これの２号車（サハ３７３形）むき逆。方向幕があるほうに揃えなきゃダメだろ。」
「それだったら自分で直せよ。」
「・・・。はい。分かってます。」
「よしこれも完了。永島。そっち手伝うか。」
模型の周りに「手を触れないでください」という表示を貼っていた箕島が聞いてきた。
「ありがとう。じゃあ、外回りの運転ついて。」
「わかった。」
諫早と一緒に車両を並べる。次に僕のほうに並べたのは２２３系２０００番台。学校にあるものだ。行先は播州赤穂。姫路よりさらに

西だ。これの5号車（モハ２２３形）を線路に置いたが、ピクリともしない。前ナヨロン先輩が言っていた寿命が来ているようだ。

諫早（いさはや）が外に並べたのはキハ９５「ドクター東海（とうかい）」。走る分には走るのだが、よく脱線する。

こんな調子で調べていくと一つだけハプニングが起きた。床に物が落ちる鈍い音がする。

「何か落ちただろ。」

箕島（みしま）がそう言って外、内両方のコントローラーのノッチを切り、電車を止める。落ちたのはいま目に見える範囲にいる３８１系「スーパーくろしお」ではない。とすると落ちたのは内回りを走っていた３８１系「スーパーやくも」のほうだ。

「「やくも」のほうだよなぁ。」

「「やくも」だったら今出口のほうにいるよ。」

留萌（るもい）がその方向を指差した。

ここは内側から向かうのでは狭すぎる。向こうの在来線（ざいらいせん）と新幹線（しんかんせん）の間ではないが、カニ歩きをしてようやっと通れるくらい。そこに走っているコードがさらに通りづらくしている。下を見てみると薄紫の車体が横たわっているのが見える。そして、運がいいことに横たわっているのは1両だけであることを確認したが・・・。状況を見る限り運がいいという言い方は失礼だった。車両は上と下の両方に分離し、一つのギア台車が外れている。運が良かったというのはパンタグラフのほうだろう。破損は見られない。

それらを手にとって来た道を戻ろうとしたが、外から留萌（るもい）が受け取り、僕はゆっくり車両のおいてあるほうに戻った。

「これはひどいなぁ。」

諫早（いさはや）がそうつぶやいて、落ちた車両の部品をかき集めていく。しばらく落ちた部品に目を通していたが、

「ウォームアップギアがない。」

と言った。このギアはモーターからの動力を車輪に伝えるもの。両方の線路から受け取った電気でモーターが動き、その動きがシャフ

トという部品によって今ないと言っているウォームアップギアに伝えられる。このギアが回転することによってギア台車の車輪がある一定方向のみに回転するという構造になっているのだ。これがないというのは模型にとって致命的だ。もちろんどの部品が欠けても模型は動かない。

「探して。これないと動かないから。」

諫早（いさはや）に命令されて、床を探す。案外簡単に見つかった。それは大体２ｃｍ（センチ）くらいの大きさしかない。横幅はあって５ｍｍ（ミリ）くらいだろう。それを白い棒がのびていたところにはめようとする。しかし、うまくはまらない。

「はまれ、ボケ。」

と言って白い棒をもぎ取る。それをウォームアップギアの取付口につけて、はめ込む場所にはめ込む。そして、ギア台車を取り付けた。何とも慣れた手つきである。そして、床と分離してしまった車体の外装を上からかぶせるように取り付ける。後は線路に乗せてまたテストをする。多少ぎこちないがちゃんと走った。

「それにしてもよくあんな細かい作業できるなぁ。」

「あれくらいふつうですよ。２２３系のＭ車からモーターもぎ取ったりしてきたわけだし。ていうか、そこに感心するな。」

今日あったとすればこのくらいだろう。他の車両も走行テストを行って今日は終了。日曜日はやることもなく家の模型で遊び、次の土曜は最終の詰め。そして、１１月１日が来た。

５５列車　寂しくなる（後書き）

地元の鉄道が廃止になったりした時、どう思いますか・・・。
さっさと消えてくれと思いますか。それとも、まだ走り続けてほしいと思いますか・・・。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0514x/

MAINE　TRAFFIC

2011年11月24日02時47分発行